

Title	南琉球八重山黒島方言の文法
Author(s)	原田, 走一郎
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55692
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

正誤表

原田走一郎「南琉球八重山黒島方言の文法」

p. 28 (2-29-c)

【誤】 maju 「猫」 [maju]

【正】 maja 「猫」 [maja]

博士学位申請論文

南琉球八重山黒島方言の文法

原田走一郎

(文学研究科文化表現論専攻日本語学専門分野博士後期課程)

2015年12月11日

目次

導入（本論文の構成について） <p.11>
略号一覧 <p.12>

第一部 記述文法

1. 黒島方言の概要および本稿で用いる資料について <p.14>
1.1. 地理・系統 <p.14>
1.1.1. 地理 <p.14>
1.1.2. 系統 <p.15>
1.2. 生業・文化 <p.16>
1.3. 話者数 <p.17>
1.4. 先行研究 <p.17>
1.5. 黒島方言内部の方言 <p.18>
1.6. 本稿で用いる資料について <p.20>

2. 音韻 <p.21>
2.1. 音素 <p.21>
2.1.1. 音素目録 <p.21>
2.1.2. 異音 <p.23>
2.1.2.1. 子音の異音 <p.23>
2.1.2.1.1. /p/ <p.23>
2.1.2.1.2. /t/ <p.23>
2.1.2.1.3. /k/ <p.24>
2.1.2.1.4. /b/ <p.24>
2.1.2.1.5. /d/ <p.24>
2.1.2.1.6. /g/ <p.24>
2.1.2.1.7. /c/ <p.24>
2.1.2.1.8. /f/ <p.25>
2.1.2.1.9. /s/ <p.25>
2.1.2.1.10. /h/ <p.25>
2.1.2.1.11. /v/ <p.26>
2.1.2.1.12. /z/ <p.26>
2.1.2.1.13. /r/ <p.27>
2.1.2.1.14. /m/ <p.27>
2.1.2.1.15. /n/ <p.28>
2.1.2.2. 半母音の異音 <p.28>
2.1.2.2.1. /j/ <p.28>
2.1.2.2.2. /w/ <p.28>
2.1.2.3. 母音の異音 <p.29>
2.1.2.3.1. /i/ <p.29>
2.1.2.3.2. /e/ <p.29>
2.1.2.3.3. /a/ <p.29>

- 2.1.2.3.4. /o/ <p.31>
- 2.1.2.3.5. /u/ <p.31>
- 2.1.2.3.6. 母音の素性 <p.31>
- 2.2. 音節構造とモーラ <p.31>
- 2.2.1. 音節構造 <p.31>
- 2.2.1.1. 語頭音節 <p.32>
- 2.2.1.2. 語中音節 <p.33>
- 2.2.1.3. 語末音節 <p.33>
- 2.2.2. モーラ構造 <p.34>
- 2.2.3. 二重母音 <p.35>
- 2.3. プロソディ <p.36>
- 2.3.1. 最小語 <p.36>
- 2.3.2. アクセント <p.36>
- 2.4. (形態) 音韻規則 <p.37>
- 2.4.1. コーダの/r/の鼻音化 <p.38>
- 2.4.2. /a/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則 <p.38>
- 2.4.2.1. /a/を先頭に持つ拘束形態素の双方向母音同化 <p.38>
- 2.4.2.2. コピュラと双方向母音同化 <p.43>
- 2.4.3. /ha/を先頭に持つ拘束形態素の母音同化 <p.44>
- 2.4.4. 連濁 <p.47>
- 2.4.5. /r/を語幹に持つ動詞の同化 <p.48>
- 2.4.6. 動詞語幹末/a/と接辞先頭の/u/の同化 <p.48>
- 2.4.7. 動詞語幹末/i/と接辞先頭の/u/の同化 <p.49>
- 2.4.8. 動詞語幹末/u/と接辞先頭の/a/の同化 <p.49>
- 2.4.9. 阻害音に挟まれた高母音の脱落 <p.50>
- 2.4.10. 二重有声摩擦音/vv/と/zz/ <p.51>
- 2.4.11. 焦点助詞=du とコピュラの形態音韻規則 <p.54>

- 3. 文法の概要 <p.55>
- 3.1. 基本的な節の構造 <p.55>
- 3.2. 名詞句 <p.58>
- 3.3. 述部 <p.59>
- 3.3.1. 動詞述部 <p.59>
- 3.3.2. 形容詞述部 <p.60>
- 3.3.3. 名詞述部 <p.60>
- 3.4. 語、助詞、接辞 <p.60>
- 3.5. 品詞分類 <p.62>
- 3.5.1. 動詞 <p.62>
- 3.5.2. 名詞 <p.63>
- 3.5.3. 形容詞 <p.63>
- 3.5.4. 連体詞 <p.65>
- 3.5.5. 感動詞 <p.65>
- 3.5.6. 接続詞 <p.65>
- 3.5.7. 副詞 <p.66>
- 3.5.8. 助詞 <p.66>
- 3.6. 形態法 <p.67>

- 3.6.1. 接辞添加 <p.67>
- 3.6.2. 複合 <p.68>
 - 3.6.2.1. 生産性の高い複合 <p.68>
 - 3.6.2.1.1. 名詞+名詞 <p.69>
 - 3.6.2.1.2. 動詞+名詞 <p.69>
 - 3.6.2.1.3. 形容詞+名詞 <p.69>
 - 3.6.2.2. 生産性のある複合 <p.69>
 - 3.6.2.2.1. 名詞+動詞 <p.70>
 - 3.6.2.2.2. 名詞+形容詞 <p.70>
 - 3.6.2.2.3. 動詞+動詞 <p.70>
 - 3.6.2.3. 生産性の低い複合 <p.70>
 - 3.6.2.4. 形容詞+動詞 <p.71>
- 3.6.3. 重複 <p.71>

- 4. 名詞と名詞句 <p.73>
 - 4.1. 名詞の形態 <p.73>
 - 4.1.1. 名詞の派生 <p.73>
 - 4.1.1.1. 接尾辞 <p.74>
 - 4.1.1.1.1. 指小辞 <p.74>
 - 4.1.1.1.2. 複数接尾辞 <p.74>
 - 4.1.1.2. 接頭辞 <p.75>
 - 4.1.1.2.1. 接頭辞 ara- <p.75>
 - 4.1.1.2.2. 接頭辞 soo- <p.75>
 - 4.1.1.2.3. 名詞接頭辞の特徴 <p.76>
 - 4.1.2. 複合名詞 <p.77>
 - 4.2. 代名詞 <p.77>
 - 4.2.1. 1人称単数代名詞 <p.77>
 - 4.2.2. 1人称複数代名詞 <p.79>
 - 4.2.3. その他の代名詞 <p.80>
 - 4.2.4. 再帰代名詞 <p.81>
 - 4.3. そのほかの名詞類 <p.82>
 - 4.3.1. 形式名詞 <p.82>
 - 4.3.2. 疑問詞と疑問の不定代名詞 <p.83>
 - 4.4. 名詞句 <p.85>
 - 4.4.1. 連体詞が修飾部を埋める場合 <p.86>
 - 4.4.2. 連体修飾節が修飾部を埋める場合 <p.86>
 - 4.4.3. 属格助詞付き名詞句が修飾部を埋める場合 <p.87>
 - 4.5. 名詞句化による感嘆文 <p.88>

- 5. 動詞 <p.90>
 - 5.1. 動詞の基本構造 <p.90>
 - 5.2. 動詞活用の種類 <p.91>
 - 5.2.1. A型動詞 <p.91>
 - 5.2.1.1. 基本A型動詞 <p.91>
 - 5.2.1.1.1. 基本A型動詞で語幹末音が異形態に関係する場合 <p.92>
 - 5.2.1.1.2. r末尾型動詞 <p.92>

- 5.2.1.2.1. 存在動詞類 <p.94>
- 5.2.1.3. s 末尾型動詞 <p.95>
- 5.2.1.4. A 型動詞の例外 <p.96>
 - 5.2.1.4.1. A 型動詞の例外 mir 「見る」 <p.96>
 - 5.2.1.4.2. A 型動詞の例外 us 「押す」 <p.97>
- 5.2.2. B 型動詞 <p.97>
- 5.2.3. 不規則動詞 <p.99>
 - 5.2.3.1. 不規則動詞 fur 「来る」 <p.99>
 - 5.2.3.2. 不規則動詞 si 「する」 <p.100>
- 5.3. コピュラと存在動詞 <p.100>
 - 5.3.1. コピュラ <p.101>
 - 5.3.2. 存在動詞 <p.102>
- 5.4. 接尾辞の種類 <p.102>
 - 5.4.1. 義務接尾辞 <p.103>
 - 5.4.1.1. 統語環境が 1 つに限定されている義務接尾辞 <p.104>
 - 5.4.1.1.1. 主節末のみに立つ動詞の義務接尾辞 <p.104>
 - 5.4.1.1.1.1. 命令の接尾辞 <p.104>
 - 5.4.1.1.1.2. 禁止の接尾辞 <p.104>
 - 5.4.1.1.1.3. 勧誘・意志の接尾辞 <p.104>
 - 5.4.1.1.1.4. 疑問詞疑問の接尾辞 <p.104>
 - 5.4.1.1.2. 副詞節末のみに立つ動詞の義務接尾辞 <p.105>
 - 5.4.1.1.2.1. 中止の接尾辞 1 <p.105>
 - 5.4.1.1.2.2. 中止の接尾辞 2 <p.105>
 - 5.4.1.1.2.3. 条件の接尾辞 <p.105>
 - 5.4.1.1.2.4. 理由の接尾辞 <p.106>
 - 5.4.1.1.2.5. 否定中止の接尾辞 <p.106>
 - 5.4.1.1.2.6. 付帯状況の接尾辞 <p.106>
 - 5.4.1.2. 統語環境が 1 つに限定されない義務接尾辞 <p.106>
 - 5.4.1.2.1. 主節末、副詞節末、連体修飾節末に立つ動詞の義務接尾辞 <p.106>
 - 5.4.1.2.1.1. 非過去の接尾辞 <p.107>
 - 5.4.1.2.1.2. 過去の接尾辞 <p.107>
 - 5.4.1.2.2. 主節末と副詞節末に立つ動詞の義務接尾辞 <p.107>
 - 5.4.1.2.2.1. 不定の接尾辞 <p.108>
 - 5.4.1.2.2.2. 直前の接尾辞 <p.109>
 - 5.4.2. 任意接尾辞 <p.109>
 - 5.4.2.1. 義務接尾辞に後続する任意接尾辞 <p.109>
 - 5.4.2.1.1. 終止の接尾辞 <p.109>
 - 5.4.2.1.2. 連体の接尾辞 <p.110>
 - 5.4.2.2. 義務接尾辞に先立つ任意接尾辞（派生接尾辞） <p.111>
 - 5.4.2.2.1. 使役の接尾辞 <p.111>
 - 5.4.2.2.2. 受け身/可能の接尾辞 <p.114>
 - 5.4.2.2.2.1. 受け身の用法 <p.115>
 - 5.4.2.2.2.2. 可能の用法 <p.115>
 - 5.4.2.2.2.3. 自発の用法 <p.116>
 - 5.4.2.2.3. 否定の接尾辞 <p.117>
 - 5.4.2.2.4. 能力可能の接尾辞 <p.119>

- 5.4.2.2.5. 結果継続の接尾辞 <p.120>
 - 5.4.2.2.6. 完了の接尾辞 <p.120>
 - 5.4.3. 統語位置による動詞活用形の分類 <p.120>
 - 5.5. 動詞の重複 <p.122>

 - 6. 形容詞の構造 <p.124>
 - 6.1. 黒島方言形容詞の特徴 <p.124>
 - 6.2. 形容詞語根のサブグループ <p.126>
 - 6.2.1. 比較形容詞形成接尾辞 ku に対する 2 つのグループのふるまいの違い <p.126>
 - 6.2.1.1. 両グループのふるまいの違いがあらわれない場合 <p.126>
 - 6.2.1.2. 両グループのふるまいが異なる場合 <p.127>
 - 6.2.2. そのほかの現象における形容詞のサブグループ <p.130>
 - 6.2.2.1. 複合 <p.130>
 - 6.2.2.2. 重複 <p.130>
 - 6.2.3. サブグループに分かれる要因 <p.131>
 - 6.2.4. サブグループピングの例外 <p.132>
 - 6.2.4.1. サブグループピングの例外 1: 比較形容詞が 2 つあるもの <p.132>
 - 6.2.4.2. サブグループピングの例外 2: 普通形容詞も比較形容詞も 2 つあるもの <p.134>
 - 6.3. 普通形容詞と比較形容詞 <p.135>
 - 6.3.1. 2 つの形容詞に共通する特徴 <p.136>
 - 6.3.1.1. 主節末、連体修飾節末、副詞節末に立ちうる活用形（過去形） <p.136>
 - 6.3.1.2. 主節末にのみ立ちうる活用形（過去終止形） <p.137>
 - 6.3.1.3. 連体修飾節末にのみ立ちうる活用形 <p.138>
 - 6.3.1.4. 副詞節末にのみ立ちうる活用形 <p.138>
 - 6.3.2. 2 つの形容詞の違い <p.139>
 - 6.3.2.1. 絶対形の分布について <p.139>
 - 6.3.2.2. 終止の接尾辞に関して <p.141>
 - 6.4. 動詞語根から形容詞語幹を派生させる接尾辞 <p.143>
 - 6.4.1. 属性化接尾辞-ida- <p.145>
 - 6.4.2. 動詞を形容詞に転換する接尾辞-jassa <p.145>
 - 6.4.3. 動詞を形容詞に転換する接尾辞 -inussa <p.146>
 - 6.4.4. 動詞を形容詞に転換する接尾辞-ipisa <p.146>
7. その他の品詞 <p.147>
 - 7.1. 連体詞 <p.147>
 - 7.1.1. 連体詞 ii 「良い」 <p.147>
 - 7.1.2. 連体詞 deezina 「大変な」 <p.149>
 - 7.2. 感動詞 <p.149>
 - 7.3. 接続詞 <p.150>
 - 7.4. 副詞 <p.150>
 - 7.4.1. 副詞を述語化する場合 <p.152>
 - 7.4.2. 形容詞語根の重複 <p.153>
 - 7.5. 形容詞 haija を後部要素に持つ複合形容詞 <p.154>
8. 助詞 <p.156>
 - 8.1. 格助詞 <p.156>

- 8.1.1. 主格=nu <p.157>
- 8.1.2. 対格 1=ju <p.157>
- 8.1.3. 対格 2=ba <p.158>
- 8.1.4. 与格=ni <p.158>
- 8.1.5. 奪格=hara <p.159>
- 8.1.6. 向格=ha <p.159>
- 8.1.7. 場所格=na <p.159>
- 8.1.8. 具格=si <p.159>
- 8.1.9. 共格=tu <p.160>
- 8.1.10. 限界格=baaki <p.160>
- 8.1.11. 比況格=nin <p.160>
- 8.1.12. 比較格=kin <p.160>
- 8.2. 属格助詞 <p.160>
- 8.3. とりたて助詞 <p.161>
- 8.3.1. 主題助詞=a <p.163>
- 8.3.2. 追加助詞=n <p.163>
- 8.3.3. 焦点助詞=du <p.164>
- 8.3.4. 不定助詞=ka <p.164>
- 8.3.5. 限定助詞=tanka <p.164>
- 8.3.6. 極端助詞=assan <p.164>
- 8.4. 接続助詞 <p.164>
- 8.4.1. 逆接助詞=nu <p.165>
- 8.4.2. 理由助詞=junti <p.166>
- 8.4.3. 不定助詞=nu <p.166>
- 8.4.4. 引用助詞=ti <p.166>
- 8.5. 終助詞 <p.166>
- 8.5.1. 新情報の終助詞=doo <p.167>
- 8.5.2. 丁寧な新情報の終助詞=ju <p.167>
- 8.5.3. 疑問詞疑問助詞=ra <p.167>
- 8.5.4. 疑問詞疑問助詞=ja <p.168>
- 8.5.5. 意外性助詞=ba <p.168>
- 8.5.6. 確認助詞=waja <p.168>
- 8.5.7. 話者のみの判断の助詞=saa <p.168>
- 8.5.8. 疑いの助詞=kaja <p.169>
- 8.5.9. 伝聞助詞=tu <p.169>
- 8.5.10. 丁寧な命令の助詞=joo <p.169>
- 8.5.11. 疑問=ka <p.169>
- 8.5.12. 軽い驚きの助詞=jara <p.169>

9. 述部 <p.170>

- 9.1. 動詞述部 <p.170>
- 9.1.1. 普通動詞述部 <p.171>
- 9.1.2. 助動詞述部 <p.171>
- 9.1.2.1. 継続の助動詞 <p.172>
- 9.1.2.2. 尊敬の助動詞 <p.173>
- 9.1.2.3. 受益の助動詞 <p.173>

- 9.1.2.4. 反予想の助動詞 <p.173>
- 9.1.2.5. 準備の助動詞 <p.174>
- 9.1.2.6. 習慣の助動詞 <p.174>
- 9.1.2.7. 経験の助動詞 <p.174>
- 9.1.3. 軽動詞述部 <p.174>
- 9.1.3.1. 包摂関係をあらわす軽動詞述部 <p.175>
- 9.2. 名詞述部 <p.176>
- 9.2.1. 複合名詞を用いる感嘆文 <p.177>
- 9.3. 形容詞述部 <p.177>
- 9.4. モダリティ要素 <p.178>
- 9.4.1. pazi、raasa <p.178>
- 9.4.2. aran <p.181>

- 10. 統語・意味 <p.185>
- 10.1. 単文 <p.185>
- 10.1.1. 動詞文 <p.185>
- 10.1.1.1. 項の数による分類 <p.185>
- 10.1.1.1.1. 1 項文 <p.185>
- 10.1.1.1.2. 2 項文 <p.186>
- 10.1.1.1.3. 3 項文 <p.187>
- 10.1.1.2. 項の増減 <p.187>
- 10.1.1.2.1. 受け身 <p.187>
- 10.1.1.2.2. 自発 <p.188>
- 10.1.1.2.3. 使役 <p.189>
- 10.1.2. 形容詞文 <p.191>
- 10.1.3. 名詞文 <p.191>
- 10.1.3.1 名詞句のみの文 <p.192>
- 10.2. 複文 <p.192>
- 10.2.1. 副詞節 <p.192>
- 10.2.1.1. 時制をとる副詞節 <p.194>
- 10.2.1.2. 時制をとらない副詞節 <p.195>
- 10.2.2. 連体修飾節 <p.195>
- 10.2.3. 補文 <p.196>
- 10.3. 文のタイプ <p.197>
- 10.3.1. 平叙文 <p.197>
- 10.3.2. 疑問文 <p.197>
- 10.3.3. 命令文 <p.198>
- 10.4. 情報構造 <p.198>
- 10.4.1. 主題 <p.198>
- 10.4.2. 対比 <p.198>
- 10.4.3. 焦点 <p.199>
- 10.4.4. 係り結び <p.199>
- 10.5. 包摂・等価・存在・所有 <p.202>
- 10.5.1. 包摂 <p.202>
- 10.5.2. 等価 <p.203>
- 10.5.3. 存在 <p.202>

- 10.5.4. 所有 <p.204>
- 10.6. テンポラリティー <p.205>
- 10.6.1. 動詞文のテンポラリティー <p.205>
- 10.6.2. 名詞文のテンポラリティー <p.207>
- 10.6.3. 形容詞文のテンポラリティー <p.207>
- 10.7. アスペクチュアリティー <p.207>
- 10.7.1. 助動詞 bur <p.208>
- 10.7.2. 接尾辞 eer <p.208>
- 10.7.3. 接尾辞-idar- <p.209>
- 10.7.4. beer 結果継続 <p.209>
- 10.7.5. arak 習慣 <p.210>
- 10.7.6. 複合動詞+tuus <p.210>
- 10.8. 可能 <p.211>
- 10.9. 否定 <p.211>

第二部 個別トピック

- 11. 二重有声摩擦音について <p.214>
- 11.1. はじめに <p.214>
- 11.2. 黒島方言の音素配列の概略 <p.214>
- 11.3. 単音と二重音の有声摩擦音の違い <p.215>
- 11.3.1. 形態音韻的ふるまいの違い <p.215>
- 11.3.2. 二重有声摩擦音を認めることのメリット <p.215>
- 11.3.2.1. 動詞活用を減らす <p.216>
- 11.3.2.2. 普通形容詞化接尾辞の母音同化の例外をなくす <p.216>
- 11.3.3. 二重有声摩擦音の実現の揺れ <p.218>
- 11.4. 類型論的位置づけ <p.219>
- 11.4.1. 類型論的傾向と黒島方言の二重有声摩擦音の実現の揺れ <p.219>
- 11.4.2. 類型論的含意関係の細分化 <p.221>
- 11.5. まとめと今後の課題 <p.222>

- 12. 形容詞の認定 <p.223>
- 12.1. 先行研究 <p.223>
- 12.1.1. 琉球語諸方言の形容詞に関する伝統的な研究 <p.223>
- 12.1.2. 琉球語諸方言の形容詞の認定に関する研究 <p.224>
- 12.1.2.1. Shimoji (2009) による宮古伊良部方言の形容詞認定に関する議論 <p.224>
- 12.1.2.2. 新永 (2010) による奄美湯湾方言の形容詞認定に関する議論 <p.226>
- 12.1.2.3. 麻生 (2010b) による八重山波照間方言の形容詞認定に関する議論 <p.228>
- 12.1.2.4. 形容詞の認定に関して議論した先行研究のまとめ <p.229>
- 12.2. 各品詞の特徴 <p.229>
- 12.2.1. 形容詞 (guffa 「重い」) <p.230>
- 12.2.2. 動詞 (haku 「書く」) <p.231>
- 12.2.3. 存在動詞 ar (ある) の記述 <p.232>
- 12.2.4. 名詞+コピュラ <p.233>
- 12.3. 形容詞と他の品詞との比較 <p.234>

- 12.3.1. 形容詞と動詞との比較 <p.235>
- 12.3.2. 形容詞とコンピュータとの比較 <p.235>
- 12.3.3. 形容詞と存在動詞および名詞との比較 <p.236>
- 12.3.4. 形容詞と各品詞との比較のまとめ <p.238>
- 12.4. ほかの方言との比較 <p.238>

- 13. いわゆる「終止形」と「連体形」について <p.240>
- 13.1. はじめに <p.240>
- 13.2. 先行研究 <p.240>
- 13.2.1. 平山ほか (1967) <p.240>
- 13.2.2. 山口 (2004) <p.241>
- 13.2.3. 先行研究の相違点と問題点 <p.242>
- 13.3. 本研究の調査結果 <p.243>
- 13.3.1. 主節末にたちうるかたち <p.244>
- 13.3.2. 連体修飾節末にたちうるかたち <p.245>
- 13.4. 各接尾辞の位置づけと議論 <p.248>
- 13.5. おわりに <p.249>

- 14. テンポラリティー・アスペクチュアリティー・エビデンシャルリティー接尾辞 *jassu* について <p.251>
- 14.1. はじめに <p.251>
- 14.2. 黒島方言テンポラリティー・アスペクチュアリティーの概要 <p.252>
- 14.3. *jassu* の形態統語的特徴 <p.253>
- 14.3.1. 形態的特徴 <p.253>
- 14.3.2. 統語的特徴 <p.255>
- 14.4. *jassu* の意味的特徴 <p.258>
- 14.4.1. 「直前」 <p.258>
- 14.4.2. 「話者の直接的経験」 <p.259>
- 14.4.3. 「状況の変化」 <p.262>
- 14.5. まとめと今後の課題 <p.265>

- 15. 属性語幹化接尾辞-*ida*-について <p.266>
- 15.1. はじめに <p.266>
- 15.2. 形態的特徴 <p.266>
- 15.3. 統語的特徴 <p.268>
- 15.4. 意味的特徴 <p.270>
- 15.4.1. 属性 <p.271>
- 15.4.2. 段階性 <p.271>
- 15.4.3. 命題の種類と段階的な意味の種類 <p.273>
- 15.4.3.1. 高頻度 <p.273>
- 15.4.3.2. 多量 <p.273>
- 15.4.3.3. 高程度 <p.274>
- 15.4.3.4. 上手 <p.274>
- 15.4.3.5. 多義性のまとめ <p.274>
- 15.4.4. 段階性の意味に関する議論 <p.275>
- 15.5. まとめと今後の課題 <p.275>

- 16. おわりに <p.277>
- 16.1. 母音の脱落について <p.277>
- 16.2. アクセント <p.278>
- 16.3. アスペクチュアリティー形式 <p.278>

参考文献 <p.279>

導入（本論文の構成について）

本論文の構成について述べる。

本論文は南琉球八重山黒島方言の文法記述を目的とするものであり、二部構成になっている。第一部では、文法を記述する。この第一部の各章においては、音韻から統語、意味まで、幅広い現象を扱う。これに続く第二部においては、個別トピックを扱う。これらは、言語類型論的観点からの考察や、他方言との対照などを含むため、記述文法の枠組みではなく、個別に取り出して扱ったほうがいい、と考えられたトピックである。

略号一覧

1	1 人称	POT	可能
2	2 人称	PROG	継続
3	3 人称	PROH	禁止
ABILT	能力可能	PS	属性語幹
ABL	奪格	PST	過去
ABS	絶対形	Q	疑問
ACC	対格	QUOT	引用
ADJVZ	普通形容詞	RED	重複
ADN	連体修飾	REFL	再帰代名詞
ADVRS	逆接	SEQ	中止
ALL	向格	SF	終助詞
COM	共格	SG	単数
COMP	完了	SIML	付帯状況、同時
COND	条件	SPNT	自発
CONT	継続	TOP	主題
CSL	理由	WH	疑問詞疑問
DAT	与格	.	音節境界
DECL	終止	-	接辞境界
DIM	指小辞	=	助詞境界
DISC	談話標識	+	複合または重複
FIL	フィラー	*	非文法的であること
FN	形式名詞	#	運用上不適切であること
GEN	属格		
HAB	習慣		
IMP	命令		
INCL	包括		
INDF	不定		
INST	具格		
INT	意志		
LMT	限界		
LOC	場所格		
LV	軽動詞		
NEG	否定		
NEGSEQ	否定中止		
NOM	主格		
NPST	非過去		
PASS	受け身		
PL	複数		

第一部

記述文法

1. 黒島方言の概要および本稿で用いる資料について

本論文は、沖縄県八重山郡竹富町黒島（以下、黒島とする）において使用されている方言（以下、黒島方言）の文法の記述を目的とする。本節においては黒島方言がおかれている状況と、本稿で用いる資料について述べる。まず、1.1.において地理的な位置と、系統的な位置について述べる。続く 1.2.では、黒島の産業や文化について簡単に述べる。1.3.においては黒島方言の話者数について述べ、1.4.では黒島方言に関する先行研究について述べる。1.5.においては黒島内での方言差について述べる。最後に、1.6.において、本論文をとおして用いる資料について述べる。

1.1. 地理・系統

本節においては、黒島の地理と、黒島方言の系統について述べる。1.1.1.で地理について、1.1.2.で系統について述べる。

1.1.1. 地理

本稿でとりあげる黒島方言は、沖縄県八重山郡竹富町黒島において使用されている。石垣島や沖縄本島にも黒島からの移住者で黒島方言を話す人もいるが、数は多くない。本節では、黒島の地理的位置と島内の集落について述べる。

黒島は、琉球列島は先島諸島に属する。先島諸島は大きく宮古諸島と八重山諸島に分けられるが、黒島はこのうちの八重山諸島に属する。八重山の中心である石垣島から高速船で南西に 30 分くらいのところに位置する、山がなく、まっ平な島が黒島である。北緯約 24 度、東経約 124 度に位置し、面積 10.02km² の非常に小さな島である（参考：国土地理院のウェブサイトおよび沖縄県八重山支庁（2012））。

島内には 5 つの集落がある。aasun 東筋（あがりすじ）、nahantu 仲本（なかもと）、puri 保里（ほり）、jaku 伊古（いこ）、mesitu ~ masitu 宮里（みやざと）である（ローマ字表記が伝統的な方言の地名。丸カッコ内は現在一般的に呼ばれている地名）。伝統行事など、集落ごとに行うものも存在するが、狭い島であるため、これらの集落間の交流はもちろん深い。方言差は存在するが、島民の間でも「黒島のことば」としての認識があることなどから、本論文においては特に区別せず、ひとつの黒島方言として扱うこととする。著しい違いがある場合は、適宜言及することとする。主な方言差については、1.5.において具体例を挙げる。

なお、黒島の伝統的な方言が使用されているのは、上記の集落のうち、東筋、仲本、保里の 3 つのみである。宮里と伊古の 2 つの集落に現在居住しているのは移住者のみであるためである。本論文においては、東筋、仲本、保里で使用されている言語を研究対象とする¹。黒島と各集落の位置に関しては、以下の図 1-1²を参照のこと。

¹ 宮里集落から石垣島へ移住した方に対する調査も行っているが、まだまとまった量ではないため、本論文の資料としては扱わない。なお、伊古集落は沖縄本島の糸満からの漁業移民で形成された集落であり、黒島方言とは別の伝統的な方言が使用されていたようであるが、詳細は不明である。

² 地図はトマ・ペラルール氏の作成による。

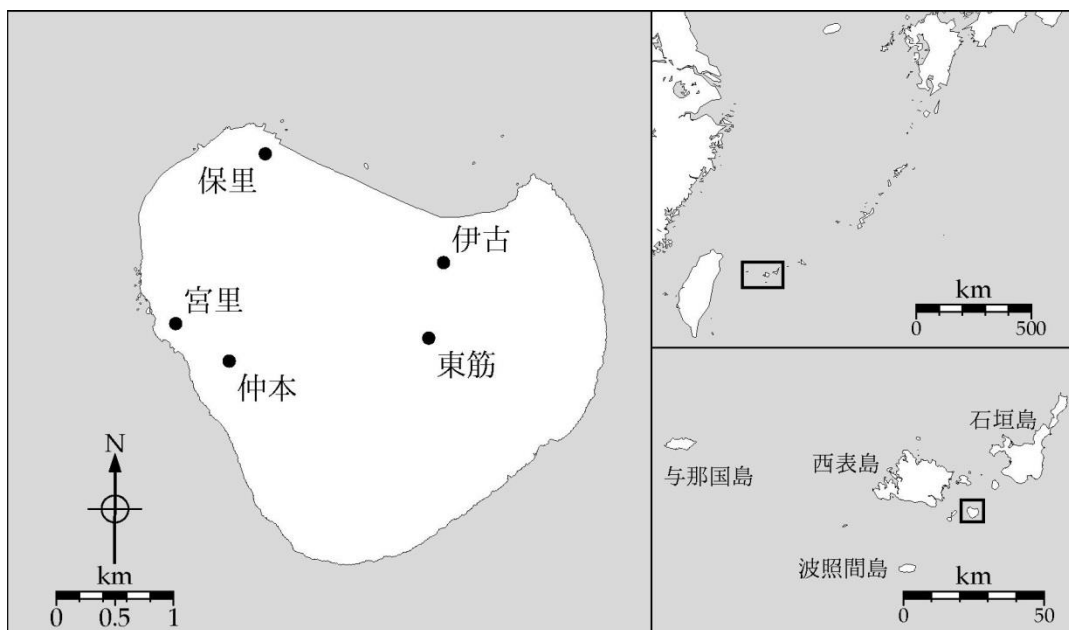


図 1-1 黒島の位置

1.1.2. 系統

琉球列島で使用される言語を「琉球語 (琉球諸語)」とするのか、「(日本語の) 琉球方言」とするのか、ということに関してはさまざまな問題があるが (上村 1997 (1992)、ハインリッヒ 2011 など)、本論文はこの問題に踏み込むものではない。本論文では、日本語との差異に注目して、琉球語という呼称を用いる。

また、琉球語内の系統についても議論の残るところ (ローレンス 2000、Pellard 2009 など) であるが、ここでは上村 (1997 (1992)) の分類に従う。琉球語はまず、北琉球語と南琉球語に大分される。さらに、その南琉球語は、宮古、八重山、与那国の 3 つに分類される。本論文の対象言語である黒島方言は、これらのうちの八重山方言群に属する。これを図にすると、下の図 1-2 になる (八重山方言の下位区分については省略している)。

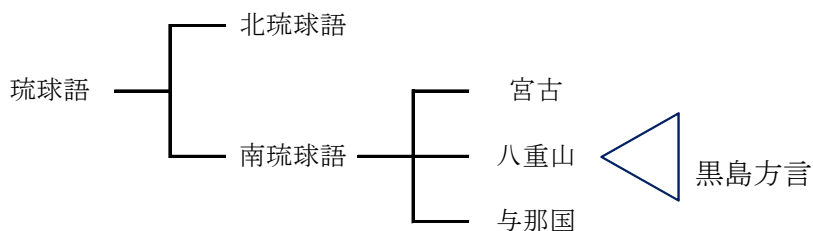


図 1-2 琉球語の系統と黒島方言の位置 (上村 1997 による)

従って、本論文では、本論文の対象となる言語は南琉球語八重山方言群の黒島方言であると、以下、黒島方言と呼ぶこととする。

なお、八重山方言群内での区画については、ローレンス (2000) が詳細な研究を行っている。ローレンス (2000) は、音韻対応などで予測できる語形とは異なる、予測できない変化を共有している方言をグループ化し、系統関係を示している。それをまとめると、下の図

1-3 のようになる³。ローレンス (2000) によると、黒島方言は竹富方言、西表島上原方言、鳩間方言と系統的に近いようである。

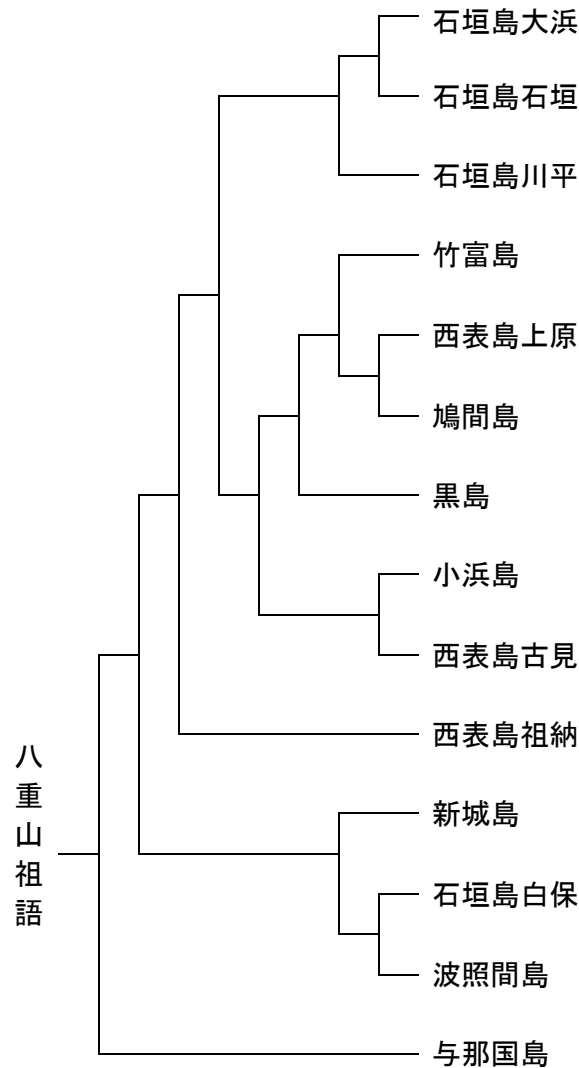


図 1-3 ローレンス (2000) による与那国を含む八重山諸方言の系統

1.2. 生業・文化

本節では、黒島方言が使用されている島、黒島の生活について簡単に述べる。

黒島の主要な産業は、畜産と観光である。これ以外の産業に関わるものはごく少数である。のちに述べるが、約 200 名の人口に対し、約 3000 頭の牛がいることから、「牛の島」

³ ローレンス (2000) と上村 (1997 (1992)) は与那国方言のとらえ方が異なるのがわかる。上村 (1997 (1992)) が図 1-2 のとおり八重山方言と与那国方言を同じレベルに置いたのに対し、ローレンス (2000) は与那国方言も八重山方言の一部としている。ただ、八重山方言のなかでも最も他の方言とは系統的には遠いものと判断されている。本稿はこの問題に立ち入るものではない。

と言われることもある。奇数月の13日ごろには島内で牛のセリが行われる。また、透明度の高い海を目的に黒島を訪れる観光客も多い。

黒島は伝統文化を多く残す八重山地方にあっても「芸能の島」と呼ばれることがあるほど芸能に富む。特に、旧正月、豊年祭、結願祭、などの行事で披露される歌と舞踊は多様で、多くの観光客を呼ぶ。(参考:沖繩国際大学南島文化研究所編2001および2002、當山 2008など)。しかし、若年層人口の減少にともない、これらの芸能の継承も難しくなってきた。そのような環境のなかでも島民の文化継承に対する努力は地道に行われている。

1.3. 話者数

世界に存在する多くの危機言語と同じく、黒島方言の話者は高齢者に限られる。黒島の人口は2010年の国勢調査によると194名であり、そのうち65歳以上の人口は53名である。伝統的な黒島方言を使用できるのはほぼ75歳以上に限られるため、黒島方言の話者数は多く見積もって40名ほどと考えられる(2015年現在)。なお、石垣島や沖縄本島にいる話者の数は不明であるが、島の方の話によると数は多くないようである。

無論、現在の若年層などにおいても「黒島の方言」というべきものは形成されているであろうが、本論文でとりあげる黒島方言とは、この、主に75歳以上の方が使用する方言を指すこととする。黒島方言話者の子供の世代は、理解能力は持っているようであるが、使用能力は持っていない。孫の世代になると、理解・使用ともに困難である。従って、この言語は明らかに消滅の危機に瀕している。なお、黒島方言話者はすべて、黒島方言から影響を受けた現代日本語と、黒島方言とのバイリンガルである。しかし、黒島方言話者同士では、黒島方言で会話を行っている。

1.4. 先行研究

黒島方言に関する先行研究は少ない。重要な研究としては、平山他(1967)、内間(2004)、山口(2004)がある。平山他(ibid.)は簡単な音韻、文法のスケッチと他の琉球語諸方言との対照が可能な語彙集を含んでいる。内間(ibid.)は日本語との音韻対応を語レベルで詳細に検討しており、また、簡単な助詞の記述も含んでいる。山口(ibid.)は学校文法にのっとり、動詞と形容詞の活用のスケッチを行っている。

これらの3つの先行研究に共通して言える問題点は、いずれも日本語(現代共通語や古典語)や他の琉球語諸方言との対照をあまりに意識しすぎている、ということである。たとえば、形容詞の活用で「連用形」というものと「未然形」というものを立てているが、すべての語において「連用形」と「未然形」は共通している(山口2004:69)。この区別は、この言語を観察したうえで出されたものと言うよりは、日本語に対する考え方をそのままこの言語に持ち込んだだけのものであろう。また、音素目録に声門閉鎖音が入っている(平山他1967:126、内間2004:3)が、意味の弁別に関わることはないので、これを音素として立てる必要はない。これは、他の琉球方言との対照を念頭に記述された、ということに起因していると考えられる。こういった意味において、黒島方言の記述をゼロから、それ自体の論理にしたがって行ったと言える研究は現在のところ、存在しない。

これらのほかにも、いくつか黒島方言を扱った研究は存在する。中松(1976(2001))は、黒島方言の助詞を分類し、意味を記述した。また、野原(2001)も同じく、黒島方言の助詞の記述を行っている。伊豆山(1996)は、母音の順行同化を扱っている。また、伊豆山(1997)は、黒島方言を大きく取り上げながら琉球語諸方言の形容詞の成立を論じている。

松森 (2014、2015) は、黒島のアクセントを取り上げており、本稿や平山など (1967) が想定するのとは違う仕組みを提案している。具体的には、本稿や平山など (1967) は 2 型のアクセントを認めているが、松森 (2014、2015) においては 3 型のアクセントを認めている。また、アクセントがかかる単位も従来とは違う単位が提案されており、この説に関しては今後、検討が必要である。荻野 (2015) においては、黒島における方言継承活動の紹介などがなされている。

そもそも、琉球語諸方言の総合的な記述というものの自体が、その危機的な状況とは裏腹に、進んでいるとは言えない。近年、Shimoji (2008) や Pellard (2009)、Niinaga (2014) において、それぞれ南琉球宮古伊良部方言、同宮古大神方言、北琉球奄美湯湾方言の文法書がまとめられた。また、現在、若手の研究者によって各地の方言の文法書が執筆されているところであるが、いまだに非常に多くの方言が体系的な記録を残さないまま消滅の危機に瀕している状況に変わりはない。

1.5. 黒島方言内部の方言

黒島は小さな島とはいえ、集落間を歩いて移動するのはかなりきつい。現在ではもっぱら車で移動するが、戦前は自転車すらなかったと聞く。小さな島でも方言差があるというのは当然のことであろう。本節では、黒島方言内部の方言差について述べる。ただし、方言差について詳細な調査は行っていないため、網羅的に情報があるわけではない。音声的な面、語彙的な面、文法項目の面にわけて示す。なお、荻野 (2015) によると、東筋方言に対して、仲本・保里・宮里の方言は似ている、と話者に認識されているようである。

まず、音声的な面について述べる。黒島方言において、色の「白」「黒」は、語根を重複させた形であらわれることが多い⁴。それは、以下のようなかたちである。東筋方言のかたちをまず挙げる。

(1-1) 東筋方言の白と黒

a. //zzu//	b. /zoosso/ [zo:s:o]
白 (語根)	白々 (重複形)
b. //vvu//	b. /vooffo/ [vo:f:o]
黒 (語根)	黒々 (重複形)

保里方言においても、これらの [zo:s:o] や [vo:f:o] という実現形はある。しかし、それと同時に、以下のような実現形も存在する。

(1-2) 保里方言の白と黒

a. //zzu//	b. /zoosso/ [zoʔos:o / zo:ʔs:o]
白 (語根)	白々 (重複形)
b. //vvu//	b. /vooffo/ [voʔof:o / vo:ʔf:o]
黒 (語根)	黒々 (重複形)

いずれの実現形のあいだにも意味的差異はないようである。声門閉鎖音が語頭の母音の前以外であらわれるケースは黒島方言においては極めて稀である。しかも、この「白々」と「黒々」の場合は声門閉鎖の存在が話者に自覚されていた。今のところ、このような変異

⁴ //zzu//「白」や//vvu//「黒」が重複された場合に末尾の母音が交替しているが、この理由は不明である。ただし、南琉球宮古伊良部方言においても同様に、いわゆる形容詞の語根が重複された場合、末尾母音が交替することがあるようである (Shimoji 2008)。

は保里方言でしか観察されていない。zoosso や vooffo のような重複形の語形成と、有声二重摩擦音の形態音韻規則についてはそれぞれ 7.4.2.、2.4.10. および 11 章で述べるが、これらの祖形の想定や他方言との対照に際し、この声門閉鎖が入る変異は役に立つものと考えられる。今後、保里方言以外でも聞かれることがないか、また、他の言語項目でも観察されることはないか、調査を進めたい⁵。

続いて、語彙的な方言は以下のようなものである。キラマンギンとは、麦の粉を水で練って作る、団子と麺の中間くらいのパスタのような食べ物である。空欄は未調査である。

表 1-1 黒島方言内部の方言差（語彙）

	東筋方言	保里方言	仲本方言
（雨などが）降る	vv-u	vu-u	
降らない	vv-an	vu-an	
降り（始める）	vv-i	vu-i	
キラマンギン	kiramangin		kirimungi
ご飯（米）	uban	ubon	ubon

「（雨などが）降る」に関しては、語根のかたちに方言差がある。東筋方言では vv が語根であるのに対し、保里方言では vu が語根である。また、キラマンギンは東筋では kiramangin、仲本では kirimungi と呼ぶ。お米のご飯のことは東筋では uban、保里と仲本では ubon と言う。このようなことから、保里と仲本が似ている、という話者の直観は支持されるのかもしれない。

最後に、文法的な面について述べる。この点に関して、仲本方言の資料はない。東筋と保里においては、動詞の禁止形に違いがある。東筋方言においては -una という接尾辞であるのに対し、保里方言においては -unna という接尾辞をとる。

表 1-2 動詞禁止形の方言差

	東筋	保里
食べるな	voona	voonna
漕ぐな	kuuna	kunna
閉めるな	fuuna	fuunna

また、形態音韻規則においても両集落間で違いがある。「泳ぐ」を意味する語根も、「追う」を意味する語根も u であるが、これにまつわる形態音韻規則が異なる。以下、表に示す。

表 1-3 「泳ぐ」の形態音韻規則に関する方言差

	東筋	保里
泳がない (u-an)	[wa:n]	[o:n]
泳ごう (u-a)	[wa:]	[o:]
泳いだ (u-uta)	[u:ta]	[u:ta]

⁵ 東筋方言では声門閉鎖入りの変異は聞かれなかった。ただし、声門閉鎖入りの変異を聞いても違和感はないようである。なお、仲本方言に関しては未調査である。

表 1-4 「追う」の形態音韻規則に関する方言差

	東筋	保里
追わない (u-an)	[wa:n]	[o:n]
追おう (u-a)	[wa:]	[o:]
追った (u-uta)	[u:ta]	[u:ta]

このように、両方言における「泳がない」「泳ごう」を意味する語形は異なる。2.4.8.で示す末尾にuを持つ形態素にaを先頭に持つ拘束形態素が続いたときの形態音韻規則を考えた場合、保里方言の実現形のほうが、その規則に従っており、より一般的であると言える。東筋方言もこの「泳ぐ」と「追う」の活用以外では、その規則に従うため、この語の音韻交替が特殊であると言える。このように考えると、ある意味では語彙的な違いのようにも考えられるが、基底に u を立て、それに接尾辞を付していくことに関しては両方言間に差異はない（つまり、先頭に a を持つ接尾辞以外の場合は両者とも共通の語形を用いる）ため、ここでは形態音韻規則上の変異とした。

1.6. 本稿で用いる資料について

本稿では、筆者のフィールドワーク（2010年6月～）によって収集された資料を主に用いる。資料は、自由談話を録音しそれを文字起こした資料と、面接調査による資料の2種類を用いる。主なインフォーマントの情報を以下の表 1-5 にあげる。Fさん以外は島外で生活した経験をほぼ持たない。Aさんの体調がすぐれなかった期間が長かったため、本稿で用いる資料は主に東筋と保里の方言である。

表 1-5 インフォーマント情報

	集落	生年	性別	備考
Aさん	仲本	1928	女性	
Bさん	東筋	1933	男性	
Cさん	東筋	1939	男性	
Dさん	保里	1928	女性	(※DさんとEさんは夫婦)
Eさん	保里	1935	男性	(※DさんとEさんは夫婦)
Fさん	仲本	1946	男性	主に書き起こしの際に話を伺った

ここで、自由談話についても述べておく。自由談話に関しては合計 150 分ほど収録、文字化している。このうち、タグ付けなどが済んでいる約 70 分を主に談話資料として使用した。この 70 分の内訳は以下のとおりである。

表 1-6 自由談話資料の内訳

資料 ID	時間	参加者	内容
awamori1	22分	Bさん、Cさん	島の産業などについて
awamori2	15分	Bさん、Cさん	泡盛の作り方などについて
kuroshiomaru4	12分	Dさん、Fさん	昔の船のことなどについて
saketousi	5分	Bさん、Cさん	牛を飼うことなどについて
sitici1	15分	Bさん、Cさん	魚の減少などについて

2. 音韻

本節では、黒島方言の音韻について述べる。まず 2.1.1.において当方言の音素を示し、異音についても述べる。続く 2.2.1.においては音節構造とモーラについて述べる。2.3.1.においてはプロソディについて述べ、本章最後の 2.4.1.においては音韻規則ならびに形態音韻規則について述べる。なお、本論文を通して、以下の表示を用いる。

- (2-1) [x] : 音声表記
/ x / : 表層の音素表記
// x // : 基底の音素表記
C : 子音 (consonant)
V : 母音 (vowel)
S : 半母音 (semi-vowel)

ここで、音声表記、表層の音素表記、基底の音素表記をそれぞれ用いる理由を示す。次節で示すとおり、1つの音素でもヴァリエーションがかなり見られることが多い。したがって、それらを示しわけするためには音声表記が必須である。しかし、これは一方で、音声にかかわりの低い箇所においては煩雑にもなる。そのため、表層の音素表記を示す。この表層の音素表記は、実現形にほぼ近いものである。そのため、直感的に語形を理解できる。これに対し、基底の音素表記では、音韻規則がかかる前の形式を示す。これは、形態素の分析や、境界の表示などで必要である。ただし、実現するかたちとはかけ離れてしまう場合が黒島方言の場合多くあるため、基底の音素表記だけでは十分とは言えず、音素表記も同時に用いる。それぞれの表記の違いを以下に例示する。

- (2-2) 音声表記 : [meetohoraja]
表層の音素表記 : /mesitohoraja/
基底の音素表記 : //mesitu hara a//
意味 : 「宮里 から は」

「宮里 (集落の名前)」を意味する語は基底では//mesitu//であり、単独では [meetu] と発音されるが、奪格格助詞[hara] //hara//が後続した場合、[mecto] /mesito/と発音され、奪格格助詞も[hora] /hora/と発音される。このように、形態音韻規則がかかったあとの実現形と、基底形とのあいだに大きな差があるため、本論文においては表層の音素表記、基底の音素表記を併用することとする。

2.1. 音素

本節ではまず 2.1.1.1.において黒島方言の音素目録を示す。続いて、2.1.1.2.において、それぞれの音素の異音を示し、同時に注意すべき現象について詳述する。

2.1.1.1. 音素目録

黒島方言には、15の子音、2つの半母音、5つの短母音とそれらに対応する長母音を認める。以下に示す。

表 2-1 子音

		両唇	唇歯	歯茎	軟口蓋	声門
破裂音	無声	p		t	k	
	有声	b		d	g	
破擦音	無声			c		
摩擦音	無声		f	s		h
	有声		v	z		
鼻音		m		n		
はじき音				r		

半母音 : j, w

表 2-2 母音

	前舌	奥舌
狭	i/i:	u/u:
半狭	e/e:	o/o:
広	a/a:	

なお、長母音と短母音はこの方言において対立する。

(2-3) 母音の長短によるミニマルペア

- a. tuzi [tudʒi] 「嫁」
tuuzi [tu:ɖʒi] 「船頭」(特に豊年祭の際の)
- b. pai [pai] 「灰」
paai [pa:i⁶] 「鋤」
- c. mari [mari] 「生まれる」
maari [ma:ri] 「まわる」

また、短母音と二重母音の対立もある。二重母音になる母音は、/b, d, g, h/ (つまり、/h/ と、有声の破裂音) 以外のすべての母音である。

(2-4) 短母音と二重母音によるミニマルペア

- a-1. itu [itu] 「糸」
- a-2. ittu [it:u] 「一斗」
- b-1. aka [aka] 「赤」
- b-2. akka [ak:a] 「あると (条件をあらわす)」
ar-ka
ある-COND
- c-1. zan [zan] 「ジュゴン」
- c-2. zzan [z:an] 「風」

これらのうち、(2-4-c-2)の例のように語頭に二重母音がたちうるのは/mm/、/nn/、/zz/、/vv/、/ss/、/ff/のみであり、他の二重母音は語中のみに実現する。

ここで、声門閉鎖音について述べる。黒島方言においては、語頭の母音の前において声

⁶ /aa/の異音として[a:]があるが、これについては2.1.2.3.3.にて述べる。cも同様。

門閉鎖音が観察されるが、これは弁別的ではない。しかし、1.5.で述べたとおり、保里方言にのみ、非語頭の声門閉鎖音が聞かれる。以下に例を示す。語根//zzu//「白」や//vvu//「黒」の重複形である。

(2-5) 黒島保里方言における非語頭の声門閉鎖音の例

a. [zoʔos:o ~ zo:ʔs:o ~ zo:s:o]	b. [voʔof:o ~ vo:ʔf:o ~ vo:f:o]
/zoosso ⁷ /	/vooffo/
RED+白	RED+黒
白々	黒々

ただし、この声門閉鎖音が入る実現は義務的ではなく自由変異である。さらに、上に示した保里方言における //zzu//「白」と //vvu//「黒」の重複形の場合にしか非語頭では声門閉鎖音は観察されないため、本稿においては例外扱いとし、声門閉鎖音を音素に加えることはしない。

2.1.2. 異音

本節では、それぞれの音素の異音を述べる。また、それぞれの項目において、注意すべき現象について詳述する。2.1.2.1.ではまず子音、続く2.1.2.2.では半母音、最後に2.1.2.3.において母音の異音について述べる。

2.1.2.1. 子音の異音

本節ではそれぞれの子音音素について異音を示し、注意すべき現象についても言及する。

2.1.2.1.1. /p/

音素/p/は、無声両唇破裂音[p]で実現する。特に語頭において有気音で実現することも多くあるが、音韻的な有気/無気の対立はない。

(2-6) a.	pana	「花」	[pana ~ p ^h ana]
b.	pini	「髭」	[pini ~ p ^h ini]
c.	giipa	「かんざし」	[gi:pa]

2.1.2.1.2. /t/

音素/t/は、無声歯茎破裂音[t]で実現する。日本本土の標準日本語とは異なり、母音/i/や/u/の前でも[t]で実現する（これらの音韻解釈については2.1.2.1.7./c/の節で述べる）。なお、有気音で実現することも多くあるが、/p/と同じく、有気/無気の対立が音韻的にあるわけではない。

(2-7) a.	tii	「手」	[ti: ~ t ^h i:]
b.	tuzi	「嫁」	[tudzi ~ t ^h udzi]
c.	taa	「田」	[ta: ~ t ^h a: ⁸]

⁷ このように形容詞語根の重複形の場合、それぞれの構成要素の末尾に/a/が後接したと思われる例が存在する。この理由については現在不明であり、今後、他方言との対照などを含めて要検討である。同様の現象は南琉球宮古伊良部方言においても観察されるようである (Shimoji 2008)。

⁸ taa「田」の実現としては、実際は、上記の[ta:]、[t^ha:]に加えて、[ta:]、[t^ha:]もありうる。しかし、[a: ~ a:]に関しては、/aa/の異音であるため (2.1.2.3.3.を参照のこと)、ここでは省略

- d. bata 「腹」 [bata]

2.1.2.1.3. /k/

音素/k/は、無声軟口蓋摩擦音[k]で実現する。母音/i/の前では口蓋化することが多い。また、/p, t/と同様に有気音で実現することもあるが、音韻的な有気/無気の対立があるわけではない。

- (2-8) a. kii 「木」 [ki: ~ ki:]
 b. kusi 「腰」 [kuei ~ k^huei]
 c. muku 「婿」 [muku]

2.1.2.1.4. /b/

音素/b/は、有声両唇破裂音[b]で実現する。

- (2-9) a. buba 「叔母」 [buba]
 b. budur 「おどり」 [budur]
 c. habi 「紙」 [habi]

2.1.2.1.5. /d/

音素/d/は、有声歯茎破裂音[d]で実現する。

- (2-10) a. duu 「自分」 [du:]
 b. duku 「毒」 [duku]
 c. nada 「涙」 [nada]

2.1.2.1.6. /g/

音素/g/は、有声軟口蓋破裂音[g]で実現する。母音/i/の前では口蓋化する場合が多い。

- (2-11) a. gira 「シャコガイ」 [gira ~ g^hira]
 b. garasa 「カラス」 [garasa]
 c. kuga 「鞆丸」 [kuga]

2.1.2.1.7. /c/

音素/c/は、無声歯茎破裂音[ts]で実現することがもっぱらである。ただし、母音/i/の前では、後部歯茎破裂音[tʃ]もしくは歯茎硬口蓋破裂音[te]で実現する。

- (2-12) a. irabucaa⁹ 「ブダイ (魚の一種)」 [irabutsa:]
 b. naacaa 「翌日」 [na:tsa:]
 c. naci 「夏」 [naʃi ~ natei]

先述したように、/t/は母音/i, u/の前でも[t]で実現するが、音声列[tsu]や[tei]が/tu/や/ti/ではなく、/cu/や/ci/と解釈される理由をここで述べておく。後述するように (2.4.2.)、主題標識=aが続いた場合、その前の要素の末尾母音が同化を起こす。この際の、末尾母音が/u, i/の場合の母音交替を以下に簡単に示し、続いて例も示す。

- (2-13) 末尾母音が/u, i/の場合の主題標識=aが後接した際の母音交替
 (---は、任意の音素列をあらわすこととする)
 u: //---Cu=a// > /---Co=o/
 i: //---Ci=a// > /---Ce=e/

している。以下、同様に、かかわりのある範囲で異音を示すこととする。

⁹ この語には irabucjaa [irabuʃa:]という変異もある。

(2-14) 末尾母音が/u,i/の語の主題標識=a が後接した場合の例

u: izu 「魚」 [izu] //izu=a// > /izo=o/ [izo:] 「魚は」
i: hami 「亀」 [hami] //hami=a// > /hame=e/ [hame:] 「亀は」

このような母音交替現象に関して、末尾音に[tsu]や[tʃi]を持つ名詞のふるまいを見てみると、以下ようになる。

(2-15) a. 「生活」 [se:katsu] > 「生活は」 [se:katso:] *[se:kato:]
b. 「夏」 [naʃi] > 「夏は」 [naʃe:] *[nate:]

仮に、[tsu]を/tu/と解釈した場合、「生活は」を意味する音素列は/seekatoo/となり、この音声的实现としては[se:kato:]が予想される。しかし、上に示したとおり、これは許容されない。このかわりに[se:katso:]が許容されるのであり、これはすなわち、「生活」を意味する語は/seekacu/と解釈されるべきである、ということの意味する。「夏」を意味する語についても同様のことが言える。したがって、[tsu]、[tʃi]は/tu/、/ti/ではなく、/cu/、/ci/と解釈されるべきである。なお、末尾に/tu/、/ti/を持つ語の場合は、以下ようになる。

(2-16) a. 「場所」 [hatu] > 「場所は」 [hato:] *[hatso:]
b. 「朝」 [eitumuti] > 「朝は」 [eitumute:] *[eitumufje:]

このように、ふるまいが異なるため、[ti、tu、tei、tsu]がそれぞれ/ti、tu、ci、cu/と解釈されることは明確である。

2.1.2.1.8. /f/

音素/f/は、無声唇歯摩擦音[f]で実現するのがもっぱらである。しかし、無声両唇摩擦音[ɸ]で実現することもある。これらは自由変異である。特に比較的若い話者（とは言っても 75 歳程度の方）では、[ɸ]が頻出する傾向があるように思われる。

(2-17) a. funi 「船」 [funi ~ ɸuni]
b. fukur 「袋」 [fukur ~ ɸukur]
c. foosi 「釣り¹⁰」 [fo:ei ~ ɸo:ei]
d. maffa 「枕」 [maf:a ~ maɸ:a]

2.1.2.1.9. /s/

音素/s/は、無声歯茎摩擦音[s]で実現することがもっぱらであるが、母音/i/の前では、[ʃ ~ ɕ]で実現する。また、母音/e/の前において口蓋化する場合も散見されるが、これは個人差によるものかもしれない。母音/i/の前の口蓋化がほぼ義務的であるのに対し、母音/e/の前の口蓋化は任意である。

(2-18) a. saki 「酒」 [saki]
b. sita 「舌」 [ʃita ~ ɕita]
c. tamajose 「玉代勢（人名）」 [tamajose ~ tamajoʃe ~ tamajoeɕ]

2.1.2.1.10. /h/

音素/h/は、無声声門摩擦音[h]で実現するが、母音/i/の前では、[ç]で実現する¹¹。また、母

¹⁰ 語源は「噛ませる、食わせる、食らわす(fu-as-)」の意味であるが、foosi とだけ言った場合、「釣り」の意味が強い。

¹¹ 固有語の単語で/hi/を含むものは今のところ確認されていないが、上記の例の「肥料」など生活に密着した漢語由来の外来語などには/hi/は現れる。

音（特に非狭母音）に挟まれた場合は有声化することもまれにある¹²。

- (2-19) a. hami 「亀」 [hami]
b. hirjoo 「肥料」 [çir'io:]
c. naha 「中」 [naha ~ naɦa]

2.1.2.1.11. /v/

音素/v/は、有声唇歯摩擦音[v]で実現することが多い。しかし、有声両唇摩擦音[β]で実現することもある。これらは自由変異である。音素/f/と同様、特に比較的若い話者においては、[β]の頻度が高いように思われる。

- (2-20) a. uva 「あなた」 [uva ~ uβa]
b. ava 「油」 [ava ~ aβa]
c. siva 「心配」 [eiva ~ eiβa]
d. nivi 「寝る」 [nivi ~ niβi]

この音素は二重子音になり得るが、この場合も有声唇歯摩擦音で実現する。二重子音の場合、単音の/v/とは異なり、有声両唇摩擦音で実現することは稀である。

- (2-21) a. vva 「子」 [v:a]
b. vv-u 「降る（非過去形）」 [v:u]
c. avv-i 「あぶる（不定形）」 [av:i]

今のところ、単音の/v/が語頭にたつ語は見つかっていない。ただし、基底の語頭の二重子音/vv/が単音化した結果、[v]が語頭にたつ語はある。

- (2-22) a. vva 「子」 [va:]
b. vv-u 「降る（非過去形）」 [vu:]

この二重子音の形態音韻規則については後述する（2.4.10.と 11 章）。

2.1.2.1.12. /z/

音素/z/は、有声歯茎摩擦音[z]か、有声歯茎破擦音[dz]で実現する。これらは自由変異である。しかし、母音/i/の前では[ʒ ~ dʒ ~ z ~ dz]で実現する。また、破擦音の変異は、語頭において顕著にあらわれる。

- (2-23) a. za 「座」 [za: ~ dza:]
b. zin 「お金」 [ʒin ~ dʒin ~ zin ~ dzin]
c. haza 「におい」 [haza]

この子音も二重子音になり得るが、破擦音[dz]で発音しても非文法的とされることはないものの、母語話者は[z:]で発音することがもっぱらである。上述した/z/が破擦音[dz]で実現することもあるのと対照的である。

- (2-24) a. zza 「下」 [z:a ~ za:]
b. zzu 「糞」 [z:u ~ zu:]

この音連続は語頭にのみ生起する。また、形態音韻規則については 2.4.10.と 11 章で述べる。

¹² 有声化した異音はまれに聞かれるが、丁寧に発音される場合は無声の[h]が好まれる。

2.1.2.1.13. /r/

音素/r/は、歯茎はじき音[r]で実現するのがもっぱらである。特に、オンセットの位置では[r]で実現する傾向が強い。コーダの位置でも[r]で実現するが、ふるえ音[r̥]で実現することもある¹³。

- (2-25) a. garasa 「カラス」 [garasa]
 b. tur 「鳥」 [tur ~ tur¹⁴]
 c. tir 「ざる」 [tir ~ tir]

なお、後述するように、(特に語末の)コーダの/r/は/n/と交替することがある。しかし、形態音韻規則上、コーダの/r/と/n/とでふるまいが異なる場合があるため、コーダにおいて/r/の異音に[n]を認めてはいない。以下、主題標識=aが後続した場合を例にとり、説明する。主題標識=aが続いた場合の、語末のコーダに/r/と/n/を持つ語のふるまいは以下に示すとおりである。

- (2-26) 主題標識=aが続いた場合の、語末コーダ/r/、/n/を持つ語のふるまい
- | | | | | | | | | |
|---------------------|-----|-----|-------|---|-----------|------|----------|-----------|
| /r/: | tur | 「鳥」 | [tur] | > | //tur=a// | 「鳥は」 | /tur=ra/ | [tur:a] |
| | | | | | | | もしくは | |
| | | | | | | | /tur=a/ | [tura] |
| 語末コーダ/r/が/n/と交替した場合 | | | | | | | | |
| | | | | | //tur=a// | 「鳥は」 | /tun=na/ | [tun:a] |
| | | | | | | | | (*[tuna]) |
-
- | | | | | | | | | |
|------|----|-----|------|---|----------|------|---------|----------|
| /n/: | in | 「犬」 | [in] | > | //in=a// | 「犬は」 | /in=na/ | [in:a] |
| | | | | | | | | (*[ina]) |

上の (2-26) に示したとおり、語末コーダ/r/に主題標識=aが後続した場合、自由変異として、[tur:a]と[tura]¹⁵の両方が許容される。つまり、二重子音になっても、ならなくてもいいのである。これに対し、語末コーダ/n/に主題標識=aが後続した場合は、必ず二重子音化が生じ、[tun:a]となる。換言すると、[tuna]という形式は許容されない。つまり、語末コーダ/r/と/n/はふるまいに違いがあるわけである。このため、語末コーダ/r/は確かに頻繁に/n/と交替するが、異音としては認められない、という結論に至った。したがって、基底の語末のコーダの/r/が[n]などの鼻音で実現した場合、それは//r//の異音として実現したと考えるのではなく、たとえば「鳥」という語であれば//tun//という異形態が基底にたち、それにコーダの//n//の形態音韻規則がかかったものである、と判断する。

2.1.2.1.14. /m/

音素/m/は、両唇鼻音[m]で実現する。なお、後述するが (2.2.1.)、黒島方言においては鼻音だけで音節を構成することがある。/m/は、語頭で単独で音節を構成することができる。

- (2-27) a. maja 「猫」 [maja]

¹³ オンセットの位置でもふるえ音[r̥]で実現することがあるが、極めて稀である。

¹⁴ 同じ南琉球語の宮古語では、コーダの位置に/r/が立った場合、そり舌側面接近音[ɹ]で実現する方言もあるようであるが (伊良部方言: Shimoji 2009: 38)、黒島方言においてはそり舌側面接近音で実現することはない。

¹⁵ この際、[tura:]と主題標識の母音が長母音化することもある。語末コーダが/n/の場合はこのような長母音化する変異はないため、この非対称性については今後検討が必要である。

b. hami	「亀」	[hami]
c. mma	「馬」	[m:a]
d. mbusi	「蒸し」	[mbuei]

2.1.2.1.15. /n/

音素 /n/は、基本的には歯茎鼻音[n]で実現すると考えてよい。ただし、コーダの位置において、軟口蓋子音の前では[ŋ]、両唇子音の前では[m]で実現する。なお、語の末尾位置では、[N~ŋ]であることが多い。また、/n/は語頭において単独で音節を構成することができる。

(2-28) a. nada	「涙」	[nada]
b. nanka	「七日」	[nan̩ka]
c. osan	「お産」	[osaN ~ osan̩]
d. osan+mai	「お産前」	[osam:ai]
e. zin	「お金」	[zin ~ zin̩ ~ zin̩]
f. ngana	「にがな」	[ŋgana ~ ŋ:ana]
g. ngamaifunaa	「超孝行もの ¹⁶⁾ 」	[ŋgamaifuna:]

2.1.2.2. 半母音の異音

本節では、/j/、/w/それぞれの半母音の異音を述べる。

2.1.2.2.1. /j/

半母音音素/j/は、子音が先に立たない場合、硬口蓋接近音[j]で実現する。また、のちに音節構造で述べる S のスロットに/j/が立ち、前に子音がある場合は、その子音を口蓋化させることによって/j/は実現する。

(2-29) a. jama	「山」	[jama]
b. junan	「与那国」	[junan]
c. maju	「猫」	[maju]
d. kjuu	「今日」	[kju:]
e. bjuuwa	「かゆい」	[bju:wa]

2.1.2.2.2. /w/

半母音音素/w/は、子音が先に立たない場合、両唇接近音[w]で実現する。また、のちに音節構造で述べる S のスロットに/w/が立ち、前に子音がある場合は、その子音を唇音化することによって/w/は実現する。

ただし、今のところ、/w/の前に立ちうる子音は/k/と/g/のみが確認されている。また、その際に後続する母音も/a/のみである。したがって、この半母音音素/w/が S のスロットに入ることは稀であり、さらに、/kwa/ vs. /ka/ また、/gwa/ vs. /ga/ という対立のミニマルペアもないため、(/kw/や/gw/を除くと) /w/はほぼ子音とみなしても構わないものと考えられる。しかし、音声的な実現として[k^wa]や[g^wa]となることがもっぱらである語があり¹⁷⁾、さらに/ka/や/ga/という音素列が自由に[k^wa]や[g^wa]であられるということもないため、半母音音素として/w/をたてることとした。

(2-30) a. waa	「豚」	[wa:]
---------------	-----	-------

¹⁶⁾ 普通の孝行ものは maifunaa である。しかし、他の語に nga が使用される例はない。

¹⁷⁾ ikkwai 「一回」は [ik:wai] と発音しても [ik:ai] と発音しても許容されるのに対し、(2-30-d) の takkwari 「(泥などが) 大量につく」は [tak:ari] は許容されず、[tak:wari] のみが許容される。

b. wunoho	「九日」	[wunoho]
c. suuwa	「強い」	[su:wa]
d. takkwari	「(泥などが) 大量につく」	[takkwari]
e. mikkwa	「盲」	[mikkwa]
f. kugwa	「鞞丸」	[kugwa]

2.1.2.3. 母音の異音

本節では、黒島方言の母音音素の異音について、それぞれ述べ、注意すべき現象についても触れる。なお、語頭に母音がたった場合に、声門閉鎖音が生じる場合が多いが、これは弁別的なものではないため音素としては認めない。

- (2-31) a. itu 「糸」 [itu ~ ?itu]
 b. abu 「母」 [abu ~ ?abu]

固有の単純語に、e、o とこれらの長母音があらわれることは稀である。ただし、派生された語や、日本語由来のものを含む外来語には頻出するため、これらを音素として認める。

- (2-32) a. 固有語の e
 meehe 「墓」 [me:he]
 b. 外来語の e
 nedan 「値段」 [nedan]
 c. 派生した語の e
 piirakehe 「涼しい」 [pi:rakehe]

2.1.2.3.1. /i/

母音音素/i/は、[i]で実現する。

- (2-33) a. izu 「魚」 [ʔizu]
 b. sini 「すね」 [eini]
 c. pii 「リーフ」 [pi:]

2.1.2.3.2. /e/

母音音素/e/は、[e]で実現する。ただし、固有の単純語においては、短母音で/e/が立つことは稀である。しかし、接辞添加などが行われた場合は、短母音の/e/も珍しくはない。

- (2-34) a. meesabi 「朝食」 [me:sabi]
 b. jen 「来年」 [jen]
 c. meehe 「墓」 [me:he]
 d. magare 「マガレ」 [magare]
 (kungacijoi 「九月祭り」の際に作られる藁算を模したお菓子)
 e. isanakehe 「石垣へ」 [isanakehe]
 (/isanaki=ha/ > /isanakehe/ 2.4.3.参照)

2.1.2.3.3. /a/

母音音素/a/は、基本的に[a]で実現すると考えてよい。短母音の場合、前寄りの[æ ~ a]で実現するのに対し、長母音/aa/は、奥寄りの[a: ~ a]で実現することがある（つまり、母音の長さも長くなり、奥寄りになるのが典型である。母音の長さが短くなる場合もある）。この長母音/aa/の奥寄りの異音を持つ話者は、比較的高齢の方である。

- (2-35) a. saba 「サメ」 [saba ~ sæbæ]

- (2-36) b. waa 「豚」 [wa: ~ wa:]
 短母音/a/と長母音/aa/のミニマルペア
 a. pai 「灰」 [pai]
 b. paai 「鋏」 [pa:i]

これらの/a/と/aa/の音声的な実現 ([æ], [a], [ɑ]) は実際、明確に違って聞こえる。しかし本研究では、これらを別の母音音素としてではなく、異音として考える。この根拠となる現象を以下、2つ述べる。1つ目は最小語制約がかかる場合とかからない場合の母音の音価の違いである。続く2つ目は、語末に子音+短母音/a/という連続を持つ語に主題標識=aが続いた場合の音声的な実現である。

まず、1つ目の根拠である、最小語制約がかかる場合とかからない場合の母音の音価の違いについて述べる。ここでは、pa「歯」という語を例に説明を行う。以下に述べるが(2.3.1.)、黒島方言には最小語制約があり、1モーラのみ語は実現せず、2モーラ分の長さを必ず持って実現する。つまり、pa「歯」という語は本研究では基底で//pa//と考えているが、これのみで実現した場合、母音が長母音になり、2モーラ分の長さを持つのである。この際、[pa: ~ pa:]というふうに変現し、[pæ:]というふうに変現することはない。

- (2-37) //pa// > /paa/ [pa: ~ pa:] 「歯」

しかし、複合語になった場合、この最小語制約は語全体にかかる制約であるため、//pa//の部分の母音が長母音になる必要はない。この例を以下に示す。なお、//pa//が/ba/となり、子音が有声音になっているのは連濁のためである。

- (2-38) // mai + pa// > /maiba/ [maiba ~ maibæ]
 前 歯
 「前の歯/前歯」

上の例に示したとおり、「前歯」という意味の複合語 maiba においては、[maiba ~ maibæ] というふうに変現する。[maiba]と変現することもあるが、これは稀である。つまり、最小語制約がかかって2モーラになった場合の//pa//「歯」の母音は、[ɑ: ~ a:]で変現するのに対し、最小語制約がかからず1モーラのみで変現する複合語の一部であるところの//pa//「歯」の母音は[a ~ æ]で変現する、ということである。したがって、同じ//pa//「歯」という語が1モーラを持った時にはより前寄りに変現し、2モーラを持った場合にはより奥寄りに変現するということであるため、[ɑ:]は/aa/の異音と考える。

続いて、2つ目の、語末に子音+短母音/a/という連続を持つ語に主題標識=aが続いた場合の音声的な実現について観察する。語末にCaを持つ語に主題標識=aが続いた場合、以下のように長母音化する。

- (2-39) saba /saba/ 「サメ」 [saba ~ sæbæ]
 saba=a /sabaa/ 「サメは」 [saba: ~ sabɑ:]

その際の音声的な実現は、上に示したとおりである。「サメ」という意味の語 saba は単独で変現した場合、[saba ~ sæbæ]となり、末尾母音は[a ~ æ]である。これに対し、主題標識が続いた場合は[saba: ~ sabɑ:]で変現し、末尾母音は[a: ~ ɑ:]で変現する。つまり、母音が1モーラ分しか持たない場合は前寄りで変現し、母音が2モーラ持つ場合は奥寄りで変現する、ということである。このようなことから、[ɑ:]は/aa/の異音と考えられる。

以上、[ɑ:]は/aa/の異音と考えられる理由を2つ述べた。

2.1.2.3.4. /o/

母音音素/o/は、[ɔ ~ o]で実現する。いずれで実現しても、唇のまるめが義務的であるわけではない。また、先述の/e/と同様、固有の単純語においては、短母音で/o/が立つことは稀である。しかし、接辞が添加された場合などには短母音の/o/も珍しくはない。

- (2-40) a. pocca 「包丁」 [pottsə]
b. kinoo 「昨日」 [k'ino:]
c. sooki 「ソーキ (あばら骨)」 [so:k'i]
d. uboho 「大きい」 [uboho]
(/ubu-ha/ > /uboho/ 2.4.3.参照のこと)

2.1.2.3.5. /u/

母音音素/u/は、[u ~ u:]で実現する。上述の/o/と同様、唇のまるめが義務的であるわけではない。

- (2-41) a. usi 「牛」 [uei ~ uei]
b. uraha 「多い」 [uraha ~ uraha]
c. tur 「鳥」 [tur ~ tuur]

ただし、長母音音素/uu/に関しては、唇のまるめがかなり顕著に観察されることがある。しかし、義務的ではない。

- (2-42) a. puu 「穂」 [pu: ~ pu:]
b. guusi 「お神酒」 [gu:ei ~ gu:ei]

2.1.2.3.6. 母音の素性

のちに 2.4. で述べるような母音の交替現象を説明するために、以下のような母音の素性を導入する。

(2-43) 黒島方言の母音の素性

i : [-low] [+high] [-back]	u : [-low] [+high] [+back]
e : [-low] [-high] [-back]	o : [-low] [-high] [+back]
a : [+low] [-high]	

2.2. 音節構造とモーラ

本節では、黒島方言の音節構造とモーラについて述べる。まず、音節構造について述べる (2.2.1.)、そのあとモーラについて述べる (2.2.2.)。

2.2.1. 音節構造

黒島方言の音節構造は(C)(C)(S)V(V)(C)である¹⁸。ただし、単純語の語頭、語中、語末でとりうる構造が異なるため、それぞれ別々に示す。2.2.1.1.では語頭、2.2.1.2.では語中、2.2.1.3.では語末について述べる。なお、語頭音節と語中音節は任意である。単純語の音節の構造

¹⁸ 音節構造上の例外として *mankka* 「まっすぐに」があげられる。これは、単純語中に3子音連続があるものであり、今のところ、この語しか確認されていない。語源などもわからないため、今後他方言との対照などから考えたい。

は以下のものである。

- (2-44) 単純語の音節構造
 (語頭音節) + (語中音節) + 語末音節

詳述する前に、それぞれの音節でとりうる構造を以下の図 2-1 に示しておく。

語頭音節	語中音節	語末音節
C	(C)(S)V(V)(C)	(C)(S)V(V)(C)
※/m、n、s、f、z、v/のどれか		※コーダは/n/か/r/

図 2-1 音節構造

2.2.1.1. 語頭音節

本節では語頭音節について述べる。語頭音節はそれだけで存在することはできない。この位置にたつことができるのは、/m、n、s、f、z、v/のみである。なお、「.」で音節の切れ目を示すこととする。

これらのうち、/s、f、z、v/がこの位置にたった場合、続く音節は必ずその音と同じオンセットを持つ。つまり、/s、f、z、v/が語頭音節にたった場合、二重子音があらわれる、ということである。例を示す。

- (2-45) a. f.fa¹⁹ 「子ども」
 b. v.vi 「(雨の) 降り」
 c. s.sana 「傘」
 d. z.za 「草」

これに対し、/m、n/が語頭音節にたつ場合は、二重子音になる場合もあるものの、そればかりではない。ただし、かなり強い制限がかかっており、これらのあとに続く音節のオンセットは（語頭音節と同一の鼻音か、）阻害音である。以下、例を示す。

- (2-46) 二重子音になる例

- a. n.ni 「胸」
 b. m.ma 「馬」

- (2-47) 鼻音+阻害音になる例

- a. n.ku 「剥く」
 b. n.ga.na 「にがな」
 c. n.zi.ri 「出ろ」
 d. m.bu.si 「蒸し」

ただし、この鼻音+阻害音の組み合わせも非常に限られていて、/nk、ng、nz、mb/のいずれかの連続しか今のところ確認されていない。

¹⁹ 「子ども」を意味する語として、(別々の) /ffa/と/vva/の2つが挙げられる。/vva/のほうも語頭に立ちうるため、連濁したものではない。今のところ、これらの関係は明らかになっていない。のちに 2.4.10.と 11 章で述べる有声二重摩擦音の形態音韻規則と関係がありそうだが、語頭の場合単子音化するのがふつうであるため、[fa:]となることが予想されるが、この語は[f:a]であり、特異な例である。

2.2.1.2. 語中音節

本節では語中音節について述べる。語中音節も、語頭音節と同じく、単独では生起しえない。単独でたちうる音節である語末音節のコーダが/n/もしくは/r/であるのに対し、語中音節はコーダに有声破裂音と/h/以外の音素がすべてたてるのが特徴である²⁰。ただし、この場合、必ず後続の音節のオンセットは、前接する語中音節のコーダと同音である。つまり、この場合も二重子音になるのである。したがって、前節で述べた「語頭音節の鼻音+語中音節のオンセットの阻害音」だけが単純語中の異なる子音の連続であり、他の異なる子音の連続はない、ということである。以下、例を示す。

(2-48)	a. rip.pa	「立派」
	b. zot.to	「いい (上等)」
	c. mik.ku.ze.ma	「みみず」
	d. us.sui	「ふろしき」
	e. maf.fa	「枕」
	f. av.vi	「あぶる (不定形)」
	g. fu.dac.ca.mi	「やもり」
	h. am.mi.ri	「アンミリ (島内の地名)」
	i. an.nu.pi ²¹	「アンヌピ (漁場の名前)」
	j. har.ra	「軽い」

単純語の場合かなり二重子音は限られるが、派生語や複合語などを含めると、かなり二重子音は一般的であると言える。たとえば、以下のような例である。

(2-49)	a. at.ta	//ar-ta//	「あった」
		ある-PST	
	b. ak.ka	//ar-ka//	「あると」
		ある-COND	
	c. u.ti.jas.su	//uti-jassu//	「落ちた」
		落ちる-jassu	
	d. u.buf.fi	//ubu+ffi//	「大降り」
		大きい+降り	
	e. in.na	//in=a//	「犬は」
		犬=TOP	

2.2.1.3. 語末音節

語末音節は義務的な音節である。したがって、1音節しかない語はこの構造をとる。語中音節と基本的には変わらないが、大きく異なるのは、コーダについてである。語中音節が10種の子音をコーダにとりえるのに対し、語末音節はコーダが極めて限られていて、/n、r/のいずれかしかとらない。

(2-50)	a. zin	「お金」
	b. tumar	「海」

²⁰ ただし、語中音節のコーダに/z/がたった例は確認されていない。これについては他方言との対応などを考慮して今後検討したい。

²¹ この語は語源をたどれば形態素分析できるかもしれないが、共時的にはそうは考えにくい。

以上のようなことから、文中で最大/n/が 3 つ続くことが可能であると推測される。つまり、コードに/n/がたち、それに続く語の語頭音節に/n/、またそれに続く音節のオンセットに/n/、という連続である。事実、それは許容される。

- (2-51) (jaana) buran nna
 (jaa.na) bu.ran. n.na
 (家に) いない お姉さん
 (家に) いないお姉さん

2.2.2. モーラ構造

モーラは音声の長さに関わる単位であり、超分節的特徴を記述するうえで重要な単位である。モーラ構造は以下の (2-52) のようになっている。

- (2-52) 語頭音節 語中・語末音節
 (C) (C)(S)V (V) (C)
 μ μ μ μ

つまり、語頭音節の C と、語中・語末音節のコードの C はそれぞれ 1 モーラ持つ。語中音節、語末音節のオンセットはそれ自身ではモーラを持たず、後続する母音と共に 1 モーラ持つ。長母音、二重母音は 2 モーラ持つ。以下、例を挙げる。

- (2-53) a. ma. i
 μ μ
 お米
 b. n. gi
 μ μ
 とげ
 c. m. bu. si
 μ μ μ
 蒸す.INF
 蒸し
 d. s. sa. na
 μ μ μ
 傘
 e. f. fu. n
 μ μ μ
 くぎ
 f. z. za
 μ μ
 草
 g. v. va
 μ μ
 こども
 h. na. r
 μ μ
 木の実、果物

i. pa. n
 μ μ
 ハブ

ただし、語頭の有声二重摩擦音 (/zz, vv/) の第一音目、つまり語頭音節の部分に関しては、モーラ性を失っているように見える現象もある。これは、最小語制約 (2.3.1.) と母音同化に関わる現象で観察される。最小語制約は、語は最小でも 2 モーラ持たなければならぬ、という制約である。基底で 1 モーラの語は、以下の例のように母音が延長される。

(2-54) 「木」 //ki// /kii/ [ki:]

また、一方の母音同化は、語末音節が軽音節の場合、その末尾母音と後接する拘束形式の先頭の母音が同化を起こす現象である。ここでは、主題の助詞=a を例にとる。

(2-55) a. 単独 「宮古」 //meeku// /meeku/ [me:ku]

b. 主題助詞付き 「宮古は」 //meeku=a// /meeko=o/ [me:ko:]

(2-56) a. 単独 「石垣」 //isanaki/ /isanaki/ [isanaki]

b. 主題助詞付き 「石垣は」 //isanaki=a// /isanake=e/ [isanake:]

この母音同化は上にも述べたとおり、語の末尾音節が軽音節の場合にのみ生じる。つまり長母音の場合は、この母音同化は生じず、主題の助詞は、=ja という異形態をとる。

(2-57) a. 単独 「今日」 //kjuu// /kjuu/ [k'ju:]

b. 主題助詞付き 「今日は」 //kjuu=a// /kjuu=ja/ [k'ju:ja]

これは最小語制約がかかり、母音が延長された語に対しても同様である。つまり黒島方言の最小語制約は語それ自体にかかるのであり、「語+助詞」に対してかかるものではない²²。

さて、これらの現象を考慮に入れて、有声二重摩擦音のふるまいを見る。「糞」を意味する zzu は 2 モーラ持ち、語末の音節が軽音節であるため、主題の助詞=a が続いた場合、母音同化が生じ、/zzoo/となることが予想される。しかし実際には、この変異は非文法的とは判断されないものの、話者の回答として自然に出てくるものではない。このかわりに、[zu:ja] というかたちが得られる。つまり、//zzu//の語頭音節のモーラ性が失われ、基底が//zu/もしくは//zuu//として認識されているのであろうと考えられる。より蓋然性の高いのは//zuu//と認識されている、と考えるほうである。なぜならば、こちらのほうであれば、元の//zzu//と同じモーラ数が保たれているためである。しかし、表層に実現するかたちは結局同じであるためどちらなのか結論付けることはできない。このように、語頭音節の有声摩擦音のモーラ性に関しては現在揺れがあると言える。ただ、現在でも語頭で 2 モーラ持つ二重有声摩擦音が聞かれたり、後に述べる形態音韻規則 (2.4.10.) が存在したりするため、本稿においては、基本的には二重有声摩擦音も 2 モーラ持つものと考え、その音節構造に揺れがある、と考えることとする。

2.2.3. 二重母音

本節では、二重母音について述べる。これらは 1 つの音節内に母音が 2 つあると考えら

²² 最小語制約がかかる範囲に関しては、琉球諸語の間でヴァリエーションがあるようである。たとえば、南琉球宮古伊良部方言では、黒島方言と同じく、語自体にかかるようである (Shimoji 2008) のに対し、南琉球八重山波照間方言においては、「語+助詞」までがその範囲であるようである (Aso 2010)。

れるものである。現在のところ、以下の二重母音が確認されている。長母音も同じ母音の連続と考えられるため、二重母音と同様、重音節を形成するものと考えられる。なお、モーラに関しては、二重母音、長母音ともに2モーラ持つ。

(2-58)	a. au	auha	「青い」
		aubi	「あくび」
b. ai	sanai	「ふんどし」	
	funai	「船酔い」	
c. ui	ui	「上」	
	jui	「晩御飯」	
d. oi	joi	「お祝い」	
e. ou	ou	「はい (yes)」	

2.3. プロソディ

本節では、2つのプロソディに関わる現象を述べる。1つ目は最小語について (2.3.1.)、2つ目はアクセントである (2.3.2.)。

2.3.1. 最小語

黒島方言においては、語は最低でも2モーラ持つ。つまり、基底で1モーラの語はそれのみで実現する場合、表層としては2モーラ持つ、ということである。

(2-59)	a. 「歯」	//pa//	>	/paa/	[pa:]
	b. 「木」	//ki//	>	/kii/	[ki:]

この制約は、語にかかるものである。従って、基底で1モーラの語が複合語の一部になった場合、その語は1モーラのままで実現する。ただし、語に続く助詞までを含むものではない。

(2-60)	a. //pa//	>	/paa/	「歯」	
	b. //pa=nu//	>	/paanu/	「歯が」	(*panu/)
	c. //ui+pa//	>	/uiba/ ²³	「上の歯」	
(2-61)	a. //ki//	>	/kii/	「木」	
	b. //ki=nu//	>	/kiinu/	「木が」	(*kinu/)
	c. //au+ki//	>	/auki/	「アコウの木」	(*aukii/)

2.3.2. アクセント

黒島方言は2つのアクセントパターンを持つ。1つ目は、領域末に下降があるパターンで、もう1つは下降がないパターンである²⁴。

²³ 通常この複合語「上の歯」は /uiba/ [uiba] と発音されるが、[uiba:]という変異も稀に観察され、非文法的ではない。助詞が後接する場合に、/panu/のように短母音であられるのが非文法的であるのと対照的である。

²⁴ 本稿においては、2型のアクセントを想定しているが、松森 (2014, 2015) においては、黒島方言は3型のアクセントパターンを持つ、とされている。アクセントに関する調査は残された部分が大きく、今後の課題である。

そして最後の 2.4.11. では焦点標示=du とコンピュータの形態音韻規則について述べる。

2.4.1. コーダの/r/の鼻音化

コーダにある/r/が鼻音と交替することが多い。特に、主格助詞 nu などが続いた場合は（必須ではないものの、）ほぼこの交替が起こり、この際は[n]で実現する。（上記のアクセントの例 (2-62) はこの例である。）また、後になにも続かない場合は、[N~ŋ]であることが多い。

- (2-66) a. tur 「鳥」 [tur ~ tun ~ tuN ~ tuŋ]
b. tur=nu 「鳥が」 [turnu ~ tun:u]

なお、この「鳥」を意味する語の基底に//tun//を立てるのではなく、//tur//を立てるのは、2.1.2.1.13. で述べたように、母音//a//が続く場合に//tura//と実現する場合があるためである。このようなことは、基底が//n//で終わる語では絶対でない。

- (2-67) a. tur=a 「鳥は」 [tura ~ tun:a]
b. in=a 「犬は」 [in:a] ([ira]で実現することはない)

2.4.2. /a/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則

本節では、/a/を先頭に持つ拘束形態素の双方向母音同化について述べる。2.4.2.1. においては、この形態音韻規則を詳述する。続く 2.4.2.2. においては、コンピュータとこの形態音韻規則とのかかわりについて述べる。

2.4.2.1. /a/を先頭に持つ拘束形態素の双方向母音同化

/a/を頭に持つ拘束形態素は多様な形態音韻規則を持つ²⁵。この規則は、前接する要素の末尾音節が軽音節である場合に生じる。その末尾母音と、後続する/a/とが双方向の同化を起こす。主題標識の助詞=a を例にとる。続いて、表 2-3 に異形態をまとめる。

- (2-68) a. 末尾母音が/a/の場合
//jama=a// > /jama=a/
山=TOP
b. 末尾母音が/e/の場合
//meehe=a// > /meehe=e/
お墓=TOP
c. 末尾母音が/i/の場合
//isanaki=a// > /isanake=e/
石垣=TOP
d. 末尾母音が/o/の場合
//iso=a// > /iso=o/
海=TOP

²⁵ 他の母音を先頭に持つ拘束形態素はあまり形態音韻的母音交替は起こさない。母音を先頭に持つ拘束形態素には例えば、動詞を形容詞に転換する接辞である-ida-があるが、これが母音の同化を起こすことはない。例えば、母音で語幹を終える動詞 va 「食べる」にこの-ida-がつく場合、va-ida となり、これが例えば*veeda のようになることはない。

- e. 末尾母音が/u/の場合
//meeku=a// > /meeko=o/
宮古=TOP
- f. 末尾が二重母音の場合
//sakai=a// > /sakai=ja/
堺=TOP
- g. 末尾が長母音/i/の場合
//mii=a// > /mii=ja/
目=TOP
- h. 末尾が長母音/u/の場合
//kjuu=a// > /kjuu=ja/
今日=TOP
- i. 末尾が/n/の場合
//an=a// > /an=na/
網=TOP
- j. 末尾が/r/の場合
//tur=a// > /tur=a ~ tur=ra/
鳥=TOP

表 2-3 主題の助詞=a の異形態とその条件

前接要素		a の異形態
音節構造	末尾音	
CV	a	a
CV	i,e	e
CV	u,o	o
CVV	※	ja
CVC	n	na
CVC	r	a もしくは ra

(※音節構造が CVV の場合、末尾音がどの音であっても同じ)

この表 2-3 について主に 2 つの観点から見ていく。1 つ目は半母音と子音の挿入で、2 つ目は母音同化である。

まず、半母音の挿入について述べる。長母音ならびに母音連続に続く場合は、/j/が挿入される。これは、音素配列上の制限が母音同化規則より強くかかっているためと考えられる。つまり、単純に母音の音価のみに反応して、同化が起こるのであれば以下のような母音の交替が起こってもよいはずであるが、実際は起こらない。

- (2-69)
- a. //sakai=a// > /sakai=ja/ (*saka~~e~~=e/)
堺=主題
 - b. //mii=a// > /mii=ja/ (*mie=e/)
目=主題
 - c. //kjuu=a// > /kjuu=ja/ (*kjuo=o/)
今日=主題

このような事実から、この母音交替現象が単純に母音の音価のみに関わっているわけではないことがわかる。このような交替が生じないのは、母音が3つ連続することを避けているものと考えられる。

また、/n/に続く場合は/n/が挿入されるが、これは、拍数を保つためと考えられる。例えば、jama「山」に主題標識=aが後続した場合、jama=aとなり、1拍分長くなる。これと平行的に、語末コーダに/n/を持つ場合を考える。an「網」を例にとって説明すると、この語はそもそも2モーラあるので、主題標識=aを後接させた場合、1拍長くして、3拍分の長さが必要とされる。その1拍分のために、子音が挿入されるものと考えられる。つまり、/an/に/a/を単純に後続させた場合、/ana/となり2モーラになってしまう。これでは、主題標識=aが付される前のモーラ数と変わりがなく、形式が付加されたことがわかりにくいのであろう。そのため、主題標識が付される前のモーラ数(2) + 主題標識のモーラ数(1)を保つため、/anna/という実現形になるものと考えられる。

また、上の表2-3に示したように、CVrを末尾に持つ語に、主題標識=aが後続した場合、tur「鳥」を例にとると、/tur=a/となって二重子音化が起こらない場合と、/tur=ra/となり二重子音化が起こる場合とがある。これらは今のところ、自由変異と考えている。二重子音化は、上述の末尾音が/n/の場合と同じく、拍数を維持するためと考えられる²⁶。

次に、母音同化についてであるが、/u/に続く場合、末尾音と主題標識そのものが共に/o/となり、/i/に続く場合は、末尾音と主題標識が共に/e/となる。この同化を、上記で導入した母音の素性を用いて説明する。

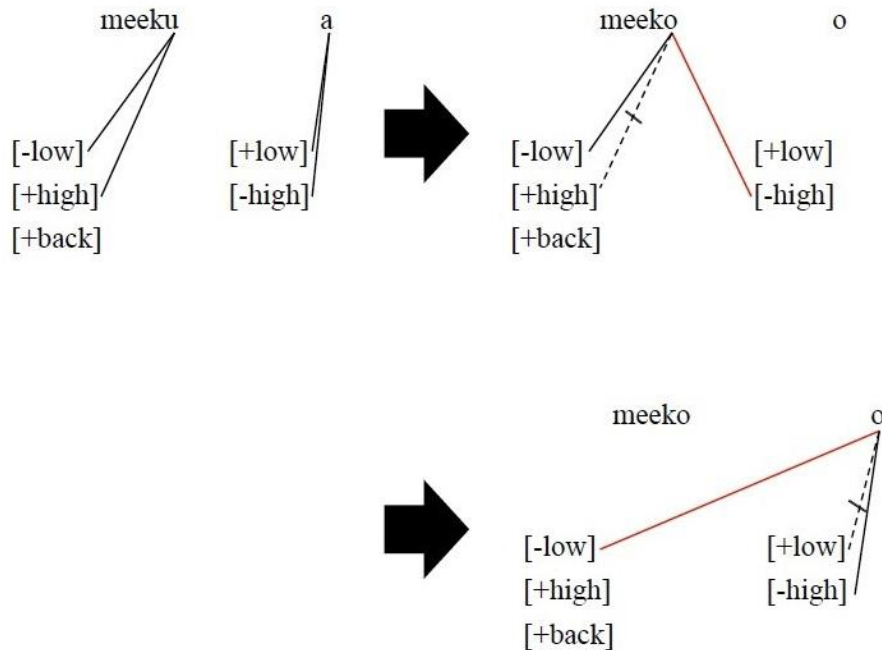


図 2-2 a の同化

(見やすさのために、分けて表示している。また、[back]については省略した。
矢印は便宜的に形態音韻規則がかかることをあらわすこととする。)

²⁶ では、なぜ/tur=a/ [tura]のように拍数を無視した変異が可能なのか、ということについては今のところ不明である。子音間のモーラの保ちやすさの違いなどがあるのかもしれない。

図 2-2 に示した通り、この現象では隣接する母音が互いに素性を与え合う形になっている。つまり、先行する母音から後続する母音へは [-low] という素性が与えられ、逆向きでは [-high] が与えられる、ということである。このように考えると、前接要素の末尾母音がその他の母音である場合も説明が可能になる。つまり、この現象は、双方向の同化現象と考えられるのである。

この際、/si/ を末尾に持つ場合は、主題標識がついても口蓋化が観察され、usi[uei] 「牛」を例にとると、//usi=a// は [ueee] と発音される。音素表記上は /usee/ と考える。

なお、この音韻規則は、複合語の内部（前部要素と後部要素との境目）や、語と語の境目では適用されない。したがって、純粋な音韻規則ではなく、形態音韻規則である。

(2-70) a. 複合語

//ubu + ami// > /ubuami/ [ubuami] (*[ubo:mi])
 大きい 雨 大雨

b. 語と語の間

//kjuu=nu ami// [kʲu:nuami] (*[kʲu:no:mi])
 今日=GEN 雨

なお、この形態音韻的母音交替を起こす形態素は確認されている限り、上で述べた主題標識=a を除いて、以下のとおりである。例もあわせて示す。このほかにコピュラ ar も同様であるが、これについてはのちに述べる。

(2-71) 形態音韻的母音交替を起こす/a/を先頭に持つ形態素

a. 指小辞 -ama

usi [uei] > usi-ama /useema/ [ueeema]
 牛 牛-DIM
 子牛

maja [maja] > maja-ama /majaama/ [maja:ma ~ majc:ma]
 猫 猫-DIM
 子猫

b. 受け身/可能の接尾辞 -ar²⁷

umu-uta²⁸ [umu:ta] > umu-ar-ita /umoorita/ [umo:rita]
 思う-PST 思う-POT-PST
 思った 思われた

c. 否定の接尾辞 -an-

umu-uta [umu:ta] > umu-an-ta /umoonta/ [umo:nta]
 思う-PST 思う-NEG-PST
 思った 思わなかった

d. 使役の接尾辞 -as-

fu-u [fu:] > fu-as-u /foosu/ [fo:su]
 噛む-NPST 噛む-CAUS-NPST
 噛む 噛ませる

なお、主題の助詞=a は他の助詞に後続することが可能であるが、この際の音韻的ふるま

²⁷ 受け身/可能-ar-の接尾辞が母音交替を起こすのに必要な条件はもちろん、直前に母音があるということであるため、母音語幹の動詞の場合のみ、この交替は観察される。これは、次に述べる否定の接尾辞-an-、使役の接尾辞-as-についても同じである。

²⁸ 過去の接尾辞は ta ~ ita ~ uta という異形態を持つ。

いも特異であり、単純な音韻規則ではなく形態音韻規則を考慮する必要がある。他の助詞に後続するケースを、/a/以外を末尾に持つ助詞に後続する場合と、/a/を末尾に持つ助詞に後続する場合に分けて考える。

まず、主題助詞=a が/a/以外を末尾に持つ助詞に後続する場合について述べる。この場合は名詞の際と違いはなく、母音同化などを起こす（ただし、任意である）。

(2-72) a. /i/を末尾に持つ名詞に主題助詞=a が後続する場合

isanakee [isanake:]

isanaki=a

石垣=TOP

石垣は

b. /i/を末尾に持つ助詞に主題助詞=a が後続する場合

isanakibaakee [isanakiba:ke:]

isanaki=baaki=a

石垣=LMT=TOP

石垣までは

(2-73) a. /u/を末尾に持つ名詞に主題助詞=a が後続する場合

hanu pusoo [puso:]

hanu pusu=a

あの 人=TOP

あの人は

b. /u/を末尾に持つ助詞に主題助詞=a が後続する場合

hanupusutoo [hanupusuto:]

hanu pusu=tu=a

あの 人=COM=TOP

あの人とは

(2-74) a. /n/を末尾に持つ名詞に主題助詞=a が後続する場合

inna [in:a]

in=a

犬=TOP

犬は

b. 与格助詞=n に主題助詞=a が後続する場合

mizifuminna [mizifumin:a]

mizi+fum-i=n=a

水+汲む-INF=DAT=TOP

水汲みには

これに対し、主題助詞=a が/a/を末尾に持つ助詞に後続する場合は、主題助詞=a は/ja/という異形態で実現する。末尾に/a/を持つ名詞に主題助詞=a が後続した場合は、上にも述べたとおり、主題助詞は/a/という異形態で実現する。

(2-75) jamaa [jama:]

jama=a

山=TOP

山は

仮に、これと同じと考えると、末尾に/a/を持つ助詞に後続する場合も、主題助詞は/a/で実現する、と考えられる。しかし、実際はそうではなく、必ず/ja/という異形態をとる。

- (2-76) isanakeheraja [isanakeheraja] (*[isanakehera:]
 isanaki=hara=a
 石垣=ABL=TOP
 石垣からは

このようなことから、この主題助詞=a の音韻規則は、前接する要素が助詞である場合を、名詞である場合と別に考えなければならない。

2.4.2.2. コピュラと双方向母音同化

2.4.2.1.で述べてきた双方向の母音同化が、実はコピュラでも観察される。黒島方言のコピュラは ar であるため、これも先頭に/a/を持つ。以下、例を示すが、コピュラが主節末にあらわれた場合、焦点の助詞=du をともなうことが一般的であるため、副詞節末にあらわれた例を示す。なお、pazi 「はず」は形式名詞であるためコピュラを用いて述語化する。

- (2-77) /i/を末尾に持つ名詞にコピュラが後続した場合

aruteedonu	zinna	nohoru	pazjeerunu
aruteedo=nu	zin=a	nohor-u	pazi ar-u=nu
ある程度=GEN	お金=TOP	残る-NPST	はず COP-NPST=ADVRS
ある程度のお金は残るはずだけど			

- (2-78) /u/を末尾に持つ名詞にコピュラが後続した場合

usimizinumasi	hatooriba
usi+mizi+num-as-i	hatu ar-iba
牛+水+飲む-CAUS-INF	場所 COP-CSL
牛に水を飲ませる場所なので	

このように、コピュラも双方向の母音同化を起こす。しかし、これは極めて例外的な現象である。前節でも述べてきたように、この形態音韻規則がかかるのは、後続する形式が拘束形態素の場合のみである。つまり、いくら先頭に/a/を持っていてもそれが自由形態素なら母音同化は生じないのである。

- (2-79) a. mizi+av-as-i [miziavaci] *[mizeevaci]
 水+浴びる-CAUS-INF
 (牛の)水浴びせ(セリ前に牛をきれいにするため)
- b. mizi av-as-iba [miziavaciba] *[mizeevaciba]
 水 浴びる-CAUS-IMP
 水を浴びせろ

翻って、コピュラは拘束形態素ではなく、自由形態素である。それは、(2-80)のように、焦点の助詞=du が名詞に後続し、そのあとにコピュラが続く場合もあることから明白である。

- (2-80) a. 焦点の助詞=du なし
 isa ar-iba
 医者 COP-CLS
 医者なので
- b. 焦点の助詞=du あり
 isa=du ar-iba
 医者=FOC COP-CLS
 医者なので

このように、コンピュータはまぎれもなく自由形態素であるにもかかわらず、この双方向母音同化を起こすのである。このことは、音韻規則がかかる単位 (phonological word) と形態統語的単位 (grammatical word) のギャップが生じている、ということを示している。黒島方言においては、このコンピュータの母音同化を除くと、音韻規則がかかる単位と形態統語的単位は一致している (たとえば、のちに述べる二重有声摩擦音の無声化であれば重複の際のみ、また、/ha/の双方向母音同化は拘束形態素境界を挟む場合のみ、など) ため、このコンピュータの特別な性質については非常に興味深い²⁹。

2.4.3. /ha/を先頭に持つ拘束形態素の母音同化

前節で述べた/a/を先頭に持つ拘束形態素に関わる母音同化が、/ha/を先頭に持つ拘束形態素でも起こる。移動の起点などを表す「～から」を意味する奪格の助詞=hara を例にとりて説明する。前接する要素の末尾音が/i/であった場合、その/i/も、また、=hara の語頭の/a/も/e/となる。つまり、isanaki「石垣」を例にとると、isanake=hara「石垣から」となるのである。また、同様に、suisu「スイス」の場合も suisu=hara「スイスから」というようになる。以下、例を示す。

- (2-81)
- a. 末尾母音が/a/の場合
//jama=hara// > /jama=hara/
山=ABL
 - b. 末尾母音が/e/の場合
//meehe=hara// > /meehe=hara/
お墓=ABL
 - c. 末尾母音が/i/の場合
//isanaki=hara// > /isanake=hara/
石垣=ABL
 - d. 末尾母音が/o/の場合
//iso=hara// > /iso=hara/
海=ABL
 - e. 末尾母音が/u/の場合
//meeku=hara// > /meeko=hara/
宮古=ABL
 - f. 末尾が二重母音の場合
//sakai=hara// > /sakai=hara/
堺=ABL
 - g. 末尾が長母音/ii/の場合
//mii=hara// > /mii=hara/
目=ABL
 - h. 末尾が長母音/uu/の場合
//kjuu=hara// > /kjuu=hara/
今日=ABL

²⁹ 存在動詞も肯定の場合、コンピュータと同音の ar-であるが、これに関しては母音同化が生じた例は、今のところ見つかっていない。今後、内省を問う調査をする必要があるが、いずれにしても、コンピュータ (あるいはそれと存在動詞) の語彙上の特異性を示す例になるものと思われる。

- i. 末尾が/n/の場合
//an=hara// > /an=hara/
網=ABL
- j. 末尾が/r/の場合
//tur=hara// > /tur=hara/
鳥=ABL

これらの、奪格の格助詞=haraの異形態とその条件をまとめると以下の表2-4のようになる。

表 2-4 奪格格助詞=haraの異形態とその条件

前接要素		haraの異形態
音節構造	末尾音	
CV	a	hara
CV	i,e	hera
CV	u,o	hora
CVV	※	hara
CVC	※	hara

(※音節構造がCVC、CVVの場合、末尾音がどの音であっても同じ)

上の表にまとめた母音交替を先述の母音の素性を用いて説明する。

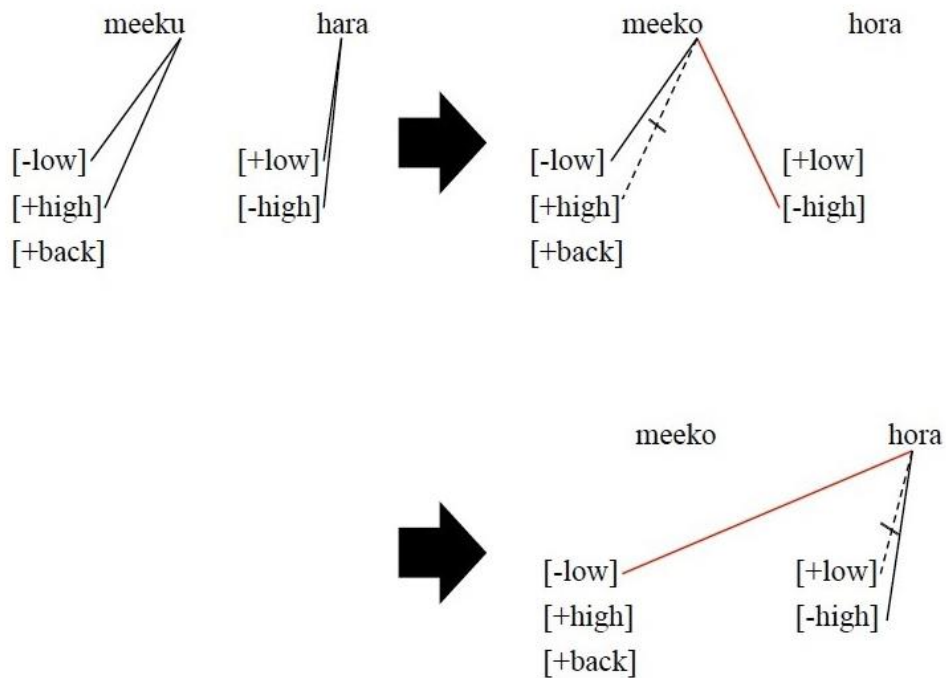


図 2-3 奪格格助詞=haraの同化

(見やすさのために、分けて表示している。また、[back]については省略した。
矢印は便宜的に形態音韻規則がかかることをあらわすこととする)

このように、/a/を先頭に持つ拘束形態素について生じる母音の交替と、/ha/を先頭に持つ拘束形態素の母音の交替はまったく同じ原理で説明可能なのである。この現象は、先行研究においては、母音調和的傾向（伊豆山 1996）とされていた³⁰が、本研究においては、上に示したように、双方向母音同化ととらえる。これは、母音調和と考えるのが困難であるという理由だけではなく、双方向の母音同化とした場合に、まったく同一の原理で 2 つの現象を説明できるためである。仮に/h/を先頭に持つ母音の交替を母音調和、/a/を先頭に持つ母音の交替を母音同化、と考えた場合、まったく別の 2 つの現象が起こっているというようにとらえられるが、実際にはそうではない。前節と本節で示した通り、これらの 2 つの現象は 1 つの原理を共有していたため、1 つの現象としてとらえるほうが適切である。このような点においても、本節で述べた/h/を先頭に持つ拘束形態素の母音交替も、前節で述べたものと同様に、双方向の母音同化と認識したほうがよい。

ちなみに、/a/を先頭に持つ拘束形態素において起こる半母音と子音の挿入は、/ha/を先頭に持つ拘束形態素の場合には関与しない。これは、前節で述べたような、3 母音連続の回避や、モーラ数の維持などの問題が/h/を先頭に持つ拘束形態素の場合には関与しないためと考えられる。

さらに、この/h/を先頭に持つ拘束形態素について生じる母音の交替も純粋に音韻論的な交替ではなく、形態音韻的なものである。上に示した、/a/を先頭に持つ拘束形態素にまつわる母音交替と同様、複合語の境界などではこの現象は生じない。

(2-82) //ubu + hazi// > /ubuhazi/ [ubuhazi] (*[ubohozi])
 大きい + 風 台風

この形態音韻的母音交替を起こす形態素は以下のとおりである。例もあわせて示す。

(2-83) 形態音韻的母音交替を起こす/h/を先頭に持つ形態素

a. 向格助詞 =ha

meeku [me:ku] > meeku=ha /meeko=ho/ [me:koho]
 宮古 宮古=ALL
 宮古へ

isanaki [isanaki] > isanaki=ha /isanake=he/ [isanakehe]
 石垣 石垣=ALL
 石垣へ

b. 普通形容詞化接辞-ha

ubu > ubu-ha /ubo-ho/ [uboho]
 大きい（語根） 大きい-ADJVZ
 大きい

zzu > zzu-ha /zoo³¹-ho/ [zo:ho]
 白い（語根） 白い-ADJVZ
 白い

³⁰ 通常母音調和と言った場合、なんらかのドメインを設定することが予想されるが（Archangeli and Pulleyblank 2007）、当該の現象においては、そのドメインを設定することが困難である、という点においても、母音調和とするより、双方向の母音同化とするほうがよいと考えられる。また、通言語的にも/h/が透明となる現象はあるようである（Rose 1996: 105）。また、琉球語における間に要素を挟んだ音韻変化はかりまた（2009: 297）に詳しい。

³¹ 基底の//zz//が単子音化し、母音が長母音化しているのは、有声二重摩擦音の形態音韻規則によるものである。これについては 2.4.10.において述べる。

2.4.4. 連濁

黒島方言においても連濁は観察される。連濁は、複合語の後部要素の頭子音が無声阻害音であった場合に、それが有声化する現象である。これは、複合以外では起こらない。

- (2-84) a. //jaa+tur// > /jaa+dur/ [ja:dur]
 家+鳥
 にわとり
 b. jaa=nu tur *[ja:nudur]
 家=GEN 鳥
 にわとり
- (2-85) a. //ui+pa// > /ui+ba/ [uiba]
 上+齒
 上の齒
 b. ui=nu pa *[uinuba:]
 上=GEN 齒
 上の齒

ただし、連濁した場合に調音点が変わるものがある。それは、/h/を語頭に持ち、かつ、祖語の段階ではそれが*kであったと想定されるものである。以下のような例である。

- (2-86) a. hami [hami]
 亀
 b-1. garasaagami [garasa:gami]
 garasaa+hami
 カラス+亀
 タイマイ³²
 b-2. mizigaami [miziga:mi³³]
 mizi+hami
 水+亀
 アオウミガメ

また、後部要素の語頭以外に有声阻害音がある場合に連濁は抑制される（いわゆるライマンの法則）。

- (2-87) ubu+hazi [ubuhazi] (*[ubugazi]³⁴)
 大きい+風
 台風

また、並列の関係の場合も連濁は生じないようである。

- (2-88) tii+pan [ti:pan] (*[ti:ban])
 手+足
 手足

³² ウミガメの一種。甲羅はベッコウ細工の材料になる。口がとがっていて、鳥のくちばしに似ていることから、「烏亀」と呼ばれる。ちなみに英語でも *hawksbill seaturtle* と呼ばれる。

³³ 「アオウミガメ」は [miziga:mi] と、「亀」の部分の母音が長音化する。この理由は未詳。

³⁴ この後部要素は、日本語の「風」に対応する語であるため、祖語では語頭に*kが想定されるものである。

(2-91)	a. va-	→	va-u	/vau ~ voo/	[vau ~ vo:]
			食べる (語根)	食べる-NPST 食べる	
	b. nka-	→	va-uta	/vauta ~ voota/	[vauta ~ vo:ta]
			迎える (語根)	迎える-NPST 迎える	
	→	nka-u	/nkau ~ nkoo/	[nkau ~ nko:]	
		迎える (語根)	迎える-NPST 迎える		
		→	nka-uta	/nkauta ~ nkoota/	[nkauta ~ nko:ta]
			迎える (語根)	迎える-NPST 迎えた	

2.4.7. 動詞語幹末/i/と接辞先頭の/u/の同化

語幹末に/i/を持つ動詞に、先頭に/u/を持つ接辞が続いた場合、/iu/ > /juu/という同化現象が起こる。この同化は義務的である。

(2-92)	a. bi-	→	bi-un	/bjuun/	[bju:n]
			植える (語根)	植える-NEG 植えない	
	b. mi-	→	mi-un	/mjuun/	[mju:n]
			見える (語根)	見える-NEG 見えない	

2.4.8. 動詞語幹末/u/と接辞先頭の/a/の同化

語幹末に/u/を持つ動詞に、先頭に/a/を持つ接尾辞が続いた場合、/ua/ > /oo/という同化が生じる。この母音同化は義務的である。これは、2.4.2.で述べた、先頭に/a/を持つ拘束形態素の母音同化であるが、1.6.において方言差としてとりあげた例外があるため、ここで取り上げる。

(2-93)	a. pusu-	→	pusu-an	/pusoon/	[puso:N]
			拾う (語根)	拾う-NEG 拾わない	
		→	pusu-a	/pusoo/	[puso:]
			拾う (語根)	拾う-INT 拾おう	
	b. jaku-	→	jaku-an	/jakoon/	[jako:N]
			休む (語根)	休む-NEG 休まない	
		→	jaku-a	/jakoo/	[jako:]
			休む (語根)	休む-INT 休もう	

このように、/ua/ > /oo/となるのが通常である。しかし、例外が観察される。それは、東筋方言の「泳ぐ」と「追う」を意味する動詞の場合である。これらは同音異義で、いずれも語根が u-である。これらは、以下のような交替を起こす。なお、そのほかの方言においては、この例外は観察されない。

(2-94)	a. u-	泳ぐ (語根)	→	u-an	}	@東筋	/waan/	[wa:N]
				泳ぐ-NEG		@保里	/oon/	[o:N]
			泳がない					
				→	u-a	}	@東筋	/waa/
		泳ぐ-INT		@保里	/oo/		[o:]	
		泳ごう						
	b. u-	追う (語根)	→	u-an	}	@東筋	/waan/	[wa:N]
				追う-NEG		@保里	/oon/	[o:N]
			追わない					
				→	u-a	}	@東筋	/waa/
		追う-INT		@保里	/oo/		[o:]	
		追わない						

なお、このような/ua/ > /waa/という音韻交替が生じるのは上に挙げた動詞と接尾辞の組み合わせの場合だけである。「泳ぐ」「追う」の語根 u-についても、ほかの接尾辞に関しては方言差はない。

2.4.9. 阻害音に挟まれた高母音の脱落

黒島方言においてはかなり顕著に母音が脱落する場合がある。それは、高母音に阻害音に挟まれた場合である。たとえば、以下のような例である。

(2-95)	a. siki	「月」	[eki ~ eiki]
	b. pusu	「人」	[psu ~ pusu]

これらのような例においては、ナチュラルスピードの発話の場合、ほぼ確実に母音が脱落する。そのため、これらの阻害音の間に母音を立てずに、子音連続と考えることも可能かもしれない。しかし、以下の2点の理由により、これらは「母音の脱落」と本研究では考えている。

(2-96) 母音の「脱落」と考える理由

1. 注意深い発話においては母音が聞かれる
2. 最小語制約とのかかわり

これらの理由を説明する。まず、(2-96-1) についてであるが、上に述べたとおり、ナチュラルスピードでの発話においては母音が脱落するものの、ゆっくり発音してもらった場合などには母音ははっきりと聞かれる。また、調査者が母音を入れて発音した場合でも、その発音でいい、というフィードバックが返ってくるのである。この点が、母音を基底にたて、それが脱落する、と本研究で考える理由の1つである。

もう1点は、最小語制約とのかかわりである。2.3.1.において述べたとおり、黒島方言の語は最低2モーラ持つ必要がある。そして、この制約は「語+助詞」ではなく「語」そのものにかかり、後続する助詞は含まない。そこで、この母音が脱落する語のふるまいを観察すると、以下ようになる。

(2-97)	a. pusu	「人」	[psu ~ pusu]
	b. pusu=a	「人は」	[pso: ~ pusu:]

このように、pusu に主題助詞=a が後続した場合、母音同化が生じる。この母音同化は、末尾音節が軽音節でなければ生じない。そのため、「人」を意味する語の末尾音節は短母音/u/

であると考えることができる。したがって、「人」をあらわす語の末尾母音は最小語制約による長母音化をしていない、ということであり、全体で少なくとも 2 モーラ持つ、ということである。そこで、仮に基底で//psu//と考えた場合、子音のみの/p/に 1 モーラ分持たせる必要が出てくるのであるが、これは考えにくい。たしかに、黒島方言においては子音のみで 1 モーラ持つものがある。しかし、それらは鼻音や摩擦音など、持続性のある子音である。それに対し、p は持続性はなく、1 モーラ持つとは考えにくい。このようなことから本稿では、基底に//psu//をたてるのではなく、//pusu//をたて、p と s の間の u が脱落するものとする。

ただし、ナチュラルスピードであっても常に子音が脱落するわけではなく、その条件などは不明である。今後も追及すべき課題である。この点に関しては 16.1.において述べる。

2.4.10. 二重有声摩擦音/vv/と/zz/

本節においては、有声摩擦音の二重子音の示す音韻規則について述べる。これに関しては、以下の 2 つの規則がある。ただし、いずれも義務的ではない。しかし、特に (2-98a) に関してはこの交替が起こることが多い。

- (2-98) 二重有声摩擦音にまつわる音韻規則
- a. 複合語境界のあとなどにおいて、二重有声摩擦音は無声化する
 - b. それ以外の環境において、二重有声摩擦音は単子音化し、後続母音が延長される。

例を用いて示す。「下 (下のほう)」を意味する語は zza であり、[z:a]と発音される。ただし、[za:]という発音も許容される。そこでまず問題になるのは、基底に//zza//をたてるべきか、//zaa//もしくは//za/³⁵をたてるべきか、という点である。結論を先に述べると、本稿では//zza//をたてるべきである、と考える。以下、まずその理由を述べる。実は、単子音の//z//と二重子音//zz//では形態音韻的ふるまいが異なるのである。基底に二重子音を持つ//zza//「下」は、複合語の後部要素にたった場合、無声化する。有声のままでも許容されるが、無声化するのがふつうである。

- (2-99) a. [z:a] 下
([za:])
b. [uis:a] 上下
([uiz:a])

これに対し、基底に単子音を持つ//za//「座」は、複合語の後部要素になった場合にも無声化しない。無声化したものは許容されない。

- (2-100) a. [za:]³⁶ 座
b. [uiza:] 上座
(*[uis:a], *[uisa:])

このように、二重子音の場合と単子音の場合で形態音韻的ふるまいに差異が見られる。現在のところ得られている同様のミニマルペアは以下の例である。

³⁵ これは、最小語制約が存在するためである (2.3.1.を参照のこと)。

³⁶ この例も前の注と同様、最小語制約のために母音が長母音化している。

- (2-101) 二重子音の例
 a. [z:an] 虱
 ([za:n])
 b. [ubus:an] 大きい虱
 ([ubuz:an])
- (2-102) 単子音の例
 a. [zan] ジュゴン
 b. [ubuzan] 大きいジュゴン
 (*[ubus:an]、*[ubusan])
- (2-103) 二重子音の例
 a. [z:u] 糞
 ([zu:])
 b. [mi:s:u] 耳垢 (lit. みみくそ)
 ([mi:z:u])
- (2-104) 単子音の例
 a. [zuu] しっぼ
 b. [ubuzuu] 大きいしっぼ
 (*[ubus:u]、*[ubuz:u])
- (2-105) 二重子音の例
 a. [z:aku] 咳
 ([za:ku])
 b. [haras:aku] 空咳
 ([haraza:ku])
- (2-106) 単子音の例
 a. [za:ku] 仕事
 b. [ubuza:ku] 大仕事
 (*[ubus:aku])

このように、かかる形態音韻規則の違いがあるため、//zz//を基底に認めるのが妥当であると思われる³⁷。なお、このような二重子音音素は、上に示した zz のほかに vv がある。以下に例を示す。

- (2-107) a. /vva/ 子供 (これも/vaa/と発音してもいい)
 b. /buiffa/ 甥っ子
 c. /sakusiffa/ 長男

このように、基底に二重有声摩擦音をたてることは妥当である。したがって、それが「単

³⁷ なお、黒島方言には、ss や ff を語頭に持つ語がある。ssana[s:ana]「傘」と ffun[f:un]「くぎ」がその例である。これらの語が複合語の後部要素になった場合、二重子音でなくなる。habisana (<habi+ssana) [baisana]「紙傘」、amisana (<ami+ssana) [amisana]「雨傘」や、naafun (naa+ffun) [na:fun]「長い釘」、ubufun (<ubu+ffun) [ubufun]「大きい釘」のようになる。これらの例は二重子音で実現させると非文法的と判断される。この現象は類例があまりに少ないため、今のところどのように考えればいいのか判断できていない。今後の課題としたい。しかし、少なくとも有声の二重摩擦音とはことなるふるまいをする、ということと言える。ちなみに、ss や ff が語中に現れることは問題ない。たとえば、maffa「枕」や umussa「おもしろい」など。ただし例は多くない。

音化+後続母音の延長」を起こしたり、無声化したりするものとする。

これをサポートする現象がある。それは、「(雨が) 降る」という意味をあらわす動詞の活用である。「(雨が) 降る」は、以下のような表層形を持つ。右に、「???」を付して、下に示す表層形に忠実に形態素分析した場合の分析を示す。

(2-108) 降る (非過去)	/vuu/	???vu-u
降った (過去)	/vuuta/	???vu-uta
降らない (否定)	/vaan/	???va-an
降れ (命令)	/vii/	???vi-i
(それぞれ、/vvu/、/vvan/、/vvi/のように発音してもよいが稀)		

一見、語幹が交替しているように見え、不規則動詞として扱う必要があるように思える。しかし、有声二重摩擦音の形態音韻規則「単音化+後続母音の延長」を考えると、語幹の交替を考える必要はない。

(2-109) 降る-NPST	//vv-u//	>	/vuu/
降る-PST	//vv-uta//	>	/vuuta/
降る-NEG	//vv-an//	>	/vaan/
降る-IMP	//vv-i//	>	/vii/

さらに、この「降る」の語幹が/vv/であると認めてよさそうな現象を確認する。

(2-110) 大降り	/ubuffi/	(/ubuvvi/でもよいが稀)
-------------	----------	------------------

「降る」が複合語の後部要素になった場合、/ffi/というかたちで実現する。このように複合語 (や重複) の場合に、基底で有声摩擦音の二重子音であったものが無声化する現象は他にも観察される。以下、基底で有声摩擦音を設定したほうが妥当であるものの、複合語の後部要素にたった場合に無声化する例を挙げる。

(2-111) a. /zzaha/	くさい	(これも/zaaha/と発音してもいい)
b. /piissaha/	おならくさい	
(2-112) a. /zuuiru/	白色	
b. /zoosso/	白々	
c. /zooho/	白い	
d. /padassoho/	色白い (lit. 肌白い)	
(2-113) a. /yuuiru/	黒色	
b. /yooffo/	黒々	
c. /yooho/	黒い	
d. /padaffoho/	色黒い (lit. 肌黒い)	
(2-114) a. /zza/	草	
b. /harissa ³⁸ /	枯草	

以上のように、表層にあらわれることは多くないものの、黒島方言においては有声二重摩擦音を基底に想定することが妥当であると考えられる。

なお、この規則は二重摩擦音にしか適用されない。黒島方言においては、鼻音に関しても語頭の二重子音が可能であるが、この連続の場合、この規則は適用されない。

³⁸ 名詞句+属格助詞の修飾部を伴う場合は無声化は起こらない。/usinuzza/ (usi=nu zza) 「牛の草」

- (2-115) a. mma [m:a] 「馬」
 b. biki+mma [bikim:a] 「メスの馬」 [*bikima:]

この現象に関しては 11 章でくわしく扱う。

2.4.11. 焦点助詞=du とコピュラの形態音韻規則

黒島方言におけるコピュラは ar であるが、これが主節末に生起する場合、焦点の助詞=du を伴うことが非常に多い。

- (2-116) banaa sinsi=du ar-ta
 1.SG.TOP 先生=FOC COP-PST
 私は先生だった

このように、焦点助詞=du とコピュラが続いた場合に、以下のように du+a > da という交替が起こる。

- (2-117) banaa sinsi=datta
 banaa sinsi=du ar-ta
 1.SG.TOP 先生=FOC COP-PST
 私は先生だった

上述したとおり (2.4.8.)、u+a > oo という双方向母音同化が黒島方言においてはより一般的である。しかし、この du+a > da という音韻規則はこの双方向母音同化とは明らかに異なる。仮に母音同化が生じた場合 du+a > doo となるはずであるが、このようなかたちはない。また、焦点助詞=du のあとでこのような音韻現象を起こすのはコピュラのみであるため、これは焦点助詞とコピュラの特異な形態音韻規則であると言える。

3. 文法の概要

本章においては、黒島方言の文法の概要を示す。まず、3.1.においては、基本的な節の構造を示す。続く、3.2.では、節を構成する2つの重要な要素のうちの名詞句について、続く3.3.においても一方の述部について述べる。3.4.においては、語、助詞、接辞の定義を行う。3.5 節では品詞分類を行う。3.6 節においては、黒島方言において用いられる形態法についてまとめる。

3.1. 基本的な節の構造

黒島方言の節は述部を中心に構成される。つまり、述部とそれにかかわる名詞句で構成されるのである。述部とともに節を構成する名詞句は、原則的には、述部より左側にあらわれる。基本的な構成素順は他動詞の場合 AOV で、自動詞の場合 SV であるが、義務的ではない。むしろ、述部と名詞句との関係は名詞句に後接する助詞によって示される。原則的には、他動詞主語と自動詞主語は=nu で、他動詞目的語は=ju もしくは=ba でマークされる主格対格型言語である。ただし、これら2つの対格の違いはいまだ明確でない。今後の課題である。

(3-1) a. 他動詞文 (目的語を=ju で標示)

iza=nu	tigami=ju	jum-i	bur-u
お父さん=NOM	手紙=ACC1	読む-INF	PROG-NPST
お父さんが手紙を読んでいる			

b. 他動詞文 (目的語を=ba で標示)

iza=nu	tigami=ba	jum-i	bur-u
お父さん=NOM	手紙=ACC2	読む-INF	PROG-NPST
お父さんが手紙を読んでいる			

(3-2) 自動詞文

iza=nu	arak-u
お父さん=NOM	歩く-NPST
お父さんが歩く	

ただし、文脈から判断可能な場合は、構成素が省略されることが多い。

(3-3) 構成素の省略

a. uva=a	simbun=a	jum-uta?
2.SG=TOP	新聞=TOP	読む-PST
あなたは新聞は読んだ?		

b. ou,	jum-uta
はい	読む-PST
はい、読んだ	

述部の種類には、動詞述部、形容詞述部、名詞述部の3つがある。これらはその名のとおり、動詞が述部の主要部となるもの、形容詞が述部の主要部となるものと、名詞が主要部となるものである。

(3-4) 動詞・形容詞・名詞述部

a. 動詞述部

fudi=si tigami=ju hak-u
筆=INST 手紙=ACC1 書く -NPST
筆で手紙を書く

b. 形容詞述部

unu saa=a maa-ha
この 茶=TOP おいしい-ADJVZ.ABS³⁹
このお茶はおいしい

c. 名詞述語

uva=a iza=a iso+pusu=du ar -ta
2.SG=GEN お父さん=TOP 海+人=FOC COP-NPST
あなたのお父さんは漁師だった

このうち、名詞述部はコピュラを伴うのが一般的であるが、非過去かつ肯定の場合は省略されることも多い。

(3-5) 名詞文のコピュラとその省略

a. hari=a sinsi=du⁴⁰ ar-ø
3.SG=TOP 先生=FOC COP-NPST
彼は先生である

b. 省略の例

hari=a sinsi
3=TOP 先生
彼は先生である

基本的には、他動詞主語と自動詞主語が同じ助詞（主格助詞=nu）で標示される主格対格型の言語であり、形容詞文と名詞文の項についても、自動詞主語と同じ主格助詞=nu で標示する。

(3-6) 他動詞文と自動詞文の格の標示

a. 他動詞文

【主格標示：nu、対格標示：ju】

iza=nu tigami=ju hak-u
お父さん=NOM 手紙=ACC1 書く -NPST
お父さんが手紙を書く

b. 自動詞文

【主格標示：nu】

iza=nu niv-u
お父さん=NOM 寝る -NPST
お父さんが寝る

³⁹ 6章において述べるが、形容詞は非過去肯定を標示する専用の接尾辞を持たない。従って、非過去肯定の場合、絶対形を用いる。この絶対形は形容詞語幹そのままのはだかのかたちであり、文終止のほか、副詞節末などに用いられる。

⁴⁰ 主節末に名詞述語文が現れる場合、焦点標識=du を伴うことが非常に多い。

(3-7) 形容詞文

unu isi=nu guffa-ta
この 石=NOM 重い-PST
この石が重かった

(3-8) 名詞文

unu pusu=nu sinsi=du ar-ta
この 人=NOM 先生=FOC COP-PST
この人は先生だった

しかし、自然現象などの自動詞や他動性の低い自動詞の場合、主語を対格助詞=**ba** や=**ju** でマークすることも許容される場合がある。

(3-9) 自然現象の自動詞

ami=ba vv-i
雨=ACC2 降る-INF
雨が降って

(3-10) 他動性の低い自動詞⁴¹

suidoo=ju=n naan-iba
水道=ACC2=ADD ない-CLS
水道もないから

これらの対格助詞=**ba** や対格助詞=**ju** による自動詞主語のマーキングについては、どのような条件であられるのかなど、今後の課題である。現在のところわかっているのは、自然現象を含む他動性の低い自動詞文であることと、不定形 (5章参照のこと。いわゆる動詞連用形。) や、不定形由来と考えられる形式を節末に持つ場合が多い、という条件だけである。

なお、形容詞文や名詞文の場合、唯一の名詞句が=**ba** や=**ju** でマークされることはない。この点においては、自動詞文と形容詞文・動詞文との間に違いがある。

(3-11) *kjuu {=ju/ =ba} acca
今日 {=ACC1/ACC2} 暑い.ABS

(3-12) *unu pusu {=ju/ =ba} sinsi
この 人 {=ACC1/ACC2} 先生

項となる名詞句と述部（および他の名詞句）との関係は、名詞句の後に置かれる助詞によって示される。この助詞も文脈から判断可能な場合は省略することが可能である⁴²。この、名詞句とそれに続く助詞をまとめた単位を「助詞付き名詞句」と呼ぶこととする。

(3-13) 格助詞の省略

a. uva=a simbun=ju jum-uta?
2=TOP 新聞=ACC1 読む-PST
あなた、新聞は読んだ？

⁴¹ naan 「ない」は、黒島方言においては否定の存在動詞として認められる。これは、動詞と同様の活用をするためである。

⁴² ただし、注意すべき現象として、「助詞の省略」と考えるのか、それとも、「無助詞」が積極的に機能を担っているのか、迷う場合がある。今後検討が必要である。また、助詞の省略が可能であるのは、主に主格と対格であるようだが、この点も今後の調査が必要である。

b. uva=a simbun jum-uta?
 2=TOP 新聞 読む-PST
 あなた、新聞、読んだ？

- (3-14) 助詞付き名詞句
 [simbun = ju]
 名詞 助詞
 助詞付き名詞句

ただし、名詞句と名詞句の関係を示す属格の省略はできない⁴³。

- (3-15) a. 属格を含む名詞句
 gakko=nu kuruma
 学校=GEN 車
 学校の車

- (3-16) *gakko kuruma
 学校の車

3.2. 名詞句

名詞句は、任意の修飾部と名詞から成る。最小の名詞句は、ひとつの名詞のみで構成される。ただ、形式名詞を主要部とする名詞句に関しては、修飾部が必須である。

修飾部を埋めうるのは、節（動詞節、形容詞節）、属格助詞を伴う名詞、連体詞である。修飾部は主要部に先行する。

また、上述のとおり、名詞句とそのあとに続く助詞までを含めた単位を助詞付き名詞句と呼ぶこととする。黒島方言には前置助詞はないため、すべての助詞付き名詞句は名詞句から始まる。

- (3-17) 名詞句と修飾部

a. 修飾部なし

izu
 魚

b-1. 動詞節による修飾

[kinoo hari=nu tur-ta]動詞節 izu
 昨日 3=NOM とる-PST 魚
 昨日、彼がとった魚

b-2. 形容詞節による修飾

[maa-ha]形容詞節 izu
 おいしい-ADJVZ.ABS 魚
 おいしい魚

c. 属格助詞を伴う名詞による修飾

[sinsi=nu] 属格助詞付き名詞句 izu
 先生=GEN 魚
 先生の魚

⁴³ 黒島方言には=nu のほかに=a という属格助詞がある。これは、呼びかけに使える名詞にのみ後接するものであるため、接尾辞と考えてもよいものであるが、本稿では助詞として考えている。詳しくは 8.2. を参照のこと。

d. 連体詞による修飾

[unu]_{連体詞} izu
 この 魚
 この魚

なお、名詞句は、節の項として、名詞句の修飾部として、また、名詞述語文の述部としても機能する。

(3-18) a. 節の項としての名詞句

[unu saki]_{名詞句=ju} num-uta
 この 酒 =ACC1 飲む-PST
 この酒を飲んだ

b. 名詞句の修飾部としての名詞句

[unu jaa]_{名詞句 =nu} jadu
 この 家 =GEN 戸
 この家の戸

c. 名詞述語文の述部としての名詞句

uri=a [uva=ha vv-ita munu]_{名詞句 =dora}
 これ=TOP 2.SG=ALL くれる-PST もの =SF
 これはあなたにあげたものだよ

3.3. 述部

黒島方言の述部は、上述のとおり、動詞述部 (3.3.1.)、形容詞述部 (3.3.2.)、名詞述部 (3.3.3.) の3つである。以下、それぞれ述べる。

3.3.1. 動詞述部

最小の動詞述部はひとつの動詞のみから成る。これに加え、助動詞を用いることも可能であり、さらに、2つ以上の動詞を用いた複雑な動詞述語を構成することも可能である。なお、助動詞構文中にとりたて助詞を入れることも可能である。詳しくは9章で述べる。

(3-19) 単純動詞述部

iza=nu tigami=ju hak-u
 お父さん=NOM 手紙=ACC1 書く-NPST
 お父さんが手紙を書く

(3-20) 助動詞構文述部

iza=nu tigami=ju hak-i bur-u
 お父さん=NOM 手紙=ACC1 書く-INF PROG-NPST
 お父さんが手紙を書いている

(3-21) 焦点標示を伴う助動詞構文述部

iza=nu tigami=ju hak-i=du bur-u
 お父さん=NOM 手紙=ACC1 書く-INF=FOC PROG-NPST
 お父さんが手紙を書いている

3.3.2. 形容詞述部

形容詞述部は形容詞のみから成る場合と、存在動詞を伴う場合とがある。とりたて助詞を含む場合、存在動詞を必ず伴う。

(3-22) 形容詞のみの述部

unu saa=ja maa-ha
この 茶=TOP おいしい-ADJVZ.ABS
このお茶はおいしい

(3-23) 補助動詞としての存在動詞を伴う形容詞述部

unu isi=a guffa=n ar-i ubu-ha=n ar-Ø
この 石=TOP 重い.ABS=ADD STATE-INF 大きい-ADJVZ.ABS=ADD STATE-NPST
この石は重くもあり、大きくもある

(3-24) 焦点標示を伴い、補助動詞としての存在動詞を伴う形容詞述部

unu saa=ja maa-ha=du ar-Ø
この 茶=TOP おいしい-ADJVZ.ABD=FOC STATE-NPST
このお茶はおいしい

3.3.3. 名詞述部

最小の名詞述部はひとつの名詞のみから成る。非過去肯定の場合、コピュラは任意であるが、過去、否定などをあらわす場合はコピュラを用いる必要がある。

(3-25) 非過去肯定コピュラ省略の名詞述語文

uri=a sinsi=nu kin
これ=TOP 先生=GEN 着物
これは先生の着物

(3-26) 非過去肯定コピュラありの名詞述語文

uri=a sinsi=nu kin=du ar-Ø
これ=TOP 先生=GEN 着物=FOC COP-NPST
これは先生の着物である

(3-27) 過去のコピュラ述語文

a. kinoo=a ami=du ar-ta
昨日=TOP 雨=FOC COP-PST
昨日は雨であった

b. *kinoo=a ami=du-ta

c. *kinoo=a ami-ta

(3-28) 否定のコピュラ述語文

a. kjuu=a ami ar-an-Ø
今日=TOP 雨 COP-NEG-NPST
今日は雨でない

b. *kjuu=a ami-an

3.4. 語、助詞、接辞

本節では、統語的、形態的な単位である語、助詞、接辞のそれぞれを定義する。語は、少なくともひとつの語根を含んだ自由形式である。複合語の場合は語根を 2 つ以

上持つ。語は内部に節や句を含まない。

助詞は自由形式にのみ付く。ただ、助詞自体は拘束形式である。接辞と比べた場合に、助詞の大きな特徴は、付く形式の自由度が高い点である。つまり、例えば、典型的な助詞である終助詞は名詞にも後接するし、動詞にも後接する。

接辞は、拘束形式に付くものが多い。ただし、著しくその接続する形式が限定されている場合は（自由形式である）名詞に付く形式であっても接辞と認める場合がある。これは例えば、複数接辞である。複数接辞は人名詞にしか付きえない。（4.1.を参照のこと。）

(3-29) 語の例

a. ひとつの語根から成る語

pusu

人

b. ふたつの語根から成る複合語

iso+pusu

海+人

漁師

(3-30) 助詞の例

a. 終助詞 =doo

a-1. 動詞に付く例

saa num-uta=doo

お茶 飲む-PST=SF

お茶飲んだよ

a-2. 名詞に付く例

banaa sinsi=doo

1.TOP 先生=SF

私は先生よ

a-3. 形容詞に付く例

meeku=a tuusa=doo

宮古=top 遠い.ABS=SF

宮古は遠いよ

b. とりたて助詞 =n 「も」

b-1. 動詞に付く場合

va-i=n s-i num-i=n s-i

食べる-INF=ADD LV-INF 飲む-INF=ADD LV-INF

食べもし、飲みもし

b-2. 助詞付き名詞句に付く場合

saki=ju=n num-uta

酒=ACC1=ADD 飲む-NPST

酒も飲んだ

b-3. 形容詞に付く場合

uri=a guffa=n ar-i koosa=n ar-i

これ=TOP 重い.ABS=ADD STATE-INF 固い.ABS=ADD STATE-INF

これは重くもあるし、固くもある

(3-31) 接辞の例

a. 動詞にまつわる接辞

ha -ah -ar -un -ta
買う -CAUS -PASS -NEG -PST
[語根] 接辞 接辞 接辞 接辞
買わされなかった

b. 形容詞にまつわる接辞

maa -ha -ta
おいしい -ADJVZ -PST
[語根] 接辞 接辞
おいしかった

c. 名詞にまつわる接辞

maja -ama
猫 -DIM
[語根] 接辞
子猫

3.5. 品詞分類

黒島方言には以下の 8 つの品詞を認める；動詞、名詞、形容詞、連体詞、感動詞、接続詞、副詞、助詞。なお、助詞は「語」と同じレベルのものではないものの、比較的統語的に自由な振る舞いも一方では示すため、ここで述べる。以下、それぞれの品詞を区別する基準を述べていく。また、続く各章(4～8章)においてそれぞれの詳細については述べる。

3.5.1. 動詞

動詞は、活用し、述部となる。この点はのちに述べる形容詞と重なる。しかし、形容詞とは形態的特徴が異なる(これについては、3.5.3.の形容詞の項と、6章において述べる)。

(3-32) 動詞の活用の例

a. ha-u

買う-NPST
買う

b. ha-uta

買う-PST
買った

c. ha-an

買う-NEG.NPST
買わない

d. ha-an-ta

買う-NEG-PST
買わなかった

e. ha-i bur-u

買う-INF PROG-NPST
買っている

(3-33) 動詞述部の例

banaa	simbun=ju	ha-uta
1.TOP	新聞=ACC1	買う-PST
私は新聞を買った		

3.5.2. 名詞

名詞は、名詞句の主要部となる。

(3-34) 名詞句の例

a. 名詞単独の名詞句

[taku] _{名詞句=ju}	va-i
タコ=ACC1	食べる-IMP
タコを食べろ	

b. 連体詞で修飾された名詞句

[unu taku] _{名詞句=ju}	va-i
この タコ=ACC1	食べる-IMP
このタコを食べろ	

c. 連体修飾節で修飾された名詞句

[kinoo tur-ta taku] _{名詞句=ju}	va-i
昨日 とる-PST タコ=ACC1	食べる-IMP
昨日とったタコを食べろ	

通常の名詞は単独でも名詞句になりうるが、それが不可能な名詞がある。それらを形式名詞と称する。これらは、形態統語的には名詞の性格を持っているものの、修飾部を必ず伴うものである。たとえば、次の bason 「時」 のようなものである。

(3-35) banaa mee cjoonan=nu mar-ita bason=a mee
 1.SG.TOP FIL 長男=NOM 生まれる-PST 時=TOP FIL
 私は長男が生まれたときは（怖くて見られなかった）

形式名詞は修飾部を伴う必要があるため、たとえば以下に示すように「時間がない」や「時が来た」などには使用できない。

(3-36) a. *bason=nu naan
 時=NOM ない.NPST
 b. *bason=nu=du kee
 時=NOM=FOC 来た

3.5.3. 形容詞

形容詞の認定は、琉球諸語において問題となることがよくある（麻生 2010a、2010b、下地 2010、新永 2010 などを参照のこと）。そのため、12 章において、黒島方言の形容詞の認定について詳述する。

結論を先に述べておくと、本研究においては黒島方言に形容詞という品詞を認める。形容詞は、動詞と同じく活用し、述部となる。この点、動詞と変わらない。しかし、動詞とはとる接辞が異なる。そもそも形容詞は語幹が接辞をとらないはだかのかたち（本稿ではこれを絶対形と称する）を文中で用いることができる（下の例 3-37-a）のに対し、動詞はそれが不可能である（3-39）。このような理由から本稿では、形容詞を、動詞に近いものの、

異なる品詞として立てる。

(3-37) 形容詞の活用の例

- a. **guffa**
重い.ABS
重い
- b. **guffa-ta**
重い-PST
重かった
- c. **guffa** **nar-ta**
重い.ABS なる-PST
重くなる

(3-38) 形容詞述部の例

unu **saki=a** **jassa**
この 酒=TOP 安い.ABS
この酒は安い

(3-39) 動詞は語幹に接辞をとらないかたちはない

- a. ***hak** 「書く」
- b. **hak-i** 「書き」
- c. ***bi** 「酔う」
- d. **bi-i** 「酔い」

以上で示した (3.5.1.~3.5.3.)、動詞、名詞、形容詞の基準を表にまとめると以下の表 3-1 のようになる。

表 3-1 動詞、名詞、形容詞の基準

	動詞	名詞	形容詞
活用する	○	×	○
述語になる	○	○	○
格助詞をとる	×	○	×
接辞をとらないかたちを用いることができる	×	○	○

さらに、黒島方言には 2 種類の形容詞がある。これらはすこしの違いを除いてほぼ形態統語的特徴を共有している。一方を普通形容詞、もう一方を比較形容詞⁴⁴と呼び、まとめて形容詞とする。

(3-40) a. 普通形容詞の例

guffa-ta
重い-PST
重かった

b. 比較形容詞の例

guffa-ku-ta
重い-CMPR-PST
重かった

⁴⁴ この形容詞がなにかとなにかを比較する際に用いられることが多いため「比較形容詞」としている。ただし、必ず用いなければならないわけではない (6 章を参照のこと)。

これらの、普通形容詞と比較形容詞の形態的違いは6章で詳述する。

3.5.4. 連体詞

連体詞は、なんの接辞や助詞もとらず、名詞句の修飾部を埋める。また、これ以外の位置には立ちえない。

- (3-41) a. unu saa=a jassa
この お茶=TOP 安い.ABS
このお茶は安い
- b. ii saa=a taka-ha
いい お茶=TOP 高い-ADJVZ.ABS
いいお茶は高い

上に示したとおり、黒島方言において ii 「いい」は連体詞である。これは、この ii が活用せず（つまりなんの接辞もとらず）、また、名詞の修飾部以外にたちえないためである。これに関しては4.4.1.で詳述する。この ii 「いい」も含めて黒島方言における連体詞は限られたものである。unu 「その」、kunu 「この」、hanu 「あの」が該当する⁴⁵。

3.5.5. 感動詞

感動詞は、そのみで文となる。修飾部も述部も持たない。

- (3-42) 質問に答えて

ou
はい

- (3-43) 子どもなどを叱るときなどに

ee
こら

3.5.6. 接続詞

接続詞は、節の先頭にあらわれ、節と節の関係をあらわす。そのみで一語となり、修飾されることはない。

- (3-44) a. muuru sima+zima=nu funi=a tumar-i si-ta isanaki=na
みんな RED+島=GEN 船=TOP 泊まる-INF LV-PST 石垣=LOC

aiti naacaa mata ki-i
そして 翌朝 また 来る-INF
みんな島々の船は泊まった、石垣に。そして翌朝また来て、

- b. airiba=du=ju
だから=FOC=SF
だからよ（相手の発言に同意したことをあらわす）

⁴⁵ 黒島方言における「どの」は nuu=nu であり、日本語に直訳すると「なにの」である。

3.5.7. 副詞

副詞を積極的に定義することは困難である。上記の品詞のどれにも当てはまらず、述部を修飾する語を副詞とする。副詞の分類などについては、7.4.を参照のこと。

- (3-45) a. unu pusu=a juu jaa=na bur-u
 この 人=TOP よく 家=LOC いる-NPST
 この人はよく家にいる
- b. mankka par-i=ba
 まっすぐ 行く -IMP=SF
 まっすぐ行け

また、形容詞語根の重複形は副詞として機能する。

- (3-46) takaa+taka tub-i bur-u
 RED+高い 飛ぶ-INF PROG-NPST
 高く飛んでいる

3.5.8. 助詞

助詞は上の 3.4.において述べたとおり、それ自体は拘束形態素であるが、自由形式に後続するものである。したがって、「語」と同じレベルのものではない。しかし、品詞を超えて接続する、複数の助詞が重なることがある、など、比較的統語的に自由な振る舞いも一方では示すため、ここで述べる。

助詞には、統語情報を持つものと持たないものがあるが、いずれにしる後接する要素の品詞性に変更は加えない。したがって、品詞 X に助詞がついた場合、その助詞がついた全体は「助詞付き X 句」ということになる。

- (3-47) 統語情報を持つ助詞
- | | | | | |
|--------------|---------------------------|----------------|-----------|------------------|
| kjuuja | ameerunu | | patakehe | parundo |
| kjuu=a | [ami ar-u= <u>nu</u>] | 助詞付き動詞句 | pataki=ha | par-u-n=do |
| 今日=TOP | 雨 | COP-NPST=ADVRS | 畑=ALL | 行く -NPST-DECL=SF |
| 今日は雨だけど畑へ行くよ | | | | |

上の例の助詞（接続助詞）=nu は副詞節末にしか生起しえない。したがって、統語的な情報を持っていると言える。しかし、以下に示すとおりたて助詞=a はそれ自体には統語的な情報を備えておらず、いろいろな環境にあらわれる。

- (3-48) 統語情報を持たない助詞
- a. 項に後接する場合
- | | | |
|----------|-----------------|---------------------|
| banaa | unna | vaanun |
| banaa | [un= <u>a</u>] | vva-an-un |
| 1.SG.TOP | 芋=TOP | 食べる -NEG-NEPST.DECL |
| 私は芋は食べない | | |
- b. 軽動詞構文の本動詞に後接する場合
- | | | |
|----------|--------------------|------------------|
| unna | vaija | suunun |
| un=a | [vva-i= <u>a</u>] | su-un-un |
| 芋=TOP | 食べる -INF=TOP | LV-NEG-NPST.DECL |
| 芋は食べはしない | | |

c. 助詞に後接する場合

aasunhaja

[aasun=ha=a]助詞付き名詞句

東筋=ALL=TOP

東筋へはいらっしゃったの

waaretan

waar-eer-ta-n

いらっしゃる-CONT-PST-DECL

3.6. 形態法

黒島方言においては、接辞添加、複合、重複の 3 つの形態法が用いられる。以下、3.6.1 において接辞添加、3.6.2 において複合、3.6.3 において重複について述べる。

3.6.1. 接辞添加

本節では、接辞添加について述べる。黒島方言は膠着的な形態法を持つ。つまり、1 形態素につき、1 つの意味であることがほとんどである。また、1 つの語内には多くの形態素を含みうるため、Comrie (1981) の述べる複統合性のスケールにおいては高い位置になる。接辞は接尾辞がほとんどである。名詞には接頭辞が 2 つある。しかし、今のところ動詞と形容詞には接頭辞は見つかっていない。したがって、すべての動詞と形容詞は語根からはじまる。

(3-49) 動詞接辞

sik	<u>-ah</u>	<u>-ar</u>	<u>-un</u>	<u>-ta</u>
聞く	<u>-CAUS</u>	<u>-PASS</u>	<u>-NEG</u>	<u>-PST</u>
[語根]	接辞	接辞	接辞	接辞

聞かされなかった

(3-50) 名詞接辞

a. 接尾辞

kooni	<u>-ama⁴⁶</u>	<u>-ta</u>
男児	<u>-DIM</u>	<u>-PST</u>
[語根]	接辞	接辞

小さい男の子たち

b. 接頭辞

<u>soo-</u>	izu
<u>いい</u>	魚
接辞	語根

いい魚

(3-51) 形容詞接辞

guma	<u>-ha⁴⁷</u>	<u>-ta</u>
小さい	<u>-ADJVZ</u>	<u>-PST</u>
[語根]	接辞	接辞

小さかった

⁴⁶ kooni-ama は母音同化 (2.4.2. で示した先頭に/a/を持つ拘束形態素の双方向母音同化) を起こし、/kooneema/というかたちで実現する。

⁴⁷ 形容詞には、形容詞化接辞-ha をとって形容詞になるものと、形容詞化接辞をとらずに形容詞として機能するものがある。詳しくは、6 章「形容詞」を参照のこと。

なお、品詞を転換する派生は、黒島方言においては動詞語根から形容詞語幹を派生させるものしか確認されていない。たとえば、以下の (3-52) のようなものである。num「飲む」は動詞語根である。このような脱動詞形容詞化については、6.4.において述べる。

- (3-52) unu pusu=a num-ida-ha
 この 人=TOP 飲む-PS-ADJVZ.ABS
 この人はよく飲む

3.6.2. 複合

本節では、複合について述べる。複合も活発に行われる。複合は、名詞、動詞、形容詞語根の間で起こる。「形容詞+形容詞」の組み合わせ以外⁴⁸は、複合が起こりうる。ただし、すべての組み合わせにおいて等しく生産性があるわけではない。生産性の高さでまとめると以下ようになる。

- (3-53) 複合の生産性の違い
 生産性高い：「名詞+名詞」「動詞+名詞」「形容詞+名詞」
 (ただし、「名詞+動詞」「形容詞+動詞」
 で、後部要素が動詞不定形で名詞化される場合は多)
 生産性あり：「名詞+動詞」「名詞+形容詞」「動詞+動詞」「形容詞+動詞」
 (ただし「形容詞+動詞」は動詞が名詞化されるもののみ)
 生産性低い：「動詞+形容詞」

上に述べたとおり、動詞語根が不定接尾辞をとって名詞化されたものを含めて、後部要素に名詞が立つものに関しては非常に生産的に複合が行われる。しかし、それ以外は生産性が高いとは言えない。また、「形容詞+動詞」に関しては、生産性はあるものの、後部要素の動詞が名詞化されるもののみが確認されている。

「生産性低い」と「生産性あり」の区別について述べておく。「生産性低い」のほうは使用される語根が限られている場合である。これに対し、「生産性あり」のほうは、頻出するわけではないため生産性が高いとは言えないが、いくつかの語根を用いてその複合が行われる場合である。具体的には、「生産性低い」と判断した「動詞+形容詞」の複合は、後部要素として haija「きれい」か paaha「はやい」しかとれない。これに対し、「生産性あり」と判断した組み合わせであれば、いくつかの語根を用いて複合が可能である。

なお、複合の際は、動詞は不定形、形容詞は語根がそれぞれ前部要素に立つ。

以下、上にあげた生産性の順にそれぞれの組み合わせについて述べる (3.6.2.1.で生産性の高い複合、3.6.2.2.で生産性のある複合、3.6.2.3.で生産性の低い複合) が、「形容詞+動詞」に関しては、上に述べたとおり語根としては「形容詞+動詞」の組み合わせであるものの、最終的な品詞としては名詞であるため、別に 3.6.2.4.において述べる。

3.6.2.1. 生産性の高い複合

本節では生産性の高い複合について述べる。3.6.2.1.1.では「名詞+名詞」、3.6.2.1.2.では「動詞+名詞」、3.6.2.1.3.では「形容詞+名詞」について述べる。

⁴⁸ 「細長い」「痛痒い」「青白い」「赤黒い」などの語を聞いてみるものの、そのような語はない、という反応が返ってくる。

3.6.2.1.1. 名詞+名詞

名詞語根+名詞語根の複合は黒島方言においては非常に頻繁に行われる。例を示す。なお、複合は+であらわす。

(3-54) 名詞+名詞の複合の例

a. iso+pusu

海+人

漁師

b. jarabi+zydai

子ども+時代

子どものころ

また、後部要素が名詞化された動詞（不定形）をとるものも多い。

(3-55) 名詞+名詞化された動詞（不定形）の例

a. izu+foos-i

魚+釣る-INF

魚釣り

b. mizi+ab-as-i

水+浴びる-CAUS-INF

水浴びさせ（牛を水で洗うこと）

3.6.2.1.2. 動詞+名詞

本節では、動詞+名詞の複合について述べる。この複合も頻出するものである。

(3-56) a. mar-i+zima (< mar-i+sima)

生まれる-INF+島

出身の島

b. pantar-i+pusu

太る-INF+人

太った人

3.6.2.1.3. 形容詞+名詞

形容詞+名詞の複合も生産性が高く、頻出するものである。複合の前部要素に立つ場合、形容詞は語根をとる。

(3-57) a. naa+panasi

長い（語根）+話

長話

b. ubu+hazi

大きい（語根）+風

台風

3.6.2.2. 生産性のある複合

本節においては生産性のある複合について述べる。3.6.2.2.1.では名詞+動詞、3.6.2.2.2.では名詞+形容詞、3.6.2.2.3.では動詞+動詞についてそれぞれ述べる。

3.6.2.2.1. 名詞＋動詞

名詞＋動詞の複合は活発ではないものの、行われる。

- (3-58) **munu+nara-as-ita=waja**
もの+習う-CAUS-PST
教えた

ただし、上に述べたとおり、後部要素が不定形をとる場合、かなり活発である。

- (3-59) 名詞+動詞(-不定)の複合の例
- a. **mizi+fum-i**
水+汲む-INF
水汲み
- b. **isanaki+haju-i**
石垣+通う-INF
石垣通い

3.6.2.2.2. 名詞＋形容詞

名詞＋形容詞の複合は頻繁に起こるわけではないが、語根が限定されているわけではないため、生産性が低いとは言えない。たとえば、以下のような例である。

- (3-60) a. **kimu+haija-ta=waja**
心+きれい-PST=SF
心がきれいよね
- b. **hazi+zuusa (< hazi+suusa)**
風+強い.ABS
風が強い

3.6.2.2.3. 動詞＋動詞

動詞＋動詞の複合に関してもあまり見られないが、語根が限定されているわけではない。

- (3-61) **mar-i+sudat-uta=do**
生まれる-INF+育つ-PST=SF
生まれ育ったよ

3.6.2.3. 生産性の低い複合

本節では、生産性の低い複合について述べる。これに当てはまるのは、動詞＋形容詞の組み合わせであり、上に述べたとおり、この組み合わせは後部要素が **haija**「きれい」と **paaha**「はやい」の2つに限定される

- (3-62) a. **simas-i+haija**
済ませる-INF+きれい.ABS
問題なく済ませる、とどこおりなく済ませる
- b. **par-i+paaha**
走る-INF+はやい.ABS
走るのがはやい、はやく走る

後部要素が 2 つに限定されているため、形態法として「動詞+形容詞」の複合が活発に行われているとは言えない。しかし、「動詞不定形+hajja」は談話中にも頻出し、かつ、特殊なふるまいを示すため、7章「その他の品詞」の7.5.において詳述することとする。

3.6.2.4. 形容詞+動詞

本節では、形容詞+動詞の複合について述べる。これは、語根の組み合わせとしては形容詞と動詞なのであるが、動詞が不定形をとって名詞化するものしか確認されていない。そのため、他の複合とは異質である。他の複合は、後部要素の語根の品詞になりうる。以下、形容詞+動詞の不定形の複合の例を示す。

- (3-63) a. **biira+mar-i**
弱い (語根) +生まれる-INF
弱い生まれ (生まれつき体が弱いこと)
- b. **ubu+hac-i**
大きい (語根) +勝つ-INF
大勝

3.6.3. 重複

本節においては、重複について述べる。重複は他の琉球語と比べると (Shimoji 2009, Pellard 2010) 活発ではないものの、黒島方言においても確認されている。

名詞語根と動詞の不定形を重複させた場合、複数性をあらわすことがある。動詞の重複形は、軽動詞構文の前部要素としてしか生起しえない。なお、重複も+を用いて示すこととする。例を示す。

- (3-64) 名詞語根の重複
- a. **jaa+jaa**
RED+家
家々
- b. **duu+duu**
RED+自分
自分自分 (それぞれ)
- (3-65) 動詞不定形の重複
- a. **hak-i+hak-i** **si-i**
RED+書く-INF LV-INF
(何度も) 書いて

また、形容詞語根の重複も確認されている。形容詞語根が重複された場合、全体として副詞として機能する。その際、1つ目の末尾モーラが1モーラ伸びることがあるが、これは任意のようである。意味的には程度の高さが付与されるものと考えられる。

- (3-66) **taka+taka/ takaa+taka**
RED+高い
とても高く

なお、形容詞語根はのちにも述べるように 2 つの類に分けられるが、形容詞化接辞が分離不可能になっている語根類についても、まったく同じ操作が行われる。この点について

述べる。形容詞語根は2つの類に分けられる。1つ目は、形容詞化接辞をとらない類であり、もう1つは形容詞化接辞をとったうえで形容詞語幹となる類である。以下、例をあげる。

- (3-67) a. 語根: **guffa** > **-ta** (過去の接辞) を付すと: **guffata** (**guffa-ta**)
 重い
 b. 語根: **taka** > **-ta** (過去の接辞) を付すと: **takahata** (**taka-ha-ta**)
 高い

上記の例を見るとわかるように、**guffa** のほうは、そのまま過去の接辞をとるが、**taka** のほうは、**-ha** という接辞をとったうえで、**-ta** をとる。このように、形容詞として語形成する際に形容詞化接辞を必要としない類と、必要とする類に分かれる。上の (3-66) の形容詞語根重複の例は、**taka** という語根であったが、この語根とは違う類に属する **guffa** の場合も重複は以下のように行われる。

- (3-68) **guffaa+guffa/ guffa+guffa**
 RED+重い
 とても重く

最後に、形容詞語根の特殊な重複形について述べておく。1.5.においても述べた、「白」と「黒」の重複形の例である。まず、東筋方言のこれらの重複形を示す。

- (3-69) 東筋方言の「白」と「黒」の重複形
- | | |
|------------|----------------------|
| a. //zzu// | b. /zoosso/ [zo:s:o] |
| 白 (語根) | 白々 (重複形) |
| b. //vvu// | b. /vooffo/ [vo:f:o] |
| 黒 (語根) | 黒々 (重複形) |

これに対し、保里方言においては別の変異も見られる。保里方言においても、これらの [zo:s:o] や [vo:f:o] という実現形はあるものの、それと同時に、以下のような実現形も存在する。

- (3-70) 保里方言の白と黒
- | | |
|------------|---------------------------------|
| a. //zzu// | b. /zoosso/ [zo?os:o / zo:?s:o] |
| 白 (語根) | 白々 (重複形) |
| b. //vvu// | b. /vooffo/ [vo?of:o / vo:?f:o] |
| 黒 (語根) | 黒々 (重複形) |

この変異は極めて特徴的なものである。なぜならば、非語頭の声門閉鎖音があらわれているためである。保里方言を含む黒島方言において、このような例は今のところほかにはない。

なお、zoosso「白々」や vooffo「黒々」においては、母音の交替（語根では zzu であるのに、oo や o となる点）を考えると、以下のような古形が想定される。

- (3-71) a. zzu-a+zzu-a
 b. vvu-a+vvu-a

この理由は今のところわからない。他方言の現象を検討するなどして解明に努めたい。

4. 名詞と名詞句

本章においては、名詞と名詞句について述べる。まず、黒島方言の名詞がとりうる形態を述べる(4.1.)。その後、4.2.において代名詞について述べる。続く4.3.においてはそのほかの名詞類について述べる。4.4.においては名詞句の構造について述べる。最後に4.5.において複合名詞を利用した感嘆文について述べる。

4.1. 名詞の形態

本節では、名詞の形態法について述べる。黒島方言の名詞には、単独名詞、派生名詞、複合名詞の3つの形態の名詞がある。それぞれ、例を示す。

(4-1) 黒島方言の名詞がとりうる形態

a. 単独名詞

taku 「タコ」

b. 派生名詞

taku-ama

タコ-DIM 「小さいタコ」

c. 複合名詞

guma+taku

小さい+タコ 「小さいタコ」

本節ではまず、4.1.1.において派生名詞について述べ、4.1.2.では複合名詞について述べる。

4.1.1. 名詞の派生

本節では名詞の派生について述べる。名詞は、黒島方言の品詞で唯一接頭辞をとることができる。また、接尾辞もとることができる。接頭辞は2つ、接尾辞は3つ確認されている。以下に列挙する。なお、これらの名詞接辞はすべて義務的ではない。

(4-2) 黒島方言における名詞接辞

a. 接尾辞

a-1. -ama 指小辞

a-2. -ta 複数接尾辞(呼びかけに使える人名詞と代名詞)

a-3. -nki 複数接尾辞(それ以外の人名詞)

b. 接頭辞

b-1. ara- 「新しい」

b-2. soo- 「いい」

上に示したとおり、複数接尾辞は相互に排他的である。また、今のところ、接尾辞と接頭辞が同時に付された語、および、2つの接頭辞が同時に付された語は確認されていない。したがって、派生名詞のとりうる構造は以下のとおりである。なお、複数接尾辞をとりうるのは人名詞のみであるなど、語根の選択には制限がある。この点に関しては、以下の各節において述べる。

(4-3) 派生名詞がとりうる構造

- a. (接頭辞-) 語根
- b. 語根 (-指小辞) (-複数)

以下、4.1.1.1.1.において接尾辞、続く 4.1.1.2.においては接頭辞について述べる。

4.1.1.1. 接尾辞

本節では、接尾辞について述べる。動詞接尾辞が数多くあるのに対し、名詞接尾辞は 3 つと限定されている。4.1.1.1.1.においては指小辞-ama について、続く 4.1.1.1.2.においては 2 つの複数接尾辞-ta と-nki について述べる。

4.1.1.1.1. 指小辞

黒島方言における指小接尾辞⁴⁹は-ama である。この接尾辞は母音音素/a/を辞頭に持つものであるため、その音韻形態論に従う (2.4.2.参照)。指小辞の意味するところは、小ささや、かわいらしさである。

(4-4)	a. usi	→	useema ⁵⁰ usi-ama 牛-DIM 子牛
	牛		
	b. kooni	→	kooneema kooni-ama 男児-DIM ちいさな男の子
	男児		
	c. gokkar	→	gokkarama アカショウビン ⁵¹ -DIM ちいさなアカショウビン

4.1.1.1.2. 複数接尾辞

複数をあらわす接尾辞には-ta と-nki の 2 種類がある。-ta は、呼びかけに用いることができる人名詞 (Pellard 2010: 132 の‘address nouns’)、及び代名詞に付く。もうひとつの複数接尾辞である-nki は、それ以外の人名詞に付く。

これらの複数接尾辞があらわすのは、associative plural (Corbett 2000: 101-111) である。つまり、sinsi-ta (先生-PL)「先生たち」と言った際に、複数の人物を示すことになるが、少なくともそのうちの一人が先生であればよく、すべての人物が先生である必要はない。

(4-5) -ta の例

a. sinsi	→	sinsi-ta	*sinsi-nki
先生		先生-PL	
		先生たち	

⁴⁹ 黒島方言の指小辞-ama は、動詞や形容詞など、名詞以外の品詞に付くことはない。

⁵⁰ useema は、[uce:ma]と発音されることが多い。2.1.2.1.9.参照のこと。

⁵¹ アカショウビンとは、八重山諸島で多くみられる鳥。カワセミの仲間。

b. paa → paa-ta
 おばあさん おばあさん-PL
 おばあさんたち

c. uva → uva-ta
 2.SG 2-PL
 あなたたち

(4-6) -nki の例

a. maa → maa-nki *maa-ta
 孫 孫-PL
 孫たち

b. iso+pusu → iso+pusu-nki *iso+pusu-ta
 海+人 (漁師) 海+人-PL
 漁師たち

指小辞と複数接辞がともに生じた場合、以下のようになる。

(4-7) kooni → kooneema → kooneemata
 kooni kooni-ama kooni-ama-ta
 男児 男児-DIM 男児-DIM-PL
 小さい男の子たち

4.1.1.2. 接頭辞

本節においては名詞の接頭辞について述べる。接頭辞は今のところ、ara「新しい」と soo「いい」の 2 つしか見つかっていない。したがって、名詞接頭辞はかなり限られていると言えよう。以下では、4.1.1.2.1.において接頭辞 ara-について、続く 4.1.1.2.2.において接頭辞 soo-について述べる。そのうえで、4.1.1.2.3.において、ara-と soo-の 2 例しかないものの、名詞の接頭辞というカテゴリーを認める理由を述べる。

4.1.1.2.1. 接頭辞 ara-

本節においては接頭辞 ara-「新しい」について述べる。次の節で述べる soo-「いい」が前接する名詞語根がかなり限られるのに対し、この ara-は様々な名詞に前接する。

(4-8) a. puni 「船」 ara-puni 「新しい船」
 b. tuzi 「妻」 ara-tuzi 「新妻」
 c. jaa 「家」 ara-jaa 「新しい家」

4.1.1.2.2. 接頭辞 soo-

本節においては、接頭辞 soo-「いい」について述べる。この接頭辞が前接しうる名詞はかなり限られているようである。

(4-9) a. subu 「ツボ (井戸を掘るツボ)」 soo-subu 「いいツボ」
 b. usi 「牛」 soo-usi 「いい牛」
 c. jaa 「家」 ?soo-jaa 「いい家」
 d. haza 「におい」 ??soo-haza 「いいにおい」

4.1.1.2.3. 名詞接頭辞の特徴

上にも述べたとおり、名詞の接頭辞はこれら、*ara*-「新しい」と *soo*-「いい」だけである。ということは、接頭辞を設けることは不要のようにも思われる。しかし、この形式を他のカテゴリーとは別のものとして考えるのが妥当である、という理由を本節では示していく。

名詞に対する修飾をもつばら行形式としては、形容詞の語根を前部要素とする複合名詞形成と、連体詞が考えられる。しかし、これらのいずれでもない、ということを示す。

まず、形容詞語根を前部要素とする複合名詞形成とは異なる、ということを示す。形容詞の語根との複合ということは、当然であるが、前部要素を語根とした形容詞がある、ということである。しかし、**ara-ha* や **soo-ha*、もしくは **ara-ku* や **soo-ku* といった形容詞は存在しない。この点、*ara* と似たような意味を持ち、一見構造上も似ている *mii* という形式は対照的である。つまり、これを語根とする形容詞が形成されるのである。

(4-10) a. *mii*+*tusi*

mii+*tusi*
新しい+年
新年

b. *mii-ha*

新しい-ADJVZ.ABS
新しい

また、*soo*-に似た意味の形容詞語根はないが、これと対照的な意味の *jana* 「ダメな/ 嫌な」があるため、これと対照する。*jana* という語根と名詞の複合も自然談話に頻出し、*soo*-を用いた名詞と反意語のような関係にあるが、構造上は全く異なる。

(4-11) a. *jana*+*usi*

ダメな+牛
ダメな/ 嫌な牛

b. *jana-ha*

ダメだ-ADJVZ.ABS
ダメだ/ 嫌だ

このように、*ara*-と *soo*-に関してはこれらから形成される形容詞がないため、形容詞語根を前部要素とする複合名詞とは異なる構造であると考えざるを得ない。

続いて、これらの接頭辞と連体詞との違いについて述べる。連体詞の場合、「連体詞 形容詞 名詞」という語順での修飾が可能である。つまり、名詞から連体詞は統語的に独立しているのである。以下のような例である。連体詞 *unu* を例にとる。

(4-12) a. 形容詞 連体詞 名詞の順

janaha unu saki
ダメな.ABS この 酒
ダメなこの酒

b. 連体詞 形容詞 名詞の順

unu janaha saki
この ダメな.ABS 酒
このダメな酒

これに対し、本節でとりあげた *ara*-や *soo*-の場合、これらと名詞の間に形容詞がたつことは不可能である。

(4-13) a. **ara maaha saki*

新しい おいしい 酒

b. **soo maaha saki*

いい おいしい 酒

このように、*ara*-と *soo*-は、他の形式とは異なる特徴を持つ。また、これらは名詞に前接

することしかせず、他の環境に現れることはないため、名詞の接頭辞として認める。

4.1.2. 複合名詞

本節においては複合名詞について述べる。複合名詞とは、2つ以上の語根から成る名詞である。

まず、複合名詞の構造について述べる。名詞+名詞の場合、間に属格助詞が入ることなく、語根が2つ並置される。動詞+名詞の場合は、前部要素の動詞が不定形をとる。形容詞+名詞の複合の場合、前部要素は形容詞語根である。以下、それぞれ例を示す。

(4-14) 複合名詞の構造

a. 名詞+名詞

sima+basa

島+バナナ

島バナナ

b. 動詞+名詞

mar-i+sima

生まれる-INF+島

出身地

c. baha+munu

若い(語根)+もの

若者

このように、修飾部+名詞とは異なる構造をとるのが、複合名詞である。修飾部+名詞の場合、修飾部が名詞の場合は属格助詞付き名詞句が、修飾部が動詞の場合は時制接尾辞か連体接尾辞で終えるかたちが、そして、修飾部が形容詞の場合は絶対形、過去形、連体形のいずれかが用いられる。なお、後部要素に脱動詞名詞を用いる複合名詞も頻繁に聞かれる。以下のような例である。

(4-15) ni+zzar-i

根+腐る-INF

根腐れ

4.2. 代名詞

本節においては、黒島方言における代名詞について述べる。まず、4.2.1.において1人称単数代名詞について述べる。4.2.2.においては、1人称複数代名詞について述べる。4.2.3.ではその他の代名詞、4.2.4.では再帰代名詞について述べる。

4.2.1. 1人称単数代名詞

本節では、1人称単数代名詞について述べる。この代名詞は *bani*、*ba*、*baa*、*banaa*、*ban* という5つの異形態を持つ。まず、*bani* は、対格助詞と与格助詞が後接する場合に用いられる。*ba* は主格助詞が後接する場合に用いられる。*baa* も1人称単数代名詞が主格をとる際に用いられる。しかし、**baa=nu* というようにこれらが重複することはない⁵²。*banaa* は、1人

⁵² 黒島方言の最小語制約は、「名詞+助詞」にかかるのではなく、名詞のみにかかるため、

称単数代名詞が主題の場合に用いられる。そして、**ban** はそれ以外の場合に用いられる。下の表 4-1 と表 4-2 に示す。表 4-1 においては、1 人称代名詞に助詞が後接する場合を、表 4-2 においては、助詞と代名詞の分析ができず、代名詞自体が統語的、もしくは情報の機能を備えている場合を示す。なお、格助詞、とりたて助詞の詳細については 9 章を参照のこと。

表 4-1 1 人称単数代名詞（助詞が付される場合）

1 人称単数代名詞のかたち	使用される場合	例
bani	対格助詞、与格助詞が後接する場合	bani=ju
ba	主格助詞が後接	ba=nu
ban	上記以外	ban=hara

表 4-2 1 人称代名詞（助詞が付されない場合）

baa	主格、属格として用いられる
banaa	主題として用いられる

以下、それぞれの例を示す。

(4-16) **bani** の例

bani=ju=n **saar-i** **par-i**
 1.SG=ACC1=ADD 連れる-INF 行く-INF
 私も連れて行け

(4-17) **ba** の例

ba=nu **k-eer-Ø=ti** **sikas-i** **waar-i=ju**
 1.SG=NOM 来る-CONT-NPST=QUOT 伝える-INF HON-IMP=SF
 私が来たと言えてください

(4-18) **baa** の例

a. 主格の場合

baa **k-eer-Ø=ti** **sikas-i** **waar-i=ju**
 1.SG.NOM 来る-CONT-NPST=QUOT 伝える-INF HON-IMP=SF
 私が来たと言えてください

b. 属格の場合

uri=a **baa** **kin=do**
 これ=TOP 1.SG.GEN 着物=SF
 これは私の着物だよ

(4-19) **banaa** の例

banaa **mai=du** **maa-ku**
 1.SG.TOP お米=FOC おいしい-CMPR.ABS
 私はお米がおいしい

(4-20) **ban** の例

a. (写真を見ながら)

uri=a **ban**
 これ=TOP 1.SG
 これは私

***baa=nu** が非文法的であるのは最小語制約によるものではない。

b. ban=tu	mazun	num-a
1.SG=COM	一緒に	飲む-INT
私と一緒に飲もう		

今のところ、ba=nu というように他の名詞などと同じ主格助詞が現れる場合と、baa という 1 人称単数代名詞と主格が融合したかたちとの機能的な違いはわかっていない。ただし、約 60 分の談話資料のなかには一度も ba=nu というかたちは出てこなかったのに対し、baa は 3 例確認された。しかし、面接調査では、ba=nu も（もちろん baa も）文法的とされる。これらの差異については今後の課題である。

なお、banaa は ban=a のように分析することはできない。なぜなら、通常の名詞で末尾に /n/ を持つものに主題標識=a が後接した場合、n の二重子音化が起こるためである。つまり、ban に主題標識が後接したと考えるのであれば、*ban=na というかたちが想定されるのである。しかし、このようなかたちはなく、1 人称単数代名詞が主題化された場合は必ず banaa[bana: ~ bana] というかたちをとる。

(4-21) /n/ を末尾に持つ名詞に主題標識が後接する場合

in	>	in=na	/inna/	[in:a]
犬		犬=TOP		
		犬は		

(4-22) ban > *ban=na

4.2.2. 1 人称複数代名詞

本節では 1 人称複数代名詞について述べる。黒島方言の 1 人称複数代名詞には、他の琉球諸語と同じく (Shimoji and Pellard 2010 など)、除外形と包含形がある。除外形が banta で、包含形が biaha である。したがって、以下の例のような場合、包含形の biaha が用いられる。

(4-23) 1 人称複数包含形

聞き手に対して誘いかける際に

biaha	futar	mazun	par-a=ra
2.PL.INCL	2 人	一緒に	行く-INT=SF
私たち 2 人一緒に行こうね			

上と同じ文脈で、biaha を用いることはできない。#は文脈上不可であることをあらわす。

(4-24) 聞き手に対して誘いかける際に

#banta	futar	mazun	par-a=ra
2.PL.EXCL	2 人	一緒に	行く-INT=SF

これに対し、banta は除外形である。

(4-25) 1 人称複数除外形

自分より若い聞き手に向かって

mukasi	banta	jarabi	sjee	kee=a
昔	1.PL.EXCL.NOM	子ども	LV.CONT.NPST	ころ=TOP
昔、私たちが子供だったころは				

これらの代名詞は、1 点、形態的に特徴的な点があるが、それ以外は異形態は持たず、通常の名詞同様、格助詞やとりたて助詞をとる。ただ、主格と属格の場合、上に述べた 1 人称単数代名詞同様、=nu を用いることも可能であるものの、なにも付さないかたちも持ち、

こちらのほうが自然であるようである。この点、1 人称単数代名詞の場合は末尾が長音であったのに対し、1 人称複数代名詞の主格と属格はどちらも長音になることはない。

(4-26) a. 主格の例

{ banta / banta=nu } bucont-ta=waja
 1.PL.EXCL.NOM 1.PL.EXCL=NOM 踊る-PST=SF
 私たちが踊ったよ

b. 属格の例

{ biaha / biaha=nu } munu
 1.PL.INCL.GEN 1.PL.INCL=GEN もの
 私たちのもの

4.2.3. その他の代名詞

本節においては、1 人称代名詞以外の代名詞について述べる。具体的には、2 人称、3 人称の単数、複数であるが、これらは特徴を共有しているため、個別にするのではなく本節においてまとめて示すこととする。

いくつか注意すべき点があるので、述べておく。

まず、3 人称の代名詞は指示代名詞であるので、現場指示の場合、話者との距離によって用いられる形式が異なる。つまり、たとえば話者の近くにいる場合 *kuri*、遠く離れている場合は、*hari* (いずれも単数の場合) を用いる。*uri* という指示代名詞もあり、これはいわゆる中称であるが、*kuri*、*hari* の範囲までも指示できる。

(4-27) 写真を指さしながら

{ *kuri* / *uri* }=a ban
 { これ それ }=TOP 1.SG.
 これは私

次に、3 人称の代名詞は人でもそうでなくてもかわらない。たとえば、次の例文では、3 人称代名詞の 1 つである *uri* が 2 度あらわれているが、最初の *uri* (例文の語形は *uree*) は人を、最後の *uri* はものをあらわしている。

(4-28) *uree kuzu num-uta-ru saki uri*
 3.SG.NOM 去年 飲む-PST-ADN 酒 3.SG.
 彼が去年飲んだ酒はこれ

さらに、2 人称の複数は、単純に単数の代名詞に複数接尾辞 *-ta* を付せばいい (単数が *uva*、複数 *uvata*) のであるが、3 人称はこれとは異なる。3 人称は単数と複数でまったく異なる語形を用いる。近称の 3 人称単数代名詞は *kuri* であるが、複数 *kucca* である。以下、表にこれらをまとめる。

表 4-3 3 人称代名詞の単複

	単数	複数
近称	<i>kuri</i>	<i>kucca</i>
中称	<i>uri</i>	<i>ucca</i>
遠称	<i>hari</i>	<i>hacca</i>

これらの点を除けば、2・3 人称の代名詞は同じ特徴を有する。以下の表にまとめる。3 人称は中称の *uri* で代表させる。

表 4-4 2、3 人称代名詞

	2 人称単数	2 人称複数	3 人称単数	3 人称複数
主格	uvaa uva=nu	uva-taa uva-ta=nu	uree uri=nu	uccaa ucca=nu
属格	uvaa uva=nu	uva-taa uva-ta=nu	uree uri=nu	uccaa ucca=nu
そのほか	uva	uva-ta	uri	ucca

以下、例をいくつか示す。

(4-29) 2 人称単数 主格

{ uvaa / uva=nu } ha-eer-Ø munu=a
2.SG.NOM/ 2.SG=NOM 買う-CONT-NPST もの=TOP

uri ar-Ø aran-un
これ COP-NPST ではないか-NPST.DECL
あなたが買ったのはこれじゃない？

(4-30) 2 人称単数 属格

uri=a { uvaa / uva=nu } munu ar-Ø aran-un
これ=TOP 2.SG.GEN / 2.SG=GEN もの COP-NPST ではないか-NPST.DECL
これはあなたのものじゃない？

(4-31) 2 人称単数 対格

taa=du uva=ju sitak-uta=ra
誰=FOC 2.SG=ACC1 殴る-PST=Q
誰があなたを殴ったの？

(4-32) 3 人称単数 主格

ban ar-an-a { uree=du / uri=nu=du } iz-uta
1.SG. COP-NEG-INF 3.SG.NOM=FOC / 3.SG=NOM=FOC 言う-PST
私じゃなくて、彼が言った

(4-33) 3 人称単数 属格

uri=a { uree / uri=nu } munu
これ=TOP 3.SG.GEN / 3.SG=GEN もの
これは彼のもの？

(4-34) 3 人称単数 対格

taa=du uri=ju sitak-uta=ra
誰=FOC 3.SG=ACC1 殴る-PST=Q
誰が彼を殴ったの？

4.2.4. 再帰代名詞

黒島方言には2つの再帰代名詞がある。duu と una である。duu はどの人称でも使用可能であるのに対し、una は3人称でのみ使用可能である。

- (4-35) duu の例
- | | | | |
|-------------|----------|--------------|----------|
| a. banaa | duu=nu | kuruma=si=du | par-Ø |
| 1.SG.TOP | REFL=GEN | 車=INST=FOC | 行く -NPST |
| 私は自分の車で行く | | | |
| b. uvaa | duu=nu | kuruma=si=du | par-i |
| 2.SG.TOP | REFL=GEN | 車=INST=FOC | 行く -IMP |
| あなたは自分の車で駆け | | | |
| c. uri=a | duu=nu | kuruma=si=du | par-Ø |
| 3.SG=TOP | REFL=GEN | 車=INST=FOC | 行く -NPST |
| 彼は自分の車で行く | | | |
- (4-36) una の例
- | | | | |
|-----------|--------|--------------|----------|
| a. *banaa | una=nu | kuruma=si=du | par-Ø |
| 1.SG.TOP | 自分=GEN | 車=INST=FOC | 行く -NPST |
| b. *uvaa | una=nu | kuruma=si=du | par-i |
| 2.SG.TOP | 自分=GEN | 車=INST=FOC | 行く -IMP |
| c. uri=a | una=nu | kuruma=si=du | par-Ø |
| 3.SG=TOP | 自分=GEN | 車=INST=FOC | 行く -NPST |
| 彼は自分の車で行く | | | |

ただし、3人称の場合の duu と una の違いは未詳である。今後、調査を進める必要がある。

4.3. そのほかの名詞類

本節では、他の注意すべき名詞類について述べる。4.3.1.においては形式名詞について、続く 4.3.2.では疑問詞と疑問の不定代名詞について述べる。

4.3.1. 形式名詞

本節においては形式名詞について述べる。通常の名詞句の場合修飾部は任意であるが、形式名詞を主要部とする名詞句の場合は修飾部は必須である。この点において形式名詞は特徴的である。

実質的な意味を持たず、ほぼ節を名詞化するためだけに機能する形式名詞 munu などがある。以下のように使用される。

- (4-37) baa isanaki=ha par-u munu=a
 1.SG.NOM 石垣=ALL 行く -NPST FN=TOP
- bjooin=ha par-u tami=dora
 病院=ALL 行く -NPST ため=SF
 私が石垣に行くのは病院に行くためだよ
- (4-38) unu pusu=nu amerika+munui panas-u munu=a
 この 人=NOM アメリカ+ことば 話す -NPST FN=TOP
- keera bahar-i waar-u-n=do
 みんな わかる -INF HON-NPST-DECL=SF
 この人が英語を話すことはみんな知っていらっしやる

こと名詞句は *munu* ではなくて *kutu* を用いてもいい。今のところ、こと名詞句である場合、*munu* と *kutu* の意味的な違いは見つかっていない。

(4-39) *unu* *pusu=nu* *amerika+munui* *panas-u* *kutu=a*
 この 人=NOM アメリカ+ことば 話す-NPST FN=TOP

keera *bahar-i* *waar-u-n=do*
 みんな わかる-INF HON-NPST-DECL=SF
 この人が英語を話すことはみんな知っていらっしゃる

このほか、形式名詞には、*bason* 「時」、*maa* 「時、頃」*kee*⁵³ 「時、頃」、*tami* 「ため」、*hatu* 「場所」がある。また、述部専用の形式名詞もあり、それらは *pazi* 「はず」と *raasa* 「らしい」である。他の形式名詞が格助詞をとることができるのに対し、これらの *pazi* と *raasa* はそれが不可能であり、述部にのみ生起する。これらの形式については 9.4.1.1 において述べる。以下、いくつか形式名詞の例を示す。

(4-40) a. *kee* 「時、頃」の例

pan=ba *vva-i* *beer-Ø* *kee=du*
 パン=ACC2 食べる-INF CONT-NPST 時=FOC

pan=ni *pan*⁵⁴=*ba* *fu-ar-ita*
 ハブ=DAT 足=ACC2 噛む-PASS-PST
 パンを食べている時にハブに足を噛まれた

b. *maruma* *tosacuzjoo=ti* *iz-u* *hatu=na* *muti* *gitti*
 今 屠殺場=QUOT 言う-NPST 場所=LOC 持って 行って

zin=ju *pra-an-aka* *usi=n* *kuras-i=n* *siir-ar-un-un*
 お金=ACC1 払う-NEG-COND 牛=ADD 殺す-INF=ADD LV-POSS-NEG-NPST.DECL
 今、屠殺場というところに持って行ってお金を払わないと牛も殺せない

c. *saisjo=nu* *maa=na* *ucca=n* *uri=ba*
 最初=GEN 頃=LOC 3.PL=ADD それ=ACC2

num-as-i *bur-ta* *pazi=dora*
 飲む-CAUS-INF PROG-PST はず=SF
 最初の頃は彼らもそれ（井戸の水）を（牛に）飲ませていたはずよ

4.3.2. 疑問詞と疑問の不定代名詞

本節においては疑問詞と疑問の不定代名詞について述べる。まず、疑問詞について述べる。一部の名詞がそうであるように、疑問詞も副詞的に機能する。まず、表に一覧を示す。

⁵³ 時をあらわす形式名詞 *bason*、*maa*、*kee* の差異は未詳である。

⁵⁴ 「ハブ」と「足」は同音異義語である。

表 4-5 疑問詞の一覧

maa	どこ
nuu	なに
giici ⁵⁵	いくつ
nuutidu ⁵⁶	なぜ
ici	いつ
nuubasi	どう
tar	だれ
nzi	どちら

以下、疑問詞の例を示す。

(4-41) 疑問詞 maa 「どこ」の例

maa=hara=du waar-eer-Ø=ra
 どこ=ALL=FOC いらっしゃる-CONT-NPST=SF
 どこからいらっしゃいましたか

この=maa と場所格の=na、そして焦点の助詞の=du が連続した場合、=mandu [mandu] というかたちで実現することがある。

(4-42) haradaka mandu tumari bura
 harada=ka maa=na=du tumar-i bur-a
 原田=INDF どこ=LOC=FOC とまる-INF PROG-Q
 原田はどこに泊まっているの？

(4-43) 疑問詞 nuu 「なに」の例

uvaa na=a nuu=ti=du iz-u=ja
 2.SG.TOP 名前=TOP なに=QUOT=FOT 言う-NPST=SF
 あなたは名前はなんと言うの

(4-44) 疑問詞 giici 「いくつ」の例

uvaa giici=nu tuki=n=du menkjo=a tur-ta=ra
 2.SG.TOP いくつ=GEN 時=LOC=FOC 免許=TOP とる-PST=SF
 あなたいくつの時に免許はとったの

(4-45) 疑問詞 nuutidu 「なぜ」の例

nuutidu sinisi=ha nar-i waar-ta=ra
 なぜ 先生=ALL なる-INF HON-PST=SF
 なぜ先生におなりになったんですか

(4-46) 疑問詞 ici 「いつ」の例

cugi=a ici=du isanaki=ha par-a
 次=TOP いつ=FOC 石垣=ALL 行く-Q
 次はいつ石垣に行く

⁵⁵ giici 「いくつ」に関しては、giikkara 「何頭」や giisai 「何回」 gitaar 「何人」などが可能なので、さらに形態素分析が可能かもしれない。

⁵⁶ nuutidu 「なぜ」については、nuu=ti=du (なに=quot=foc) に由来するものかと考えられるが、今のところこれを形態素分析する理由は見つかっていない。

(4-47) 疑問詞 *duubasi* 「どう」の例

a. *panti=a nuubasi iso=a si-i waar-ta-n*
昔=TOP どう 漁=TOP する-INF HON-PST-DECL

昔はどうやって漁をなされたんですか？

b. *nuubasi=nu zidai=nu=du mee nkaar-i taboor-u*
どう=GEN 時代=NOM=FOC FIL 迎える-INF たまわる-NPST
どのような時代になるのか (lit. どのような時代が迎えられるのか)

(4-48) 疑問詞 *taar* 「誰」の例

unu pusu=a taar=a
この 人=TOP 誰=Q

この人は誰？

(4-49) 疑問詞 *nzi* 「どちら」の例

kis-u ki=a nzi=ja
切る-NPST 木=TOP どちら=Q

切る木はどっち？

また、疑問詞は重複することによって、複数をあらわすことができる。

(4-50) *jum-ar-i+kanzi nuu+nuu=ja*
読む-POT-INF+漢字 RED+何=Q?
読める漢字はどれどれか？

最後に、疑問の不定代名詞について述べる。疑問の不定代名詞は、基本的には疑問詞に *ara* もしくは *ra* を付したかたちである⁵⁷。現在わかっているかたちを挙げておく。

(4-51) 疑問詞 疑問の不定代名詞

<i>nuu</i> 「なに」	<i>nuara</i>	「なにか」
<i>tar</i> 「誰」	<i>taara</i> もしくは <i>tanna</i>	「誰か」
<i>maa</i> 「どこ」	<i>maara</i>	「どこか」

4.4. 名詞句

本節では、名詞句の構造について述べる。黒島方言の名詞句は以下のような基本構造を持つ。すなわち、名詞句は任意の修飾部と義務的な名詞（句）から成る。

(4-52) [(修飾部) 名詞]_{名詞句}

最小の名詞句は単一の名詞のみから成る。最小の名詞句と、修飾部付きの名詞句の例と、それを用いた例文を示す。

(4-53) 最小の名詞句

a. *simmuci* 「本」

b. [*simmuci*]_{名詞句=ju} *jum-i*
本=ACC1 読む-IMP
本を読め

⁵⁷ この疑問の不定代名詞を形成する *ara* は、疑問詞疑問文の際に用いられる助詞の *ra* と同源である可能性がある。

(4-54) 1つの修飾部がついた名詞句

a. unu simmuci

この 本 「この本」

b. [unu simmuci]_{名詞句=ju} jum-i

この 本=ACC1 読む-IMP

この本を読め

この修飾部は、連体詞、節、属格助詞付き名詞句で占められる。以下、本節では4.4.1.において連体詞が修飾部となる場合、4.4.2.では節が修飾部となる場合、4.4.3.では属格付き名詞句が修飾部となる場合に分けて示す。

4.4.1. 連体詞が修飾部を埋める場合

本節では、連体詞が修飾部を埋める場合について述べる。連体詞は、語形変化を起こすこともなく、また、助詞をとることもなく、修飾部に生起する。したがって、助詞をとるなどした場合は、非文法的となる。

(4-55) [unu]_{修飾部} kin
この 着物

(4-56) *unu=nu kin

ここで、ii「いい」が連体詞であることを示す。連体詞は、語としての独立性はあるものの被修飾部を必要とするものである。被修飾部を必要とするという点において、名詞の接頭辞と共通する点がある。しかし、両者の間には差があることを示す。連体詞ii「いい」は語としての独立性があるため、iiと被修飾名詞との間に他の語を挟むことができる。

(4-57) ii unu usi
いい この 牛
いいこの牛

これに対し、似たような意味を持つ名詞接頭辞soo-はこれが不可能である。

(4-58) *soo unu usi
いい この 牛

このような違いがあるため、ii「いい」は接頭辞とは区別されるべきである。また、この語は活用もしない。

(4-59) a. *ii-ta
b. *ii-ha-ta

このような事情から、ii「いい」は連体詞として認めるのが妥当であると判断する。

4.4.2. 連体修飾節が修飾部を埋める場合

本節では、連体修飾節が修飾部を埋める場合について述べる。後に10.2.において述べるが、黒島方言の連体修飾節は、修飾する名詞句と内の関係のもののみならず、外の関係のものも許容される。下に例を示す。

(4-60) 内の関係の連体修飾節

[kinoo	hak-uta]	連体修飾節	tigami
昨日	書く	-PST	手紙
昨日書いた手紙			

(4-61) 外の関係の連体修飾節

[kii=ju	moos-i	bur-Ø]	連体修飾節	haza
木=ACC1	燃やす	-INF	PROG-NPST	におい
木を燃やすにおい				

4.4.3. 属格助詞付き名詞句が修飾部を埋める場合

本節では、属格助詞付き名詞句が修飾部を埋める場合について述べる。名詞句が他の名詞句の修飾部を埋める場合は、属格助詞をとる。属格助詞は基本的には=nu である。

(4-62) 普通名詞

isanaki=nu	jaa
石垣=GEN	家
石垣の家	

(4-63) 人名詞

takesi=nu	jaa
たけし=GEN	家
たけしの家	

ただし、呼びかけに使える人名詞の場合にかぎり、=a という属格助詞も可能である。

(4-64) 呼びかけに使える人名詞

takesjee	jaa
takesi=a	jaa
たけし=GEN	家
たけしの家	

しかし、これは他の名詞には使用できない。

(4-65) a. 呼びかけに使えない人名詞

*iso+pusu=a	jaa
海+人=GEN	家

b. 普通名詞

*isanaki=a	jaa
------------	-----

また、属格助詞=nu が、助詞にも後接しうるのに対し、=a が呼びかけに使える人名詞以外に後接することはない。

(4-66) jamatu=hara=nu tigami

日本=ABL=GEN	手紙
日本からの手紙	

(4-67) *jamatu=hara=a tigami

日本=ABL=GEN	手紙
------------	----

今のところ、人名詞における=nu と=a の意味的差異はわかっていない。

4.5. 名詞句化による感嘆文

本節においては、形式名詞 *joo* 「様」を後部要素に、動詞を前部要素に持つ複合名詞を利用した感嘆文について述べる。以下のようなものである。

- (4-68) *kjuu=nu boor-i+joo=jara*
 今日=GEN 疲れる-INF+様=SF
 今日は大変疲れた！ (lit. 今日の疲れ様よ)

この表現が動詞文ではなく、名詞を用いた表現であることを示す⁵⁸。理由は3つある。以下、それぞれ述べる。

1つ目は、*joo* を後部要素に持つ複合名詞が感嘆文ではなく通常の名詞句として使用可能であることである。

- (4-69) 通常の名詞句の場合
- a. *ii+hak-i+joo=nu zoozi ar-an-un*
 絵+描く-INF+様=NOM 上手 COP-NEG-NPST.DECL
 絵を描くのが上手じゃない
- b. *unu pusu=nu si-i+joo=ba nara-i*
 この 人=GEN する-INF+様=ACC2 習う-IMP
 この人のやり方を習え

このように、*joo* を後部要素に持つ複合名詞は格助詞をとり、通常の名詞句として機能することが可能である。

2つ目の理由は、連体詞を挿入することが可能である、ということである。連体詞は、名詞類しか修飾することができない。

- (4-70) *kjuu=nu kunu boor-i+joo=jara*
 連体詞
 今日=GEN この 疲れる-INF+様=SF
 今日は大変疲れた！

さらに、3つ目の理由は焦点のとりたて助詞=*du* の挿入を許さない、という点である。=*du* は種々の構成素に付き、節中や文中の焦点を示す。つまり、語や句の内部には=*du* は挿入されない、ということである。この *joo* を用いた構造の内部に=*du* が挿入されることはない。

- (4-71) **kjuu=du boor-i+joo=jara*
 今日=FOC つかれる-INF+様=SF

なお、この表現は、通常の名詞文とは異なり、主題・題述構造をとることはない。つま

⁵⁸ 実は、この感嘆文は以下の例のようにコピュラをとることも不可能ではない。したがって、コピュラをとるという点もこの表現が複合名詞を利用したものであることの理由の1つになりうる。しかし、話者の方によるとコピュラをとった場合はかなり不自然であり、誤りではないものの、使用する機会はないだろう、とのことであった。そのため、ここでは注記するにとどめる。

kinoo=nu boor-i+joo=du ar-ta=ra
 昨日=GEN 疲れる-INF+様=FOC COP-PST=SF
 昨日は疲れたね (lit. 昨日の疲れ様だったね)

り、名詞句単独で文を構成するものであると言える。以上、示したように、この感嘆表現は名詞句を利用したものであると言える。このように感嘆文に名詞句を利用することは通言語的に見ても一般的である (Zevakhina 2013)。

この感嘆文を作る際の名詞化の特徴としては、他動詞の目的語まで複合する点である。

(4-72) a. もとの他動詞文

kameda=nu taku=ju tur-u
 亀田=NOM タコ=ACC1 とる-NPST
 亀田がタコをとる

b. 感嘆文

kameda=nu taku+tur-i+joo=jara
 亀田=GEN タコ+とる-INF+様=SF
 亀田がよくタコをとるねえ (lit. 亀田のタコとり様よ)

これを以下のように、対格助詞付き名詞句のままにしておくと非文法的になる。

(4-73) *kameda=nu taku=ju tur-i+joo=jara
 亀田=GEN タコ=ACC とる-INF+様=SF

以上、示してきたように、この構文は単独の名詞句を利用したものであると言える⁵⁹。

⁵⁹ この感嘆文に用いられる名詞句は、なんらかの修飾部と (joo を含む) 複合名詞から成るのがふつうのようである。たとえば (4-72b) であれば kameda=nu (亀田=GEN) が修飾部で、taku+tur-i+joo (タコ+とる-INF+様) が複合名詞である。ただし、以下のような例もあるため、必ずしも複合名詞が修飾部を伴う必要があるわけではないようでもある。

赤ん坊が上手に歩くようになって
 arak-ida-ha nar-i+joo=jara
 歩く-IDA-ADJVZ.INF なる-INF+様=SF
 歩くのが上手になったねえ

5. 動詞

本章では黒島方言の動詞について述べる。コピュラも動詞であるため、本章で取り扱う。本章の構成を述べる。まず、5.1.において動詞の基本的な構造を示す。その後、動詞の形態的な違いに基づく下位類について述べる(5.2.)。5.3.においては、コピュラと存在動詞について述べる。続いて、動詞に続く接辞について述べる(5.4.)。最後に5.5.において動詞の重複について述べる。

5.1. 動詞の基本構造

本節では、黒島方言の動詞の基本構造について述べる。黒島方言の動詞は語根と接辞の組み合わせで構成される。語根、接辞ともに拘束形態素である。動詞にまつわる接辞は今のところ、接尾辞しか見つかっていない。

接尾辞は、文中に生起するために必須である義務接尾辞と、オプショナルである任意接尾辞とに分類される。したがって、もっとも単純な構成の動詞は、語根に義務接尾辞が後接するかたちのものである。以下にその構造を示し、続いて、その例を示す。

(5-1) もっとも単純な動詞

[[語根] -義務接尾辞]動詞

(5-2) [[num] -uta]動詞
 語根 義務接尾辞
 飲む PST
 飲んだ

(5-3) [[num] -iba]動詞
 語根 義務接尾辞
 飲む CSL
 飲むから

任意接尾辞は、動詞語根と義務接尾辞の間に入るものと、義務接尾辞に後続するものの2種類がある。これを含めて動詞の基本構造を図式化すると、以下のようになる。続けて、例も示す。

(5-4) 動詞の基本構造

[[語根] (任意接尾辞) 義務接尾辞 (任意接尾辞)]動詞

(5-5) [[jum] -ar -ita -n] 動詞
 語根 任意接尾辞 義務接尾辞 任意接尾辞
 読む PASS PST DECL
 読まれた

(5-6) [[jum] -ar -ita] 動詞
 語根 任意接尾辞 義務接尾辞
 読む PASS PST
 読まれた

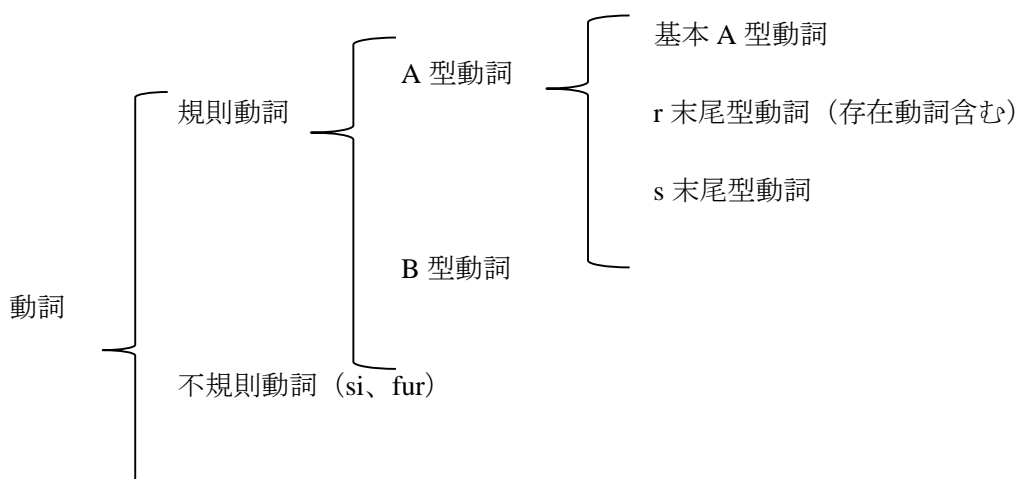
(5-7) [[jum] -uta -n] 動詞
 語根 義務接尾辞 任意接尾辞
 読む PST DECL
 読んだ

5.2. 動詞活用の種類

本節では、黒島方言動詞の活用型による分類を行う。黒島方言の動詞の活用型は、まず大きく規則動詞と不規則動詞に分けられる。不規則動詞は、*fur*「来る」と *si*「する」の2つである。規則動詞は語幹の交替がない動詞であり、不規則動詞は語幹が交替する動詞である。

規則動詞は、とる接尾辞の異形態の違いによって A 型と B 型に分けられる。A 型の下位類として、基本 A 型動詞、r 末尾型、s 末尾型の3つがある。また、r 末尾型とほぼ同じ活用を示すものの、一部例外的なふるまいを見せる存在動詞がある。このような分類を図示すると、以下の (5-8) のようになる

(5-8) 黒島方言動詞の活用型分類



以下、本節においてはそれぞれの活用型について述べていく。それぞれの活用型に対する接尾辞の異形態については代表的、かつ、他の活用型との違いがあらわれるものを示すにとどめ、本章の最後にそれぞれがとる接尾辞の異形態についてまとめる (表 5-12 と 13)。5.2.1.1.においては A 型動詞、続く 5.2.1.2.においては B 型動詞、そして、5.2.1.3.においては不規則動詞について述べる。

5.2.1. A 型動詞

本節においては A 型動詞について詳述する。A 型動詞は、基本 A 型動詞、r 末尾型動詞、s 末尾型動詞の3つの下位類に分けられる。もっとも基本になるのが基本 A 型動詞であり、それに多少のアレンジが必要なのが r 末尾型動詞と s 末尾型動詞である。以下、5.2.1.1.では基本 A 型動詞、5.2.1.2.においては r 末尾型動詞、5.2.1.3.においては s 型動詞についてそれぞれ述べる。最後に、5.2.1.4.において、A 型動詞の例外について述べる。

5.2.1.1. 基本 A 型動詞

本節においては、基本 A 型動詞について述べる。基本 A 型動詞は A 型動詞のうち、語幹末が *r*/でも *s*/でもない動詞である。表のかたちで基本 A 型動詞のとる接尾辞の異形態をいくつか示す。

表 5-1 基本 A 型動詞の語幹と接尾辞

	書く	買う		接尾辞
非過去	hak-u	ha-u		-u
過去	hak-uta	ha-uta		-uta
否定	hak-an	ha-an		-an
命令	hak-i	ha-i		-i
禁止	hak-una	ha-una		-una

上に示したかぎりにおいては、子音語幹動詞と母音語幹動詞という区別は特に問題にならない。実際、2つの例外を除いて、語幹の末尾音が子音であるか、母音であるか、ということとはとる接尾辞の異形態に関係しない。この例外については次の 5.2.1.1.1.において述べる。しかし、原則的には基本 A 型動詞であれば接尾辞が同じ異形態をとるので、本稿では語幹の末尾音が子音であれ、母音であれ、まとめて 1つの活用タイプとする。以下、いくつか、基本 A 型動詞の例を示す。

(5-9) 基本 A 型動詞語根の例

ara 「洗う」、bara 「笑う」、vva 「食べる」、
kis 「切る」、jum 「読む」、sik 「聞く」、tub 「飛ぶ」

5.2.1.1.1. 基本 A 型動詞で語幹末音が異形態に関係する場合

上で述べたとおり、原則的には基本 A 型動詞であるかぎり、それが子音語幹であろうと母音語幹であろうととる異形態に違いはない。しかし、2つ例外が存在する。それは、アスペクト接尾辞-eer-と「直前に話者が直接経験した状況の変化」をあらわす接尾辞-jassu の 2つである。これらは、子音語幹の基本 A 型動詞に後接する場合と母音語幹の基本 A 型動詞に後接する場合とでかたちが異なる。以下にそれぞれ示す。

(5-10) アスペクト接尾辞-eer-の異形態

子音語幹の基本 A 型動詞：hak-eer
母音語幹の基本 A 型動詞：ha-jaa

(5-11) 「直前に話者が直接経験した状況の変化」をあらわす接尾辞 jassu の異形態

子音語幹の基本 A 型動詞：hak-essu
母音語幹の基本 A 型動詞：ha-jassu

これらの例外はあるものの、基本 A 型動詞は、原則的に同じ異形態をとる。

5.2.1.1.2. r 末尾型動詞

本節においては、A 型動詞の 1つの下位類である r 末尾型動詞について述べる。また、5.2.1.2.1.においては、r 末尾型動詞の下位類である存在動詞について述べる。

r 末尾型動詞は、ほぼ基本 A 型動詞と同じ異形態をとる。ただし、基本 A 型動詞のとる異形態のうち、/u/を先頭に持つ異形態について、/u/を落としたかたちをとるところが特徴的である。つまり、過去の接尾辞であれば、基本 A 型動詞の場合の異形態は-uta であるが、r 末尾型動詞の場合、-ta という異形態をとるのである。ただし、非過去の接尾辞の異形態は基本 A 型動詞と同じく-u である。この非過去の接尾辞に関して、存在動詞は例外的にふるまうので、これについては後述する。以下の表 5-2 に、r 末尾型動詞のとる語幹と接尾辞の

異形態についてまとめる。

表 5-2 r 末尾型動詞の語幹と接尾辞

	踊る	接辞
非過去	budur-u	-u
過去	budur-ta	-ta
否定	budur-an	-an
命令	budur-i	-i
禁止	budur-na	-na

2.4.1.において述べたとおり、コーダの r は鼻音と交替する。特に、/n/が後続する場合はそれが顕著であり、この r 末尾型動詞の活用においてもほぼ交替すると言ってよい。ただし、常に交替するわけではなく、/r/で実現することも問題ない。

- (5-12) budur-na > /budunna/ [budun:a]
 踊る-PROH
 踊るな
 (交替せず、/budurna/ [budurna ~ budurna]でもよい)

また、2.4.5.で述べたとおり、過去の接尾辞-ta が続いた場合は逆行同化を起し、以下のよ
 うな形態音韻の交替が生じることがある。これも上記の鼻音化と同様、必須ではない。

- (5-13) budur-ta > budutta
 踊る-PST
 踊った
 (同化せず、/budurta/ [budurta ~ budurta]でもよい)

ここで、r 末尾型動詞について注意すべき現象を述べる。r 末尾型動詞は非過去で-u とい
 う異形態をとるが、この母音が脱落することがある。特に、主節末にこの動詞が生起し、
 かつ、非過去の接尾辞のあとになにもとらない場合に顕著である。

- (5-14) 主節末に生起した r 末尾型動詞の音声的変異
 budur-u [budur ~ buduru]
 踊る-NPST
 踊る

このようなことから r 末尾型動詞の非過去の接尾辞は音形のない-Ø であるのではないか、
 と考えることも可能である。しかし、あとに終止の接辞-n をとった場合、母音が生じること
 が多い、ということから、そのようには考えない。

- (5-15) r 末尾型動詞の非過去終止
 budur-u-n [budurun ~ budurn]
 踊る-NPST-DECL
 踊る

以下に r 末尾型動詞の例をいくつか示す。

- (5-16) r 末尾型動詞語根の例
 tur 「取る」、mir 「見る」、kir 「蹴る」、bur 「いる」

5.2.1.2.1. 存在動詞類

上に示したとおり、黒島方言においては存在動詞類は不規則変化は起こさず、通常の r 末尾型動詞である。しかし、例外的な現象が 2 つある。それは、以下の 2 つである。

(5-17) 存在動詞類における活用上の例外

- a. 非過去接尾辞と終止接尾辞を同時にとる場合の /ru/ の脱落
- b. 終止接尾辞をとらず、非過去接尾辞のみをとった場合の、/ru/ 脱落と長母音化

1 点目は、非過去の接尾辞と終止の接尾辞をとった場合である。このような動詞は bur 「いる」だけではなく、ar 「ある」などの存在動詞類も同様であるが、ここでは bur 「いる」を例にして説明する。

(5-18) bur 「いる」(非過去終止)
bundo [bundo]
bur-Ø-n=do
いる-NPST-DECL=SF
いるよ

これに対し、通常の r 末尾型動詞が非過去と直接の接尾辞をとる場合、budur-u-n=do となり、[budundo] のようになることはない。

(5-19) budur 「踊る」(非過去終止)
budurundo *budundo
budur-u-n=do
踊る NPST-DECL=SF
踊るよ

つまり、r 末尾動詞の末尾の r と非過去の u が落ちる現象は存在動詞以外の r 末尾動詞では起こらない。

2 点目は、1 点目と似てはいるものの、終止接尾辞をとらない場合である。この場合、以下のようなふるまいを示す。

(5-20) bur 「いる」(非過去)
buudo [bu:do]
bur-u=do
いる-NPST=SF
いるよ

つまり、/ru/ が脱落し、おそらくその代償延長として長母音化が生じるのである。これが生じるのは存在動詞類のなかでも bur 「いる」と ar 「ある」とコピュラの ar のみである。これに対し、存在動詞類以外の r 末尾型動詞においてはこのような現象は起こらない。

(5-21) budur 「踊る」(非過去)
budurudo *buduudo
budur-u=do
踊る-NPST=SF
踊るよ

これらのことを考え合わせると、存在動詞類の非過去の接尾辞は音形を持たない異形態が存在すると考えたほうがよさそうである。ただし、-u と-Ø は自由変異である。

このように、r 末尾動詞のなかでも存在動詞は一部例外的なふるまいを示すものの、それが極めて限定的であるため、r 末尾動詞の 1 つとして本稿では扱う。このようなふるまいを示す存在動詞類は、bur 「いる」、ar 「ある」、waar 「いらっしやる」、misar 「良い」、コンピュータの ar である。

この現象に加え、存在動詞 ar 「ある」は、原則的には r 末尾動詞と同一の活用をするものの、特異な現象を持つため 5.3.2.において別にまた述べる。

5.2.1.3. s 末尾型動詞

続いて本節においては、A 型動詞の下位類の 1 つである s 末尾型動詞について述べる。s 末尾型動詞は、非常に厳密に言えば、語幹が交替する。しかし、その交替が規則的であり予測可能であるため、A 型動詞の下位類として認めることにしている。その交替とは、語幹末の/s/が/h/に交替するものであるが、これは、後続する接尾辞が/a/で始まる場合に規則的に起こる。また、s 末尾型動詞は、基本 A 型動詞とも、r 末尾型動詞とも異なる接尾辞をとる。以下の表 5-3 にまとめて示す。

表 5-3 s 末尾型動詞の語幹と接尾辞

	話す		接辞
非過去	panas-u		-u
過去	panas-ita		-ita
否定	panah-an		-an
命令	panah-ai		-ai ⁶⁰
禁止	panas-ina		-ina

以下に、s 末尾型動詞の例をいくつか示しておく。

(5-22) s 末尾型動詞語根の例

nees 「煮る」、piiras 「冷やす」、moos 「燃やす」、waas 「刺す」、panas 「話す」

ただし、ここで注意が必要なのは、語幹が/s/で終わっても s 末尾型動詞と同じような交替を示したり、接辞をとったりしない動詞がある、ということである。今のところ、どのような要因でこの例外になるのか、わかっていない。仮説としては、非過去の接辞-u を付した場合に 2 モーラとなる語の場合に例外となる、というものである。例外の動詞は基本 A 型動詞と同じふるまいを見せる。以下、s 末尾型動詞の例外を表のかたちで示す。

⁶⁰ s 語幹の命令の接辞は、通常上に示したとおり -ai である。そのため、基本語幹が haras 「貸す」の場合、語幹が交替し、harah-ai 「貸せ」となるのである。しかし、2 つ例外が確認されている。それは、moos 「燃やす」と nees 「煮る」である。これらは、他の接辞に関しては通常の s 末尾型動詞と同じふるまいを見せるのであるが、命令の接辞に関してのみ、特殊である。*mooh-ai とはならず mooh-qi 「燃やせ」、*neeh-ai ではなく neeh-qi となるためである。この点に関しては、同じふるまいを見せる動詞が他にあるかどうかを含めて、なぜこのようになるのか、今後の検討が必要である。これらは、2.4.3.で示した、/h/を挟んだ母音同化と類似する現象であるため、興味深い。

表 5-4 s 末尾型動詞の例外

	切る		接辞
非過去	kis-u		-u
過去	kis-uta		-uta
否定	kis-an		-an
命令	kis-i		-i
禁止	kis-una		-una

なお、この例外は今のところ、上の kis-u 「切る」、pus-u 「干す」、pis-u 「おならをする」、kus-u 「濾す」、tas-u 「足す」の 5 つが見つかっている⁶¹。非過去の接尾辞-u を付して 2 モーラとなる語で、s で語幹が終わる語は、これらしか見つかっていない。

5.2.1.4. A 型動詞の例外

本節では、A 型動詞における例外について述べる。1 つ目は mir 「見る」で、もう 1 つは us 「押す」である。これらはどちらも例外的に語幹を 2 つ持つが、そのあり方は異なる。

5.2.1.4.1. A 型動詞の例外 mir 「見る」

本節では A 型動詞の例外のうちの 1 つである動詞 mir 「見る」について述べる。この動詞は、2 つの語幹を持つという点において例外である。通常、以下に示すとおり、mir を語幹として持ち、r 末尾型の活用を示す。

(5-23)	mir 「見る」	mir-u	見る-NPST	「見る」
		mir-ta	見る-PST	「見た」
		mir-i	見る-IMP	「見ろ」
		mir-na	見る-PROH	「見るな」

しかし、もう 1 つ、mi という語幹を持つという点において、この語は例外である。ただし、mi は規範から外れているとの意識があるようでもある。話者の方によると、「もの足りない」とのことである。

(5-24)	不定接辞添加の場合		
a.	mir-i	bur-Ø	【語幹：mir】
	見る-INF	PROG-NPST	
b.	mi-i	bur-Ø	【語幹：mi】
	見る-INF	PROG-NPST	
(5-25)	能力可能接辞添加の場合		
a.	mir-isse-ta		【語幹：mir】
	見る-ABILT-PST		
b.	mi-isse-ta		【語幹：mi】
	見る-ABILT-PST		

ただし、mi という語幹が使用される範囲はかなり限定的である。不定接尾辞と能力可能

⁶¹ us 「押す」も同じくこの例外にあたるが、これについてはさらに例外的なふるまいがあるため、のちに 5.2.1.4.2. で述べる。

接尾辞、さらに付帯状況を表す接尾辞 ittaana の場合のみ mi が許容される。このことから「見る」を意味する動詞は原則的には語根として mir を持つ r 末尾型動詞として考える。

なお、経験をあらわす助動詞の mir もあるが、この場合は mi という語幹は許容されない。

- (5-26) 経験の助動詞 mir
- | | | |
|-----------|---------------|--------------|
| si-i | mir-i (*mi-i) | waar-ta-n |
| する-INF | 経験-INF | HON-PST-DECL |
| なさったことがある | | |

5.2.1.4.2. A 型動詞の例外 us 「押す」

本節では、A 型動詞の例外のうちのもう 1 つである動詞 us 「押す」について述べる。この動詞も 2 つの語幹を持つという点において例外であるが、mir 「見る」とはそのあり方が異なる。基本的には、us 「押す」は以下に示すとおり us を語幹として持ち、基本 A 型の活用を示す。つまり、s を語幹末に持つ動詞としては例外である。

- (5-27) us 「押す」
- | | |
|--------|---------|
| us-u | 押す-NPST |
| us-uta | 押す-PST |
| us-an | 押す-NEG |

しかし、usu という語幹も同時に持つ。

- (5-28) 不定接尾辞添加の場合
- | | | |
|----------|-----------|----------|
| a. us-i | bur-u | 【語幹：us】 |
| 押す-INF | PROG-NPST | |
| b. usu-i | bur-u | 【語幹：usu】 |
| 押す-INF | PROG-NPST | |
- (5-29) 能力可能接尾辞添加の場合
- | | |
|----------------|----------|
| a. us-isse-ta | 【語幹：us】 |
| 押す-ABLIT-PST | |
| b. usu-isse-ta | 【語幹：usu】 |
| 押す-ABILT-PST | |

ただし、上の mir 「見る」同様、usu という語幹が許容される範囲は狭い。許容される範囲も mir 「見る」とまったく同じで、不定接尾辞と能力可能接尾辞、さらに付帯状況を表す接尾辞 ittaana の場合のみである。

5.2.2. B 型動詞

本節においては、B 型動詞について述べる。B 型動詞も規則動詞であり、A 型動詞同様、語幹の交替がない。ただし、A 型動詞とはとる接尾辞の異形態が異なる。次のページに B 型動詞の語幹と異形態を表のかたちで示す。

表 5-5 に示すとおり、B 型動詞のとる接尾辞の異形態は A 型動詞のとる異形態とはかなり異なる。以下に、B 型動詞の例をいくつかあげておく。

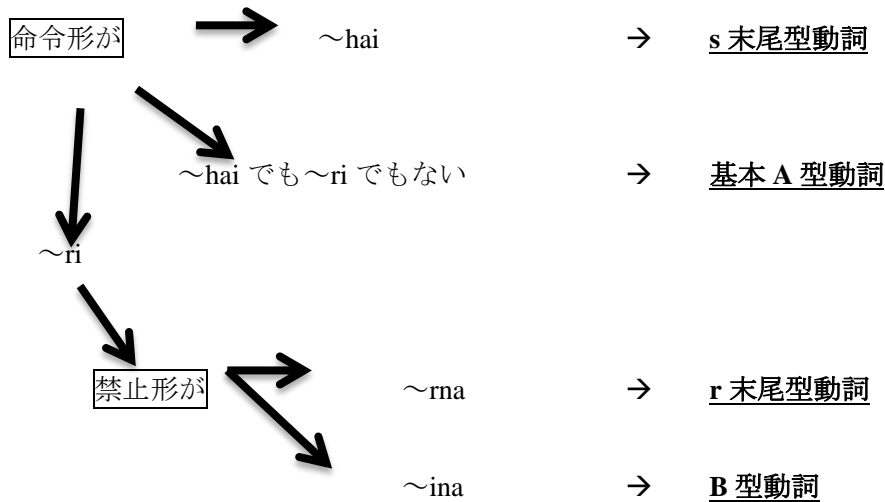
- (5-30) B 型動詞語根の例
- | | | | | | | | |
|-----|--------|----|--------|-----|--------|------|-------|
| fuk | 「起きる」、 | ut | 「落ちる」、 | par | 「晴れる」、 | bass | 「忘れる」 |
| ba | 「驚く」、 | bi | 「植える」、 | ubu | 「覚える」 | | |

表 5-5 B 型動詞の語幹と接尾辞

	出る		接尾辞
非過去	nz-iru		-iru
過去	nz-ita		-ita
否定	nz-un		-un
命令	nz-iri		-iri
禁止	nz-ina		-ina

ここまで示してきたとおり、A 型動詞、B 型動詞ともに語幹の交替は（基本的に）なく、さらに、どちらにも母音が語根末に立つものも、子音が語根末に立つものもある。つまり、語根のかたちを見るだけでは A 型なのか B 型なのか判断ができない、ということである。ということは、ある動詞がどちらの活用タイプをとるかは、覚えるか、テストで確認するしかない。活用型のテストとしては、命令形と禁止形を聞くのがはやい。以下のように確認できる。

(5-31) 動詞活用型を確認するテスト



(※r 末尾型動詞の禁止形~rna は/nna/で実現することが多い)

ちなみに、基本 A 型動詞の mir 「見る」の命令形が miri で、B 型動詞 bass 「忘れる」の命令形が bassiri なので、命令形のみではどの活用型の動詞か判断がつかない。

なお、以下に示すように、自動詞と他動詞の語根が同一のものがある。

- (5-32) a. 自動詞 kis (語根) 「切れる」
- kis-iru 切れる-NPST
 - kis-un 切れる-NEG
 - kis-ita 切れる-PST
- b. 他動詞 kis (語根) 「切る」
- kis-u 切る-NPST
 - kis-an 切る-NEG
 - kis-uta 切る-PST

このような例はこの kis の例しか今のところ見つかっていないため、これは語根を共有しているのではなく、「切れる」の語根と「切る」の語根がたまたま同音である、というように考えている。

5.2.3. 不規則動詞

本節では、黒島方言における不規則動詞について述べる⁶²。不規則動詞は 2 つある。fur「来る」と si「する」である。これらは、語幹が交替するという点において規則動詞とは異なるため、不規則動詞としている。

5.2.3.1. 不規則動詞 fur「来る」

本節においては不規則動詞 fur「来る」について述べる。まず、以下の表 5-6 にその語幹ととる接辞を示す。

表 5-6 不規則動詞 fur の語幹と接尾辞

	来る		接辞
非過去	fur-Ø、fu		-Ø
過去	fur-ta		-ta
否定	ku-un		-un
命令	k-u		-u
禁止	fur-na		-na

表に示したとおり、非常に複雑な体系を示す。語幹ごとにとる接辞をまとめると、以下のようになる。

(5-33) fur「来る」のそれぞれの語幹がとる接辞

fur : -Ø, -ka, -na, -ta
 (fur-Ø) (fur-ka) (fur-na) (fur-ta)

ku : -un
 (ku-un)

k : -u
 (k-u)

この体系において、極めて特殊なのは、命令の接辞-u である。このかたちの命令の接辞は、不規則動詞 fur の場合のみであられる（他の動詞では-i、-ai、-iri である）。

この動詞の命令形には、さらに注意すべき点がある。それは、なにも終助詞をとらない場合、実際の発話では、[ku:]のように 2 モーラで発音される、という点である。これは、最小語制約 (2.3.1.) によるものと考えられる⁶³。

また、非過去の場合に/fuu/、/fu/というかたちも許容される。特に、fu は後に終止接尾辞 -n が後接した場合に、義務的に用いられる。

⁶² なお、古典日本語の不規則動詞である「死ぬ」「ある」は、ともに黒島方言においては規則動詞である。「死ぬ」は sin、「ある」は ar であり、それぞれ基本 A 型動詞、r 末尾型動詞の存在動詞である。

⁶³ 命令形については、ku ではなく、kuu を基底にたてる考え方も可能である。しかし、終助詞=ba が後続する場合に[kuba]と実現するため、短母音を基底に立てている。これが[kuuba]と実現した例はない。ただし、これも終助詞まで含んで 2 モーラであるため、最小語制約の例外ではある。

- (5-34) maruma=hara fu-n=do (*furndo)
 今=ABL 来る.NPST-DECL=SF
 今から来るよ

また、2.4.5.で示した、形態素末に/r/がたち、かつ、次に続く音が無声破裂音であった場合の音韻規則に従って、fur-ta は/futta/となる。さらに、禁止の接尾辞-na が後接した場合は、[fun:a]となるのが普通である。

5.2.3.2. 不規則動詞 si 「する」

本節では、不規則動詞 si について述べる。まず、以下の表 5-7 にその語幹ととる接辞を示す。

表 5-7 不規則動詞 siir の語幹と接辞

	する		接辞
非過去	si-iru		-iru
過去	si-ta		-ta
否定	su-un		-un
命令	si-iri		-iri
否定命令	si-ina		-ina

表に示した通り、かなり複雑な体系である。語幹ごとにとる接辞をまとめると、以下のようになる。

- (5-35) si のそれぞれの語幹がとる接辞
- | | | | | | |
|----|---|----------|---------|----------|----------|
| si | : | -iru, | -ta, | -iri | -ina |
| | | (si-iru) | (si-ta) | (si-iri) | (si-ina) |
| su | : | -un | | | |
| | | (su-un) | | | |

このように、不規則動詞 si のとる接尾辞の異形態はかなり B 型動詞のそれと重なるが、本研究では以下の 2 つの理由でこの動詞は不規則動詞として B 型動詞とは異なるものとして取り扱う。1 つ目の理由は、語幹が交替する、という理由である。B 型動詞は語幹が交替しない。2 つ目の理由は、過去の接尾辞の異形態が異なる、という点である。si 「する」の過去は sita であり、取り出すとしたら-ta が過去の接尾辞である。これに対し、B 型動詞の過去の接尾辞の異形態は-ita であり、これらは異なる。以上の 2 つの理由により、si 「する」は不規則動詞とみなす。

5.3. コピュラと存在動詞

本節においては、コピュラと存在動詞について述べる。黒島方言においては、コピュラも動詞と同じ活用を示すため、本節で扱う。いずれも、同音の ar であり、原則的には A 型活用動詞の r 末尾型動詞であるが、いくつかそれぞれに特有のふるまいを持つ。それらについて本節では言及する。

黒島方言においては、コピュラ動詞と存在動詞は語根は ar という同音であるが、区別が

ある。どちらも非過去肯定の場合は、**aru**（もしくは **an**、**ar**）であり同音であるが、否定の場合、コピュラは **ar-an** という形態的な否定をとり、存在動詞の場合は、補充形の **naan** というかたちをとる。

- (5-36) a. コピュラ（肯定）
 ana=du ar-u-n
 穴=FOC COP-NPST-DECL
 穴である
- b. コピュラ（否定）
 ana=du ar-an-un (*naan-u-n)
 穴=FOC COP-NEG-NPST-DECL
 穴でない
- (5-37) a. 存在動詞（肯定）
 ana=du ar-u-n
 穴=FOC STATE-NPST-DECL
 穴がある
- b. 存在動詞（否定）
 ana=du naan-un (*ar-an-u-n)
 穴=FOC STATE-NEG-NPST-DECL
 穴がない

したがって、コピュラは比較的単純な **r** 末尾型動詞であるのに対し、存在動詞は補充形を含む複雑な **r** 末尾型動詞であると考ええる。以下、5.3.1.においてコピュラの活用に特徴的な点、5.3.2.において存在動詞の活用に特徴的な点を述べる。

5.3.1. コピュラ

黒島方言のコピュラは基本的には **r** 末尾型動詞の下位類と考えて問題ない。しかし、他の **r** 末尾型動詞にはない異形態を持つ。それは、前にたつ要素の語末音による異形態である。これらの異形態は、2.4.2.で示した、先頭に/a/を持つ拘束形態素の母音同化の規則に従う。ただし、コピュラ自体は拘束形態素ではなく自由形態素である。そのため、この現象は異例であると言える。詳しくは2.4.2.2.参照のこと。

- (5-38) a. jar （前接する要素の末尾が二重母音の場合）
 pai jaawaja
 pai jar-∅=waja
 灰 COP-NPST=SF
 灰だよ
- b. nar （前接する要素の末尾が **n** の場合）
 pan naawaja
 pan nar-∅=waja
 ハブ COP-NPST=SF
 ハブだよ
- c. or （前接する要素の末尾が **u** の場合）
 sinoowaja
 sinu ar-∅=waja
 角 COP-NPST=SF
 角だよ

d. er (前接する要素の末尾が i の場合)

mizewaja
mizi ar-Ø=waja
水 COP-NPST=SF
水だよ

5.3.2. 存在動詞

本節においては、存在動詞について述べる。存在動詞は否定に否定専用の形式を用いるという点が特徴的であるため、本節ではその否定の存在動詞の活用について述べる。否定の存在動詞の活用は否定の接尾辞の活用（以下の 5.4.2.2.3.）と共通する特徴を持つ。以下、現在得られている範囲の例文を示す。

(5-39) 否定の存在動詞の活用の例

a. 非過去

zitto mut-i waar-u jaa=ti naan-Ø=ti
10 頭 持つ-INF HON-NPST 家=QUOT ない-NPST=QUOT
(牛を) 10 頭持っておられる家というのはない、と

b. 非過去終止

zin=a nohor-u bun=a naan-un=do
金=TOP 残る-NPST ぶん=TOP ない-NPST.DECL=SF
お金は残る分はないよ

c. 過去（終止）

kuruma=a naan-ta(-n)
車=TOP ない-PST(-DECL)
車はなかった

d. 理由

biaha+sima=a suidoo=ju=n naan-iba
1.PL.INCL+島=TOP 水道=ACC1=ADD ない-CSL
私たちの島は水道もないので

e. 不定

gokurootin=ti=n naan-a=du
ご苦労賃=QUOT=ADD ない-INF=FOC
ご苦労賃というのもなくて

5.4. 接尾辞の種類

本節においては、接尾辞の分類と、それぞれの記述を行う。黒島方言の動詞接尾辞は、まず大きく、義務的接尾辞と任意接尾辞に分けられる。義務接尾辞は動詞が文中に生起するためにとる必要があるもので、任意接尾辞はそうではなくオプションであるものである。これらの形態的配置を示すと、以下のようになる。

(5-40) 義務接尾辞、任意接尾辞の配置

[語根 (- 任意接尾辞) - 義務接尾辞 (- 任意接尾辞)]_{動詞}

すべての動詞接尾辞を分類して示すと、以下の表のようになる。表の見やすさのため、義務接尾辞と任意接尾辞に分けて示す。任意接尾辞は、義務接尾辞に対する位置でまず、分

類される。

表 5-8 義務接尾辞の分類

義務接尾辞	統語環境が1つに限定されている義務接尾辞	主節末のみに立つ動詞の義務接尾辞	命令の接尾辞
			禁止の接尾辞
			勧誘、意志の接尾辞
			疑問詞疑問の接尾辞
		副詞節末のみに立つ動詞の義務接尾辞	中止の接尾辞 1
			中止の接尾辞 2
			条件の接尾辞
			理由の接尾辞
	統語環境が1つに限定されない義務接尾辞	主節末、副詞節末、連体修飾節末に立つ動詞の義務接尾辞	非過去の接尾辞
			過去の接尾辞
主節末と副詞節末に立つ動詞の義務接尾辞		不定の接尾辞	
		直前の接尾辞	

表 5-9 任意接尾辞の分類

任意接尾辞	義務接尾辞に後続する任意接尾辞	終止の接尾辞
		連体の接尾辞
	義務接尾辞に先立つ任意接尾辞（派生接尾辞）	使役の接尾辞
		受け身/可能の接尾辞
		否定の接尾辞
		能力可能の接尾辞
		結果継続の接尾辞
		完了の接尾辞

以下、それぞれの分類について述べる。

まず、義務接尾辞は、統語環境によって分類される。義務接尾辞のうち、統語環境が1つに限定されているものと、2つ以上の環境に生起可能なものとは大きく分類し、それぞれをさらに細分化する。統語環境が1つに限定されているものは、主節末のみに生起するものと、副詞節末のみに生起するものに分類される。そして、統語環境が1つに限定されないものは、主節末、従属節末関係なくすべての節末に生起しうるものと、主節末と副詞節末に生起するものとは分類される。これらの、2つ以上の統語的環境に立ちうる形式は、それに続く助詞で統語位置が示されるものと、活用形そのもので統語位置を示すものがあるが、この点については、それぞれの接尾辞の説明の際に述べる。

続いて、任意接尾辞について述べる。任意接尾辞は、義務接尾辞の前に来るか、後に来るかで大別される。義務接尾辞の前に来るものを派生接尾辞と呼ぶ。

以下、本節では、上記の分類に従い、それぞれの接尾辞について述べる。

5.4.1. 義務接尾辞

本節においては、義務接尾辞について述べる。義務接尾辞は、統語環境が1つに限定さ

れるものと、そうでないものとに分類される。以下、5.4.1.1.では統語環境が 1 つに限定されているものについて、続く 5.4.1.2.では統語環境が 1 つに限定されないものについて述べる。

5.4.1.1. 統語環境が 1 つに限定されている義務接尾辞

本節においては統語環境が 1 つに限定される義務接尾辞について述べる。統語環境が 1 つに限定されるものはさらに、その統語位置によって分類される。5.4.1.1.1.では主節末にのみ立つものについて、5.4.1.1.2.では副詞節末にのみ生起するものについて述べる。

5.4.1.1.1. 主節末のみに立つ動詞の義務接尾辞

主節末にのみ立つ動詞の義務接尾辞は、対人的モダリティを持つものである。命令、禁止、勧誘・意志、疑問詞疑問の 4 つの接尾辞がある。勧誘・意志の接尾辞と疑問詞疑問の接尾辞は同音である。

5.4.1.1.1.1. 命令の接尾辞

命令の接尾辞は、s 末尾型動詞以外の A 型動詞が-i、B 型動詞が-iri という異形態を持つ。

(5-40)	a. A 型の命令 (s 末尾除く)	b. s 末尾型の命令	c. B 型の命令
	ha-i	panah-ai	bass-iri
	買う-IMP	話す-IMP	忘れる-IMP
	買え	話せ	忘れろ

5.4.1.1.1.2. 禁止の接尾辞

禁止の接尾辞は、-una⁶⁴と-ina という異形態を持つ。s 末尾型を除く A 型が-una、B 型と s 末尾型が-ina である。

(5-41)	a. A 型動詞の禁止	b. s 末尾型の禁止	b. B 型動詞の禁止
	jum-una	panas-ina	ku-ina
	読む-PROH	話す-PROH	越える-PROH
	読むな	話すな	越えるな

5.4.1.1.1.3. 勧誘・意志の接尾辞

勧誘・意志の接尾辞は、A 型動詞が-a、B 型動詞が-u という異形態を持つ。

(5-42)	a. A 型動詞の勧誘・意志	b. B 型動詞の勧誘・意志
	hak-a	bi-ina
	書く-INT	酔う-INT
	書こう	酔おう

5.4.1.1.1.4. 疑問詞疑問の接尾辞

疑問詞疑問の接尾辞は、A 型が-a、B 型が-u という異形態を持つ。上の勧誘・意志と同音

⁶⁴ 1.5 で述べたとおり、-una は東筋方言である。保里方言では-unna となる。

である。なお、動詞が過去形をとった場合の疑問視疑問文には、特別な接尾辞はない。

- (5-43) a. A 型動詞の疑問詞疑問 b. B 型動詞の疑問詞疑問
- | | |
|-------|--------|
| hak-a | bi-ina |
| 書く-WH | 酔う-WH |
| 書くか | 酔うか |

5.4.1.1.2. 副詞節末のみに立つ動詞の義務接尾辞

本節においては、統語環境が 1 つに限定されている義務接尾辞のうち、副詞節末にのみ立つ義務接尾辞について述べる。これには、中止 1、中止 2、条件、理由、否定中止、付帯状況の 6 つの接尾辞が含まれる。中止 1 と中止 2 の意味上、機能上の差異は未詳である。

5.4.1.1.2.1. 中止の接尾辞 1

中止の接尾辞は、否定接尾辞に続く場合以外は-iti⁶⁵、(否定の存在動詞を含む) 否定接尾辞に続く場合は-ati と実現する。

- (5-44) a. 否定接尾辞以外 b. 否定語幹
- | | |
|---------|-------------|
| hak-iti | hak-an-ati |
| 書く-SEQ1 | 書く-NEG-SEQ1 |
| 書いて | 書かずに |

5.4.1.1.2.2. 中止の接尾辞 2

中止の接尾辞 2 も、中止の接尾辞 1 同様、否定接尾辞のあとかどうかで異形態がある。否定接尾辞以外の場合は-ituri、否定語幹の場合は-aturi である。

- (5-45) a. 否定接尾辞以外 b. 否定語幹
- | | |
|-----------|--------------|
| hak-ituri | hak-an-aturi |
| 書く-SEQ2 | 書く-NEG-SEQ2 |
| 書いて | 書かずに |

また、r 末尾型動詞の場合、-ituri と同時に-turi という異形態もあり、この場合、/r/と無声破裂音が連続するため、2.4.5.で述べた同化が生じる。

- (5-46) r 末尾語幹動詞が中止の接尾辞 2 をとる場合
- | | |
|-------------|------------|
| a. -ituri | b. -turi |
| | budutturi |
| budur-ituri | budur-turi |
| 踊る-SEQ2 | 踊る-SEQ2 |
| 踊って | 踊って |

5.4.1.1.2.3. 条件の接尾辞

条件の接尾辞は、r 末尾型動詞の場合-ka、それ以外の A 型動詞は-uka、B 型動詞は-ika、否定語幹については-aka という異形態を持つ。なお、r 末尾型動詞の場合は、r と無声破裂

⁶⁵ 現代標準日本語とは異なり、この-iti「～て」が助動詞構文などに生起することはない。助動詞構文の前部要素には不定の接辞-i が用いられる。

音の連続であるのでどうかを起こす (2.4.5.参照)。

- (5-47) a. r 末尾型動詞 b. r 末尾型以外の A 型
- | | |
|---------|---------|
| pakka | |
| par-ka | sik-uka |
| 行く-COND | 聞く-COND |
| 行くと | 聞くと |
-
- | | |
|----------|-------------|
| c. B 型動詞 | d. 否定語幹 |
| nz-ika | par-an-aka |
| 出る-COND | 行く-NEG-COND |
| 出ると | 行かないと |

5.4.1.1.2.4. 理由の接尾辞

理由の接尾辞は、否定語幹と A 型動詞は-iba、B 型動詞の場合は-iriba をとる。

- (5-48) a. A 型動詞 b. 否定語幹 c. B 型動詞
- | | | |
|---------|------------|------------|
| num-iba | num-an-iba | bass-iriba |
| 飲む-CSL | 飲む-NEG-CSL | 忘れる-CSL |
| 飲むので | 飲まないので | 忘れるので |

5.4.1.1.2.5. 否定中止の接尾辞

否定中止の接尾辞は、A 型動詞の場合は-ansukun、B 型動詞の場合は-unsukun をとる。

- (5-49) a. A 型動詞 b. B 型動詞
- | | |
|--------------|--------------|
| bara-ansukun | bass-unsukun |
| 笑う-NEGSEQ | 忘れる-NEGSEQ |
| 笑わずに | 忘れずに |

5.4.1.1.2.6. 付帯状況の接尾辞

付帯状況の接尾辞は、A 型、B 型問わず-ittaana である。

- (5-50) a. A 型動詞 b. B 型動詞
- | | |
|-------------|------------|
| jum-ittaana | nz-ittaana |
| 読む-SIML | 出る-SIML |
| 読みながら | 出ながら |

5.4.1.2. 統語環境が 1 つに限定されない義務接尾辞

本節では、義務接尾辞のうち、統語環境が 1 つに限定されないものについて述べる。これは、大きく、主節末、副詞節末、連体修飾節末のすべてに立ちうるもの (5.4.1.2.1.) と、主節末と副詞節末にのみ立つ (つまり、連体修飾節末には立ちえない) もの (5.4.1.2.2.) に分類される。以下、それぞれ述べる。

5.4.1.2.1. 主節末、副詞節末、連体修飾節末に立つ動詞の義務接尾辞

本節では統語環境が 1 つに限定されない義務接尾辞で、統語的に制限を受けず、主節末、

副詞節末、連体修飾節末のいずれにも生起しうるものについて述べる。この類に含まれるのは過去と非過去の時制接尾辞である。これらの接尾辞を末尾に持つ動詞は、どの節にも生起するのであるが、その条件には差異がある。主節末と連体修飾節末には助詞をとらずに生起するものの、副詞節末には動詞のあとに接続助詞を付さなければ生起できない。仮に、接続助詞を付さずに時制接尾辞で節を終えると、副詞節ではなく主節末と判断される。

(5-51) a. 主節末に生起する過去接尾辞を末尾に持つ動詞

saki=ju num-uta
酒=ACC1 飲む-PST
酒を飲んだ

b. 連体修飾節末に生起する過去接尾辞を末尾に持つ動詞

kinoo num-uta saki
昨日 飲む-PST 酒
昨日飲んだ酒

c. 副詞節末に立つ場合

saki=ju num-uta=junti
酒=ACC1 飲む-PST=CSL
酒を飲んだので

したがって、すべての節に生起しうるとはいえ、主節ならびに連体修飾節に生起する場合と、副詞節に生起する場合とでは性質が異なると言える。以下、それぞれ述べる。

5.4.1.2.1.1. 非過去の接尾辞

非過去の接尾辞は、存在動詞を除く A 型動詞では -u、存在動詞は -u もしくは音形なしの -∅、そして、B 型動詞では -iru をとる。存在動詞の例は -∅ のみをあげる。

(5-52) a. (存在動詞以外の) A 型動詞 b. 存在動詞 c. B 型動詞

sitak-u	bur-∅	ki-iru
たたく -NPST	いる -NPST	消える -NPST
たたく	いる	消える

5.4.1.2.1.2. 過去の接尾辞

過去の接尾辞は、基本 A 型動詞の場合は -uta、r 末尾型動詞は -ta、s 末尾型と B 型動詞は -ita をとる。

(5-53) a. 基本 A 型 b. r 末尾型 c. s 末尾型 d. B 型

hak-uta	budur-ta	panas-ita	bass-ita
書く -PST	踊る -PST	話す -PST	忘れる -PST
書いた	踊った	話した	忘れた

5.4.1.2.2. 主節末と副詞節末に立つ動詞の義務接尾辞

本節においては、義務接尾辞で主節末と副詞節末に生起しうるものについて述べる。ここには、不定の接尾辞と直前の接尾辞が含まれる。しかし、これらも、うえで述べた時制接尾辞の生起しうる節と助詞の関係と同様、助詞の必要性の有無で、性質が異なる。不定の接尾辞は主節末、副詞節末ともに、助詞なしで生起しうる（そのため、かたちからはどちらなのかかわからない場合があり、その場合は文脈から判断するしかない）。これに対し、

直前の接尾辞の場合、時制接尾辞と同様、接続助詞を付さない限り、主節末と判断される。

(5-54) kisaa tigami=ba hak-i
 さっき 手紙=ACC2 書く-INF
 さっき手紙を {書いた/ 書いて}

(5-55) maruma tigami=ju hak-essu
 今 手紙=ACC1 書く-直前
 今、手紙を書いた (副詞節末と判断されることはない)

以下、本節では、それぞれの接尾辞について述べる。

5.4.1.2.2.1. 不定の接尾辞

不定の接尾辞は、否定語幹を除いて、すべて-i というかたちをとる。否定語幹に関しては、-a という異形態をとる。

(5-56)	a. A 型動詞	b. B 型動詞	c. 否定語幹
	ara-i	ut-i	ara-an-a
	洗う-INF	落ちる-INF	洗う-NEG-INF
	洗って	落ちて	洗わずに

不定形は、時間の指定がなされておらず、以下の例のように多義的である。

(5-57) fuk-i=raasa
 起きる-INF=らしい
 {起きたらしい / 起きるらしい}

このほか、不定の接尾辞は、副詞節末、助動詞構文の前部要素、複合語の前部要素にもなる。

(5-58) a. 副詞節
 tigami=ju hak-i, saa=ju num-i,
 手紙=ACC1 書く-INF お茶=ACC1 飲む-INF
 手紙を書いて、お茶を飲んで、

b. 助動詞構文
 hak-i bur-ta
 書く-INF PROG-PST
 書いていた

c. 複合語の前部要素
 hak-i+munu
 書く-INF+もの
 書きもの

なお、否定動詞の不定形に関しては、副詞節末にのみ立ち、主節末、助動詞構文と複合語の前部要素には立ちえない。

(5-59) aja munu=nu=du naan-a nar-i
 ああいう もの=NOM=FOC ない-INF なる-INF
 ああいうものがなくなって

5.4.1.2.2.2. 直前の接尾辞

直前の接尾辞は、他の接尾辞とは異なり、語幹末音の子音/母音の別が異形態にかかわる。A型動詞で語幹末が子音の場合-essu、A型動詞で語幹末が母音の場合-jassu、B型動詞の場合-ijassuをとる。

(5-60)	a. 語幹末が子音の A 型	b. 語幹末が母音の A 型	c. B 型
	tub-essu	vva-jassu	ki-ijassu
	飛ぶ-直前	食べる-直前	消える-直前
	飛んだ	食べた	消えた

上にも示したとおり、直前の接尾辞が副詞節末に立つ場合、接続助詞が必要である。さらに、直前の接尾辞がとりうる接続助詞は逆接の=nuのみであり、理由の=juntiは接続しない。

(5-61)	a. maruma	vva-jassu=nu
	今	食べる-直前=ADVRS
	今、食べたけど	
	b. *maruma	vva-jassu=junti
	今	食べる-直前=CSL

5.4.2. 任意接尾辞

本節では、任意接尾辞について述べる。任意接尾辞は、義務接尾辞との位置関係によって分類される。これらは、性質が異なるものである。まず、義務接尾辞の後に来るものは、統語位置を定める機能を持つ接尾辞である。これに対し、義務接尾辞の前に来るものは動詞の意味に変更を加えるものである。これらを派生接尾辞と呼ぶ。以下、義務接尾辞に後続する任意接尾辞について 5.4.2.1. で、義務接尾辞の前に来る任意接尾辞（派生接尾辞）については 5.4.2.2. において述べる。

5.4.2.1. 義務接尾辞に後続する任意接尾辞

本節においては、義務接尾辞に後接する任意接尾辞について述べる。これらの接尾辞は、統語位置を示すものであるが、これらがなくともそれぞれの位置に動詞が生起しうするため、任意の接尾辞とみなしている。

5.4.2.1.1. 終止の接尾辞

終止の接尾辞は、過去、非過去どちらの時制接尾辞にも後接する。

(5-62)	a. 非過去	b. 過去
	jum-u-n	jum-uta-n
	読む-NPST-DECL	読む-PST-DECL
	読む	読んだ

また、非過去の否定接尾辞の場合は-un という異形態をとる。過去の否定接尾辞の場合は-n である。

- (5-63) a. 非過去否定 b. 過去否定
 jum-an-un jum-an-ta-n
 読む-NEG-NPST-DECL 読む-NEG-PST-DECL
 読まない 読まなかった

この接尾辞をとった動詞は、副詞節末、連体修飾節末には生起しえず主節末にのみ立つ。

- (5-64) a. 主節末
 kjuu=a simbun jum-uta-n
 今日=TOP 新聞 読む-PST-DECL
 今日は新聞読んだ
- b. 副詞節末
 *simbun jum-uta-n=junti
 新聞 読む-PST-DECL=CSL
- c. 連体修飾節末
 *jum-uta-n simbun
 読む-PST-DECL 新聞

5.4.2.1.2. 連体の接尾辞

本節では、連体の接尾辞について述べる。この接尾辞は過去の接尾辞にのみ後接する。それ以外の接尾辞には続かない。つまり、非過去の接辞にも続くことはない。このことは動詞における連体修飾接辞-ru の特徴である。なぜなら、形容詞の場合、過去であれ非過去であれ、連体の接尾辞が接続しうるためである。この点についてはまた 6 章で述べる。

- (5-65) a. 過去
 hak-uta-ru tigami
 書く-PST-ADN 手紙
 書いた手紙
- b. 非過去
 *hak-u-ru tigami
 書く-NPST-ADN 手紙

この接尾辞をとった動詞連体形は連体修飾節末にのみ立ち、主節末、副詞節末には立ちえない。

- (5-66) a. 連体修飾節末
 kinoo num-uta-ru saki
 昨日 飲んだ-PST-ADN 酒
 昨日飲んだ酒
- b. 主節末
 *kinoo saki num-uta-ru
 昨日 酒 飲む-PST-ADN
- c. 副詞節末
 *kinoo saki num-uta-ru=junti
 昨日 酒 飲む-PST-ADN=CSL

5.4.2.2. 義務接尾辞に先立つ任意接尾辞（派生接尾辞）

本節においては派生接尾辞について述べる。派生接辞には、使役、受け身/可能、能力可能、否定、結果継続、完了の 6 つがある。これらの間には承接の制限がかなりある。図示すると、以下ようになる。つまり、派生アスペクトの接尾辞は他の派生接尾辞と共起しない。能力可能の接尾辞は否定接尾辞とのみ共起する。使役と受け身/可能の接尾辞は以下の図の順で生起し、否定接尾辞と共起する。なお、派生接辞は語幹拡張接辞であり、なんらかの義務接辞をとらない限り、当該の動詞は文中には生起しえない。続けて、派生接尾辞をとった動詞の例も示す。

語根	使役	受け身/可能	否定	義務接尾辞
	能力可能			
	派生アスペクト (結果継続、完了)			

図 5-1 派生接尾辞の承接関係

(5-67) 派生接辞を複数とる例

- a. sik -ah -an -ta
 語根 派生接辞 派生接辞 義務接辞
 聞く CAUS NEG PST
 聞かせなかった
- b. sik -ar -un -ta
 語根 派生接辞 派生接辞 義務接辞
 聞く PASS NEG PST
 聞かれなかった
- c. sik -ah -ar -un -ta
 語根 派生接辞 派生接辞 派生接辞 義務接辞
 聞く CAUS PASS NEG PST
 聞かせられなかった
- d. u -iss -an -ta
 語根 派生接辞 派生接辞 義務接辞
 泳ぐ ABILT NEG PST
 泳げなかった

以下、本節では、5.4.2.2.1.において使役の接辞について、5.4.2.2.2.において受け身/可能の接辞について、5.4.2.2.3.において否定の接辞についてそれぞれ述べる。また、受け身/可能の接辞と同じスロットに入りうる能力可能の接辞があるが、この接辞は、前に使役の接辞をとることはできない。この接辞については、5.4.2.2.4.において述べる。5.4.2.2.5.と 5.4.2.2.6.では、それぞれ結果継続と完了のアスペクト接辞について述べる。

5.4.2.2.1. 使役の接尾辞

本節では、使役の接辞について述べる。黒島方言における使役の接辞は、-as-で代表される。まず、例を示す。なお、使役の統語的操作については 10.1.1.2.3.を参照のこと。

(5-68) a. 非使役

par-ta
行く -PST
行った

b. 使役

par-as-ita
行く -CAUS-PST
行かせた

この接辞は、-as-のほかに、-im-、-isas-、-ah-という異形態を持つ。まず、ペアとなる自動詞がある他動詞で、それが他動詞化接辞-as-が付加されて形成されたものと思われる動詞にさらに使役の接辞が付く場合、-as-ではなく、-im-が用いられる。そして、それ以外の B 型の活用を示す動詞の場合に-isas-という異形態をとる。この選択を簡単に示すと以下のようになる。

(5-69) 使役の接辞の異形態の選択

ペアとなる自動詞があり、かつ、
他動詞化接辞-as-がついた動詞

yes → -im-

no



B 型の活用を示す動詞

yes → -isas-

no



-as-

この-im-という異形態が用いられるのは、おそらく、他動詞化接辞-as-と使役接辞-as-が同じ語源を持つためであると思われる⁶⁶。そのため、その接尾辞を2回使うことを避けるのである。しかし、実際、現在の黒島方言においては、他動詞化接辞としての-as-はもはや生産的とは言えず、かなり語彙化が進んでいる。したがって、上述したように、他動詞化接辞-as-を含んでいる、と語源的に考えられる動詞の場合、-im-という異形態をとる、ということとなる。以下、-im-の例と-ah-の例をそれぞれ示す。

(5-70) 使役の接辞の異形態-im

a. 非使役

fukas-u⁶⁷
沸かす -NPST
沸かす

b. 使役

fukas-im-u
沸かす -CAUS-NPST
沸かさせる

⁶⁶ 北琉球語についての論考であるが、他動詞化接辞と使役接辞が同源であるものと考えられる、という研究は當山 (2012) に見られる。

⁶⁷ この fukas 「沸かす」という例は、fuk 「沸く」という自動詞のペアを持つ。この例は、自動詞のかたちには as がそのままついている例であり、分析が容易であるが、-im-をとる動詞がすべてこのようにはっきりとした自動詞のペアを持っているわけではない。

(5-71) 使役の接尾辞の異形態-*isas*⁶⁸-

a. 非使役

ubu-iru

覚える-NPST

覚えた

b. 使役

ubu-isas-u

覚える-CAUS-NPST

覚えさせた

-*as*-の活用は *s* 末尾型動詞と同じである。したがって、-*ah*-という異形態もある。

(5-72) 使役の接辞の異形態-*ah*-

a. *par-ah-an-ta*

行く-CAUS-NEG-PST

行かせなかった

b. *par-ah-ar-ita*

行く-CAUS-PASS-PST

行かされた

-*im*-と-*isas*-は *s* 末尾型動詞と同様の活用を示すため、-*ita* という過去の異形態をとる。

(5-73) a. *fukas-im-ita*

沸かす-CAUS-PST

沸かさせた

b. *ubu-isas-ita*

覚える-CAUS-PST

覚えさせた

この接辞の意味としては、いわゆる使役をあらわし、使役者の項が1つ増える。つまり、非使役文から使役文を作る場合、形態的には接尾辞-*as*-を添加するという操作を行い、統語的には、与格 *ni* (もしくは *n*) を付した助詞付き名詞句を1つ増やす、という操作を行う。

(5-74) a. 非使役文

juu=ju fukas-ita

お湯=ACC1 沸かす-PST

お湯を沸かした

b. 使役文

pusu=n=du juu=ju fukas-im-ita

人=DAT=FOC お湯=ACC1 沸かす-CAUS-PST

人にお湯を沸かさせた

ここで、動詞 *si* 「する」の使役について述べておく。動詞 *si* 「する」の場合は、使役の接尾辞が後接するのではなく、補充法が用いられ、語幹が交替し、*sim* というかたちが用いられる。5.2.3.2.で述べたとおり、動詞 *si* はかなり語幹の交替が激しい。

⁶⁸ この使役の接尾辞の異形態-*isas*-は、たとえば *ubu-isas-ita* 「覚えさせた」のような場合は、[*ubuisacita*]のように実現する。しかし、[*ubuisacita*]のように、/s/が長子音化する変異も認められる。今のところ、これらは自由変異であると考えている。

(5-75) a. 非使役「する」

sjukudai=ju si-ta
宿題=ACC1 する-PST
宿題をした

b. 使役「する」(させる)

maa=ni sjukudai=ju sim-ita
孫=DAT 宿題=ACC1 させる-PST
孫に宿題をさせた

使役の接尾辞には、許容をあらわすと考えられる用法がある。以下のような例である。

(5-76) fusan=ti iz-ituri duu=si ha-i=ti ha-as-ita=waja
ほしい=QUOT 言う-SEQ2 REFL=INST 買う-IMP=QUOT 買う-CAUS-PST=SF
ほしいと言うから自分で買えと(言って)買わせた。

5.4.2.2.2. 受け身/可能の接尾辞

本節では、受け身/可能の接尾辞について述べる。受け身/可能の接尾辞は-ar-である。この接尾辞は多義的である。具体的には、受け身、可能、自発をあらわす。以下、5.4.2.2.2.1.では受け身、5.4.2.2.2.2.では可能、5.4.2.2.2.3.では自発の、それぞれの用法について述べる。なお、受け身等の統語的操作については10.1.1.2.1.と10.1.1.2.2.を参照のこと。

用法の説明に入る前に、この接尾辞の異形態について述べておく。この接尾辞には-ar-と-irar-という2つの異形態がある。それぞれ、-ar-はA型活用動詞の場合の、-irar-はB型活用動詞の場合の異形態である。

(5-77) a. A型活用動詞に後接する異形態

par-ar-un-un
行く-POT-NEG-NPST.DECL
行かない

b. B型活用動詞に後接する異形態

bass-irar-un-un
忘れる-POT-NEG-NPST.DECL
忘れられない

この接尾辞-ar-、-irar-自体はB型の活用をとる。

(5-78) a. pararirun

par-ar-iru-n
行く-POT-NPST-DECL
行くことができる

b. mirarita

mir-ar-ita
見る-PASS-PST
見られた

c. jaanatankaja

ja=na=tanka=a beerarunun
家=LOC=だけ=TOP いる.CONT-POT-NEG-NPST.DECL
家にばかりはいられない

5.4.2.2.2.1. 受け身の用法

本節では、受け身/可能の接辞の受け身の用法について述べる。まず、例を示す。

(5-79) a. 非受け身

sik-uta
聞く -PST
聞いた

b. 受け身

sik-ar-ita
聞く -PASS-PST
聞かれた

この用法の意味としてはいわゆる受け身をあらわす。形態的には、他動詞語根に接辞-ar-（もしくは-irar-。以下、異形態については省略する）を付し、統語的には、非受け身文の主語の項を与格にし、目的語の項を主語にする。のちに10章で述べるが、黒島方言においては、この受け身の用法でこの接尾辞を付しうるのは、他動詞のみである。

(5-80) a. 非受け身文

hari=nu=du bani=ju kir-ta
彼=NOM=FOC 1.SG=ACC1 蹴る -PST
彼が私を蹴った

b. 受け身文

banaa hari=n=du kir-ar-ita
1.TOP 彼=DAT=FOC 蹴る -PASS-PST
私は彼に蹴られた

なお、現代標準日本語のいわゆる迷惑の受け身は黒島方言のこの接辞ではあらわすことができない。つまり、黒島方言で受け身の意味で、この接尾辞をとることができるのは他動詞のみである。

(5-81) *ami=ni vv-ar-ita
雨=DAT 降る -PASS-PST
雨に降られた

5.4.2.2.2.2. 可能の用法

本節では、受け身/可能の接辞-ar-の可能の用法について述べる。まず、以下に例を示す。

(5-82) a. 非可能

si-ta
する -PST
した

b. 可能

siir-ar-ita
する -POT-PST
できた

この用法は、いわゆる可能をあらわすが、主に、状況可能をあらわす場合に用いられるようである。能力可能をあらわす接辞に関しては、5.4.2.2.4.において述べる。

(5-83) 状況可能の例

- a. unu izu=a duku=nu naan-iba va-ar-iru
この 魚=TOP 毒=NOM STATE.NEG-CSL 食べる-POT-NPST
この魚は毒がないから、食べられる
- b. kjuu=a ami=nu par-iriba pataki=ha par-ar-iru-n
今日=TOP 雨=NOM 晴れる-CSL 畑=ALL 行く-POT-NPST-DECL
今日は雨が上がったので畑へ行ける

(5-84) 状況不可能の例

- a. unu izu=a duku=nu ar-iba va-ar-un-un
この 魚=TOP 毒=NOM ある-CSL 食べる-POT-NEG-NPST.DECL
この魚は毒があるから、食べられない
- b. kjuu=a ami=nu vv-i bu-riba
今日=TOP 雨=NOM 降る-INF PROG-CSL
- pataki=ha par-ar-un-u-n
畑=ALL 行く-POT-NEG-NPST.DECL
今日は雨が降っているので畑へ行けない

のちに 5.4.2.2.4. で述べる能力可能の接辞-iss-が能力可能に厳密に限定されているのに対し、この受け身/可能の接辞-ar-の可能の用法は、状況可能が基本であるものの、能力可能と解釈しうる文脈でも使用可能のようである。

(5-85) 能力(不)可能とも状況(不)可能ともとれる例

- a. pusu=a tub-ar-un-Ø
人=TOP 飛ぶ-POT-NEG-NPST
人は飛ぶことができない
- b. unu pusu=a saki=ju num-ar-iru-n=do
この 人=TOP 酒=ACC1 飲む-POT-NPST-DECL=SF
この人は酒を飲めるよ

5.4.2.2.2.3. 自発の用法

本節では、受け身/可能の接尾辞-ar-の自発の用法について述べる。まず、例を示す。

(5-86) a. 非自発

umu-uta
思う-PST
思った

b. 自発

umu-ar-ita⁶⁹
思う-SPNT-PST
思われた

意味としては、自分の意志や意図と関係なく(時には反して)、そのような行動をとる、といういわゆる自発をあらわす。なお、現代標準日本語においては、自発の接辞をとれるの

⁶⁹ この接辞-ar-は/a/を先頭に持つ接辞であるため、その形態音韻規則に従う。そのため、umu-ar-ita は、/umoorita/ [umo:rita] と実現する。

は思考動詞や感情動詞に限られる(渋谷 2002)が、黒島方言においてはその限りではない。

- (5-87) atenaana⁷⁰ num-ar-i naan-Ø
 知らないうちに 飲む-SPNT-INF COMP-NPST
 知らないうちに飲んでしまった

上に示した例のように、意に反した行動については、話者の期待に反する事態が生じたこと意味する助動詞 *naan* を伴うのが自然であるが、これは任意である。

5.4.2.2.3. 否定の接尾辞

本節では、否定の接尾辞について述べる。まず、例を示す。

- (5-88) a. 非否定文
 samba=n waar-ta
 産婆=ADD いらっしゃる-PST
 産婆もいらっしゃった
 b. 否定文
 samba=n waar-an-ta
 産婆=ADD いらっしゃる-NEG-PST
 産婆もいらっしゃらなかった

この否定の接尾辞は、-an-と-un-という異形態を持つ。A型動詞には-an-、B型動詞には-un-が用いられる。

- (5-89) a. 異形態-an-の例
 sik-an-ta
 聞く-NEG-PST
 聞かなかった
 b. 異形態-un-の例
 nz-un-ta
 出る-NEG-PST
 出なかった

コンピュータを含む、一般の動詞すべてにこの否定の接尾辞は後接しうるが、存在動詞はその例外である。存在動詞を否定する際には、補充形である、*naan* という否定存在専用の動詞を用いる。

- (5-90) 存在動詞の肯否
 a. ar-Ø
 ある-NPST
 ある
 b. ar-ta
 ある-PST
 あった

⁷⁰ この *atenaana* は *ati=a naan-a* 「意図=TOP STATE.NEG-INF」(直訳すると「意図はなく」というように分析が可能かもしれないが、今のところ確認できていない。

c. naan-Ø

ない-NPST

ない

d. naan-ta

ない-PST

なかった

否定の接尾辞の活用は、特殊である。否定の存在動詞も同じ活用を示す。

(5-91) a. 不定 -a

kjuu=a par-u-n=ti umu-uta=nu par-an-a jam-ita
 今日=TOP 行く-NPST-DECL=QUOT 思う-NPST=ADVRS 行く-NEG-INF やめる-PST
 今日は走ると思ったけど、走らず、やめた

b. 条件-akka

jum-an-akka sun siir-u-n=do
 読む-NEG-COND 損 する-NPST-DECL=SF
 読まないと損するよ

c. 過去 -ta

kjuu=a simbun jum-an-ta-n
 今日=TOP 新聞 読む-NEG-PST-DECL
 今日は新聞読まなかった

また、この否定の接尾辞の活用は従属節末と主節末で異なるようである。従属節末では bur-an-u というようなかたちをとることができる (5-92)ものの、主節末ではこのかたちをとることはできない。

(5-92) maruma bur-an-u nna
 今 いる-NEG-NPST お姉さん
 今いないお姉さん

(5-93) *maruma nna=nu=du bur-an-u
 今 お姉さん=NOM=FOC いる-NEG-NPST

このような場合、以下のようなかたちになる。

(5-94) maruma nna=nu=du bur-an
 今 お姉さん=NOM=FOC いる-NEG.NPST
 今、お姉さんがいない

また、過去の場合は以下のようになる。

(5-95) bur-an-ta nna
 いる-NEG-PST お姉さん
 いなかったお姉さん

(5-96) nna=nu=du bur-an-ta
 お姉さん=NOM=FOC いる-NEG-PST
 お姉さんがいなかった

このようなことから、主節末と従属節末で（非過去に限って）否定の接尾辞の担う機能が異なる、ということになる。

5.4.2.2.4. 能力可能の接尾辞

能力可能の接尾辞-iss-は、そもそも短母音として珍しい/e/が接頭辞の先頭に立つなど、特殊な活用を見せる。以下に例を示す。

- (5-97) a. 非過去
 hak-iss-en
 書く-ABILT-NPST
 書ける
- b. 過去
 hak-iss-eta
 書く-ABILT-PST
 書けた
- c. 連体
 u-iss-e pusu
 泳ぐ-ABILT-ADN 人
 泳げる人
- d. 理由
 budur-iss-eriba
 踊る-abilt-csl
 踊れるから

この能力可能の接尾辞は動詞語根による異形態はない。すべての動詞に-iss-というかたちで後接する。

- (5-98) a. A 型 jum-iss-en
 読む-ABILT-NPST
- b. B 型 bass-iss-en
 忘れる-ABILT-NPST

ただし、肯定の場合に顕著に口蓋化した変異が聞かれる。これは自由変異である。

- (5-99) uissen [uis:en ~ uie:en]
 u-iss-e-n
 泳ぐ-能力可能-肯定-decl
 泳げる

うえで述べた受け身/可能の接尾辞が可能の用法で主に状況可能をあらわしつつも、能力可能ともとれる例でも使用可能であったのに対し、この-iss-は能力可能に明確に限定されている。

- (5-100) maa=ja sina-ha-ti unu hon=a jum-iss-an
 孫=TOP 幼い-ADJVZ-SEQ この 本=TOP 読む-ABILT-NEG.NPST
 孫は小さくて、この本は読むことができない

- (5-101) unu ffa=a sina-ha=nu=du
 この 子ども=TOP 幼い-ADJVZ.ABS=ADVRS=FOC

- zii=a hak-iss-en
 字=TOP 書く-ABLIT-NPST
 この子供は幼いけれど、字は書くことができる

- (5-102) unu hon=a jar-i jum-ar-un-Ø
 この 本=TOP 破れる-INF 読む-POT-NEG-NPST
 この本は破れていて、読むことができない
- (5-103) *unu hon=a jar-i jum-iss-an-Ø
 この 本=TOP 破れる-INF 読む-ABILT-NEG-NPST
 この本は破れていて、読むことができない
- (5-104) uri=a zzar-i va-ar-un-u-n (*va-iss-an-u-n)
 これ=TOP 腐る-INF 食べる-POT-NEG.NPST-DECL
 これは腐って食べられない

5.4.2.2.5. 結果継続の接尾辞

結果継続の接尾辞は、-eer-、-jar-、-ijar-という異形態をとる。-eer-は末尾が子音である A 型動詞、-jar-は末尾が母音である A 型動詞、-ijar-は B 型動詞の場合である。また、それ自体は存在動詞と同じ活用をとる。そのため、非過去の場合-Øをとる。

- (5-105) a. A 型動詞 (子音末尾) b. A 型動詞 (母音末尾) c. B 型動詞
- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| hak-eer-Ø | ha-jar-Ø | nz-ijar-Ø |
| 書く-CONT-NPST | 買う-CONT-NPST | 出る-CONT-NPST |
| 書いている | 買っている | 出ている |

5.4.2.2.6. 完了の接尾辞

完了の接尾辞はいずれの語幹にも-idar-というかたちである。この接尾辞も存在動詞と同様の活用を示す。

- (5-106) a. A 型動詞 b. B 型動詞
- | | |
|--------------|----------------|
| ara-idar-Ø | muss-idar-Ø |
| 洗う-COMP-NPST | むしれる-COMP-NPST |
| 洗った | むしれた |

5.4.3. 統語位置による動詞活用形の分類

ここまで、5.4.においては、義務性に基づく接尾辞の分類を行った。本節においては、それぞれの接尾辞をとった動詞の活用形の統語位置による分類について簡単にまとめる。したがって、非関与的な派生接尾辞（義務接尾辞の前に来る任意接尾辞）については本節では言及しない。まず、表 5-10 に生起しうる統語位置ごとの分類を示す。続いて、活用形ごとに、生起しうる統語位置を表 5-11 に示す。

表 5-10 生起しうる統語位置による動詞活用形の種類

位置	類	活用形	他に立ちうる位置
主節末に立ちうる	時制	非過去形	(連体修飾節、副詞節末にも立ちうる)
		過去形	(連体修飾節、副詞節末にも立ちうる)
	終止	非過去終止形	
		過去終止形	
	モダリティ	命令形	
		禁止形	
		勧誘・意志形	
		疑問詞疑問形	
	その他	不定形	(副詞節末にも立ちうる)
		直前形	(副詞節末にも立ちうる)
連体修飾節末に立ちうる	時制	非過去形	(主節末、副詞節末にも立ちうる)
		過去形	(主節末、副詞節末にも立ちうる)
	連体	連体形(過去のみ)	
副詞節末に立ちうる	副詞節形成	中止形 1	
		中止形 2	
		条件形	
		理由形	
		否定中止形	
		付帯状況形	
	時制	非過去形(助詞必要)	(主節末、連体修飾節末にも立ちうる)
		過去形(助詞必要)	(主節末、連体修飾節末にも立ちうる)
	その他	不定形	(主節末にも立ちうる)
		直前形	(主節末にも立ちうる)

表 5-11 活用形ごとの立ちうる統語位置

類	活用形	主節末	副詞節末	連体修飾節末
時制	非過去形	○	○	○
	過去形	○	○	○
その他	不定形	○	○	
	直前形	○	○	
終止	非過去終止形	○		
	過去終止形	○		
モダリティ	命令形	○		
	禁止形	○		
	勧誘・意志形	○		
	疑問詞疑問形	○		
副詞節形成	中止形 1		○	
	中止形 2		○	
	条件形		○	
	理由形		○	
	否定中止形		○	
	付帯状況形		○	
連体	連体形			○

(空欄は生起不可能であることを示す)

5.5. 動詞の重複

本節においては、動詞の重複について述べる。動詞の重複形は、不定形を重複することによって形成される。前の動詞も後ろの動詞も、不定接尾辞以外の接尾辞をとることはない。

また、動詞の重複形は非常に生起環境がきわめて限定されている。すなわち、軽動詞述部の前部要素の位置にしか、生起しえないのである。つまり、動詞の重複形だけで述部を構成することはできない。以下に例を示す。

(5-107) $nankai=n$ $hak-i+hak-i$ $si-ti=du$ $ubu-i$
 何回=ADD RED+書く-INF LV-SEQ1=FOC 覚える-INF
 何回も書いて覚えた

表 5-12 活用表（規則動詞）

		規則動詞			
		A型動詞			B型
		基本A型 書く	r末尾型 踊る	s末尾型 話す	
		出る			
義務接尾辞	命令の接尾辞	hak-i	budur-i	panah-ai	nz-iri
	禁止の接尾辞	hak-una	budur-na	panas-ina	nz-ina
	勧誘、意志の接尾辞	hak-a	budur-a	panah-a	nz-uu
	疑問詞疑問の接尾辞	hak-a	budur-a	panah-a	nz-ira
	中止の接尾辞1	hak-iti	budur-iti	panas-iti	nz-iti
	中止の接尾辞2	hak-ituri	budur-ituri	panas-ituri	nz-ituri
	条件の接尾辞	hak-uka	budur-ka	panas-ika	nz-ika
	理由の接尾辞	hak-iba	budur-iba	panas-iba	nz-iriba
	否定中止の接尾辞	hak-ansukun	budur-ansukun	panah-ansukun	nz-unsukun
	付帯状況の接尾辞	hak-itaana	budur-ittaana	panas-ittaana	nz-ittaana
	非過去の接尾辞	hak-u	budur-u	panas-u	nz-iru
	過去の接尾辞	hak-uta	budur-ta	panas-ita	nz-ita
	不定の接尾辞	hak-i	budur-i	panas-i	nz-i
	直前の接尾辞	hak-essu	budur-essu	panas-essu	nz-iiassu
任意接尾辞	直説の接尾辞	hak-u-n	budur-u-n	panas-u-n	nz-iru-n
	連体の接尾辞	hak-uta-ru	budur-ta-ru	panas-ita-ru	nz-ita-ru
	使役の接尾辞	hak-as-u	budur-as-u	panah-as-u	nz-issas-iru
	受け身/可能の接尾辞	hak-ar-iru	budur-ar-iru	panah-ar-iru	nz-irar-iru
	否定の接尾辞	hak-an	budur-an	panah-an	nz-un
	能力可能の接尾辞	hak-iss-en	budur-iss-en	panas-iss-en	nz-iss-en
	結果継続の接尾辞	hak-eer-Ø	budur-eer-Ø	panas-eer-Ø	nz-ijar-Ø
	完了の接尾辞	hak-idar-Ø	budur-idar-Ø	panas-idar-Ø	nz-idar-Ø

表 5-13 活用表（不規則動詞）

		不規則動詞	
		来る	する
義務接尾辞	命令の接尾辞	kuu	si-iri
	禁止の接尾辞	fuuna	si-ina
	勧誘、意志の接尾辞	vaa	s-uu
	疑問詞疑問の接尾辞	fura	si-ira
	中止の接尾辞1	kitti	sitti
	中止の接尾辞2	kiituri	siituri
	条件の接尾辞	fukka	sikka
	理由の接尾辞	furiba	si-iria
	否定中止の接尾辞	kuunsukun	suunsukun
	付帯状況の接尾辞	keettaana	sjettaana
	非過去の接尾辞	fur-Ø	si-iru
	過去の接尾辞	futta	s-ita
	不定の接尾辞	kii	si-i
	直前の接尾辞	kessu	sjessu
任意接尾辞	直説の接尾辞	fun	si-iru-n
	連体の接尾辞	futta-ru	s-ita-ru
	使役の接尾辞	kissasiru	simiru
	受け身/可能の接尾辞	kiirariru	s-irar-iru
	否定の接尾辞	kuun	suun
	能力可能の接尾辞	kiissen	si-iss-en
	結果継続の接尾辞	keer-Ø	sjeer-Ø
	完了の接尾辞	kiidar-Ø	si-idar-Ø

6. 形容詞の構造

本章においては黒島方言の形容詞について述べる。3章において述べたとおり、形容詞は活用するという点においては動詞と類似点を持つ。しかし、非過去肯定の接尾辞を形容詞は持っておらず、その空き間に絶対形を用いるところ、さらにその絶対形は接辞をとらないはだかのかたちであることが大きな特徴であった。これに対し、動詞は非過去の接尾辞を持ち、かつ、語根と同じかたちを表層で用いることはいかなる場合でもありえない。以下、形容詞と動詞の例を示す。動詞は、非過去・肯定の文終止の場合と、あとに動詞的要素をとるという点において形容詞の絶対形と共通性のある不定形の例を挙げる。

(6-1) 形容詞の例

a. 絶対形で文終止（非過去・肯定）する例

unu saa=a jassa
この お茶=TOP 安い.ABS
このお茶は安い

b. 絶対形で連用修飾する例

unu saa=a jassa nar-ta
この お茶=TOP 安い.ABS なる-PST
このお茶は安くなった

(6-2) 動詞の例

a. 非過去・肯定の文末終止

unu pusu=a tigami=ju hak-u
この 人=TOP 手紙=ACC1 書く-NPST
この人は手紙を書く

b. 動詞の不定形で助動詞構文を作る例

unu pusu=a tigami=ju hak-i bur-Ø
この 人=TOP 手紙=ACC1 書く-INF PROG-NPST
この人は手紙を書いている

このようなことから、本稿においては動詞とは異なる語類として形容詞を認める。琉球諸語における形容詞の認定に関しては議論が多くあるため、12章において個別に取り出し、論じる。

黒島方言の形容詞は、その全体像が複雑である。そのため、次の6.1.において形容詞の概要を述べる。その後、それぞれの項目について詳述する。

6.1. 黒島方言形容詞の特徴

本節においては、黒島方言の形容詞の特徴についてその概要を述べる。大きく、以下の3つのことについて述べる。

形容詞の特徴について本節で述べること

1. 黒島方言には2種類の形容詞があるということ
(つまり、1つの語根から2つの形容詞が派生される)
2. 形容詞語根が2つのサブグループに分けられるということ
3. 形容詞の絶対形の統語的分布の広さについて

まず、2種類の形容詞と2つの形容詞語根のサブグループについて述べる。黒島方言においては、2つの語根類からそれぞれ2種類の形容詞が派生される。このことをまず簡単に表に示す。表には、非過去・肯定の形容詞述部の際に用いられるかたちを示している（このかたちは絶対形と呼ぶものである）。

表 6-1 黒島方言の2つの語根類と2つの形容詞（非過去・肯定のかたち）

	語根グループ A 語根 guffa 「重い」	語根グループ B 語根 guma 「小さい」
普通形容詞	guffa	gumaha
比較形容詞	guffaku	gumaku

表の説明をする。語根 guffa 「重い」と guma 「小さい」は別の語根類に属する。それぞれ、「普通形容詞」と「比較形容詞⁷¹」という2種類の形容詞を派生させる。これらを派生させる際のふるまいが guffa 「重い」と guma 「小さい」では異なるのである。guffa は、普通形容詞の絶対形をつくる場合、語根と同じかたちのままであり、比較形容詞をつくる場合は語根に ku を付す。これに対し、別の語根類に属する guma では、普通形容詞の絶対形をつくる際は、ha を付さなければならない。比較形容詞を派生させる場合は guffa と同じく ku を語根に付せばよい。このように、黒島方言においては最終的に形成される形容詞が2種類あり、その派生のさせ方も語根類によって異なる。

続いて、形容詞の絶対形の統語的分布の広さ、言い換えると、汎用性の高さについて述べる。形容詞の絶対形は、①主節末における非過去・肯定の述部、②連体修飾構造、③連用修飾構造にあらわれる⁷²。黒島方言において、時制などに反応して活用を示すのは動詞と形容詞のみであり、この活用するという点においてこれらの品詞は共通している。しかし、この絶対形の分布の広さは、動詞と形容詞を分ける、形容詞の際立った特徴であると言ってよい。

(6-3) 形容詞の絶対形の統語的分布

a. 主節末の非過去・肯定の述部

unu ffa=a guffa
この 子供=TOP 重い.ABS
この子供は重い

b. 連体修飾

unu guffa ffa
この 重い.ABS 子供
この重い子供

c. 連用修飾構造

unu ffa=a guffa nar-ta
この 子供=TOP 重い.ABS なる-PST
この子供は重くなった

以下、本章においては、このような特徴を持つ黒島方言の形容詞について述べる。6.2.においては形容詞語根のサブグループについて、6.3.においては普通形容詞と比較形容詞につ

⁷¹ この形容詞が、比較の際により用いられやすいため、このような呼称を用いる。

⁷² ただし、絶対形のみがこれらの位置を占める、というわけではない。連体修飾構造には形容詞の連体形も用いられる。主節末の非過去・肯定の形容詞述部には絶対形しか用いられない。

いて述べる。6.4.においては動詞語根から形容詞を派生させる形態的操作について述べる。

6.2. 形容詞語根のサブグループ

本節においては、黒島方言における形容詞語根のサブグループの必要性について述べる。

まずは現象を確認するために、語としてあらわれるかたちの観察から始める。一方のグループの形容詞は、**guffa**（「重い」）という語根を例にとると、普通形容詞の非過去・肯定で **guffa** というかたち（絶対形）を持ち、比較形容詞形成接尾辞-ku を付す場合、**guffa-ku** となる。つまり、普通形容詞の絶対形のかたちに-ku を足した格好である。これに対し、もう一方のグループの語根ではふるまいが異なる。普通形容詞の絶対形が **gumaha**（「小さい」）という語を例にとると、さきほどの **guffa** の例にしたがうとすれば、絶対形にそのまま-ku を足せばよかったので、**gumaha-ku** となることが予想される。しかし、実際にはこうはならない。そのかわりに、**guma-ku** という形式が文法的とされる。つまり、簡単に表にすると以下の表 6-2 のようになる。（表に示すように、**guffa**（「重い」）に対する ***guf-ku** という形式なども非文法的である。）

表 6-2 **guffa** と **gumaha** の接辞 **ku** に対するふるまいの違い

「重い」	「小さい」
guffa	gumaha
guffa-ku (*guf-ku)	guma-ku (*gumaha-ku)

このように、形容詞という 1 つの品詞のなかでも、形態的ふるまいの違いが見られる。特に、本節では、この比較形容詞形成接尾辞-ku に対するふるまいに注目して記述を進める。しかし、のちに 6.2.2.で示すように、このサブグループは接尾辞-ku にまつわる現象の説明のためだけに必要なのではなく、他の現象（複合と重複）の説明にとっても有効なものである。したがって、このサブグループを設定することは黒島方言の記述にとって不可欠なことである。以下、まず、2 つのグループの比較形容詞形成接尾辞-ku に対するふるまいの違いについて 6.2.1.において述べる。続く 6.2.2.においてはそれ以外の現象における形容詞語根のサブグループについて述べる。そして、6.2.3.においてサブグループに分かれる要因について述べ、最後の 6.2.4.においてはサブグループの例外について述べる。

6.2.1. 比較形容詞形成接尾辞 **ku** に対する 2 つのグループのふるまいの違い

本節では、比較形容詞形成接尾辞-ku に対するふるまいの違いによって、形容詞語根が 2 つのサブグループに分類されることを示すが、先に 6.2.1.1.において、両グループのふるまいの違いが表面化しない場合を確認し、その後、6.2.1.2.においてグループ間の違いを示す。

本節では、先に見た 2 つのサブグループをそれぞれ、グループ A とグループ B とし、グループ A は普通形容詞の非過去・肯定で **guffa**（「重い」）という語を、グループ B は同じく普通形容詞の非過去・肯定で **gumaha**（「小さい」）という語を例にとって、以降、説明をしていく。

6.2.1.1. 両グループのふるまいの違いがあらわれない場合

まず、いったん、両グループの差異が表面化しない例を確認しておく。以下に示すとお

り、両グループが示すふるまいは、常に異なるわけではない。

(6-4) 普通形容詞の過去の場合

- a. unu isi=a guffa-ta
この 石=TOP 重い-PST
この石は重かった
- b. unu isi=a guma-ha-ta
この 石=TOP 小さい-ADJVZ-PST
この石は小さかった

(6-5) 普通形容詞の否定の場合

- a. unu isi=a guffa naan-un
この 石=TOP 重い.ABS NEG.STATE-NPST.DECL
この石は重くない
- b. unu isi=a guma-ha naan-un
この 石=TOP 小さい-ADJVZ.ABS NEG.STATE-NPST.DECL
この石は小さくない

このように、両グループの差異が表面化しない場合もある。下の表 6-3 にまとめておく。

表 6-3 両グループの差異が表面化しない場合

グループ A	guffa	グループ B	gumaha
	guffa (重い)		gumaha (小さい)
	guffa naan (重くない)		gumaha naan (小さくない)
	guffata (重かった)		gumahata (小さかった)
	guffaka (重ければ)		gumahaka (小さければ)

6.2.1.2.両グループのふるまいが異なる場合

次に、比較形容詞形成接尾辞-ku を付して、両グループの差異が出る場合を確認していく。グループ A では、guffa/guffaku のように、普通形容詞の絶対形と同じかたちにそのまま-ku を付す。それに対し、グループ B では、gumaha/gumaku のように、普通形容詞の絶対形から-ha を落としたうえで-ku を付すと、文法的である。比較形容詞形成接尾辞-ku には CMPR とグロスをふる。

- (6-6) a. unu isi=a guffa-ku=du ar-ta
この 石=TOP 重い-CMPR.ABS=FOC STATE-PST
この石は重かった
- b. unu isi=a guma-ku=du ar-ta (*gumahaku)
この 石=TOP 小さい-CMPR.ABS=FOC STATE-PST
この石は小さかった
- (6-7) a. unu isi=a guffa-ku naan
この 石=TOP 重い-CMPR.ABS STATE.NEG
この石は重くない

- b. unu isi=a guma-ku naan (*gumahaku)
 この 石=TOP 小さい-CMPR.ABS STATE.NEG
 この石は小さくない
- (6-8) a. unu isi=a guffa-ku nar-ta
 この 石=TOP 重い-CMPR.ABS なる-PST
 この石は重くなった
- b. unu isi=a guma-ku nar-ta (*gumahaku)
 この 石=TOP 小さい-CMPR.ABS なる-PST
 この石は小さくなった

このように両グループ間で明らかに形態的なふるまいの差が見られるが、これはいずれかが特殊で散発的である、といった性質のものではない。今のところ約 50 の語について確認したが、数的な偏りはない。以下、表 6-4 と表 6-5 にそれぞれ、グループ A、B の語を、比較形容詞形成接尾辞-ku を付したかたちと共に挙げる。

表 6-4 グループ A の語

重い	guffa	guffaku
にくい	miffa	miffaku
きたない	janija	janijaku
寒い	piija	piijaku
うれしい	sanija	sanijaku
軽い	harra	harraku
ひもじい	jaasa	jaasaku
うるさい	hasamasa	hasamasaku
うるさい	jagamasa	jagamasaku
難しい	musukasa	musukasaku
遠い	tuusa	tuusaku
さみしい	hamaarasa	hamaarasaku
かわいい	hanasa	hanasaku
固い	koosa	koosaku
薄い	pissa	pissaku
悪い	wassa	wassaku
易しい	jassa	jassaku
おもしろい	umussa	umussaku
安い	jassa	jassaku
忙しい	isugassa	isugassaku
眠い	nihuta	nihutaku
暑い	acca	accaku
かゆい	bjuuwa	bjuuwaku
楽だ	messa	messaku
まずい	miza	mizaku
遅い	niva	nivaku

表 6-5 グループ B の語

小さい	gumaha	gumaku
若い	bahaha	bahaku
細い	bakaha	bakaku
悪い	janaha	janaku
はやい	paaha	paaku
多い	uraha	uraku
少ない	isikaha	isikaku
近い	sikaha	sikaku
おいしい	maaha	maaku
幼い	sinaha	sinaku
高い	takaha	takaku
長い	nagaha	naaku/nagaku
低い	pisaha	pisaku
深い	hukaha	hukaku
浅い	asaha	asaku
狭い	sibaha	sibaku
赤い	akaha	akaku
青い	auha	auku
貧しい	geeraha	geeraku
暗い	vaaha	vaaku
臭い	zzaha	zzaku
からい	karaha	karaku
やわらかい	jaaraha	jaaraku
荒い	araha	araku
強い	suusa	suuku
弱い	joosa	jooku
新しい	miisa	miiku
白い	zzoho ⁷³	zzuku
黒い	vvoho	vvuku

上の表 6-4、6-5 に示したとおり、両グループの間に数的な偏りはないと言える。また、Dixon (2004) による意味的な分類も行ったが、特に意味的な偏りもなかった。

以上、本節では、黒島方言の形容詞語根は比較形容詞形成接尾辞-ku を付した際に異なるふるまいを見せる 2 つのサブグループに分けられることを示した。また、グループ A の語は、接辞-ku を付す際に普通形容詞の絶対形にそのまま付すが、グループ B の場合、-ha を落としたかたちに-ku を付すと、文法的になる、ということも示した。次節では、このサブグループが形容詞語根をめぐる他の現象を説明する際にも必要であることを示す。

⁷³ zzoho「白い」と vvoho「黒い」は/ha/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則に従って母音同化を起こしている。したがって、基底形は//zzu-ha//や//vvu-ha//である。また、どちらも二重有声摩擦音を語頭に持つため、単子音化することもあり、[zo:ho]や[vo:ho]と発音されることがある。この際、[z]や[v]のあとの母音が長母音化するのは代償延長のためと考えられる。形態音韻論の詳細は 2 章と 11 章を参照のこと。

6.2.2. そのほかの現象における形容詞のサブグループ

本節では、前節で述べた形容詞語根の2つのサブグループが、比較形容詞形成接尾辞-kuをめぐりふるまいに関してのみ有用なものであるというわけではなく、他の現象の説明にも有効であるということを示す。具体的には、2つの現象をとりあげる。1つ目は複合(6.2.2.1.)で、もう1つは重複(6.2.2.2.)である。

6.2.2.1. 複合

黒島方言においては、形容詞語根と名詞を複合させることができる。この複合を起こす際に、前節で述べたサブグループ間においてふるまいが異なる。グループごとに確認する。

まず、グループAの語では、絶対形のかたちのまま複合する。つまり、「重い石」(字義通りに日本語訳すると「重石」という意味の複合語を形成する場合は、guffa+isiとなる。この際、*guf+isiや*guff+isiのようにはならない。例をいくつか示す。

(6-9) グループAの形容詞語根を前部要素とする複合名詞

a. jassa+kin	b. piija+hazi
安い+着物	寒い+風
安い着物	寒い風

これに対し、グループBの語は異なるふるまいを示す。すなわち、普通形容詞の絶対形と同じ形ではなく、普通形容詞の絶対形から-haを落としたかたちと名詞が複合を起こすのである。つまり、「小さい石」(字義通りに日本語訳すると「小石」)を例にとると、guma+isiという複合語が形成される、ということである。これも例を示す。

(6-10) グループBの形容詞語根を前部要素とする複合名詞

a. taka+ki	b. baha+munu
高い+木	若い+もの
(背の) 高い木	若者

以上示したように、複合語を形成する際にも両グループ間にはふるまいの違いが見られる。しかも、その違いは比較形容詞形成接尾辞-kuに対するふるまいの場合と同じであり、グループAの場合は普通形容詞の絶対形と同じかたちで複合語化し、グループBの場合は普通形容詞の絶対形からhaを落としたかたちで複合語化するのである。

6.2.2.2. 重複

続いて、重複に関して確認する。黒島方言の形容詞語根は重複して、そのうえで属格助詞をとり、名詞句の修飾部に入ることができる⁷⁴。意味としては、程度の高さを表すことが典型であるようである。この際にも両グループ間でふるまいが異なる。それぞれ確認していく。

まず、グループAの語においては、重複の場合も普通形容詞の絶対形と同じかたちを重ねる。したがって、以下の例のようになる。

⁷⁴ 形容詞語根の重複形は属格助詞=nuをとるばかりではなく、かなり特異なふるまいを示す。詳細については、7.4.2.において述べる。

- (6-11) a. *guffa+guffa=nu* *isi*
 RED+重い=GEN 石
 重い石
 b. *acca+acca=nu* *pi*
 RED+暑い=GEN 日
 暑い日

この場合、**gufagufa*、**gufguf*、**guguffa* などにはならず普通形容詞の絶対形と同じかたちがすべて重複される格好である。

これに対し、グループ B の場合は、やはり普通形容詞の絶対形から *-ha* を落としたかたちが重複される。以下に例を示す。

- (6-12) a. *guma+guma=nu* *an*
 RED+小さい=GEN 蟻
 小さい蟻
 b. *kara+kara=nu* *munu*
 RED+辛い=GEN もの
 辛いもの

この際、**gumahagumaha* とはならない。したがって、重複の場合も、複合の場合と同様に、グループ A においては普通形容詞の絶対形とおなじかたちを利用し、また、グループ B においては普通形容詞の絶対形から *-ha* を落としたかたちを利用する。

6.2.3. サブグループに分かれる要因

ここまで、複合と重複を観察した。そのことによって、本節の前半で述べた形容詞のサブグループは、決して比較形容詞形成接尾辞 *-ku* に関するふるまいにのみ関係するわけではなく、種々の現象にわたって重要な区別である、ということが明確になった。

ここで、比較形容詞形成接尾辞 *-ku*、および、複合、重複に関する両グループのふるまいを表 6-6 にまとめておく。

表 6-6 両グループのふるまいの違い

	グループ A	グループ B
普通形容詞の絶対形	<i>guffa</i>	<i>gumaha</i>
<i>-ku-</i>	<i>guffa-ku</i>	<i>guma-ku</i>
複合	<i>guffa+isi</i>	<i>guma+isi</i>
重複	<i>guffa+guffa</i>	<i>guma+guma</i>

表 6-6 にまとめた、以上の現象を考慮に入れると、両グループ間の形態的差異が説明できる。グループ A の語は、普通形容詞の絶対形より小さいかたちで生起することがない。これに対し、グループ B の語は普通形容詞の絶対形から *-ha* を落としたかたちで生起することが可能である。つまり、グループ B のほうは普通形容詞化接尾辞をとりだすことが可能であるのに対し、グループ A のほうは、普通形容詞化接尾辞の分析が不可能、という状況である。換言すると、それぞれの形態的操作の際の両グループのふるまいの違いは、この普通形容詞化接尾辞の分析可能性の違いに起因しているのであり、グループ B の *gumaha* はより細かく、*guma-ha* と分析されるべきである、ということである。

以上の結果をまとめる。黒島方言の形容詞語根は 2 つのサブグループに分けられる。一方のサブグループ(グループ A)では、語根そのままのかたちで普通形容詞の絶対形になる。これに対し、もう一方のグループ B の語根類はそのままのかたちでは普通形容詞の絶対形になることはできず、-ha という普通形容詞形成接尾辞を必要とする。このような形態的ふるまいの違いは、形容詞語根を前部要素とする複合や、形容詞語根の重複形形成の際にもあらわれる。したがって、この語根の下位分類は黒島方言の記述にとって必要不可欠である⁷⁵。

6.2.4. サブグループピングの例外

本節ではこれまで形容詞語根のサブグループピングについて述べてきた。しかし、例外があるため、本節においてそれらについて述べる。

これまで、形容詞語根から普通形容詞と比較形容詞を派生する際のふるまいの違いに注目してきた。つまり、グループ A の場合、語根と同じかたちが普通形容詞の絶対形であり、それと同じかたちに比較形容詞派生接尾辞-ku を付す。これに対し、グループ B の場合、語根に普通形容詞派生接尾辞-ha を付して普通形容詞の絶対形をつくり、また、語根に比較形容詞派生接尾辞-ku を付して比較形容詞をつくる。これらが通常形容詞語根からの普通形容詞と比較形容詞の派生のしかたである。

これらに対し、2 種類の例外がある。1 つ目の例外は、比較形容詞の形成のされ方が 2 つあるもの。つまり、たとえば、ubu 「大きい」という語根から、ubu-ku と ubo-ho-ku という 2 つの比較形容詞が派生されるものである。もう 1 つの例外は、普通形容詞も比較形容詞も 2 つのかたちがあるものである。以下、それぞれの例外について述べる。

6.2.4.1. サブグループピングの例外 1: 比較形容詞が 2 つあるもの

本節では、サブグループピングの例外の 1 つ目として、比較形容詞が 2 種類あるものについて述べる。これは、以下のようなふるまいを見せるものである。

(6-13) 語根 ubu 「大きい」
a. 普通形容詞の派生

ubo-ho
大きい-ADJVZ.ABS
大きい

b. 比較形容詞の派生

ubu-ku / ubo-ho-ku
大きい-CMPR.ABS / 大きい-ADJVZ-CMPR.ABS
大きい

この例外となる語根の説明を、語根 ubu 「大きい」を例にとって説明する。まず、この語根は ubu というかたちが語根であることを確認する。これは、ubu というかたちで複合名詞の前部要素になるためである。

⁷⁵ なお、ku という接尾辞に対する形容詞語根間のふるまいの差については、北琉球奄美湯湾方言(新永悠人 p.c.)や同じく北琉球喜界島上嘉鉄方言(白田理人 p.c.)でも観察されるようである。詳細については原田(2014)を参照のこと。

(6-14) 語根 **ubu** 「大きい」を前部要素に持つ複合名詞

a. ubu+hazi	b. ubu+pusu
大きい+風	大きい+人
台風	大人

このようなことから、語根のかたちが **ubu** であることは間違いない。この語根から、普通形容詞を派生させると、**ubo-ho** となる。この際に***ubu-ha** とならず、**ubo-ho** となるのは 2.4.3. で扱った子音/h/を挟む双方向の母音同化が起こるためである。ここまでは、母音交替が起こっていることを除けば、グループ **B** の形容詞語根と同じである。そして実際、比較形容詞を形成する際も、グループ **B** と同様の形成も可能である。つまり、語根に **-ku** をそのまま付した **ubu-ku** というかたちである。これに加え、普通形容詞の絶対形と同じかたちである **ubo-bo** に比較形容詞形成接尾辞 **-ku-** を付す **ubo-ho-ku** という比較形容詞も存在する。これは、話者間の変異ではなく、話者内の変異である。今のところ、確認したすべての話者がいずれのかたちも文法的であるとしている。このように普通形容詞を 1 つ、比較形容詞を 2 つ持つ語根は、上に示した **ubu** 「大きい」のほかに、**nge** 「にがいに」、**piirake** 「涼しい」、**pusu** 「広い」、**imi** 「小さい」が確認されている。以下に、それぞれの普通形容詞と比較形容詞の例を示す。なお、それぞれ母音同化が起こっている。

(6-15) 普通形容詞が 1 つ、比較形容詞が 2 つある例

a. nge 「にがいに」	
普通形容詞	ngehe
比較形容詞	ngeheku / ngeku
b. piirake 「涼しい」	
普通形容詞	piirakehe
比較形容詞	piirakeheku / piirakeku
c. pusu 「広い」	
普通形容詞	pusoho
比較形容詞	pusohoku / pusuku
d. imi 「小さい」	
普通形容詞	imehe
比較形容詞	imeheku / imiku

これらの形容詞語根は、すべてにおいて重複と名詞との複合が観察されるわけではない。今のところ確認されているのは、**ubu** 「大きい」を前部要素とする複合名詞と、**pusu** 「広い」の重複形のみである⁷⁶。**ubu** を前部要素とする複合名詞は上の (6-14) を参照のこと。次には、**pusu** の重複形を示す。

(6-15) 語根 **pusu** 「広い」 → 重複 **puso+puso**
RED+広い
非常に広い

(6-16) **puso+puso** **si-i=ra**
RED+広い LV-INF=SF
とっても広いね

⁷⁶ **ubu** 「大きい」の重複形がないのは、別に **uboobi** 「大きく」という副詞があるためと思われる。この **uboobi** のような副詞は他に 2 例しかなく、その派生規則が生産的とは言えないため、**ubu** から **uboobi** が派生されるとは本稿では考えず、**uboobi** という副詞があるものと考ええる。

これら ubu、nge、piirake、pusu、imi の 5 つの共通点は、普通形容詞派生接尾辞が後接するさいに、子音/h/を挟んだ双方向の母音同化を起こす点である。このことから、このように普通形容詞派生接尾辞-ha が後接した際に母音同化を起こす語根が、サブグループの例外になっているものと考えられるが、実際はそうではない。語根 zzu 「白い」から派生した普通形容詞 zzoho と、語根 vvu 「黒い」から派生した普通形容詞 vvoho は普通形容詞派生接尾辞とその前の母音が双方向の母音同化を起こしているものの、*zzohoku や*vvohoku は許容されない。したがって、普通形容詞派生接尾辞と語根の末尾母音とが母音同化を起こしているからと言って、かならず比較形容詞を 2 つ持つ、というわけではない。

6.2.4.2. サブグループの例外 2: 普通形容詞も比較形容詞も 2 つあるもの

本節ではもう 1 つのサブグループの例外について述べる。これは、1 つの語根から普通形容詞も比較形容詞も 2 つずつ派生されるものである。この例外は今のところ makka 「短い」という例しか見つかっていない。以下に、この語根からの普通形容詞と比較形容詞の派生を示す。

(6-17) 語根 makka 「短い」

普通形容詞	makka	/	makkaha
比較形容詞	makkaku	/	makkahaku

この例では、普通形容詞が語根と同じかたちでも、語根に-ha を付したかたちでもよく、さらに、比較形容詞は語根と同じかたちにそのまま-ku を付しても、また、-ha を付したかたちにさらに-ku を付してもよい。他の語根ではこのようなことは許されず、この例は極めて例外的なものであると言わざるを得ない。今のところ、この形容詞語根 makka を前部要素に持つ複合名詞は確認されていない。ただし、重複形の場合は、以下のようなかたちになる。続いて、例も示す。

(6-18) 語根 makka → 重複形 makka+makka
 短い RED+短い
 非常に短い

(6-19) makka+makka=nu sina
 RED+短い=GEN 綱
 非常に短い綱

以上、普通形容詞と比較形容詞の派生のしかたに基づいて形容詞語根をサブグループ化し、さらにそれらの例外も示した。これらを表に示すと、以下の表 6-7 のようになる。

表 6-7 形容詞語根のサブグループと例外の普通形容詞と比較形容詞の派生

	語根	普通形容詞	比較形容詞
グループ A	guffa	guffa	guffa-ku
グループ B	guma	guma-ha	guma-ku
例外 1	ubu	ubo-ho	ubu-ku ubo-ho-ku
例外 2	makka	makka makka-ha	makka-ku makka-ha-ku

6.3. 普通形容詞と比較形容詞

先述のように、黒島方言には2つの形容詞がある。1つの形容詞語根から2種類の形容詞が派生されるのである。一方を普通形容詞、もう一方を比較形容詞と称する。まず、以下に例を挙げる。

(6-20) 2種類の形容詞

語根 *taka* 「高い」の例

1. 普通形容詞 : *taka-ha-ta*

2. 比較形容詞 : *taka-ku-ta*

(理解のために、過去接辞-*ta* を付している。

意味としては、「高かった」という意味である。)

上の例を用いて2つの形容詞について説明する。語根 *taka* から2種類の形容詞が派生されるのであるが、1つは-*ha* で拡張されるもので、これを「普通形容詞」と呼ぶこととする。そしてもう1つは-*ku* で拡張されるのであるが、これを便宜的に「比較形容詞」と呼ぶこととする⁷⁷。このかたちはなにかとなにかを比較する際に用いられやすいためである。しかし、比較の際に必ず用いなければならないわけではない。

本節では、普通形容詞と比較形容詞の形態統語的特徴⁷⁸を記述する。これらの形容詞は多くの特徴を共有しながらも、同時に異なる部分も持つ。そこで、本節では、これらの相違点について述べる。詳細に入る前に、次の表 6-8 と表 6-9 に各形容詞がとりうる活用形の一覧をあげておく。表 6-8 は語根グループ A の、表 6-9 は語根グループ B のものである。

表 6-8 各形容詞の活用形一覧

活用形	とる接辞	普通形容詞	比較形容詞
絶対形		<i>guffa</i>	<i>guffa-ku</i>
過去形	過去接尾辞	<i>guffa-ta</i>	<i>guffa-ku-ta</i>
非過去終止形	終止接尾辞	<i>guffa-n</i>	
過去終止形	過去接尾辞-終止接尾辞	<i>guffa-ta-n</i>	<i>guffa-ku-ta-n</i>
非過去連体形	連体接尾辞	<i>guffa-ru</i>	<i>guffa-ku-ru</i>
過去連体形	過去接尾辞-連体接尾辞	<i>guffa-ta-ru</i>	<i>guffa-ku-ta-ru</i>
中止形	中止接尾辞	<i>guffa-ti</i>	<i>guffa-ku-ti</i>
条件形	条件接尾辞	<i>guffa-ka</i>	<i>guffa-ku-ka</i>
理由形	理由接尾辞	<i>guffa-riba</i>	<i>guffa-ku-riba</i>

※空欄は、その活用形がないことをあらわす

⁷⁷ この普通形容詞と比較形容詞の派生のしかたの違いによって形容詞語根を2つのサブグループに分ける必要があることは6.2.において述べた。

⁷⁸ 形容詞の推量をあらわす形式で、*waa* というものが確認されている。たとえば、*piijawaa* 「寒そう」のように使用する。この形式は、存在はわかっているものの、(たとえば、これが接尾辞なのかどうか、や、比較形容詞にも後続しうるのか、など) 詳細不明である。今後、調査を行い、明らかにしたい。

表 6-9 各形容詞の活用形一覧

活用形	とる接辞	普通形容詞	比較形容詞
絶対形		taka-ha	taka-ku
過去形	過去接尾辞	taka-ha-ta	taka-ku-ta
非過去終止形	終止接尾辞	taka-ha-n	
過去終止形	過去接尾辞-終止接尾辞	taka-ha-ta-n	taka-ku-ta-n
非過去連体形	連体接尾辞	taka-ha-ru	taka-ku-ru
過去連体形	過去接尾辞-連体接尾辞	taka-ha-ta-ru	taka-ku-ta-ru
中止形	中止接尾辞	taka-ha-ti	taka-ku-ti
条件形	条件接尾辞	taka-ha-ka	taka-ku-ka
理由形	理由接尾辞	taka-ha-riba	taka-ku-riba

※空欄は、その活用形がないことをあらわす

上の表 6-8 と 6-9 に示した活用形のうち、「絶対形」と「終止形」において普通形容詞と比較形容詞の間に違いがみられる。「絶対形」に関してはその分布が異なり、非過去終止形については比較形容詞にはそのかたちがない。以下、まず 6.3.1.1.において 2 つの形容詞に共通する点について述べ、続く 6.3.2.において異なる特徴について述べることとする。

なお、表からもわかるとおり、形容詞語根のグループ間の差は本節では問題にならず、いずれのグループであっても原則的に同様である。違いがある場合は指摘するが、違いがない場合は指摘せず、グループ A もしくはグループ B の語の例を挙げるが、これは例があがっていないグループを排除するわけではない。

6.3.1. 2 つの形容詞に共通する特徴

上の活用表に示したとおり、普通形容詞と比較形容詞はかなりの部分同じふるまいを示す。本節では、違いのある絶対形と終止形を除く活用形について、統語的分布に従って示す。6.3.1.1.においては主節末、連体修飾節末、副詞節末に立ちうるもの、6.3.1.2.においては主節末にのみ立ちうるもの、6.3.1.3.においては連体修飾節末にのみ立ちうるもの、6.3.1.4.においては副詞節末にのみ立ちうるものについて述べる。

6.3.1.1. 主節末、連体修飾節末、副詞節末に立ちうる活用形（過去形）

本節では、主節末、連体修飾節末、副詞節末に立ちうる形容詞の活用形について述べる。絶対形も同様の統語的分布を示すが、これは普通形容詞と比較形容詞の間に違いがあるため、のちに 6.3.2.1.で述べる。絶対形を除くと、この分布に該当するのは過去形である。

- (6-21) a. 普通形容詞の過去形 b. 比較形容詞の過去形
- | | |
|--------------|-------------|
| taka-ha-ta | taka-ku-ta |
| 高い-ADJVZ-PST | 高い-CMPR-PST |
| 高かった | 高かった |

この活用形は形容詞語幹に過去の接尾辞-ta を付すものである。これは、主節末、連体修飾節末、副詞節末のいずれにも立ちうる。ただし、副詞節末に立つ場合には助詞が必要であり、助詞がない場合は主節と解釈される。なお、主節末、連体修飾節末に立つ場合は助詞は必要ない。(6-22) は普通形容詞、(6-23) は比較形容詞の例である。

- (6-22) a. 主節末
 unu izu=a maa-ha-ta
 その 魚=TOP おいしい-ADJVZ-PST
 その魚はおいしかった
- b. 連体修飾節末
 maa-ha-ta izu
 おいしい-ADJVZ-PST 魚
 おいしかった魚
- c. 副詞節末
 unu izu=a maa-ha-ta=nu pinar-i
 その 魚=TOP おいしい-CMPR-PST=ADVRS 減る-INF
 その魚はおいしかったけど、減った
- (6-23) a. 主節末
 unu izu=a maa-ku-ta
 その 魚=TOP おいしい-CMPR-PST
 その魚はおいしかった
- b. 連体修飾節末
 maa-ku-ta izu
 おいしい-ADJVZ-PST 魚
 おいしかった魚
- c. 副詞節末
 unu izu=a maa-ku-ta=nu pinar-i
 その 魚=TOP おいしい-CMPR-PST=ADVRS 減る-INF
 その魚はおいしかったけど、減った

6.3.1.2. 主節末にのみ立ちうる活用形（過去終止形）

本節では主節末にのみ立ちうる形容詞の活用形について述べる。ここには、非過去終止形も含まれるが、普通形容詞と比較形容詞の間で違いがあるため、6.3.2.2.に後述する。非過去終止形を除くと、主節末にのみ立ちうる活用形は過去終止形のみである。例を示す。

- (6-24) a. 普通形容詞の過去終止形 b. 比較形容詞の過去終止形
 guffa-ta-n guffa-ku-ta-n
 重い-PST-DECL 重い-CMPR-PST-DECL
 重かった 重かった

この活用形は連体修飾節末、副詞節末には立ちえない。

- (6-25) a. 主節末
 unu usi=a guffa-ta-n=do
 その 牛=TOP 重い-PST-DECL=SF
 その牛は重かったよ
- b. 連体修飾節末
 *guffa-ta-n usi
 重い-PST-DECL 牛
- c. 副詞節末
 * unu usi=a guffa-ta-n=nu jassa=du ar-ta
 その 牛=TOP 重い-PST-DECL=ADVRS 安い.ABS=FOC COP-PST

6.3.1.3. 連体修飾節末にのみ立ちうる活用形

連体修飾節末にのみ立ちうる形容詞の活用形は、以下の非過去連体形と過去連体形の 2 つである。

- (6-26) a. 非過去連体形 taka-ha-ru (普通形容詞) taka-ku-ru (比較形容詞)
 b. 過去連体形 taka-ha-ta-ru (普通形容詞) taka-ku-ta-ru (比較形容詞)

このように、非過去連体形は、絶対形と同じかたちに連体接尾辞-ru を付したかたち、過去連体形は、過去接尾辞に連体接尾辞-ru を付したかたちである。動詞の連体接尾辞が過去接尾辞にのみ後接するのとは対照的である (5.4.2.1.2.参照のこと)。

これらの活用形は連体修飾節末にのみ生起する。

- (6-27) a. 連体修飾節末
 { maa-ku-ru / maa-ku-ta-ru } izu
 {おいしい-CMPR-ADN / おいしい-CMPR-PST-ADN} 魚
 {おいしいおいしかった} 魚
- b. 主節末
 *unu izu=a { maa-ku-ru / maa-ku-ta-ru }
 その 魚=TOP {おいしい-CMPR-ADN / おいしい-CMPR-PST-ADN}
- c. 副詞節末
 * unu izu=a { maa-ku-ru / maa-ku-ta-ru }=junti
 その 魚=TOP {おいしい-CMPR-ADN / おいしい-CMPR-PST-ADN}=CSL

6.3.1.4. 副詞節末にのみ立ちうる活用形

本節では副詞節末にのみ立ちうる形容詞の活用形について述べる。これには、中止形、条件形、理由形が含まれる。過去形も副詞節末に立ちうるが、これは助詞が必要であった。それに対し、中止形、条件形、理由形は助詞なしの活用形のみで副詞節末に立つ。いずれも語幹にそれぞれの接尾辞を付すかたちである。続けて例も示す。

- (6-28) a. 中止形 acca-ti (普通形容詞) acca-ku-ti (比較形容詞)
 b. 条件形 acca-ka (普通形容詞) acca-ku-ka (比較形容詞)
 c. 理由形 acca-riba (普通形容詞) acca-ku-riba (比較形容詞)

- (6-29) a. 中止形
 kjuu=a piija-ti jaa=na=du bur-Ø
 今日=TOP 寒い-SEQ 家=LOC=FOC いる-NPST
 今日は寒くて、家にいる
- b. 条件形
 acca piija-ka jaa=na=du bur-Ø
 明日 寒い-COND 家=LOC=FOC いる-NPST
 明日寒いと家にいる
- c. 理由形
 kjuu=a piija-riba jaa=na=du bur-Ø
 今日=TOP 寒い-CSL 家=LOC=FOC いる-NPST
 今日は寒いので、家にいる

6.3.2. 2つの形容詞の違い

本節では、普通形容詞と比較形容詞の異なる点について述べる。普通形容詞形成の際の、語根類間の違いについてはここでは繰り返さない。

普通形容詞と比較形容詞の違いは以下の2点である。

(6-30) 普通形容詞と比較形容詞の形態統語的差異

- a. 絶対形の分布に関して
- b. 終止の接尾辞に関して

以下、まず絶対形の分布について 6.3.2.1.において、続いて、6.3.2.2.で終止の接尾辞に関して述べる。

6.3.2.1. 絶対形の分布について

本節では、普通形容詞と比較形容詞の絶対形について、主にその差異に注目して述べる。まず、差異を述べたあと、共通する特徴についても述べる。

普通形容詞と比較形容詞の絶対形は、統語的分布において異なる。普通形容詞の絶対形が主節末、連体修飾節末、副詞節末のすべてに立ちうるのに対し、比較形容詞の絶対形は主節末、副詞節には立ちうるものの、連体修飾節末には立ちえない。以下、それぞれの非過去の連体修飾構造の例をあげる。普通形容詞の場合、絶対形でも非過去連体形でも構わないが⁷⁹、比較形容詞の場合は連体形を用いなければならない。

(6-31) 普通形容詞の非過去の連体修飾

{	taka-ha	/	taka-ha-ru	}	jama
	高い-ADJVZ.ABS		高い-ADJVZ-ADN		山
	高い山				

(6-32) 比較形容詞の非過去の連体修飾

{	*taka-ku	/	taka-ku-ru	}	jama
	高い-CMPR.ABS		高い-CMPR-ADN		山
	高い山				

この点が普通形容詞と比較形容詞の形態統語的違いの1点目である。なお、過去の連体修飾の場合は、普通形容詞と比較形容詞のあいだに差はなく、どちらも過去の接尾辞のみで連体修飾節末に生起することも可能であるし、また、過去の接尾辞のあとに連体接尾辞をとって連体修飾節末に生起することも可能である。

(6-33) 普通形容詞の過去の連体修飾

{	taka-ha-ta	/	taka-ha-ta-ru	}	jama
	高い-ADJVZ-PST		高い-ADJVZ-PST-ADN		山
	高かった				

(6-34) 比較形容詞の過去の連体修飾

{	taka-ku-ta	/	taka-ku-ta-ru	}	jama
	高い-CMPR-PST		高い-CMPR-PST-ADN		山
	高かった				

このようなことから、2つの形容詞の絶対形は、統語的分布が異なる、といえる。しかし、

⁷⁹ 絶対形による連体修飾と、連体形による連体修飾の差異は未詳である。

他の面においては共通する特徴もある。以下に、普通形容詞と比較形容詞の絶対形に共通する特徴について述べる。

まず、主節末と副詞節末に立つ普通形容詞、比較形容詞それぞれの絶対形の例を挙げる。いずれの形容詞の絶対形も、いずれの位置にも立ちうる。

(6-35) 主節末の絶対形

a. 普通形容詞

unu	isi=a	guffa
この	石=TOP	重い.ABS
この石は重い		

b. 比較形容詞

unu	isi=a	guffa-ku
この	石=TOP	重い-CMPR.ABS
この石は重い		

(6-36) 副詞節末の絶対形

a. 普通形容詞

unu	vva=a	guffa	nar-eer-Ø
この	子ども=TOP	重い.ABS	なる-CONT-NPST
この子は重くなった			

b. 比較形容詞

unu	vva=a	guffa-ku	nar-eer-Ø
この	子ども=TOP	重い-CMPR.ABS	なる-CONT-NPST
この子は重くなった			

続いて、形容詞の絶対形の名詞性について述べる。普通形容詞にしても比較形容詞にしても、絶対形が名詞的にふるまうことは原則的にない⁸⁰。この点は共通する特徴である。

しかし、普通形容詞の絶対形で、ごく限られた語において、名詞らしく格助詞をとる場合がある。今までに確認されたのは、tuusa「遠い」、sikaha「近い」、takaha「高い」、pisaha「低い」、fukaha「深い」などの場所をあらわすものだけである。

(6-37) tuusa=ha mi-iru
 遠い.ABS=ALL 見える-NPST
 遠くに見える

(6-38) sika-ha=na=du mir-ar-i
 近い-ADJVZ.ABS=LOC=FOC 見る-POT-INF
 近くに見える

(6-39) taka-ha=hara ut-iru
 高い-ADJVZ.ABS=ABL 落ちる-NPST
 高いところから落ちる

(6-40) fuka-ha=ha=du mi-iru
 深い-ADJVZ.ABS=ALL=FOC 見える-NPST
 深いところに見える

⁸⁰ 比較形容詞において1つ例外が見つかっている。それは、asi+ffai+piira-ku「お昼ご飯+食べる.INF+涼しい-CMPR」という語であり、これは「11月ごろのお昼ご飯を食べたあとくらいに寒くなること、また、その時期」という意味である。今のところ、この語以外に比較形容詞形成接尾辞で終えるかたちで名詞をつくるものは見つからない。

しかし、通常、形容詞の絶対形は抽象名詞として機能することはない。

- (6-41) *guffa=nu=du tar-an-un
重い.ABS=NOM=FOC 足る-NEG-NPST.DECL
重さが足りない
- (6-42) *taka-ha=nu=du tar-an-un
高い-ADJVZ.ABS=NOM=FOC 足る-NEG-NPST.DECL
高さが足りない

ただし、とりたて助詞が後続するという点においてのみ、形容詞の絶対形には名詞性があると言える。

- (6-43) 「高いか？」と問われて「高くはない」と答える際に
- a. takahaja⁸¹ naanun
taka-ha=a naan-un
高い-ADJVZ.ABS=TOP ない-NPST.DECL
高くはない
- b. takakuja naanun
taka-ku=a naan-un
高い-CMPR.ABS=TOP ない-NPST.DECL
高くはない

6.3.2.2. 終止の接尾辞に関して

続いて、もう 1 つの形態統語的特徴の違いである終止の接尾辞について述べる。普通形容詞は、非過去の場合も過去の場合も終止の接尾辞-n をとることができる。

- (6-44) a. 非過去の場合
uri=a maa-ha-n=do
これ=TOP おいしい-ADJVZ-DECL=SF
これはおいしいよ
- b. 過去の場合
unu izu=a maa-ha-ta-n=do
その 魚=TOP おいしい-ADJVZ-PST-DECL=SF
その魚はおいしかったよ

これに対し、比較形容詞は終止の接尾辞を、非過去の場合にとることができない。過去の場合は可能である。

- (6-45) a. 非過去の場合
*uri=a maa-ku-n=do
これ=TOP おいしい-CMPR-DECL=SF
これはおいしいよ

⁸¹ 形容詞の絶対形にとりたて助詞=a が後続する場合、=ja という異形態があらわれることが多い。通常、/a/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則に従い、/takahaa/や/takakoo/のようになることが考えられ、かつ、そのように実現する場合もあるが、=ja であらわれることのほうが多いようである。ただし、母音同化が生じた実現形が不自然であるというわけではない。

b. 過去の場合

unu izu=a maa-ku-ta-n=do
 その 魚=TOP おいしい-CMPR-PST-DECL=SF
 その魚はおいしかったよ

このように、普通形容詞と比較形容詞のあいだには形態統語的差異が存在する。

なお、普通形容詞と比較形容詞の意味的な差異は、あまり明確ではない。しかし比較形容詞は、その名のとおり、なにかとなにかを比べる際に用いられることが多い。例を以下に示す。

(6-46) unu pusukinna⁸² hanu pusunudu
 unu pusu=kin=a hanu pusu=nu=du
 この 人=より=TOP あの 人=NOM=FOC

umussakuda
 umussa-ku=du ar-Ø
 おもしろい-CMPR.ABS=FOC STATE-NPST
 この人よりあの人のほうがおもしろい

(6-47) uri=kin=a hari=nu=du isika-ku
 これ=より=TOP あれ=NOM=FOC 少ない-CMPR.ABS
 これよりあれのほうが少ない

ただし、比較だからと言って、比較形容詞を用いることが必須であるわけではない。したがって、以下の例文はどちらも文法的である。

(6-48) a. 比較形容詞
 kjoo=kin=a kinoo=nu=du acca-ku-ta
 今日=より=TOP 昨日=NOM=FOC 暑い-CMPR-PST
 今日より昨日のほうが暑かった

b. 普通形容詞
 kjoo=kin=a kinoo=nu=du acca-ta
 今日=より=TOP 昨日=NOM=FOC 暑い-PST
 今日より昨日のほうが暑かった

このような意味的な特徴のためか、自然談話にあらわれる頻度は普通形容詞のほうが高い。約 70 分の会話に形容詞は合計で 38 例あらわれた。このうち、29 例が普通形容詞であり、残る 9 例が比較形容詞であった。自然談話から得られた普通形容詞と比較形容詞の例をそれぞれ示す。

(6-49) 自然談話から得られた普通形容詞の例

a. maruma=nu usi=nu nedan=n mukasi=hara iz-uka
 今=GEN 牛=GEN 値段=ADD 昔=ABL 言う-COND

mee jassa=ti=n iz-ar-un-un mata
 FIL 安い.ABS=QUOT=ADD 言う-POT-NEG-NPST.DECL DISC

⁸² コーダの/n/にトピックマーカ―=a が続くと/n/が挿入されるため、kinna と実現する。詳しくは 2.4.2.を参照のこと。

taka-ha=ti=n iz-ar-un-n
 高い-ADJVZ.ABS=QUOT=ADD 言う-POT-NEG-NPST.DECL
 今の牛の値段も昔と比べると安いとも言えない、高いとも言えない
 (lit. 今の牛の値段も昔から言うと言えない、高いとも言えない)

b. maaha un=nu k-eer-iba=ti
 おいしい.ABS 芋=NOM 来る-CONT-CSL=QUOT
 おいしい芋が来たからと

(6-50) 自然談話から得られた比較形容詞の例

a. ubuza=kin=a mata uva suu-ku
 おじいさん=より=TOP DISC 2.SG 強い-CMPR.ABS
 おじいさんよりあなたが強くて

b. banaa mee mai=du maa-ku
 1.SG.TOP FIL お米=FOC おいしい-CMPR.ABS

mee maruma=a
 FIL 今=TOP
 私はお米がおいしいよ、今は⁸³

以上、普通形容詞と比較形容詞の違いについて述べた。

6.4. 動詞語根から形容詞語幹を派生させる接尾辞

本節では、動詞語根から形容詞語幹を派生させる接尾辞について述べる。この接尾辞には、属性化の-ida-、簡単であることをあらわす-jassa、難しいことをあらわす-inussaそして、願望をあらわす-ipisaがある。これら自体は形容詞活用を示すが、動詞語幹に後接する点に特徴がある。したがって、以下の例のように動詞とではなく、形容詞と同様のふるまいを示す。

(6-51) a. 動詞述語の否定

hari=a saki=ju num-an
 彼=TOP 酒=ACC1 飲む-NEG
 彼は酒を飲まない

b. 形容詞述語の否定

unu isi=a guffa naan
 この 石=TOP 重い.ABS ない
 この石は重くない

c. -ida-付き形式の否定

hari=a saki=ju num-ida-ha naan
 彼=TOP 酒=ACC1 飲む-PS-ADJVZ.ABS ない
 彼は酒をあまり飲まない

また、焦点構造をとる際の助動詞に関しても形容詞と同様である。通常、「書いてい

⁸³ この例が得られた談話では、お米とお芋のどちらがおいしいか、という議論が話者間で行われた。このなかで maa-ku (おいしい-CMPR) が3回用いられた。つまり、自然談話で得られた比較形容詞全9例中3例がここに集中してあらわれていることになる。

る」などの動詞句を「書いてぞいる」のように焦点化する場合は、有生物に用いる存在動詞 **bur** が用いられる。これに対し、**-ida**-付きの形式に焦点標識=**du** を付した場合（通常の形容詞と同じく）、存在動詞 **ar** を用いるのである。

(6-52) a. 動詞の焦点化

hak-i=du **bur-u**
 書く -INF=FOC いる -NPST
 書いている

b. 形容詞の焦点化

guma-ha=du **ar-u**
 小さい -ADJVZ.ABS=FOC ある -NPST
 小さい

c. **-ida**-付き形式の焦点化

hak-ida-ha=du **ar-u**
 書く -IDA-ADJVZ.ABS=FOC ある -NPST
 よく書く

ただし、これらの接尾辞で拡張された形容詞語幹は、重複や複合などを起こさないため、形容詞語幹と特徴をすべて共有するわけではない。

(6-53) a-1. 形容詞語幹 **taka** の重複

taka+taka
 RED+高い
 高く

a-2. 形容詞語幹 **taka** の複合

taka+ki
 高い+木
 高い木

b-1. **-ida**-で拡張された語幹の重複

***num-ida+num-ida**
 RED+飲む-PS

b-2. **-ida**-で拡張された語幹の複合

***num-ida+pusu**
 飲む-PS+人

また、普通形容詞を派生させる際の、形容詞化接尾辞の必要性によって、これらの接尾辞は2つに分類される。**-ida**-は、普通形容詞として機能させるためには、さらに**-ha**が必要である。

(6-54) a. **num-ida-ha-ta**

飲む-PS-ADJVZ-PST
 よく飲んだ

b. ***num-ida-ta**

飲む-PS-PST

これに対し、**-jaasa**、**-inussa**、**-ipisa** は、普通形容詞として機能する場合は**-ha** は必要ではない。下には**-jassa** の例を示すが、**-nussa** も**-ipisa** も同様である。

- (6-55) a. ku-jassa-ta
 こぐ-易い-PST
 こぎやすい
 b. *ku-jassa-ha-ta
 こぐ-易い-ADJVZ-PST

以下、それぞれの接尾辞について述べる。

6.4.1. 属性化接尾辞-ida-

本節では、動詞語根（語幹）から、形容詞語根相当の語幹を派生する接尾辞-ida-について述べる。まず、簡単にどのような現象か確認する。なお、-ida-には異形態はない。

- (6-56) a. ida なし
 hari=a simmuci=ju jum-u
 3.SG=TOP 本=ACC1 読む-NPST
 彼（女）は本を読む
 b. ida つき
 hari=a simmuci=ju jum-ida-ha
 彼=TOP 本=ACC1 読む-PS-ADJVZ.ABS
 彼は本をよく読む

このように、意味としては「頻繁に～する」や「上手に～する」といった意味をあらわす。意味を細分化すると、以下のようである。

- (6-57) ida のいろいろな意味
- a. 量が多いこと
 hari=a saki=ju num-ida-ha
 彼=TOP 酒=ACC1 飲む-PS-ADJVZ.ABS
 彼は酒を大量に飲む
- b. 頻度が高いこと
 hari=a isanaki=ha par-ida-ha
 彼=TOP 石垣=ALL 行く-PS-ADJVZ.ABS
 彼は石垣へよく行く
- c. 上手であること
 hari=a ii=ju hak-ida-ha
 彼=TOP 絵=ACC1 書く-PS-ADJVZ.ABS
 彼は絵を描くのが上手だ
- d. 程度が高いこと
 unu kii=a mu-ida-ha
 この 木=TOP 燃える-PS-ADJVZ.ABS
 この木はよく燃える/燃えやすい火がよく上がる/火力がある

このような意味をあらわすこの接尾辞-ida-については 15 章において詳述する。

6.4.2. 動詞を形容詞に転換する接尾辞-jassa

本節では、動詞を形容詞に転換する接尾辞-jassa について述べる。この形式は、「(値

段が) 安い」という意味の形容詞 *jassa* があるため、接尾辞ではなく複合と考えられるかもしれない。しかし、この「～しやすい」を意味する接尾辞には *-essa* という異形態があり、形容詞 *jassa* 「安い」にはそれがないため、別の接尾辞として認めるものである。*-essa* という異形態は、末尾が子音の A 型動詞においてあらわれる。末尾が母音の動詞には *-jassa*、また、末尾が子音の B 型動詞には *-ijassa* という異形態が用いられる。

- (6-58) a. A 型 (末尾が子音) b. 末尾が母音の動詞 c. B 型 (末尾が子音)
- | | | |
|-----------------|-----------------|------------------|
| <i>bar-essa</i> | <i>ku-jassa</i> | <i>nz-ijassa</i> |
| 割る-やすい | こぐ-やすい | 出る-やすい |
| 割りやすい | こぎやすい | 出やすい |

6.4.3. 動詞を形容詞に転換する接尾辞 *-inussa*

本節で述べる *-inussa* は、前節で述べた *-jassa* と意味的に対になるものである。この *-inussa* は、*nussa* という形容詞がないため、複合ではなく、接尾辞と考える。この接尾辞には異形態はなく、すべての場合に *-inussa* と実現する。

- (6-59) a. A 型動詞 b. B 型動詞
- | | |
|-------------------|------------------|
| <i>hak-inussa</i> | <i>mu-inussa</i> |
| 書く-にくい.ABS | 燃える-にくい.ABS |
| 書きにくい | 燃えにくい |

6.4.4. 動詞を形容詞に転換する接尾辞 *-ipisa*

本節においては、動詞を形容詞に転換する接尾辞 *-ipisa* について述べる。意味としては、願望をあらわす。この接尾辞にも異形態はなく、原則的にすべての場合に *-ipisa* として実現する。

- (6-60) a. A 型動詞 b. B 型動詞
- | | |
|------------------|-----------------|
| <i>num-ipisa</i> | <i>bi-ipisa</i> |
| 飲む-したい.ABS | 酔う-したい.ABS |
| 飲みたい | 酔いたい |

現代標準日本語において、願望をあらわす「～たい」は結合価を変える場合がある。しかし、黒島方言の *ipisa* はそのようなことはなく、もとの動詞文のままの結合価をとる。以下に例を示す。

- (6-61) a. 動詞文
- | | |
|----------------|--------------|
| <i>mizi=ju</i> | <i>num-u</i> |
| 水=ACC1 | 飲む-NPST |
| 水を飲む | |
- b. 接尾辞 *-ipisa* によって派生された形容詞文
- | | |
|----------------|--------------------------------|
| <i>mizi=ju</i> | <i>num-ipisa</i> ⁸⁴ |
| 水=ACC1 | 飲む-願望.ABS |

⁸⁴ この *numipisa* 「飲みたい」にのみ見つかっている変異が存在する。それは、*nuncaa* [*nuntsa: ~ nuntsa:*] というものである。これは、*numipisa* 同様に活用を示す。このような変異は *num* 「飲む」以外に見つかっていない。

7. その他の品詞

本節においては、動詞、名詞、形容詞以外の品詞について述べる。具体的には、連体詞、感動詞、副詞である。連体詞と感動詞は閉じたクラスであり、メンバーは限られる。一方、副詞は非常に雑多なものが混じっており、それらをなんらかの基準で定義するのは難しい。以下、7.1.において連体詞、7.2.において感動詞、7.3.において接続詞、7.4.において副詞について述べる。さらに、形容詞 *haija* 「きれい」を後部要素に持つ副語形容詞について 7.5.において述べる。これは、形容詞語根が後部要素となる複合形容詞であり、語構成上はなんの問題もないのであるが、対格助詞=*ba* と軽動詞を用いて述語化できるという点において他の形容詞とは異なる特徴を持つため、特殊な項目として本章で扱うものである。

7.1. 連体詞

本節では、連体詞について述べる。連体詞は、そのまま名詞句の修飾部を埋める、という機能のみ持つ品詞である。つまり、述部に成りえず、語形変化もしない。

黒島方言における連体詞の数はそもそも少ない。しかし、指示にかかわる連体詞は頻用される。

(7-1) 指示にかかわる連体詞

{	<i>unu</i>	/	<i>kunu</i>	/	<i>hanu</i> }	<i>simmuci</i>
	その		この		あの	本

これらの連体詞は、便宜的に日本語の「この」「その」「あの」と訳を当てているが、機能分担は、日本語のそれとは異なるはずである。*kunu* と *hanu* は近称、遠称として問題なさそうであるが、特に *unu* の範囲が日本語の「その」に比べ広いようである。たとえば、自分の手元にある（そして聞き手からは距離がある）酒に対して、次のように言える。

(7-2) { *kunu* / *unu* } *saki=a* *maa-ha*
この その 酒=TOP おいしい-ADJVZ.ABS
この酒はおいしい

しかし、このような指示詞の究明は今後の課題である。

また、日本語に訳すると「そんな」と「あんな」となる *aja* と *haja* という連体詞も存在する。

(7-3) { *aja* / *haja* } *munu*
そんな あんな もの

他の連体詞は、今のところ、*ii* 「いい」と *deezina* 「大変な」しか見つかっていない。これはそれぞれ日本語の「いい」、「大事な」を外来語として取り入れたか、それらと同源のものと考えられる。しかし、これらの語は黒島方言においては、現代標準日本語の「いい」「大事な」とはそれぞれ異なった特徴を示すため、本節において述べる。

7.1.1. 連体詞 *ii* 「良い」

本節においては連体詞 *ii* 「良い」について述べる。この語は黒島方言においてはまったく語形変化を起こさず、さらに、述部にも成りえない。そのため、連体詞として認めている。

(7-4) ii usi

いい 牛

いい牛

(7-5) *unu usi=a ii=doo

この 牛=TOP いい=SF

この牛はいいよ

ここで、この ii が形容詞語根を前部要素とした複合名詞形成 (3.6.2.を参照のこと) や接頭辞とは異なるものであるということを確認しておく。形容詞語根を前部要素とした複合名詞形成や接頭辞の場合、内部に節を含むことはできない。(7-6、7) に形容詞語根 aka 「赤い」を前部要素とした複合名詞の例を、(7-9、10) に接頭辞 soo 「良い」の例を挙げる。

(7-6) 形容詞語根を前部要素とした複合名詞の例

aka+kin

赤い (語根) +着物

赤衣着物

(7-7) *aka [kinoo ha-uta]節 kin

赤い (語根) 昨日 買う -PST 着物

(7-8) 形容詞による修飾の例

aka-ha-Ø [kinoo ha-uta]節 kin

赤い-ADJZ-NPST 昨日 買う -PST 着物

赤い昨日買った着物

(7-9) 接頭辞の例

soo-usi⁸⁵

いい-牛

いい牛

(7-10) *soo [kinoo ha-uta]節 usi

いい 昨日 買う -PST 牛

まず、形容詞語根を前部要素にとる複合語形成に関して述べる。(7-6) のように、形容詞語根の直後に名詞がたち、複合名詞になるのは可能である。しかし、続く (7-7) に示したように形容詞語根と名詞のあいだになにかしらの要素が入った場合、この修飾構造は非文法的になる。仮に、「赤い昨日買った着物」のような表現をしたい場合は (7-8) に示したような「形容詞+節+名詞」という構造にしなければならない。

続いて、接頭辞の場合について述べる。接頭辞に関しても形容詞語根と同様、接頭辞と名詞語根のあいだになにも他の要素が入ってはならない (7-10)。

これらに対し、今問題にしている ii は、連体修飾節で修飾された名詞句にかかることができる。

(7-11) ii kin

いい 着物

いい着物

(7-12) ii [kinoo ha-uta]節 kin

いい 昨日 買う -PST 着物

いい昨日買った着物

⁸⁵ ii soo-usi という連続が可能かどうかは未確認である。

このようなことから本研究では、ii は接頭辞でも、形容詞語根の特殊な例⁸⁶でもなく、連体詞として考える。

7.1.2. 連体詞 *deezina* 「大変な」

続いて、*deezina* 「大変な」について述べる。この語は、このまま名詞句の修飾部に入る連体詞であり、黒島方言においては頻用される。

- (4-13) a. *zidai=ti iz-u munu=a deezina kutu ar-u=waja*
 時代=QUOT 言う-NPST FN=TOP 大変な こと COP-NPST=SF
 時代というのは大変なことだよ
- b. *deezina mondai=do*
 大変な 問題=SF
 大変な問題よ

しかし、この語は、同源の名詞を持つ点において特徴的である。つまり、*deezi* 「大変」という名詞も黒島方言にはあるのである。しかし、以下に示すとおり、*deezi* は名詞でありコピュラや属格助詞をとる。

- (4-14) a. *unu maan=a deezi=du ar-ta=doo*
 その ころ=TOP 大変=FOC COP-PST=SF
 その頃は大変だったよ
- b. *deezi=nu zidai=na=du maar-i kee*
 大変=GEN 時代=LOC=FOC 生まれる-INF 来る.CONT
 大変な時代に生まれてきたよ

このような事情から、*deezina* を *deezi* の語形変化したものとみなすことも不可能ではない。しかし、黒島方言においてはこの語以外の語に *na* を末尾に持つ連体形式はない。たとえば、同じく日本語の「上等な」と同源であろうと考えられる語 *zjootoo* があるが、これは *na* をとることはない。

- (4-15) *zjootoo { =nu /*=na }* *kin*
 上等=GEN 着物
 いい着物

つまり、この *deezi* はかなり例外的な形式であるため、例外的な名詞と扱っても、連体詞として扱っても記述の経済性としては差はないように思われる。いずれにせよ、この形式は極めて特殊な形式である。

7.2. 感動詞

本節では、感動詞について述べる。感動詞は、それのみで文となる品詞である。修飾部も述部も持たない。以下に例を挙げる。

- (7-16) 感動詞の例
- a. *ou* 「(質問に答えて) はい」
- b. *aai* 「(質問に答えて) いいえ」

⁸⁶ そもそも、ii を語根とする形容詞、たとえば *ii-ha などは黒島方言には存在しない。

- c. mee 「(フィラーとして) もう」
 d. je 「(呼びかけとして) おい！」
 e. ee 「(子供などに) こら！」
 f. tou (なにかを終わりにする際に言うことば。お酒を注がれるときなど)
 g. aga 「痛い！」
 h. agaja 「あちゃー (なにか失敗などが起こった際のことば)」

7.3. 接続詞

本節においては、接続詞について述べる。今のところわかっている接続詞は、*aiti* 「そして」、*airiba* 「だから」、*airunu* 「だけど」の3つである。接続詞は、節の先頭にあらわれ、節と節の関係をあらわす。そのみで一語となり、修飾されることはない。

- (7-17) a. *muuru* *sima+zima=nu* *funi=a* *tumar-i* *si-ta* *isanaki=na*
 みんな RED+島=GEN 船=TOP 泊まる-INF LV-PST 石垣=LOC

aiti *naacaa* *mata* *ki-i*
 そして 翌朝 また 来る-INF
 みんな島々の船は泊まった、石垣に。そして翌朝また来て、

- b. *airiba=du=ju*

だから=FOC=SF
 だからよ (相手の発言に同意したことをあらわす)

- c. *airunu* *maruma=nu* *juu=a* *mee*
 だけど 今=GEN 世=TOP もう
 だけど、今の世の中はもう、

airiba や、*airunu* は、コンピュータを用いた *ai ariba* や *ai arunu* が語源と考えられるが、共時的には分析不可能であるため、このようなかたちで接続詞として扱う。仮に、*ai* にコンピュータが続くとすると、共時的には *ai jariba* などというかたちが想定される。しかし、このかたちが用いられることはない (この形態音韻規則に関しては 2.4.2.、特に 2.4.2.2. を参照のこと)。

7.4. 副詞

本節では副詞について述べるが、副詞を積極的に定義することは困難である。これまでに述べた品詞のどれにも当てはまらない語で、他の要素を修飾する語を副詞とする。機能としては、述部や節、文全体を修飾する。また、形容詞語根の重複形は副詞として機能するため、本節で扱う。

- (7-18) *unu* *pusu=a* *juu* *jaa=na* *bur-Ø*
 この 人=TOP よく 家=LOC いる-NPST
 この人はよく家にいる

- (7-19) *mazi* *baa* *niv-uka* *fuk-as-i* *waar-i=ju*
 もし 1.NOM 寝る-COND 起きる-CAUS-INF HON-INF=SF
 もし私が寝たら起こしてくださいね

- (7-20) takaa+taka tub-i bur-Ø
 RED+高い 飛ぶ-INF PROG-NPST
 高く飛んでいる

本節では意味・機能上の違いから、呼応の副詞、情態副詞、程度副詞に分けて述べる。

まず、呼応の副詞呼応の副詞について述べる。呼応の副詞とは、その副詞が用いられた場合に述部の肯否の予想ができるものである。たとえば、以下の例で用いられている副詞 jooini で修飾された述部は必ず否定でなければならない。

- (7-21) unu ki=a jooini bur-an-un=do
 この 木=TOP なかなか 折れる-NEG.NPST-DECL=SF
 この木はなかなか折れないよ

- (7-22) *unu ki=a jooini bur-u-n=do
 この 木=TOP なかなか 折れる-NPST-DECL=SF
 (この木は簡単に折れるよ)

今のところ、呼応の副詞は jooini のほかに、matakutu 「決して」と jadin 「必ず」が見つまっている。matakutu は否定、jadin は肯定の述部がそれぞれあらわれる。以下、例を挙げる。

- (7-23) banaa matakutu num-an-un
 1.SG.TOP 決して 飲む-NEG-NPST.DECL

- (7-24) uri=a jadin fun=joo
 3.SG.=TOP 必ず 来る.NPST.DECL=SF
 彼は必ず来るよ

また、述部や節のあらわすイベントのありかたを修飾する副詞として情態副詞があげられる。以下、例を示す。

- (7-25) jarabina=du arak-u=waja
 ゆっくり=FOC 歩く-NPST=SF
 ゆっくり歩くよ

- (7-26) sinni denwa=ba si-i pukorasa=ju
 わざわざ 電話=ACC2 する-INF ありがたい=SF
 わざわざ電話をくれてありがとうございます

- (7-27) ai si-ti sudat-ita=do
 そう する-SEQ1 育てる-PST=SF
 そうして育てたよ

形容詞語根の重複も意味、機能上は情態副詞である。これについては、7.4.2.において述べる。

- (7-28) taka+taka=du tub-i bur-Ø
 RED+高い=FOC 飛ぶ-INF PROG-NPST
 高く飛んでいる

最後に程度副詞について述べる。程度副詞は程度性のある述部を修飾する。

- (7-29) maami ha-iba=du=ka masi?
 もっと 買う-CSL=FOC=INDF いい
 もっと買ったらいい？

- (7-30) saa uma=na=du asab-uta
 いつも あそこ=LOC=FOC 遊ぶ-PST
 いつもあそこで遊んだ

一部の副詞は、属格助詞=nu をとって、名詞の修飾部にたつことができる。

- (7-31) a. 節を修飾する場合
paanti makkon=a ubu-ku=du ar-ta
 昔 ヤシガニ=TOP 大きい-CMPR.ABS=FOC STATE-PST
 昔、ヤシガニは大きかった
- b. 名詞を修飾する場合
paanti=nu makkon=a ubu-ku=du ar-ta
 昔=GEN ヤシガニ=TOP 大きい-CMPR.ABS=FOC STATE-PST
 昔のヤシガニは大きかった
- (7-32) a. 節を修飾する場合
unu ffa=a uboobi nar-eer-Ø
 この 子ども=TOP 大きく なる-CONT-NPST
 この子は大きくなった
- b. 名詞を修飾する場合
hama=na uboobi=nu isi=nu ar-u=wara
 あそこ=LOC 大きい=GEN 石=NOM STATE-NPST=SF
 あそこに大きな石があるでしょ

7.4.1. 副詞を述語化する場合

この章で述べる他の品詞（連体詞、感動詞、接続詞）とは異なり、副詞は述語になることができる。この際、副詞は名詞とまったく同じ方法で述語化される。つまり、コンピュータを用いて述語化するのである。

- (7-33) 連用修飾用法としての副詞
mankka par-i
 まっすぐ 行く -IMP
 まっすぐ行け
- (7-34) 副詞が述部となった場合
- a. 肯定・非過去・主節末
unu mici=a mankka=dora
 この 道=TOP まっすぐ=SF
 この道はまっすぐだよ
- b. 肯定・過去・主節末
unu mici=a mankka=du ar-ta=dora
 この 道=TOP まっすぐ=FOC COP-PST=SF
 この道はまっすぐだったよ
- c. 否定・非過去・主節末
unu mici=a mankka ar-an-un=dora
 この 道=TOP まっすぐ COP-NEG-NPST.DECL=SF
 この道はまっすぐでないよ

d. 肯定・非過去・理由の副詞節末

unu mici=a mankka ar-iba maciga-an-un=dora
 この 道=TOP まっすぐ COP-CSL 間違う -NEG-NPST.DECL=SF
 この道はまっすぐだから迷わないよ

ここで注意が必要なのは、副詞を述語化する際に用いるのはコピュラであって、状態動詞ではない、という点である。この違いは、上 (7-34c) に示した、否定の場合にあらわれている。つまり、仮に状態動詞が用いられたとしたら、否定をあらわす場合、否定の存在動詞 *naan* が使われるはずである。しかし、それは実際は非文法的とされる。

(7-35) *mankka naan
 まっすぐ STATE.NEG
 まっすぐでない

7.4.2. 形容詞語根の重複

本節においては、形容詞語根の重複について述べる。形容詞語根は重複を起こす。これは、6章で述べた2つの語根類のいずれも同じである。グループ A、B それぞれの重複の例を示す⁸⁷。

(7-36) a. グループ A 形容詞の重複
 語根 *guffa* 重複 *guffa+guffa*
 重い
 b. グループ B 形容詞の重複
 語根 *guma* 重複 *guma+guma*
 小さい

このような形容詞の重複形は副詞として機能する。

(7-37) *guma+guma* *hak-iba*
 RED+小さい 書く -IMP
 小さく書け
 (7-38) *kjuu=a* *naa+naa* *par-ar-ita*
 今日=TOP RED+長い 行く/走る -POT-PST
 今日は長く走れた

いくつかの副詞同様、属格助詞 *nu* をともなって、名詞を修飾することも可能である。

⁸⁷ ごくわずかな語にしかない、形容詞語根を利用したように思われる副詞の派生法も存在する。それは、以下のような例である。

- (a) 語根 *ubu* 「大きい」 重複 *uboobi*
 (b) 語根 *imi* 「少ない」 重複 *imeemi*
 (c) 語根 *ura* 「多い」 重複 *uraari*

これらは、すべて、①1つ目の語根の末尾に *a* を付す②2つ目の語根の頭の母音を落とす③2つ目の語根の末尾母音を *i* にする (*i* のものはそのまま *i* にとどめる)、という構成になっている (母音の同化については、2.4.2.を参照のこと)。これら3つにはそれが共通しており、規則的である。しかし、これら以外の形容詞語根にはこのような操作は不可能であるため、重複形と思しき *uboobi*、*imeemi*、*uraari* はすべて単独の副詞として本稿では扱う。

- (7-39) guma+guma=nu an
 RED+小さい =GEN アリ

また、形容詞語根にもなりうる色名詞も重複形がある。特に、「白」と「黒」に関しては語根の単独形や形容詞よりも重複形のほうが好まれるようである。この際、母音において特殊な交替を見せる。ただし、基底の有声二重阻害音と短母音の連続が、単子音と長母音で実現することと、複合語境界のあとなどで無声化することは 2.4.10.において示した。また、詳細は 11 章で述べる。

- (7-40) 「白」
 語根 zzu 重複 zoosso

- (7-41) 「黒」
 語根 vvu 重複 vooffo

- (7-42) zoosso nuuriba
 zzu+zzu nuur-iba
 RED+白 塗る-IMP
 白く塗れ

- (7-43) zoossonu maja
 zzu+zzu=nu maja
 RED+白=GEN 猫
 白い猫

7.5. 形容詞 haija を後部要素に持つ複合形容詞

本節においては、動詞を前部要素に、形容詞 haija 「きれい」を後部要素に持つ複合形容詞について述べる。すでに 3.6.において述べたとおり、黒島方言においては「動詞+形容詞」の複合はまったく活発ではない⁸⁸。ただし、例外的に「動詞+haija」が用いられ、かつ、談話に頻出するため、ここでとりあげる。まず、例を示す。

- (7-44) banaa par-i+haija-ta-n=do
 1.SG.TOP 走る-INF+きれい-PST-DECL=SF
 私は走りがきれいだったよ

- (7-45) hanu pusu=kin=a unu pusu=a
 あの 人=より=TOP この 人=TOP

par-i+haija-ku=du ar-ta
 走る-INF+きれい-CMPR.ABS=FOC STATE-PST
 あの人よりこの人のほうが走るのがきれいだった

本節においては、この複合形容詞の特徴について述べる。この複合形式は基本的には形容詞と同じふるまいを見せる。しかし、一部、通常の形容詞とは異なる点があるため、本章において、特別な表現として扱うこととした。

⁸⁸ haija 「きれい」以外の形容詞がこの複合の後部要素になることはない。ただ、paaha 「はやい」だけが例外的に par-i+paaha 「走る-INF+はやい」というかたちで確認されている。しかし、この複合は、par-i+paaha=ba si というように軽動詞を用いて述語化されることはない。したがって、haija を後部要素に持つ複合とは異なる性質を持つものと思われる。

まず、この表現を複合と認めるのは、アクセント単位として1つになるためである。たとえば、arak-i (歩く-INF)「歩き」はこのまま発音された場合、ra のモーラと ki のモーラの間でピッチの降下がある。しかし、haija と複合した場合この降下がなくなり、haija のほうの降下のみが観察される。

- (7-46) a. araki LHL 「歩き」
 b. haija HLL 「きれい」
 c. arakihaija LHHLL 「歩くのがきれい」

このようにアクセント単位が1つになるため、この表現は複合として考えている。

さらに上に示したとおり、複合の結果、形容詞と同じ形態的特徴を示すため、全体として複合形容詞として認めている。活用した例をもう1つ以下に示す。

- (7-47) unu pusu=a par-i+haija-riba unu pusu=nu misar-Ø
 この 人=TOP 走る-INF+きれい-CSL この 人=NOM いい-NPST
 この人は走るのがきれいだから、この人がいい

以上示したように、この表現は複合形容詞と考えてよい。ただし、このように使用される「動詞+haija」の複合形容詞であるが、この表現は一部特殊なふるまいを見せる。それは、格助詞=ba と軽動詞をとって、述部化することができる、という点である。なお、この際に用いられる格助詞は必ず=ba であり、他の格助詞やとりたて助詞などは非文法的となる。

- (7-48) (豊年祭で孫が大役をつとめて、かつ集落が勝利を収めたことに関して)
 par-i+haija=ba si-i nuur-i+haija=ba si-i
 走る-INF+きれい.ABS=ACC2 LV-INF 乗る-INF+きれい.ABS=ACC2 LV-INF

 ubu+hac-i ara-hac-i si-tara sanija-ta=wa
 大きい+勝つ-INF 新しい-勝つ-INF LV-PST.CSL うれしい-PST=SF
 きれいに走って、きれいに乗って、大勝したので、うれしかったよ

- (7-49) *par-i+haija=du si-i
 走る-INF+きれい.ABS=FOC LV-INF

- (7-50) *par-i+haija=ju si-i
 走る-INF+きれい.ABS=ACC1 LV-INF

なお、複合形容詞でない場合は、このようなことは不可能である。

- (7-51) *haija=ba si-ta
 きれい.ABS=ACC2 LV-PST

以上示したとおり、この対格助詞=ba をとるという点はこの構造のきわめて特徴的な点である。このような特徴を備えているため、複合形容詞とは認めつつも、その他の品詞を扱う本章においてとりあげることにした。

8. 助詞

本章においては、黒島方言の助詞について述べる。助詞とは、自由形式にのみ後接する拘束形態素である。また、接辞のホストは限定されているのに対し、助詞のホストは比較的多様である点も特徴である。

黒島方言の助詞は5つの類に分けられる。すなわち、格助詞、属格助詞、とりたて助詞、接続助詞、終助詞の5つである。まず、それぞれの特徴をまとめておく。

(8-1) それぞれの助詞の特徴

- 格助詞 : 名詞に後接し、その名詞と述部の関係をあらわす。
- 属格助詞 : 名詞に後続し、その属格付き名詞句は別の名詞を修飾する。
- とりたて助詞 : 多様な要素に後接し、その要素のもつ情報上の特徴をあらわす。
- 接続助詞 : 節に後接し、その節と続く節との関係をあらわす。
- 終助詞 : 文末に生起し、主に聞き手への働きかけなどをあらわす。

これらのうち、特異なのはとりたて助詞である。それ以外の格助詞、属格助詞、接続助詞、終助詞は、意味の違いを持ちつつも、すべて統語的な情報を同時に持っている。たとえば、主格=nuであれば、後接した名詞句が主語であることを示しつつ動詞と名詞の文内の統語的な関係をあらわすし、接続助詞=juntiであれば、「理由」という意味を持ちながら、その節が従属節であることをあらわす。もっともわかりやすいのは終助詞で、これらの助詞が現れた場合、そこは必ず文末である。しかし、とりたて助詞はこのような性質を持っていない。上述((8-1))したように、とりたて助詞は、後接した要素の情報構造上の特徴をあらわすものである。したがって、とりたて助詞がついたところで統語的な情報はそこから読み取ることはできない。たとえば、以下の例のようである。

- (8-2) a. unu pusu=a saki num-ida-ha
この 人=TOP 酒 飲む-PS-ADJVZ.ABS
この人はよく酒を飲む
- b. hak-i=a suun-u=nu jum-i=du si-iru
書く-INF=TOP LV.NEG-NPST=ADVRS 読む-INF=FOC LV-NPST
書きはしないが読みはする

(8-2a) の場合、名詞句に後接し、さも、それと動詞句の関係をあらわしているように見える。しかし、(8-2b) を見てみると、同じ主題助詞の=a が軽動詞構文の間にあらわれていて、統語的環境は(8-2a) とまったく異なる。このように、とりたて助詞には統語的情報は含まれておらず、情報上の特徴のみを標示するものである、と言える。

以下、8.1.において格助詞、8.2.において属格助詞、8.3.においてとりたて助詞、8.4.において接続助詞、8.5.において終助詞について述べる。

8.1. 格助詞

本節では、黒島方言の格助詞について述べる。格助詞は、名詞句と述部の関係を示す。まず、まとめて表 8-1 に示す。

表 8-1 格助詞

	助詞	機能
主格	=nu	S/A
対格 1	=ju	O (S)
対格 2	=ba	O (S)
与格	=ni ~ =n	着点
奪格	=hara	起点
向格	=ha	方向
場所格	=na	場所
具格	=si	道具
共格	=tu	共同作業
限界格	=baaki	移動の着点
比況格	=nin	比喩の対象
比較格	=kin	比較の対象

8.1.1. 主格=nu

主格助詞=nu はホスト名詞句が他動詞主語もしくは自動詞主語であることをあらわす。

(8-3) a. 自動詞主語

sinsi=nu budur-ta
 先生=NOM 踊る-PST
 先生が踊った

b. 他動詞主語

sinsi=nu hari=ju sitak-uta
 先生=NOM 3.SG.=ACC1 たたく-PST
 先生が彼をたたいた

8.1.2. 対格 1=ju

対格助詞=ju はホスト名詞句が他動詞目的語であることを主にあらわす。対格助詞 2=ba との違いは明確ではなく、今後の課題である。

(8-4) sinsi=nu izu=ju foos-ita
 先生=NOM 魚=ACC1 釣る-PST
 先生が魚を釣った

また、極めて例外的ではあるが、他動性の低い自動詞主語のマーキングに=ju が用いられることもある。自然談話で観察された例をあげる。

(8-5) suidoo=ju=n⁸⁹ naan-iba
 水道=ACC1=ADD ない-CSL
 水道もないので

ただし、この自動詞主語に=ju を用いるのは、内省を問う調査では非文法的と判断される。

⁸⁹ 自然談話では、自動詞主語の=ju がすべて=ju=n という連続であらわれた。この点は今後注意が必要かもしれない。

8.1.3. 対格 2=ba

対格助詞 2=ba も原則的には他動詞の目的語をマークする。

- (8-6) toofu=ba sukur-i bur-Ø
豆腐=ACC2 作る-INF PROG-NPST
豆腐を作っている

ただし、対格助詞 2=ba は統語的制限があり、動詞の不定形の節の内部に生起するのが自然である⁹⁰。

- (8-7) mizi=ba hakub-i
水=ACC2 運ぶ-INF
水を運んで

また、対格 1=ju 同様、他動性の低い自動詞の主語のマーキングにも対格 2=ba が用いられることがある。自然談話で観察された例が以下のものである。

- (8-8) abuku=ba nz-i=du
泡=ACC2 出る⁹¹-INF=FOC
泡が出て

8.1.4. 与格=ni

与格=ni はものなどの移動の着点をあらわす。3 項文の間接目的語のマーキングに用いられる。異形態として、=n があり、これらは自由変異である。

- (8-9) sinsi=ni (=n) kin=ju batas-ita
先生=DAT 着物=ACC1 渡す-PST
先生に着物を渡した⁹²

また、受け身文の動作主を標示するのも与格=ni である。

- (8-10) pan=ni fu-ar-ita
ハブ=DAT 噛む-PASS-PST
ハブに噛まれた

⁹⁰ この点は下地理則氏のご教示による。氏の研究対象である南琉球宮古伊良部方言においても同様の現象が観察されるようである。ただし、黒島方言においては、内省を問う調査を行うと、=ba が不定形を用いない場合にも文法的と判断されることもある。また、70 分の自然談話に計 102 の目的語を標示する=ba が確認されたが、1 例を除いて、不定形を用いた表現、もしくは不定形を起源に持つと思われる表現が述部であった。例外は以下のような例である。

- a. un=ba=du sukur-ka
芋=ACC2=FOC 作る-COND
芋を作ると

⁹¹ nz は、「出す」ではなく「出る」を意味する自動詞の語根である。「出す」には nz-as (出る-CAUS) を用いる。

⁹² この例文のように授受をあらわす場合、受け手をあらわすのに与格=ni も使えるが、向格=ha も同様に文法的である。sinsi=ha batasita 「先生へ渡した」

8.1.5. 奪格=hara

奪格=hara は移動の起点などをあらわす。この=hara は先頭に/ha/を持つ拘束形態素の形態音韻規則に従う (2.4.3.を参照のこと)。

- (8-11) maruma=hara hak-i
今=ABL 書く -IMP
今から書け

なお、標準日本語では「に」であらわされる授受の出どころは、与格=ni ではなく、この奪格=hara で標示される。

- (8-12) sinsi=hara simmuci=ju taboor-ar-ita
先生=ABL 本=ACC1 たまわる -PASS-PST
先生から本をいただいた

8.1.6. 向格=ha

向格=ha は移動などの方向をあらわす。この助詞も、先頭に/ha/を持つ拘束形態素の形態音韻規則に従う (2.4.3.を参照のこと)。

- (8-13) isanaki=ha par-i
石垣=ALL 行く -IMP
石垣へ行け

8.1.7. 場所格=na

場所格=na は動作や、存在の場所をあらわす。したがって、標準日本語にある「に」(存在の場所)と「で」(動作の場所)の区別は黒島方言にはない。

- (8-14) a. jaa=na bur-Ø=doo
家=LOC いる -NPST=SF
家にいるよ
- b. isanaki=na haimunu=ba si-i bur-ta
石垣=LOC 買い物=ACC2 する -INF PROG-PST
石垣で買い物をしていた

8.1.8. 具格=si

具格=si は、手段や道具などをあらわす。

- (8-15) fudi=si tigami=ju hak-uta
筆=INST 手紙=ACC1 書く -PST
筆で手紙を書いた

また、量などをあらわすこともある。

- (8-16) muuru=si gjuusa=kaja
全部=INST いくら=SF
全部でいくらかな

8.1.9. 共格=tu

共格=tu は共同作業や、セットになるものをあらわす。

- (8-17) sinsi=tu mazun par-i
先生=COM 一緒に 行く -IMP
先生と一緒にいけ
- (8-18) uri=tu kuri=tu=si gjuusa=kaja
それ=COM これ=COM=INS いくら=SF
それとこれとでいくらかな

8.1.10. 限界格=baaki

限界格=baaki は移動の着点などをあらわす。

- (8-19) isanaki=baaki=a icizikanhan hakar-ta
石垣=LMT=TOP 一時間半 かかる -PST
石垣までは一時間半かかった

8.1.11. 比況格=nin

比況格助詞=nin は、なにかをなにかに例える際に用いられる。

- (8-20) uri=a izu=nin=du u-u=do
彼=TOP 魚=ように=FOC 泳ぐ -NPST=SF
彼は魚のように泳ぐよ

8.1.12. 比較格=kin

比較格=kin はなにかをなにかと比べる際に用いられる。

- (8-21) un=kin mai=du masi
芋=より 米=FOC いい
芋より米がいい

8.2. 属格助詞

属格助詞は、名詞句と名詞句の修飾関係をあらわす。黒島方言の属格助詞は 2 つあり、=nu と=a である。=a はかなり限られた場合にのみ使用可能である。=a は、呼びかけに用いることができる名詞と代名詞にのみ後接する。これに対し、=nu はすべての名詞句に後接しうる。さらに、=nu は、助詞付き名詞句にも後接しうる。

- (8-22) 属格 =nu
- a. 普通名詞に後接する場合
- gakko=nu simmuci
学校=GEN 本
学校の本

b. 代名詞に後接する場合

ba⁹³=nu simmuci

1.SG.=GEN 本

私の本

c. 呼びかけに用いる名詞に後接する場合

sinsi=nu simmuci

先生=GEN 本

先生の本

d. 呼びかけに用いる固有名詞に後接する場合

wakacuki=nu kin

若月=GEN 着物

若月の着物

e. 助詞付き名詞句に後接する場合

hanu pusu=hara=nu tigami

あの 人=ABL=GEN 手紙

あの人からの手紙

(8-23) 属格 =a⁹⁴

a. 呼びかけに使える名詞に後接する場合

sinsi=a simmuci

先生=GEN 本

先生の本

b. 呼びかけに使える固有名詞に後接する場合

wakacuki=a simmuci

若月=GEN 本

c. 代名詞に後接する場合

uri=a simmuci

3.SG.=GEN 本

彼の本

8.3. とりたて助詞

とりたて助詞は、情報構造上の機能を示す助詞である。まず、とりたて助詞の統語的特徴について述べる。他の助詞が、かなり限定された要素にしか後接しえないのに対し、とりたて助詞はそのホストの多様性が特異である。ここでは、その統語位置について述べる。焦点助詞=du を例に示す。

(8-24) とりたて助詞の統語位置

a. 名詞（項）に後接

simbun=du jum-uta

新聞=FOC 読む-PST

新聞を読んだ

⁹³ 1 人称単数代名詞に属格を付す場合、ba という異形態に付す。1 人称単数代名詞の異形態については4.2.1.参照のこと。ただし、

⁹⁴ 属格助詞=a は/a/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則に従う。2.4.2.を参照のこと。

b. 名詞（項以外）

kjuu=du isanaki=ha getta⁹⁵
 今日=FOC 石垣=ALL 行った
 今日、石垣へ行った

c. 代名詞

baa=du isanaki=ha getta
 1.SG.NOM=FOC 石垣=ALL 行った
 私が石垣へ行った

d. 形容詞

unu pusu=a suusa=du ar-ta
 この 人=TOP 強い.ABS=FOC STATE-PST
 この人は強かった

e. 動詞

maruma arak-i=du bur-Ø
 今 歩く-INF=FOC PROG-NPST
 今、歩いている

f. 副詞

ai=du si-iri
 そう=FOC する-IMP
 そうしなさい

g. 格助詞

hanu pusu=a fukinaa=ha=du getta
 あの 人=TOP 沖縄=ALL=FOC 行った
 あの人は沖縄へ行った

h. とりたて助詞

harada=tanka=du getta
 原田=だけ=FOC 行った
 原田だけが行った

このように、とりたて助詞はさまざまな要素に後接しうる。ただし、すべてのとりたて助詞が同様の分布を示すわけではない。特に、(8-24h) で示したようなとりたて助詞動詞が続くようなものは、焦点の助詞=du が 2 番目にくる場合しか許されない。また、主題助詞=a は主格助詞=nu に後接しない、など、制限がある。しかしこれらのとりたて助詞の統語的制限については今後の研究が必要である。現在わかっている範囲で、主題助詞=a と焦点助詞=du がどのような格助詞に続きうるか、表 8-2 に示す。

表 8-2 格助詞と主題助詞、焦点助詞との共起

	主題助詞	焦点助詞
場所格	=na=a ([naja]と実現)	=na=du
向格	=ha=a ([haja]と実現)	=ha=du
主格	*=nu=a	=nu=du
対格 1	*=ju=a	=ju=du
対格 2	*=ba=a	=ba=du

⁹⁵ getta 「行った」は、非過去を見つけれられていない。意味としては、どこかへ行って帰ってきた場合の「行った」のようである。ここでは形態素分析せず示す。

とりたて助詞の一覧を以下の表 8-3 に示す。

表 8-3 とりたて助詞

	助詞	機能
主題	=a	主題
追加	=n	追加、並立、「も」
焦点	=du	焦点
不定	=ka	疑問の主題
限定	=tanka	限定「だけ」
極端	=assan	極端な例示「さえ」

以下、それぞれの例を示す。

8.3.1. 主題助詞=a

主題助詞=a は、文の主題となる要素に後接する。

- (8-25) unu saki=a maa-ha
 この 酒=TOP おいしい-ADJVZ.ABS
 この酒は美味しい

この主題助詞=a は、先頭に/a/を持つ拘束形態素の形態音韻規則（詳しくは 2.4.2.参照のこと）に従うが、必ず異なるふるまいを示すケースがある。それは、助詞に、この主題助詞が後続した場合である。この場合、主題助詞は ja という異形態をとることが多い。

- (8-26) isanakeheja paranun
 isaknaki=ha=a par-an-u-n
 石垣=ALL=TOP 行く -NEG-NPST-DECL
 石垣へは行かない

8.3.2. 追加助詞=n

追加助詞=n は、日本語の「も」に相当し、前提となる事態に加える場合に用いられる。

- (8-27) izu=n taku=n tur-ta
 魚=ADD たこ=ADD とる-pst
 魚もたこもとった

この=n「も」は、=nun という異形態も持つ。これは、前の要素が/n/を末尾に持つ場合の異形態である。

- (8-28) aminu vuu pinnun an
 ami=nu vv-u pin=n ar-Ø
 雨=NOM 降る-NPST 日=ADD ある-NPST
 雨が降る日もある

8.3.3. 焦点助詞=du

焦点助詞=du は文中の焦点となる要素に後接する。

- (8-29) kjuu=du isanaki=ha par-ta
今日=FOC 石垣=ALL 行く-PST
(昨日ではなく) 今日、石垣へ行った

8.3.4. 不定助詞=ka

不定助詞=ka は疑問文の主題になる要素に付される。

- (8-30) harada=ka maa=na=du tumar-i bur-a
原田=INDF どこ=LOC=FOC とまる-INF PROG-WH
原田はどこに泊まっているの？

この不定助詞=ka は、主題の助詞=a に続くこともある。

- (8-31) a. jum-as-u munu=a=ka nuu=ja
読む-CAUS-NPST もの=TOP=INDF 何=WH
読ませるのはどれか？
b. uri=a=ka uvaa kin?
これ=TOP=INDF 2.SG.GEN 着物
これはあなたの着物？

8.3.5. 限定助詞=tanka

限定助詞=tanka は限定をする要素に付される。

- (8-32) jarabi=tu u-i+pusu=tanka sima=na nohor-i
子供=COM 老いる-INF+人=だけ 島=LOC 残る-INF
子供と老人だけ島に残り

8.3.6. 極端助詞=assan

極端助詞=assan は極端な例を示す際に用いられる。

- (8-33) mizi=assan num-an-ta-n
水=さえ 飲む-NEG-PST-DECL
水さえ飲まなかった

この=assan は/a/を先頭に持つ拘束形態素であるため、その形態音韻規則に従う。そのため、mizi=assan 「水さえ」は[mizis:an]と発音される。

8.4. 接続助詞

接続助詞は、節と節の関係を示す助詞である。以下、表 8-4 に示す。

表 8-4 接続助詞

助詞	機能
=nu	逆接
=junti	理由
=nu	不定の節
=ti	引用

これらの助詞は接続助詞としてまとめられるが、性質が異なる。それは、前にとりうる節の違いによる。=nu（逆接）、=junti、=nu（不定）は時制接尾辞で終える節しか前部要素にとれないが、=ti は終止接尾辞と終助詞までを含んだ節を前部要素にとりうる。=nu（逆接）と=ti の例を示す。

(8-34) =nu（逆接）の例

a. 時制接尾辞で終える節

kinoo=a piija-ta=nu kjuu=a acca-n
 昨日=TOP 寒い-PST=ADVRS 今日=TOP 暑い-DECL
 昨日は寒かったけど、今日は暑い

b. 終止接尾辞で終える節

*kinoo=a piija-ta-n=nu kjuu=a acca-n
 昨日=TOP 寒い-PST-DECL=ADVRS 今日=TOP 暑い-DECL

c. 終助詞で終える節

*kinoo=a piija-ta-n=do=nu kjuu=a acca-n
 昨日=TOP 寒い-PST-DECL=SF=ADVRS 今日=TOP 暑い-DECL

(8-35) =ti の例

a. 時制接尾辞で終える節

kinoo=a piija-ta=ti iz-uta
 昨日=TOP 寒い-PST=QUOT 言う-PST
 昨日は寒かったって言った？

b. 終止接尾辞で終える節

kinoo=a piija-ta-n=ti iz-uta
 昨日=TOP 寒い-PST-DECL=QUOT 言う-PST
 昨日は寒かったって言った？

c. 終助詞で終える節

kinoo=a piija-ta-n=do=ti iz-uta
 昨日=TOP 寒い-PST-DECL=SF=QUOT 言う-PST
 昨日は寒かったよって言った？

以下、それぞれ示す。

8.4.1. 逆接助詞=nu

逆接の接続助詞は、前件からの予想に反することが後件に来ることをあらわす。

(8-36) vva-i+tuus-i bur-u=nu maame vva-ar-iru
 食べる-INF+通す-INF PROG-NPST=ADVRS まだ 食べる-POT-NPST
 ずっと食べているけど、まだ食べられる

しかし、=nu の用法は、逆接ばかりではないかもしれない。この点は注意すべきであり、今後の課題である。たとえば、以下のような例がある。

(8-37) a. maa=a sina-ha=nu
孫=TOP 幼い-ADJVZ.ABS=ADVRS

unu hon=a jum-iss-an-un
この 本=TOP 読む-ABILT-NEG-NPST.DECL
孫は幼いから、この本は読むことができない

8.4.2. 理由助詞=junti

理由助詞=junti は、前件が後件の理由となる場合に用いられる。

(8-38) nooka=nu=du nihjaku =a ar-eer-Ø=junti
農家=NOM=FOC 200=TOP ある-CONT-NPST=CSL

heekin si-ka gotoo
平均 する-COND 五頭
農家が 200 はあったから、平均すると五頭

8.4.3. 不定助詞=nu

不定助詞=nu は節の内容が未確定である場合に用いる。例を示す。

(8-39) a. uvaa uri=nu jamatu=ha par-u=nu par-an=nu
2.SG 彼=NOM 内地=ALL 行く-NPST=INDF 行く-NEG=INDF

zz-eer-Ø-n
知る-CONT-NPST-DECL
あなた、彼が内地に行くかどうか知っている？

b. mata ubu+nai=nu fur-Ø=nu bahar-an-un
また 大きい+地震=NOM 来る-NPST=INDF わかる-NEG-NPST.DECL
また大きい地震が来るかもしれない

8.4.4. 引用助詞=ti

引用助詞=ti は、引用した節に付される。

(8-40) ou=ti iz-i waar-ta
はい=QUOT 言う-INF HON-PST
はい、と言ってらっしゃった

8.5. 終助詞

終助詞は文末に立ち、話者の命題や、聞き手に対する態度をあらわす。ただし、=ju に関しては文末以外にもあらわれる。この点については、以下に述べる。それぞれの意味の記述は今後の課題である。表 8-5 にまとめ、以下、例を示す。

表 8-5 終助詞

助詞	機能
=doo	相手にとっての新情報
=ju	相手にとっての新情報+丁寧
=ra	疑問詞疑問
=ja	疑問詞疑問
=ba	意外性
=waja	確認
=saa	話者のみの判断
=kaja	疑い
=tu	伝聞
=joo	丁寧な命令
=ka	疑問
=jara	軽い驚き

8.5.1. 新情報の終助詞=doo

終助詞=doo は、聞き手が、その命題が相手にとって新情報である、と判断した場合に用いられる。

- (8-41) uri=a maa-ha=doo
 これ=TOP おいしい-ADJVZ.ABS=SF
 これはおいしいよ。

8.5.2. 丁寧な新情報の終助詞=ju

終助詞=ju は、命題に対する話者の態度は=doo と変わらないが、聞き手に対してより丁寧になる。したがって、目上などには=doo ではなく=ju を用いる。

- (8-42) 丁寧な念押し ju
 banaa sinsi=ju
 1.SG.TOP 先生=SF
 私は先生ですよ

この=ju は、間投助詞としての機能も持つ。今のところ、黒島方言で見つかった唯一の間投助詞である。

- (8-43) kjuu=a acca-riba=ju jaa=na=du bur-Ø=ju
 今日=TOP 暑い-CSL=間投助詞 家=LOC=FOC いる-NPST=SF
 今日は暑いからね、家にいるよ

8.5.3. 疑問詞疑問助詞=ra

助詞=ra は疑問詞疑問文の末尾に用いられる。動詞の疑問詞疑問接尾辞とは共起しない。

- (8-44) a. uri=a nuu=ti=du iz-u=ra
 これ=TOP なに=QUOTE=FOC 言う-NPST=WH
 これはなんと言うか？

b. num-i+pazim-i=a=ka ici=ra
 飲む-INF+始める-INF=TOP=INDF いつ=WH
 飲み始めはいつ？

また、動詞の否定形などに後接する場合、r が n に交替する。

(8-45) nuutidu uree jumanna
 nuutidu uri=a jum-an=ra
 なぜ これ=TOP 読む-NEG=WH
 なんでこれ読まないの？

8.5.4. 疑問詞疑問助詞=ja

助詞=ja も疑問詞疑問文末に用いられる。=ra との違いは未詳である。

(8-46) a. ici=du jum-as-i=ja
 いつ=FOC 読む-CAUS-INF=WH
 いつ読ませるの？

b. uva na=a nuu=ti=du iz-u=ja
 2.SG 名前=TOP なに=QUOT=FOC 言う-NPST=WH
 あなた、名前はなんというの？

8.5.5. 意外性助詞=ba

助詞=ba は話者が意外だと感じていたり、驚きを感じていたりすることをあらわす。話者にとって新情報である必要はなく、前々から意外だと思っていることにも使える。

(8-47) uja futaar=a a-u=ba
 長老 二人=TOP 喧嘩する-NPST=SF
 長老二人は喧嘩してるよ

8.5.6. 確認助詞=waja

確認の助詞=waja は、話者が、聞き手も同じ情報を持っていると判断している際に用いる。

(8-48) biaha mukasi+pusu=du ar-i=waja
 1.PL.INCL 昔+人=FOC COP-INF=SF
 私たちは昔の人間だよ

8.5.7. 話者のみの判断の助詞=saa

助詞=saa は、聞き手の判断や情報共有の状態に話者が感知せず、自分の判断だけを述べる場合に用いる。

(8-49) (「暑いね」と言われ、それを否定するとき)
 duu=a acca naan=saa
 自分=TOP 暑い.ABS STATE.NEG=SF
 自分は暑くないよ

8.5.8. 疑いの助詞=kaja

助詞=kaja は話者が命題内容に疑いを持っている場合に用いられる。

- (8-50) acaha=a ami=kaja
 明日=TOP 雨=SF
 明日は雨かな？

8.5.9. 伝聞助詞=tu

伝聞の助詞=tu は、話者が他から得た情報を他者に伝える際に用いられる。

- (8-51) pukorasa=tu
 ありがとう=SF
 ありがとうってよ

興味深い点として、引用の接続助詞=ti と伝聞の終助詞=tu が存在する、ということがあげられる。これらの違いは、=ti が単純に引用をマークするのに対し、=tu は聞き手に対して伝達しようという対人的モダリティをも含む点である。したがって、=tu が使用できる部分では、=ti は終助詞を伴って生起可能である。

- (8-52) pukorasa=ti=ju
 ありがとう=QUOT=SF
 ありがとうってよ

しかし、=ti の使用範囲のすべてを=tu がカバーするわけではない。

- (8-53) *ou=tu iz-i waar-ta
 はい=sf 言う-INF HON-PST

8.5.10. 丁寧な命令の助詞=joo

助詞=joo は命令形に続き、それを丁寧にする際に用いられる。

- (8-54) misukomisuko waar-i taboor-i=joo
 気を付けて/ゆっくり いらっしゃる-INF たまわる-IMP=SF
 気を付けていらしてくださいね

8.5.11. 疑問=ka

助詞=ka は、肯否疑問文の文末に使用される。

- (8-55) hama=na bur-u munu=a pisida=ka?
 あそこ=LOC いる-NPST FN=TOP ヤギ=SF
 あそこにいるのはヤギか？

8.5.12. 軽い驚きの助詞=jara

=jara は、独り言にも用いられ、話者の軽い驚きをあらわす。

- (8-56) kjuu=a acca=jara
 今日=TOP 暑い.ABS=SF
 今日は暑い

9. 述部

本章では、黒島方言の述部について述べる。黒島方言の述部は、動詞述部 (9.1.)、名詞述部 (9.2.)、形容詞述部 (9.3.) のいずれかである。以下、それぞれ述べる。また、9.4.において、頻出するモダリティ要素について述べる。

9.1. 動詞述部

黒島方言の動詞述部は、3つのサブグループに分けられる。すなわち、普通動詞述部 (9.1.1.)、助動詞述部 (9.1.2.)、軽動詞述部 (9.1.3.) である。本節ではまず、それぞれの違いを示す。3つの動詞述部の特徴は以下のようなものである。また、続いてそれぞれの例を示す。

(9-1) 3つの動詞述部の特徴

- 普通動詞述部 : 1つの動詞語根、もしくは1つの複合動詞で構成される
- 助動詞述部 : 1つの本動詞と1つ以上の助動詞で構成される
本動詞は不定形をとる
- 軽動詞述部 : 名詞、もしくは本動詞と軽動詞で構成される
本動詞は不定形をとる
軽動詞は *siir* 「する」 である

(9-2) 普通動詞述部の例

a. 1つの動詞語根の場合

unu pusu=a arak-uta
この 人=TOP 歩く -PST
この人は歩いた

b. 複合動詞の場合

arak-i+tuus-ita
歩く -INF+続ける -PST
歩き続けた

(9-3) 助動詞述部の例

arak-i bur-ta
歩く -INF PROG-PST
歩いていた

(9-4) 軽動詞述部の例

a. 名詞と軽動詞の場合

hanatai si-ta
反対 LV-PST
反対した

b. 本動詞と軽動詞の場合

arak-i si-ta
歩く -INF LV-PST
歩いた

複合動詞、助動詞、軽動詞は、上の例からもわかるように形態上区別がつかない場合がある。しかし、上記の3つの構造は、とりたて助詞が使用可能か、という点において分類される。複合動詞の場合、2つの動詞語根の間にとりたて助詞を用いることは不可能であるの

に対し、助動詞構文と軽動詞の場合は、とりたて助詞が挿入可能である。

(9-5) a. 複合動詞

*vva-i=du	tuus-i
食べる-INF=FOC	通す-INF

b. 助動詞

vva-i=du	bur-Ø
食べる-INF=FOC	PROG-NPST
食べている	

c. 軽動詞

vva-i=du	si-i
食べる-INF=FOC	LV-INF
食べて	

このような点に関しては、軽動詞構文は特殊な助動詞構文と考えてよい。ただし、軽動詞は名詞を前部にとることができるという点において極めて特徴的である。

(9-6) a. 助動詞

*binkjoo	bur-Ø
勉強	PROG-NPST

b. 軽動詞

binkjo	si-i
勉強	LV-INF
勉強する	

9.1.1. 普通動詞述部

普通動詞述部は、単一の語幹の動詞から成るのが通常であるが、複合動詞も可能である。

(9-7) tigami=ju jum-uta
手紙=ACC1 読む-PST
手紙を読んだ

(9-8) tigami=ju jum-i+pazimi-ta
手紙=ACC1 読む-INF+始める-PST
手紙を読みはじめた

9.1.2. 助動詞述部

助動詞述部においては、本動詞が先行し、助動詞がそれに続く。また、本動詞は不定形をとる。

(9-9) tigami=ju jum-i bur-ta
手紙=ACC1 読む-INF PROG-PST
手紙を読んでいた

助動詞述部の場合、本動詞と助動詞の間に助詞を置くことが可能である。

(9-10) tigami=ju jum-i=du bur-ta
手紙=ACC1 読む-INF=FOC PROG-PST
手紙を読んでいた

本節で述べる構文を、接尾辞と考えずに助動詞構文と考えるのには理由がある。それは、本動詞と助動詞のあいだに助詞の挿入が可能であるためである。

(9-11) a. 助詞なし

iz-i waar-ta
言う-INF HON-PST
言っていच्छやった

b. 助詞あり

iz-i=n waar-ta
言う-INF=ADD HON-PST
言ってもいच्छやった

このように、明らかに統語的境界が本動詞と助動詞のあいだに存在する。これに対し、接尾辞の場合は、形態的切れ目が存在しない。願望の接尾辞-ipisa を例にとる。

(9-12) a. iz-ipisa b. *iz=n ipisa
言う-~たい 言う=add ~たい
言いたい

黒島方言における助動詞は限られている。現在わかっている範囲では、動作継続の助動詞 bur、尊敬の waar、受益の taboor、反予想の naan、準備の usuku、習慣の arak、経験の mir の 7 つである。以下、それぞれ例を示す。

9.1.2.1. 継続の助動詞

本節では、継続の助動詞 bur について述べる。活用は存在動詞 bur と同じで、変則的な r 末尾型である。意味上は動作の継続をもっぱらあらわす。

(9-13) a. pisida=ba kuras-i bur-u
ヤギ=ACC 殺す-INF PROG-NPST
ヤギを殺している（屠殺の最中）
b. kin=ba kis-i bur-u
着物=ACC 着る-INF PROG-NPST
着物を着ている（着用の動作の最中）

上に述べたとおり、bur を用いた助動詞構文は動作の継続をあらわす。したがって、(9-13a) の例は訳のとおり、「屠殺の最中」のみをあらわし、「すでに殺している」という状況はあらわせない。同じく、(9-13b) の例も「着用の動作の最中」のみをあらわし、「すでに着用の動作を完了し、今も着用中である」という意味にはとれない。なお、黒島方言における存在動詞 ar はイベントが行われることをあらわすこともできるため、日本本土の方言に見られる「あっている」と類似する構造の表現が可能である。

(9-14) unu maan=a jaa+sukur-i=a mainen ar-i=du bur-ta
この ころ=TOP 家+作る-INF=TOP 毎年 ある-INF=FOC PROG-PST
そのころは家作りは毎年行われていた

なお、この助動詞 bur は助動詞に後続することができる。

(9-15) par-i waar-i bur-Ø
走る-INF HON-INF PROG-NPST
走っていच्छやる

それぞれの項目でも述べるが、助動詞に続くことができる助動詞は、この継続の *bur*、尊敬の *waar*、受益の *taboor* のみである。

9.1.2.2. 尊敬の助動詞

尊敬の助動詞 *waar* も、存在動詞と同様の活用を示す。意味的には尊敬をあらわすが、動作の継続を含む場合もある。

- (9-16) a. *par-i* *waar-Ø=waja*
 走る-INF HON-NPST=SF
 走っていらっしゃる/ 走りなさる
- b. *maruma* *saki=ba* *num-i* *waar-Ø*
 今 酒=ACC2 飲む-INF HON-NPST
 今、酒を飲んでいらっしゃる

ただし、以下のような例もあるため、必ず動作継続を含むというわけではない。

- (9-17) a. *par-i* *waar-i* *bur-Ø*
 走る-INF HON-INF PROG-NPST
 走っていらっしゃる
- b. *icinna* *num-i* *waar-u=nu* *maruma* *num-i* *waar-an-un*
 いつもは 飲む-INF HON-NPST=ADVRS 今 飲む-INF HON-NEG-NPST.DECL
 いつもは飲みなさるけど、今飲んでいらっしゃらない

なお、この助動詞は他の助動詞に続くこともできる。

- (9-18) *saki* *sa-i* *usuk-i* *waar-i*
 酒 注ぐ-INF おく-INF HON-IMP
 酒を注いでおいてください

9.1.2.3. 受益の助動詞

受益の助動詞 *taboor* は、*r* 末尾型動詞と同じ活用を示す。自らへりくだる謙譲の意味も含まれるため、目上の行動によって利益がもたらされた場合に用いられる。

- (9-19) *sinsi=nu* *simbun=ba* *jum-i* *taboor-ta*
 先生=NOM 新聞=ACC2 読む-INF たまわる-PST
 先生が新聞を読んでくださった

この助動詞も他の助動詞に続く。

- (9-20) *saki* *sa-i* *usuk-i* *taboor-i*
 酒 注ぐ-INF おく-INF たまわる-IMP
 酒を注いでおいてください

9.1.2.4. 反予想の助動詞

反予想の助動詞 *naan* は、否定の存在動詞 *naan* と同様の特殊な活用を示す。意味としては、話者の予想や期待と反する事態を述べる際に用いられる。自発の接尾辞と共に起し、自らの意思とは無関係に起こしてしまった行動について述べるケースが典型的である。

- (9-21) a. num-an=ti si-ta=nu num-i naan
 飲む-NEG=QUOT する-PST=ADVRS 飲む-INF 反予想
 飲まないと思っていたのに飲んでしまった
- b. kurab-i naan-ta
 転ぶ-INF 反予想-PST
 転んでしまった

9.1.2.5. 準備の助動詞

準備の助動詞 usuk は基本 A 型動詞と同じ活用を示す。別の事態の準備のために行う事態について述べる際に用いられる。

- (9-22) saki=ju sa-i usuk-i
 酒=ACC1 注ぐ-INF おく-IMP
 酒を注いでおけ

9.1.2.6. 習慣の助動詞

習慣の助動詞 arak は基本 A 型動詞と同じ活用を示す。ある程度長い期間の習慣をあらわす。

- (9-23) a. siwa=ti=n naan-a=du arak-iba
 心配=QUOT=ADD ない-INF=FOC HAB-CSL
 心配というものもないので
- b. ici=n arak-i arak-u
 いつ=ADD 歩く-INF HAB-NPSTT
 いつも歩いている

9.1.2.7. 経験の助動詞

経験の助動詞 mir は r 末尾型動詞と同じ活用を示す（詳細は 5.2.1.4.1.参照のこと）。これまでに経験したことがある事態をあらわす。

- (9-24) uvaa baa usitu=ha a-i mir-u-n
 2.SG.TOP 1.SG.GEN. 弟(妹)=ALL 会う-INF 経験-NPST-DECL
 あなたは私の弟に会ったことがある？

9.1.3. 軽動詞述部

本節においては、軽動詞述部について述べる。黒島方言の軽動詞述部は前部要素にとるものの違いによって、以下の3つ種類がある。

- (9-25) 黒島方言における軽動詞述部
- 動詞の不定形を前部要素とする軽動詞述部
 - 動詞の重複を前部要素とする軽動詞述部
 - 名詞を前部要素とする軽動詞述部

- (9-26) 動詞の不定形を前部要素とする軽動詞述部
- muuru sima+zima=nu funi=a tumar-i si-ta isanaki=na
 みんな RED+島=GEN 船=TOP 泊まる-INF LV-PST 石垣=LOC
 みんな島々の船は泊まった、石垣に

動詞の重複は、この軽動詞構文の前部要素としてしか用いられない。動詞の重複は、不定形をすべて重複することによって形成される。どちらの動詞も不定接尾辞以外の接尾辞をとることはない。

(9-27) 動詞の重複を前部要素とする軽動詞述部

nankai=n hak-i+hak-i si-ti=du ubu-i
 何回=ADD RED+書く-INF LV-SEQ1=FOC 覚える-INF
 何回も書いて覚えた

(9-28) 名詞を前部要素とする軽動詞述部

taroo=nu=du hanaka=n binkjoo=ju
 太郎=NOM=FOC 花子=DAT 勉強=ACC1

 hasi s-i taboor-ar-ita
 加勢 LV-INF たまわる-PASS-PST
 太郎が花子に勉強を手伝ってもらった

なお、名詞に準ずるものとして、「形容詞語根+動詞不定形」の複合についても、軽動詞述部の前部要素になることが可能である。

(9-29) ubu+vv-i si-i
 大きい+降る-INF LV-INF
 激しく雨が降った/ 大降りだった

9.1.3.1. 包摂関係をあらわす軽動詞述部

本節では、包摂関係をあらわす軽動詞述部について述べる。これをわざわざ取り上げるのは、非常に形式上の制限が強いためである。まず、例を示す。

(9-30) banta jarabi sjeer-Ø kee
 1.PL.EXCL 子供 LV.CONT-NPST ころ
 私たちが子供だった頃

このような包摂関係をあらわす軽動詞は、非常に環境が制限されている。具体的には、上に示したような N sjeer kee「Nだったころ」という連体修飾構造においてしか認められない。したがって、包摂関係をあらわす軽動詞が主節末に立つことはない。

(9-31) *unu bason=a jarabi sjeer =waja
 その とき=TOP 子ども LV.CONT.NPST=SF

また、かかる修飾名詞が kee「ころ」以外であってはいけない。たとえば、上の例文にある bason「とき」は、kee とよく似た意味を持つが、この軽動詞が bason にかかることはない。

(9-32) *banaa jarabi sjeer bason
 1.SG.TOP 子ども LV.CONT.NPST とき

そのうえ、軽動詞も結果継続の非過去のかたちである sjeer しかとることはできない。

(9-33) a. *banaa jarabi sjeerta kee
 1.SG.TOP 子供 LV.CONT.PST ころ

b. *banaa	jarabi	sita	kee
1.SG.TOP	子供	LV.PST	ころ

さらに、述部を構成する名詞にはどのような助詞も付されない。

(9-34) a. *banaa	jarabi=du	sjeer	kee
1.SG.TOP	子供=FOC	LV.CONT.NPST	ころ
b. *banaa	jarabi=ju	sjeer	kee
1.SG.TOP	子供=ACC1	LV.CONT.NPST	ころ
c. *banaa	jarabi=ba	sjeer	kee
1.SG.TOP	子供=ACC2	LV.CONT.NPST	ころ

以上、示したように軽動詞が意味的には包摂関係をあらわすことがあるが、その形態統語的環境は非常に限られたものである。

9.2. 名詞述部

名詞述部においては、コピュラを伴う。しかし、非過去肯定の場合、コピュラが落ちることが多い。ただし、焦点標示を伴う場合は、コピュラが必須となる。

(9-35) a. 非過去でコピュラが落ちた例			
	banaa	sinsi	
	1.SG.TOP	先生	
		私は先生である	
b. 焦点標示を伴う例			
	banaa	sinsi=du	ar-u
	1.SG.TOP	先生=FOC	COP-NPST
		私は先生である	
c. 焦点標示を伴う過去の例			
	banaa	sinsi=du	ar-ta
	1.SG.TOP	先生=FOC	COP-PST
		私は先生であった	
d. 従属節の例			
	banaa	sinsi	ar-an-iba
	1.SG.TOP	先生	COP-NEG-CSL
		私は先生でないので	

また、助詞付き名詞句も述部に入ることが可能である。以下の例では、mir-i-n という与格助詞付き名詞句が述部になっている。

(9-36)	kuree	isanakehe	par	munoo
	kuri=a	isanaki=ha	par-Ø	munu=a
	3.SG.=TOP	石垣=ALL	行く -NPST	FN=TOP
	vvankehe	mirinnawaja		
	vva-nki=ha	mir-i-n	ar-Ø=waja	
	子供-PL=ALL	見る -INF=DAT	COP-NPST=SF	
		彼が石垣に行くのは子供に会うためだよ		

なお、この際も非過去・肯定の場合にはコピュラが頻繁に落ちる。

- (9-37) kuree isanakehe par munoo
 kuri=a isanaki=ha par-Ø munu=a
 3.SG.=TOP 石垣=ALL 行く -NPST FN=TOP
- vvankehe mirinwaja
 vva-nki=ha mir-i=n=waja
 子供-PL=ALL 見る -INF=DAT =SF
 彼が石垣に行くのは子供に会うためよ

9.2.1. 複合名詞を用いる感嘆文

複合名詞を用いた構文がある。それは形式名詞 *joo* を複合名詞の後部とし、その名詞を述部とするものである。意味としては感嘆をあらわす。たとえば、以下のようなものである。

- (9-38) a. kjuu=nu boor-i+joo=jara
 今日=GEN 疲れる -INF+様=SF
 今日は大変疲れたよ (lit. 今日の疲れ様よ)
- b. kameda=nu taku+tur-i+joo=jara
 亀田=GEN タコ+とる -INF+様=SF
 亀田はよくタコをと (lit. 亀田のタコとり様よ)

この構文は、1つの名詞句があるだけである⁹⁶。このことから、これは Zevakhina (2013) が述べるところの、名詞句を用いた感嘆 (exclamatives) と考えていいものを思われる。この表現が、動詞の接尾辞添加ではなく、複合名詞を利用したものであることは、4.5.において示した。通常の名詞文は名詞句が2つ (主題標示の付くものと、コピュラの付くもの) あることが多いため、この構文は特殊なものであると言える。

この構文があらわす意味は、便宜的に「感嘆」としておく。ここでは、「感嘆」とは「話者の驚きをあらわすもの」と簡単に定義しておく。

9.3. 形容詞述部

形容詞も述部となりうる。しかし、非過去肯定を示す形態的手段がないため、その際には、絶対形があらわれる。

- (9-39) a. 普通形容詞
 unu isi=a guffa
 この 石=TOP 重い.ABS
 この石は重い

⁹⁶ 話者の方によると、コピュラが後接しても非文法的ではないが、実際にそれを使用することはないであろう、とのことであった。以下のような例がその例である。

- kinoo=nu boor-i+joo=du ar-ta=ra
 昨日=GEN 疲れる -INF+様=FOC COP-PST=SF
 昨日は疲れたね (lit. 昨日の疲れ様だったね)

b. 比較形容詞

unu isi=a guffa-ku
この 石=TOP 重い-CMPR.ABS
この石は重い

さらに、形容詞述部が焦点化された場合、形容詞絶対形（と焦点助詞）のあとに、存在動詞が使用される。

(9-40) unu isi=a guffa=du ar-ta
この 石=TOP 重い.ABS=FOC STATE-PST
この石は重かった

形容詞は、必ず統語的な否定をとる。その際、否定の存在動詞 **naan** を用いる。

(9-41) unu isi=a guffa naan
この 石=TOP 重い.ABS STATE.NEG.NPST
この石は重くない

9.4. モダリティ要素

本節では、動詞、形容詞、名詞に直接後接可能なモダリティ要素について述べる。具体的には、以下のように使用される。

(9-42) pazi 「はず」の例

a. 名詞に後接

kjuu=a ami=pazi
今日=TOP 雨=はず
今日は雨のはずだ

b. 形容詞に後接

kinoo=a meeku=a acca-ta=pazi
昨日=TOP 宮古=TOP 暑い-PST=はず
昨日は宮古は暑かったはずだ

c. 動詞に後接

kjuu=a ami=nu vv-u=pazi
今日=TOP 雨=NOM 降る-NPST=はず
今日は雨が降るはずだ

このようなモダリティ要素は上に示した pazi 「はず」のほかに、raasa 「らしい」、aran 「ではないか」が見つかっている。これらの要素の特徴は、名詞文、形容詞文、動詞文のすべてに後接可能である、という点である。

ただし、それ以外の形態統語的特徴はかなり異なる。pazi と raasa については述部専用の形式名詞として認める。そして、aran に関しては、時制接尾辞を末尾に持つ動詞にそのまま後接する例外的な形式として考える。以下、9.4.1.において pazi と raasa、続く 9.4.2.において aran について述べる。なお、これらは拘束形態素であるため、=を用いて示すこととする。

9.4.1. pazi、raasa

本節においては、pazi 「はず」と raasa 「らしい」について述べる。これらの形式は、同じ形態統語的ふるまいを示す。いずれも述部にのみ生起する形式名詞である。まず例を示す。

- (9-43) a. ami=nu vv-uta=pazi
 雨=NOM 降る-PST=はず
 雨が降ったはず
- b. ami=nu vv-uta=raasa
 雨=NOM 降る-PST=らしい
 雨が降ったらしい

以下、これらの形式の形態統語的特徴について述べる。まず、これらを（形式）名詞とする理由は、述語化する際にコピュラを用いるためである。なお、非過去肯定の場合は、コピュラが省略されるのがふつうである。

- (9-44) a. kjuu=a ami=pazi=do
 今日=TOP 雨=はず=SF
 今日は雨のはずだよ
- b. kjuu=a ami=raasa=do
 今日=TOP 雨=らしい=SF
 今日は雨らしいよ
- (9-45) a. kjuu=a ami=pazi=du ar-ta
 今日=TOP 雨=はず=FOC COP-PST
 今日は雨のはずだった
- b. kjuu=a ami=raasa=du ar-ta
 今日=TOP 雨=らしい=FOC COP-PST
 今日は雨らしかった
- (9-46) a. kjuu=a ami=pazi ar-iba
 今日=TOP 雨=はず COP-CSL
 今日は雨のはずなので
- b. kjuu=a ami=raasa ar-iba
 今日=TOP 雨=らしい COP-CSL
 今日は雨らしいので

このように、これら pazi と raasa は述語化する際にコピュラが必要となる。この点により、これらの形式を（形式）名詞としている。

ただし、完全な名詞ではなく、形式名詞としている。名詞と形式名詞の違いは、4.3.1.に示したとおり、名詞が修飾部なしに生起しうるのに対し、形式名詞は修飾部なしには生起しえない、という点にある。

- (9-47) 名詞と形式名詞の違い

a-1. 名詞（修飾部あり）

[kinoo	hak-uta]	修飾部	tigami	名詞	=ju	nzas-ita
昨日	書く-PST		手紙		=ACC1	出す-PST

昨日書いた手紙を出した

a-2. 名詞（修飾部なし）

tigami	名詞	=ju	nzas-ita
手紙		=ACC1	出す-PST

手紙を出した

b-1. 形式名詞（修飾部あり）

[kinoo	hak-uta]	munu	=ju	nzas-ita
昨日	書く -PST	名詞	=ACC1	出す -PST
昨日書いたのを出した				

a-2. 形式名詞（修飾部なし）

*munu	=ju	nzas-ita
名詞	=ACC1	出す -PST
FN		

この点において、pazi も raasa も形式名詞であると言える。つまり、以下に示すとおり、どちらもそれ単独では文中に生起することができない。

- (9-48) A: koosien=a pazimar-ta-n?
 甲子園=TOP 始まる -PST-DECL
 甲子園は始まったの？
- B1: *pazi=du ar-u=do
 はず=FOC COP-NPST=SF
- B2: *raasa=du ar-u=do
 らしい=FOC COP-NPST=SF

さらに、これらの形式が名詞的である特徴として、直前に連体接尾辞をとりうる、という点があげられる。5.4.2.1.2.で述べたとおり、黒島方言の動詞は非過去の場合に連体接尾辞をとりうる。つまり、時制接尾辞を末尾に持つ動詞も、時制接尾辞のあとにさらに連体接尾辞を末尾に持つ動詞も、連体修飾節末に生起するという点である。pazi、raasa はどちらのかたちも承けることが可能であるため、まさに名詞的な特徴を持っていると言える。

(9-49) a-1. 過去接尾辞を末尾に持つ動詞を承ける pazi

ami=nu	vv-uta=pazi
雨=NOM	降る -PST=はず
雨が降ったはず	

a-2. 連体接尾辞を末尾に持つ動詞を承ける pazi

ami=nu	vv-uta-ru=pazi
雨=NOM	降る -PST-ADN=はず
雨が降ったはず	

b-1. 過去接尾辞を末尾に持つ動詞を承ける raasa

ami=nu	vv-uta=raasa
雨=NOM	降る -PST=らしい
雨が降ったらしい	

b-2. 連体接尾辞を末尾に持つ動詞を承ける raasa

ami=nu	vv-uta-ru=raasa
雨=NOM	降る -PST-ADN=らしい
雨が降ったらしい	

以上のような特徴を持つため、pazi、raasa は名詞的であると言える。しかし、完全な名詞ではないため、形式名詞とする。さらに、属格付き名詞句を修飾部にとることはできないという点においても、これらの形式は名詞としては特異である。

- (9-50) *kjuu=a ami=nu pazi
 今日=TOP 雨=GEN はず

(9-51) *kjuu=a ami=nu raasa
 今日=TOP 雨=GEN らしい

以上、示してきたようなふるまいを示すことから、pazi と raasa は述部専用の形式名詞として本稿では扱う⁹⁷。

9.4.2. aran

本節では、aran「ではないか」について述べる。まず、例を示す。

(9-52) a. ami=nu vv-i bur-u=aran-un
 雨=NOM 降る-INF PROG-NPST=ではないか-NPST.DECL
 雨が降っているんじゃない？
 b. ami=nu vv-i bur-ta=aran-un=kaja
 雨=NOM 降る-INF PROG-PST=ではないか-NPST.DECL=SF
 雨が降っていたんじゃないかな

この形式も、動詞文のみならず、名詞文、形容詞文にも後接可能である

(9-53) 名詞文
 acahaja ameearanun
 acaha=a ami ar-Ø=aran-un
 明日=TOP 雨 COP-NPST=ではないか-NPST.DECL
 明日は雨じゃない？

(9-54) 形容詞文
 kjuu=n acca=du ar-u=aran-un?
 今日=add 暑い=FOC STATE-NPST=ではないか-NPST.DECL
 今日も暑いんじゃない？

このように使用される aran「ではないか」であるが、これは以下のような特徴を持つため、黒島方言において極めて特異な形式である。

(9-55) aran「ではないか」の特徴
 a. 述部としての独立性があるかたちに直接後接するにもかかわらず、aran 自体も活用する。
 b. 活用はするものの、過去、非過去の2つの選択肢しかない。
 (理由や条件など、副詞節を形成するかたちは持たない)

この aran という形式を除くと、黒島方言において述部に後接しうる形式は助詞類か、連体修飾節に続く名詞類である。つまり、述部に直接後接する形式は活用しないのがふつうである。しかし、この aran はこれ自体が活用する。この点において極めて特異である。以下に aran が活用した例を示す。

(9-56) a. aran の非過去
 koosien=a kunici=hara pazimar-u=aran-un
 甲子園=TOP 9日=ABL 始まる-NPST=ではないか-NPST.DECL
 甲子園は9日から始まるんじゃない？

⁹⁷ 標準日本語において pazi、raasa に対応すると思われる「はず」と「らしい」は「助動詞」として扱われることが多いものと思われるが、本稿では別の構造に助動詞という述語を使用している。

b. aran の過去

koosien=a	kunici=hara	pazimar-u=aran-ta-n
甲子園=TOP	9日=ABL	始まる-NPST=ではないか-PST-DECL

甲子園は9日から始まるんじゃない？

実は、動詞の直後に動詞的な要素が来ること自体は特に問題ではない。以下のような助動詞構文は頻繁に会話中にあらわれる。しかし、大きな違いは、以下の(9-57)のような助動詞構文の場合、前の動詞（本動詞）が不定形をとるのに対し、aran の場合は不定形をとらない、という点である(9-58)。

(9-57) 助動詞構文の例

ami=nu	vv-i	bur-u
雨=NOM	降る-INF	PROG-NPST

雨が降っている

(9-58) aran の例

ami=nu	vv-i	bur-u=aran-un
雨=NOM	振る-INF	PROG-NPST=ではないか-NPST-DECL

雨が降っているんじゃない

(9-59) *ami=nu

*ami=nu	vv-i=aran-u-n
雨=NOM	降る-INF=ではないか-NPST-DECL

したがって、aran を助動詞と考えることは不可能である。

そこで考えるのは、aran の直前に無音の名詞を想定する、ということである。そのようにすれば、この aran を例外扱いすることなく、他と同一の構造として考えることができる。つまり、連体修飾節を受けた無音の名詞にコピュラ aran が後続するというかたちである。確かに、上に示したような例を見る限り、そのような構造を想定することが可能のように思われる。

(9-60) aran の直前に無音の名詞「Ø」を想定した例

koosien=a	kunici=hara	pazimar-u	Ø	aran-un
甲子園=TOP	9日=ABL	始まる-NPST	Ø	COP-NEG-NPST-DECL

甲子園は9日から始まるんじゃない？

この構造は上に示した形式名詞 pazi 「はず」などの構造と同様であるため、このような考え方を検討することは必要である。(上では、pazi を述部専用の形式名詞と認めているため、動詞に付属する形式として示しているが、ここではわかりやすさのために離して記す。)

(9-61) pazi の構造

koosien=a	kunici=hara	pazimar-u	pazi	aran-u-n
甲子園=TOP	9日=ABL	始まる-NPST	はず	COP-NEG-NPST-DECL

甲子園は9日から始まるんじゃない？

しかし、このように考えることは不適切である。5章において示したとおり、黒島方言の動詞は非過去においては連体専用の接尾辞というものを持たないものの、過去の場合、連体の接尾辞をとることも可能である(ただし義務的ではない)。

(9-62) a. 連体接尾辞なしの連体修飾

pazimar-ta	pi
始まる-PST	日

始まった日

b. 連体接尾辞ありの連体修飾

pazimar-ta-ru pi
 始まる-PST-ADN 日
 始まった日

つまり、無音の名詞を想定するのであれば、過去の場合にこの連体の接尾辞をとっていいはずである。しかし、実際にはこの連体接尾辞のあとに *aran* を用いることはできない。

(9-63) *koosien=a kunici=hara pazimar-ta-ru=aran-un
 甲子園=TOP 9日=ABL 始まる-PST-ADN=ではないか-NPST.DECL

(9-64) koosien=a kunici=hara pazimar-ta=aran-un
 甲子園=TOP 9日=ABL 始まる-PST=ではないか-NPST.DECL
 甲子園は9日から始まったんじゃない？

これに対し、*pazi* は連体の接尾辞をとることが可能である。

(9-65) vv-ta-ru pazi
 降る-PST-ADN はず
 降ったはず

このようなことから、*aran* の直前に無音の名詞を想定することは他の構造との整合性がとれるため理想的であるものの、この考え方は不適切であると結論付けざるを得ない。

そこで、本稿ではこの形式を極めて例外的な、活用する文末付属形式として考える。このような形式は今のところ、この *aran* しか発見されていない。

そこで、議論しておくべきなのは、この *aran* に前接する部分をどのように考えるか、という点である。仮に *aran* がコピュラであるとしたら、*aran* の前は名詞でなければならない。名詞であるとする、時制接尾辞を末尾に持つすべての品詞に名詞節化が可能である、と考えることになる。実は、この分析でも何の問題もない。しかし本稿ではこの考え方はとらない。それは、以下の理由による。

- (9-66) *aran* に前接する部分を名詞節と考えない理由
1. *aran* がコピュラとして完全な活用を持たないこと
 2. 統語的環境が主節末に限定されていること
 3. 他に類似の現象がないため、名詞節化の規則を追加するより例外扱いしたほうが経済的であること

以下、それぞれの理由について述べていく。

まず、1つ目の「コピュラとして完全な活用を持たない」という点について述べる。*aran* はコピュラに否定の接尾辞がついた、*ar-an* を言語的な資源にしていることは容易に推測がつく。しかし、否定の接尾辞が後接したかたちしかこの環境にはあらわれない。たとえば、以下のようにコピュラ-非過去の接尾辞という連続は不可能である。

(9-67) *acaha=a ami=nu vv-u=ar-u
 明日=TOP 雨=NOM 降る-NPST=COP-NPST

したがって、*aran* はコピュラをもとにしているものの、共時的には *ar-an* のように分析することができない形式である、と本稿では判断する。つまり、*aran* で1つの形態素として認める、ということである。

続いて、2つ目の「統語的環境が主節末に限定されている」という点について述べる。通常のコピュラは、主節末、副詞節末、連体修飾節末のすべてに生起しうる。

(9-68) コピュラの生起しうる統語的環境

a. 主節末

unu maan=a deezi=du ar-ta=doo
その ころ=TOP 大変=FOC COP-PST=SF
そのころは大変だったよ

b. 副詞節末

ama+mizi=ba tam-ituri=du num-i beer-u
甘い+水=ACC2 ためる-SEQ2=FOC 飲む-INF CONT-NPST

zidai ar-Ø=junti
時代 COP-NPST=CSL
雨水をためて飲んでる時代なので

c. 連体修飾節末

sinsi=du ar-ta-ru pusu
先生=FOC COP-PST-ADN 人
先生だった人

これに対し、aran を含む述部は副詞節末、連体修飾節末には生起せず、主節末にのみ生起可能である。

(9-69) aran の生起しうる統語的環境

a. 主節末

sugu bass-iru=aran-un
すぐ 忘れる-NPST=ではないか-NPST.DECL
すぐ忘れるんじゃない

b. 副詞節末

*sugu bass-iru=aran-iba
すぐ 忘れる-npst=ではないか-CSL

c. 連体修飾節末

*sugu bass-iru=aran-u pusu
すぐ 忘れる-NPST=ではないか-NPST 人

このように、統語的環境についてもコピュラと aran の間には大きな差がある。

最後の理由は、他に類似する現象がない、という点である。つまり、他に類似する現象があれば、時制接尾辞を末尾に持つ述部が名詞節化する、という規則を立てて、それをそれらの現象に当てはめればよい。しかし、実際には名詞節を形成するという考え方を有効利用できる構造はこの aran しか今のところ見つかっていない。そのため、それぞれの述部に関して名詞節化の規則を設けるよりも、aran を例外として扱ったほうが記述としてすっきりする、ということである。

以上、見てきたとおり、この aran という形式は黒島方言においてかなり特異な形式である。

10. 統語・意味

本章においては、黒島方言の統語構造および意味的なまとまりのある範囲について述べる。まず 10.1.1.1.1 においては単文の、続く 10.2 においては複文の統語構造について述べる。その後、10.3 においては文のタイプ、10.4 においては情報構造にかかわる現象について述べる。10.5.以降は、意味的なまとまりのあるものについて述べていく。包摂・等価・存在・所有 (10.5.)、テンポラリティー (10.6.)、アスペクチュアリティー (10.7.) 可能 (10.8.)、否定 (10.9.) についてそれぞれ述べる。

10.1. 単文

本節においては単文の統語構造について、動詞文 (10.1.1.)、形容詞文 (10.1.2.)、名詞文 (10.1.3.) にわけて述べる。

10.1.1. 動詞文

本節では単文の動詞文の統語的構造について述べる。まず、10.1.1.1.1 において、項の数による分類を行い、続く 10.1.1.2. においては、項の増減について述べる。

10.1.1.1. 項の数による分類

本節においては、項の数ごとに動詞文の構造を記述する。

10.1.1.1.1. 1 項文

1 項文では、基本的には唯一の名詞句を主格でマークする。つまり、1 人称、2 人称の代名詞では主格のかたちをとり、それ以外の名詞句の場合、主格格助詞=**nu** をとる。

(10-1) a. 1 人称単数主語の 1 項文

baa par-u-n=doo
1.SG.NOM 行く -NPST-DECL=SF
私が行くよ

b. 普通名詞句主語の 1 項文

hazi=nu fuk-i bur-u
風=NOM 吹く -INF PROG-NPST
風が吹いている

c. 普通名詞句の 1 項文

wakacuki=nu kurab-eer-Ø
若月=NOM 転ぶ -CONT-NPST
若月が転んだ

一方で、S を=**ba** や=**ju** でマークする場合もある。これは、自然現象などを述べる場合に限られる。=**nu**、=**ba**、=**ju** それぞれでマークされた場合の意味上の違いはわかっていない⁹⁸。

⁹⁸ S 項を=**ba** や=**ju** でマークする場合、意味的には自然現象であることが多いが、動詞のか

- (10-2) a. ubu+hazi=ba fuk-i=ra
 大きい+風=ACC2 吹く-INF=SF
 台風が来たね
 b. ami=tanka=ba vv-i
 雨=ばかり=ACC2 降る-INF
 雨ばかり降る
- (10-3) suidoo=ju=n naan-iba
 水道=ACC1=ADD ない-CSL
 水道もないので

10.1.1.1.2. 2 項文

2 項文の場合、動作主的な名詞句を主格で、対象的な名詞句を対格でマークするのが一般的である。この際、2つの対格=ba と=ju のうちどちらかを使用するのであるが、

- (10-4) a. baa saki=ju num-uta
 1.SG.NOM 酒=ACC1 飲む-PST
 私が酒を飲んだ
 b. wakacuki=nu kameda=ju sitak-uta
 若月=NOM 亀田=ACC1 殴る-PST
 若月が亀田を殴った
 c. unu pusu=nu juubinkjoku=ba sukur-i waar-ta
 この 人=NOM 郵便局=ACC2 作る-INF HON-PST
 この人が郵便局を作りなされた

「なる」の補語が名詞である場合、与格ではなく、向格であらわす。

- (10-5) nuuti=du sinsi{=ha /*=ni} nar-i waar-ta-ra
 なぜ=FOC 先生{=ALL /*=DAT} なる-INF HON-PST-Q
 なぜ先生におなりになったんですか

ただし、joo「様」が主要部である名詞句が「なる」の補語の場合、joo「様」には与格=ni を付す。

- (10-6) maruma=a duu=tanka=si par-u joo=ni nar-eer-Ø=waja
 今=TOP 自分=だけ=INS 行く-NPST 様=DAT なる-CONT-NPST=SF
 今は自分だけで行くようになった

また、共同作業の相手を共格=tu でとる 2 項文も存在する。

- (10-7) baa kinoo uri=tu a-uta
 1.SG.NOM 昨日 3.SG=COM 喧嘩する-PST
 私が昨日、あいつと喧嘩した

たちにも特徴がある。すなわち、=ba や=ju で S をマークする場合、動詞が不定形（もしくは不定形由来と考えられる形式）を含むのである。自然談話で観察された 9 例 (=ba が 1 例、=ju が 8 例) もすべてそのようなかたちであった。

10.1.1.1.3. 3項文

3項文は、動作主を主格、直接目的語を対格、間接目的語を与格、もしくは向格でマークする。

(10-8) maa=nu=du bani{=n / =ha} kin=ba vv-ita
孫=NOM=FOC 1.SG{=DAT/ =ALL} 着物=ACC2 くれる-PST
孫が私に着物をくれた

(10-9) sasaki=nu takahasi{=n / =ha} u-i=ju nara-as-ita
佐々木=NOM 高橋{=DAT/=ALL} 泳ぐ-INF=ACC1 習う-CAUS-PST
佐々木が高橋に泳ぎを教えた

また、事物の出どころを含む3項文の場合、その出どころは奪格=hara で標示する。

(10-10) a. sasaki=nu takahasi=hara kin=ba iir-i
佐々木=NOM 高橋=ABL 着物=ACC2 もらう-INF
佐々木が高橋から着物をもらった
b. sasaki=nu takahasi=hara amerika+munui=ba nara-uta
佐々木=NOM 高橋=ABL アメリカ+ことば=ACC2 ならう-PST
佐々木が高橋から英語を習った

10.1.1.2. 項の増減

本節では、項の増減にかかわる現象について述べる。まず、10.1.1.2.1.において受け身、10.1.1.2.2.においては自発、最後に10.1.1.2.3.において使役について述べる。

10.1.1.2.1. 受け身

本節では、項の数を減らす、受け身について述べる。述部動詞においては、受け身の接尾辞-ar-を付し、受け身の動詞を派生させる。受け身文の動作主は与格でマークする。与格は=ni もしくは=n であり、これらは自由変異である。また、被動作主は主格でマークする。この際、助詞付き名詞句の順序はどのような順序でもかまわない。

(10-11) a. 能動文

hanako=nu taroo=ba sitak-uta
花子=NOM 太郎=ACC2 殴る-PST
花子が太郎を殴った

b. 受動文

taroo=nu hanako={ni / n} sitak-ar-ita
太郎=NOM 花子=DAT 殴る-PASS-PST
太郎が花子に殴られた

なお、黒島方言においては、いわゆる迷惑の受け身はない。したがって、被動者を目的語に持つ他動詞からしか受け身文は作れない⁹⁹。

⁹⁹ この点において、琉球諸語ではヴァリエーションがあるようである。たとえば、黒島方言と同様、南琉球宮古大神方言においては迷惑の受け身は不可能である (Pellard 2010: 149)。これに対し、南琉球宮古伊良部方言 (Shimoji 2008: 495) や、北琉球奄美湯湾方言 (Niinaga 2010: 79) においては、可能であるようである。

(10-12) *ami=ni virarita
雨に降られた

(10-13) *pusu=ni jum-ar-ita
人に読まれた

ただし、いわゆる持ち主の受け身は可能である。

(10-14) a. 能動文

nusitu=nu=du hano pusu=nu zin+fukur=ba nusum-eer-u
どろぼう=NOM=FOC あの 人=GEN 金+袋=ACC2 盗む-CONT-NPST
泥棒があの人財布を盗んだ

b. 受動文

hanu pusu=nu=du nusitu=ni zin+fukur=ba nusum-ar-ita
あの 人=NOM=FOC 泥棒=DAT 金+袋=ACC2 盗む-PASS-PST
あの人財布が泥棒に盗まれた

(10-15) a. 能動文

hanako=nu taroo=nu amazi=ju sitak-uta
花子=NOM 太郎=GEN 頭=ACC1 殴る-PST
花子が太郎の頭を殴った

b. 受動文

taroo=nu hanako={ni / n} amazi=ju sitak-ar-ita
太郎=NOM 花子=DAT 頭=ACC1 殴る-PASS-PST
太郎が花子に頭を殴られた

10.1.1.2.2. 自発

本節では、項を減らす現象である自発について述べる。自発も、上で述べた受け身と同様、-ar-という接尾辞を付し、動詞を派生させる。意味的には、自分の意志や意図と関係なく（時には反して）、そのような行動をとる、といういわゆる自発をあらわす。

自発文は、他動詞文からも自動詞文からも作れる。まず、他動詞文の場合、元の主語があらわれる場合は、主題化される。そして、元の目的語は格標示なしであらわれる。

(10-16) a. 能動文（他動詞）

baa saki=ju num-uta
1.SG.NOM 酒=ACC1 飲む-PST
私が酒を飲んだ

b. 自発文

banaa saki num-ar-ita
1.SG.TOP 酒 飲む-SPNT-PST
私は酒を飲んでしまった

自動詞文をもとにする自発文も可能であり、動詞の形態的には他動詞と同様である。もとの主語があらわれる場合は主題化され、格助詞で標示されることはない。

(10-17) a. 能動文（自動詞）

baa budur-ta
1.SG.NOM 踊る-PST
私が踊った

b. 自発文

(banaa) budur-ar-ita
 1.SG.TOP 踊る-SPNT-PST
 (私は) 踊ってしまった

なお、自発の場合、必須ではないものの、助動詞 *naan* を用いることが多い。この助動詞 *naan* は、事態の完了もあらわすのであるが、話者の期待に反する事態が生じた、ということもあらわす。

(10-18) a. banaa saki num-ar-i naan-ta
 1.SG.TOP 酒 飲む-SPNT-INF 反予想-PST
 私は酒を飲んでしまった

b. (banaa) budur-ar-ita
 1.SG.TOP 踊る-SPNT-PST
 (私は) 踊ってしまった

10.1.1.2.3. 使役

本節では、使役構文の格標示について述べる。まず、非使役文と使役文のペアの例を示す。述語動詞においては、使役の形態素 *-as-* を付し、動詞を派生させる。

(10-19) a. 非使役文
 jarabi=nu simbun=ju jum-uta
 子ども=NOM 新聞=ACC1 読む-PST
 子どもが新聞を読んだ

b. 使役文
 baa jarabi=n simbun=ju jum-as-ita
 1.SG.NOM 子ども=DAT 新聞=ACC1 読む-PST
 私が子供に新聞を読ませた

ただし、他動詞で、かつ、他動詞化接辞 *-as-* を起源とすると思われる形式が含まれている動詞語根を使役化する場合は、*-im-* という異形態を用いる。

(10-20) a. 非使役文
 baa juu=ju fukas-ita
 1.SG.NOM お湯=ACC1 沸かす-PST
 私がお湯を沸かした

b. 使役文
 baa pusu=ni juu=ju fukas-im-ita
 1.SG.NOM 人=DAT お湯=ACC1 沸かす-CAUS-PST
 私が人にお湯を沸かさせた

上に示したとおり、使役文はもとの文から項が 1 つ増える。したがって、もとの文が自動詞文であった場合、その使役文は 2 項の文になり、他動詞の場合、3 項の文になる。この場合の格標示は、以下のようである。

まず、対応する非使役文が自動詞である場合、もとの自動詞の項は主格でマークされる。これが使役化した場合、このもとの主格の項は、対格か与格でマークされる。そして、導入される使役主が主格でマークされる。以下に例を示す。

(10-21) a. 自動詞文
 wakacuki=nu kurab-eer-Ø
 若月=NOM 転ぶ-CONT-NPST
 若月が転んだ

b. 自動詞の使役文
 kameda=nu wakacuki=ju kurub-as-eer-Ø
 亀田=NOM 若月=ACC1 転ぶ-CAUS-CONT-NPST
 亀田が若月を転ばせた

ただし、もとの主語のマーキングによって、意味が異なってくる。すなわち、対格を用いた場合 (10-22a)、強制的意味になり、与格もしくは向格を用いた場合は、許可の意味となる (10-22b)。

(10-22) a. 強制 (嫌がる若月を踊らせた)

wakacuki=ju budur-as-ita
 若月=ACC1 踊る-CAUS-PST
 若月を躍らせた

b. 許可 (若月が踊りたいと言っているので躍らせた)

wakacuki=ni budur-as-ita
 =ha
 若月 =DAT 踊る-CAUS-PST
 =ALL
 若月に躍らせた

対応する非使役文が他動詞文であった場合、このもとの文の動作主項は主格でマークされ、被動作主項は対格でマークされる。これが使役化した場合、まず、もとの主格は与格もしくは向格、もとの対格はそのまま対格、そして新たに導入される使役主が主格でマークされる。以下に例を示す。

(10-23) a. 他動詞文
 sasaki=nu takahasi=ju sitak-uta
 佐々木=NOM 高橋=ACC たたく-PST
 佐々木が高橋をたたいた

b. 他動詞の使役文
 wakacuki=nu sasaki=ha takahasi=ju sitak-as-ita
 若月=NOM 佐々木=ALL 高橋=ACC たたく-CAUS-PST
 若月が佐々木に高橋をたたかせた

直接使役の場合、被使役者をマークするのは与格か向格のいずれでもよい。

(10-24) jarabi =ha ki=ju bar-as-ita
 =ni
 子供 =ALL 木=ACC 割る-CAUS-PST
 =DAT
 子供に木を割らせた

間接使役になった場合も同様に、被使役者のマーキングは向格でも与格でもよい。ただし、使役主体 (最終的な行為者ではなく、使役の主体) の標示は向格でなければならない。

(10-25) wakacuki =ha iz-i kameda =ha bar-as-im-ita
 *=ni =ni
 若月 =ALL 言う-INF 亀田 =ALL 割る-CAUS-CAUS-PST
 =DAT =DAT
 若月に言って、亀田に割らせた

10.1.2. 形容詞文

形容詞文では、名詞句を主題助詞=a、もしくは主格助詞=nu でマークする。ただし、主格助詞=nu でマークした場合は、他との対比を意味する。また、=nu の場合は、焦点の助詞=du をともなうのが普通であるため、その例を示す。

(10-26) a. 主題助詞=a でマークした場合

kjuu=a acca
 今日=TOP 暑い.ABS
 今日は暑い

b. 主格助詞=nu でマークした場合

kjuu=nu=du acca
 今日=NOM=FOC 暑い.ABS
 今日が暑い

自動詞文の場合、唯一の名詞句を=ba や=ju でマークすることがあると述べたが (10.1.1.1.1.)、形容詞の場合、そのようなことはなく、必ず=nu もしくは主題助詞=a でマークされる。

(10-27) a. *kjuu=ba acca
 b. *kjuu=ju acca

10.1.3. 名詞文

名詞文においても、形容詞文同様、述部ではない名詞句を主題助詞=a もしくは主格助詞=nu でマークする。=nu の場合、焦点の助詞=du をともなうのが普通であるのも、形容詞と同様である。

(10-28) a. 主題助詞=a でマークした場合

unu pusu=a sinsi
 この 人=TOP 先生
 この人は先生である

b. 主格助詞=nu でマークした場合

unu pusu=nu=du sinsi
 この 人=NOM=FOC 先生
 この人が先生

また、これも形容詞文と同じく、=ba や=ju を名詞文で用いることはできず、この点は一項動詞文との違いである。

(10-29) a. *unu pusu=ba sinsi
 b. *unu pusu=ju sinsi

10.1.3.1 名詞句のみの文

4.5.にて述べた複合名詞を利用した感嘆文は、構文として特殊であると言える。それは、その構文が基本的には名詞句がただ1つあるだけの構文であるためである。まず例を示す。

(10-30) kameda=nu taku+tur-i+joo=jara
亀田=GEN タコ+とる-INF+様=SF
亀田はよくタコをとるねえ (lit. 亀田のタコとり様よ)

上で述べたとおり、名詞文は通常、主部と述部から成り、主部は主題化される。もちろん、このような通常の名詞文の場合でも、主文の省略は可能であるが、本節で述べる名詞句のみの文では、主題名詞句が生起することが許されないのである。

(10-31) *uri=a kameda=nu taku+tur-i+joo=jara
それ=TOP 亀田=GEN タコ+とる-INF+様=SF

このように、この複合名詞を利用した感嘆文は、黒島方言の統語構造のなかでも特殊なものとして考える必要がある。この構文の特殊性は、感嘆文という即時的な、話者の判断を挟む余地のない表現である、という事実起因しているものと考えられる。

10.2. 複文

本節では、黒島方言の複文について述べる。黒島方言の従属節は3つに分類される。すなわち、副詞節、連体修飾節、補文の3つである。これらは、それぞれ述部が異なる。副詞節は、副詞節末にのみ立ちうる活用形、もしくは時制接尾辞+接続助詞をとる。連体修飾節は、時制接尾辞か連体接尾辞を末尾に持つ活用形をとる。補文は、時制接尾辞か終止接尾辞を末尾に持つ活用形をとり、さらに引用の助詞をとる。それぞれ、例を示す。

(10-32) a. 副詞節

uva par-ka uri=n par-u-n=do
2.SG.NOM 行く-COND 3.SG.=ADD 行く-NPST-DECL=SF
あなたが行くと、彼も行くよ

b. 連体修飾節

uva kinoo ha-uta munu=a uri
2.SG.NOM 昨日 買う-PST もの=TOP これ
あなたが昨日買ったものはこれ？

c. 補文

kinoo=a ami=nu vv-uta=ti iz-u
昨日=TOP 雨=NOM 降る-PST=QUOT 言う-NPST
昨日は雨が降ったって？

以下、10.2.1.において副詞節について、10.2.2.において連体修飾節について、最後に10.2.3.において補文について述べる。

10.2.1. 副詞節

副詞節は、主節に従属する。まず、その例を示す。(10-33)は動詞活用形での副詞節、(10-34)は接続助詞を含む副詞節である。

(10-33) 理由の副詞節

kookai=a nar-an-iba
 航海=TOP できる-NEG-CSL
 航海はできないので

(10-34) 逆接の副詞節

ici=n=a paa-ha fuk-iru=nu
 いつ=ADD=TOP はやい-ADJVZ.ABS 起きる-NPST=ADVRS
 いつもは早く起きるのに

しかし、独立した主節と従属節を見分けるのが困難な場合がある。なぜならば、不定形は主節を終えることも、従属節を形成することも可能だからである。

(10-35) 不定形による副詞節と主節

a. 不定形による副詞節

aa=ba mak-i
 粟=ACC2 蒔く-INF
 粟をまいて、

b. 不定形による主節

kinoo tigami=ba hak-i
 昨日 手紙=ACC2 書く-INF
 昨日手紙を書いた

このように、黒島方言において主節と副詞節をはっきりと二分することは難しい。本節においては、動詞不定形の副詞節末での用法にのみ言及することとする。

黒島方言の副詞節には、2種類ある。1つ目は、時制接尾辞をとった動詞が形成する副詞節であり、もう1つは、時制接尾辞をとらない動詞が形成するものである。それぞれまず例を示す。

(10-36) a-1. 時制接尾辞をとる副詞節

kisaa vva-uta=junti mee vva-an-un
 さっき 食べる-PST=CSL もう 食べる-NEG-NPST.DECL
 さっき食べたから、もう食べない

a-2. 時制接尾辞をとる副詞節

maruma=hara hak-u=junti uri=ju mut-i waar-i
 今=ABL 書く-NPST=CSL それ=ACC1 持つ-INF HON-IMP
 今から書くから、それを持って行ってください

b. 時制接尾辞をとらない副詞節

maruma=hara hak-iti mut-i fun
 今=ABL 書く-SEQ1 持つて-INF 来る.NPST
 今から書いて、持つて来る（持つていく）

このとおり、黒島方言の副詞節には2種類があるが、これらは、副詞節末の形式と関連している。つまり、時制をとる副詞節の場合、動詞句+接続助詞が、副詞節末に立つのに対し、時制をとらない副詞節の場合、動詞句のみで副詞節末に立つのである。以下、10.2.1.1. においては、時制をとる副詞節について、続く10.2.1.2. においては、時制をとらない副詞節について述べる。

10.2.1.1. 時制をとる副詞節

本節においては、時制をとる副詞節について述べる。この副詞節は、述部+接続助詞で構成される。この構造をとる接続助詞は、理由の接続助詞=junti と逆接の接続助詞=nu の2つである。述部は、原則的には時制接尾辞が末尾に立つかたちをとる。これに対し、可能な場合、連体の接尾辞をとったかたちをとる場合もある。ただし、これは、逆接の接続助詞=nu の場合に限る。以下、それぞれ例を示す。

(10-37) a. 時制接尾辞を動詞末尾に持つ場合

zin=nu hakar-u=junti
 お金=NOM かかる-NPST=CSL
 お金がかかるから

b. 連体接尾辞を動詞末尾に持つ場合

zin=nu hakar-ta-ru=nu
 お金=NOM かかる-PST-ADN=ADVRS
 お金がかかったけど

このように、逆接の接続助詞=nu に関しては、連体接尾辞で終えるかたちをとる場合がある。ただし、これは任意であり、時制接尾辞で終えるかたちに続いてても文法的である。

(10-38) zin=nu hakar-ta=nu
 お金=NOM かかる-PST=ADVRS
 お金がかかったけど

しかし、これとは対照的に、=junti に先行する動詞が連体接尾辞をとることは非文法的であり、この点においては非対称性がある。

(10-39) *zin=nu hakar-ta-ru=junti
 お金=NOM かかる-PST-ADN=CSL

以下、理由の接続助詞=junti と逆接の接続助詞=nu をそれぞれ用いた副詞節の例を挙げる。

(10-40) 理由の接続助詞=junti を用いた副詞節の例

nooka=nu=du nihjaku=haban=a=a mee ar-eer-Ø=junti
 農家=NOM=FOC 200=ばかり=TOP=TOP FIL ある-CONT-NPST=CSL

heekin si-ka mee gotoo
 平均 する-COND FIL 5頭
 農家が200ほどあったから、平均すると5頭(ほどの牛を飼っていた)

(10-41) 逆接の接続助詞=nu を用いた副詞節の例

hai pur=nu uta=n ziraba=n mee bahar-ta=nu
 そうして 豊年祭=GEN 歌=ADD ジラバ(古謡)=ADD FIL わかる-PST=ADVRS

maruma=nu ju=a mee aja munu=nu naan-u=junti
 今=GEN 世=TOP FIL そうい もの=NOM STATE.NEG-NPST=CSL

zenzen mee pur=nu uta=n bahar-an-un
 全然 FIL 豊年祭=GEN 歌=add わかる-NEG-NPST.DECL
 そうやって豊年祭の歌もジラバもわかったけど、今の世はそういうものがないので、全然豊年祭の歌もわからない

10.2.1.2. 時制をとらない副詞節

本節では、時制接尾辞をとらない副詞節について述べる。前節で述べた時制接尾辞をとる副詞節が接続助詞をとったのに対し、この副詞節では接続助詞をとるのではなく、述部の形態で副詞節であることを示す。これは、同時の接尾辞-ttaana、不定の接尾辞-i、中止の接尾辞-iti、条件の接尾辞-ka、理由の接尾辞-iba、をとる場合がある。以下、それぞれの例を示す。

(10-42) 同時の接尾辞-ttaana を用いる副詞節

funi	ku-ja-ttaana	izu=ju	fu-as-ita
船	漕ぐ-CONT-SIML	魚=ACC1	噛む-CAUS-PST

船漕ぎながら魚を釣った

(10-43) 不定の接尾辞-i を用いる副詞節

jaa=na	pair-i	dentoo=du	sik-ita
家=LOC	入る-INF	電灯=FOC	つける-PST

家に入って、電灯をつけた

(10-44) 中止の接尾辞-ti を用いる副詞節

usi=ba	ara-iti	mudur-i	fur-Ø=waja
牛=ACC2	洗う-SEQ	もどる-INF	来る-NPST=SF

牛を洗って戻ってきた

(10-45) 条件の接尾辞-ka を用いる副詞節

ba=du	usi	ar-ka	ping-i=du	si-i
1.SG.NOM=FOC	牛	COP-COND	逃げる-INF=FOC	LV-INF

私が牛だったら逃げる

(10-46) 理由の接尾辞-iba を用いる副詞節

usi	sikana-u	pusu=nu=du	gambar-i	waar-iba
牛	養う-NPST	人=NOM=FOC	頑張る-INF	HON-CSL

牛を養う人ががんばっていらっしやるので

10.2.2. 連体修飾節

連体修飾節は名詞句の修飾部を埋める。黒島方言における名詞句の修飾部は必ず主名詞より前に位置するため、連体修飾節も同じく、主名詞に先行する。

(10-47) juu num-uta saki

よく 飲む-PST 酒
よく飲んだ酒

また、連体修飾節と修飾される名詞句との関係は、内の関係でも外の関係でもよい。

(10-48) 内の関係の連体修飾節

[kinoo hak-uta]	連体修飾節	tigami
昨日	書く-PST	手紙

昨日書いた手紙

(10-49) 外の関係の連体修飾節

[kii=ju moos-i bur-Ø]	連体修飾節	haza	
木=ACC1	燃やす-INF	PROG-NPST	におい

木を燃やすにおい

なお、連体修飾節は、分裂文を作る際にも用いられる。

(10-50) いたずらをやった嫌疑をかけられた子供が

banaa su-un-un=do si-eer-Ø munu=a hari
1.SG.TOP する-NEG-NPSTDECL=SF する-CONT-NPST FN=TOP あいつ
僕はやってない。やったのはあいつだ！

連体修飾節末の述部は、連体接尾辞をとることができる形式であれば、連体接尾辞をとってもよい。しかし、それは義務的でなく、時制接尾辞をとりさえすれば連体修飾節末に生起しうる。

(10-51) a. 連体接尾辞をとる場合

kinoo ha-uta-ru simmuci
昨日 買う-pst-adn 本
昨日買った本

b. 連体接尾辞をとらず、時制接尾辞で終える場合

kinoo ha-uta simmuci
昨日 買う-pst 本
昨日買った本

10.2.3. 補文

本節においては、補文について述べる。思考動詞や発話動詞の補部は、引用助詞=ti をともなった補文であらわされる。

(10-52) [aja zidai=kaja=ti] umu-ar-iru=ju
そういう 時代=SF=QUOT 思う-SPTN-NPST=SP
そういう時代かなあ、と思われるよ

このほかに、不定の引用節を承ける=nu という助詞がある。以下のように使用される。

(10-53) uvaa uri=nu jamatu=ha par-u=nu par-an=nu
2.SG 彼=NOM 内地=ALL 行く-NPST=INDF 行く-NEG=INDF

zz-eer-Ø-n
知る-CONT-NPST-DECL
あなた、彼が内地に行くかどうか知っている？

これに対し、内容の疑問の補文は=nu ではなく=ti を用いて埋め込まれる。

(10-54) ici=du mudur-i fur-Ø=ti bahar-u-n?
いつ=FOC 戻る-INF 来る-NPST=QUOT わかる-NPST-DECL
いつ戻ってくるかわかる？

(10-55) isanaki=na ha-jaar-Ø munu nuu=du ar-ta=ti
石垣=LOC 買う-CONT-NST もの なに=FOC COP-PST=QUOT

bass-i naan-un
忘れる-INF しまう-NPST-DECL
石垣で買ったものが何か忘れてしまった

また、この内容の疑問の補文の場合にのみ使用される助詞=jaari もあるが、この助詞が使用されるのは稀である。

- (10-56) maa=na=du ha-uta=jaari bass-i naan-un
 どこ=LOC=FOC 買う-PST=疑問補文 忘れる-INF しまう-NPST.DECL
 どこで買ったか忘れた

10.3. 文のタイプ

本節においては、文のタイプについて述べる。10.3.1.においては平叙文、10.3.2.においては、疑問文、10.3.3.においては命令文について述べる。

10.3.1. 平叙文

平叙文は、文末助詞=doo や=ju によって示される。また、これらの文末助詞が接続しない場合でも、下降イントネーションなどでも示される。

- (10-57) uri=a hami=doo
 これ=TOP 亀=SF
 これは亀だよ

10.3.2. 疑問文

肯否疑問文は基本的にイントネーションによってしめされる。これに加え、疑問の終助詞が用いられることもある。また、これと同音の疑問の主題をあらわす不定のとりたて助詞=ka が用いられることもある (10-60)。ここでは、上昇イントネーションを文末の「?」であらわすことにする。

- (10-58) hama=na bur-u munu=a pisida?
 あそこ=LOC いる-NPST FN=TOP ヤギ
 あそこにいるのはヤギ?
- (10-59) hama=na bur-u munu=a pisida=ka?
 あそこ=LOC いる-NPST FN=TOP ヤギ=SF
 あそこにいるのはヤギか?
- (10-60) hama=na bur-u munu=a=ka pisida=ka?
 あそこ=LOC いる-NPST FN=TOP=INDF ヤギ=SF
 あそこにいるのはヤギか?
- (10-61) asi=a va-idar-Ø?
 昼ごはん=TOP 食べる-COMP-NPST
 昼ごはんは食べた?

これに対し、疑問詞疑問文は基本的には下降イントネーションをとる。さらに、終助詞の=ra は疑問視疑問文専用であり、肯否疑問文の場合に用いられることはない。

- (10-62) situmuti=a nuu=du si-ta=ra
 朝=TOP なに=FOC する-PST=WH
 朝はなにをしたか

10.3.3. 命令文

命令文は、形態的に動詞が命令の接尾辞-(ir)i をとることによって標示される。また、否定命令（禁止）の場合は、-(u)na が用いられる。

(10-63) tigami=ju hak-i
手紙=ACC1 書く-IMP
手紙を書け

(10-64) tigami=ju hak-una
手紙=ACC1 書く-PROH
手紙を書くな

10.4. 情報構造

本節においては、情報構造について述べる。10.4.1.においては主題について、10.4.2.においては対比、10.4.3.においては焦点、10.4.4.においては係り結びについてそれぞれ述べる。

10.4.1. 主題

主題は主題助詞=a によって示される。また、1 人称単数代名詞においては主題助詞が形態的に分析できず、代名詞の主題形を用いることで主題をあらわす。主題標識=a は種々の構成素に付きうる。

(10-65)a. 主語の主題化

unu pusu=a kinoo keer
この 人=TOP 昨日 来る.CONT
この人は昨日（島に）来た

b. 目的語の主題化

meesabi=a vva-idar-Ø
朝ごはん=TOP 食べる-COMP-NPST
朝ごはんは食べた

c. 場所の主題化

unu sima=a mizi=nu naan-ta
この 島=TOP 水=NOM STATE.NEG-PST
この島は水がなかった

b. 1 人称単数代名詞の主題形

banaa harada=ti iz-u munu=do
1.SG.TOP 原田=QUOT 言う-NPST もの=SF
私は原田というものよ

なお、主題助詞が後接しうる助詞と、後接しえない助詞とがある。8.3.を参照のこと。

10.4.2. 対比

対比も主題助詞で示される。主題助詞は、主題をあらわすのにも当然用いられるため、対比と主題をはっきりと分けることは難しい。

(10-66)	harada=a	par-ta=nu	wakacuki=a	mada=do
	原田=TOP	行く -PST=ADVRS	若月=TOP	まだ=SF
	原田は行ったけど若月はまだよ			

主題助詞を単独で用いる対比の用法に加え、主題助詞を二重に使用することでも、対比をあらわすことができる。

(10-67)	unu	simaaja	mizinu	naanta
	unu	sima= <u>a=a</u>	mizi=nu	naan-ta
	この	島=TOP=TOP	水=NOM	STATE.NEG-PST
	この島は、水がなかった			

この主題助詞の二重使用の場合、上の(10-67)に示したとおり、2 つ目の主題助詞が必ず ja という異形態をとる。これは、この二重使用の場合に限らず、主題助詞が/a/を末尾に持つ助詞に後接した場合の形態音韻規則である（詳しくは 2.4.2.を参照のこと）。

10.4.3. 焦点

焦点をあらわす場合、焦点の助詞=du を用いる。焦点化された構成素には焦点助詞=du が付く。この=du の後接する要素も多様であり、節にも付されることがある。

(10-68)	a. izu=du	tur-i	
	魚=FOC	とる-INF	
	魚をとって		
	b. va-i=du	bur-Ø	
	食べる-INF=FOC	PROG-NPST	
	食べている		
	c. duu=si	sikana-i	mir-iba=du
	自分=INST	養う-INF	経験-CSL=FOC
	自分で（牛を）養っているから		

10.4.4. 係り結び

本節においては係り結びについて述べる。係り結びとは、節中のいずれかの要素に焦点を標示するマーカーがあらわれた場合に、節末が通常の終止とは異なる形態で終えられる現象である。しかし、黒島方言においては、顕著に係り結びが見られる、というわけではない。特に、内省を問う調査を行った場合、係り結びは観察されない。しかし、一方で、談話資料を観察すると、確かに係り結びが起こっているように見えるし、また、ある形式の内省調査においても、係り結びが生じているように思われる現象もある。このような状況であることから、黒島方言の係り結びは変化の途上にあり、性質が定まらないのではないか、と思われる。本節では、このような黒島方言の係り結びについて、観察される場合、観察されない場合、いずれも示す。

まず、係り結びが観察されない場合について述べる。黒島方言における焦点標示の助詞は=du である。したがって、この助詞が節中にあらわれた場合、節末が通常の終止とは異なる形になる、ということが予想される。黒島方言の動詞の主節末終止は、時制接尾辞で終えるか、それに終止の接尾辞を加えるかするものが通常である。

(10-69) 通常の主節末終止の動詞の形態

- | | |
|------------------|-----------------|
| a. 時制接尾辞（非過去） | b. 時制接尾辞（過去） |
| num-u | num-uta |
| 飲む-NPST | 飲む-PST |
| 飲む | 飲んだ |
| c. 時制接尾辞（非過去）-終止 | d. 時制接尾辞（過去）-終止 |
| num-u-n | num-uta-n |
| 飲む-NPST-DECL | 飲む-PST-DECL |
| 飲む | 飲んだ |

終止の接尾辞が添加された場合とされない場合の意味的な違いは未詳であるが、これらがいわゆる文終止でもっとも用いられる動詞形態である。内省調査を行うと、節中に焦点助詞=du があらわれても、上のすべてのかたちが許容される。

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| (10-70) a. 時制接尾辞（非過去） | b. 時制接尾辞（過去） |
| saki=du num-u | saki=du num-uta |
| 酒=FOC 飲む-NPST | 酒=FOC 飲む-PST |
| 酒を飲む | 酒を飲んだ |
| c. 時制接尾辞（非過去）-終止 | d. 時制接尾辞（過去）-終止 |
| saki=du num-u-n | saki=du num-uta-n |
| 酒=FOC 飲む-NPST-DECL | 酒=FOC 飲む-PST-DECL |
| 酒を飲む | 酒を飲んだ |

このように、焦点助詞=du の有無にかかわらず主節末の形態がかわらないため、黒島方言においては係り結びは見られない、と結論付けることができる。

ここで、一点注意すべき現象について述べておく。古典日本語における「ぞ」と同源と考えられる焦点助詞を節中に持つ場合、節末の動詞形態がいわゆる「連体形」になることが古典日本語における現象を考えると予想される。上に示した4つの形態のうち、終止の接尾辞をともなわない、時制接尾辞で終える動詞形態がいわゆる「連体形」とみなされることもある（山口 2004）が、本稿ではそのようには考えない。それは、この形態が上に示したとおり、連体修飾節末だけではなく、主節末でも使用可能であるからである。また、黒島方言の動詞には過去の場合にのみあらわれる連体修飾専用の接尾辞がある。本稿ではこちらを連体形と呼ぶことにしている。

- | | | |
|------------------|------------|------|
| (10-71) a. kinoo | num-ta-ru | saki |
| 昨日 | 飲む-PST-ADN | 酒 |
| 昨日飲んだ酒 | | |
| b. *kjuu | num-u-ru | saki |
| c. kjuu | num-u | saki |
| 今日 | 飲む-NPST | 酒 |
| 今日飲む酒 | | |

この過去の場合にのみあらわれる連体形は、主節末にあらわれることはない。それは、焦点助詞=du が文中にあらうとなかろうと同様である。

- | | | |
|--------------------|---------|-----------|
| (10-72) a. *kjuu=a | saki=ju | num-ta-ru |
| b. *kjuu=a | saki=du | num-ta-ru |

このように、内省調査の限りにでは、黒島方言では係り結びが観察されない、と結論付けられる。

一方で、自由談話の録音資料からは、係り結びと思われる現象が観察される。また、下で述べるアスペクチュアリー助詞の-*idar*に関する調査を行った場合においても係り結びが観察された。

まず、自由談話のデータから述べる。焦点の助詞=*du* が同一節中にあらわれた場合、節末に終止の接尾辞-*n* があらわれることが少ない、ということが言える。約 70 分の自然談話資料中、述部が 1070 あらわれた。そのうちの 53 の末尾に終止の接尾辞-*n* が用いられているが、このうち 4 つのみ、同一文中に焦点の助詞=*du* があらわれた。以下の例である。

- (10-73) *nuara=ba=du* *habas-i* *usuk-i* *waar-an-un?*
 なにか=ACC2=FOC かぶせる-INF おく-INF HON-NEG-NPST.DECL
 なにかをかぶせておいておられない？
- (10-74) *ucca=nu=du* *bur-an-un=waja*
 それら=NOM=FOC いる-NEG-NPST.DECL=SF
 それら（昔釣っていた魚）がいないよ
- (10-75) *soo-izu=nu=du* *mee* *bur-an-a* *nar-i* *naan-un=wara*
 いい-魚=NOM=FOC FIL いる-NEG-INF なる-INF しまう-NPST.DECL=SF
 いい魚がいなくなってしまったよね
- (10-76) *par-u-n=ti=du* *umu-ar-un-un=waja*
 行く-NPST-DECL=QUOT 思う-SPNT-NEG-NPST.DECL=SF
 （年をとったので、海に）行こうと思われないよ

このようにこれらの 4 例はすべて否定の接尾辞を含む（もしくは否定動詞と同源と考えられる）動詞であり、しかも、非過去である。否定の接尾辞は、非過去で主節末の場合、上に示したとおり、非過去の時制接尾辞と、終止の接尾辞の切れ目がない。つまり、たとえば *bur* 「いる」を例にとると、従属節の場合は以下の (10-77) が可能であるのに対し、主節末では不可能である。

- (10-77) *bur-an-u* *nna*
 いる-NEG-NPST お姉さん
 いないお姉さん
- (10-78) a. **nna=nu=du* *bur-an-u*
 b. **nna=nu* *bur-an-u*
 c. **nna* *bur-an-u*

このようなことから、主節末の否定の接尾辞に続く非過去と終止は分析ができないものであると言える。そのため、もともと係り結びのために立ち得なかった終止の接尾辞も、上の (10-73~76) のような状況において立ち得るようになったのではないかと考えられる。

このような例外を除けば、終止の接尾辞-*n* が用いられた場合、その節中には焦点の助詞=*du* が用いられていない。つまり、焦点の助詞が用いられた場合、節末に終止の接尾辞を用いない、というかたちの係り結びが黒島方言には存在しているのではないかと、と言えるのである。

これと類似する現象がある。それは、完了をあらわすアスペクチュアリー接尾辞-*idar*に関するものである。この接尾辞を節末に用いた場合、焦点の助詞が他の要素にあらわれる例文は非文法的とまではされないものの、すわりがよくないものと判断される。たとえば、以下の (10-79) のような文である。

(10-79) ??kinoo=du menkjo=a tur-idar-Ø
 昨日=FOC 免許=TOP とる-COMP-NPST
 昨日免許はとった

しかし、この文は、焦点の助詞=du を除くと、まったく問題のない文として判断される。

(10-80) kinoo menkjo=a tur-idar-Ø
 昨日 免許=TOP とる-COMP-NPST
 昨日免許はとった

つまり、このアスペクチュアリティー接尾辞-idar-は、おそらく語源に=du を含んでいるものと考えられる。実際、かなり意味の近い-eer-という接尾辞があり、(10-81)はその eer を用いた場合、適格な文である。

(10-81) kinoo=du menkjo=a tur-eer-Ø
 昨日=FOC 免許=TOP とる-CONT-NPST
 昨日免許はとった

このような事実も、黒島方言に係り結びがある、ということを示唆するものである。

以上のようなことから、本論文では、黒島方言における係り結びは話者に意識されないようになりつつあるものの、自然談話や痕跡的な形式においては観察される、としておく。今後、より多くの談話資料からの検討や、さらなる面接調査などが必要である。

10.5. 包摂・等価・存在・所有

本節においては、包摂 (10.5.1.)、等価 (10.5.2.)、存在 (10.5.3.)、所有 (10.5.4.) をそれぞれあらわす表現について述べる。いずれも名詞に深く関連するものである。

10.5.1. 包摂

黒島方言において包摂関係は、主に名詞述部であらわされる。

(10-82) uri=a gakusee=do
 3.SG.=TOP 学生=SF
 彼は学生よ

(10-83) uri=a abunai+mondai=du ar-i=a si-i=do
 3.SG. あぶない+問題=FOC COP-INF=TOP LV-INF=SF
 それはあぶない問題でありはするよ

ただし、例外的に軽動詞構文を用いて包摂関係があらわされることもある。この表現はかなり固定化されたものである。

(10-84) banta jarabi sjeer kee
 1.PL.EXCL 子供 LV.CONT.NPST ころ
 私たちが子供だった頃

(10-85) banaa ningin sjeer kee
 1.SG.TOP 人間 LV.CONT.NPST ころ
 私が人間だった頃

このような、軽動詞を用いた包摂表現は今のところ、上記の X sjeer kee 「X だったころ」という連体修飾構造でしか確認されていない。いくつか、この表現にかかる制限について述べる。まず、「X sjee kee」の X に助詞がつくことはない。

(10-86) *jarabi{=ba/ =ju / =du/ =nu} sjeer kee
 子ども{=ACC2/ =ACC1 / =FOC/ =NOM} LV.CONT.NPST ころ

続いて、kee は「ころ」を意味する形式名詞であるが、これと似た意味を持つ bason 「とき」という形式名詞は、包摂関係をあらわす軽動詞を承けることはできない。

(10-87) *banaa jarabi sjeer bason
 1.SG.TOP 子供 LV.CONT.NPST とき

また、軽動詞も継続・非過去のかたちである sjee 以外をとることはない。

(10-88) *banaa jarabi sjeerta kee
 1.SG.TOP 子供 LV.CONT.PST ころ

(10-89) *banaa jarabi sita kee
 1.SG.TOP 子供 LV.PST ころ

この、sjeer kee があらわすことができる包摂関係は過去のものに限定される。そのため、軽動詞を用いて現在の包摂関係をあらわすことはできない。このようなことから、軽動詞が包摂関係をあらわすことは可能であるものの、固定化された表現においてのみであることがわかる。

10.5.2. 等価

黒島方言において等価関係は、名詞文を用いてあらわされる。

(10-90) uri=a baa maa=dora
 3.SG.=TOP 1.SG.GEN 孫=SF
 これは私の孫だ

前節の包摂関係において示した軽動詞を用いた表現は等価関係をあらわすためには用いられない。

(10-91) *uri=a baa maa sjee=dora
 3.SG.=TOP 1.SG.GEN 孫 LV.CONT.NPST=SF

10.5.3. 存在

黒島方言において存在をあらわす場合、典型的には存在の意味を持つ動詞を用いる。存在動詞は、2種類ある。1つは生物に用いられ (bur)、もう一方は非生物に用いられる (ar)。また、生物に対して用いる存在動詞 bur には、尊敬の waar もある。したがって、目上の存在をあらわしたい場合は、この waar を用いる必要がある。ちなみに、自分の身内などについて述べる場合にも、目上の場合、waar を用いたほうがよいとのことである。

(10-92) 生物の存在
 bokuzjoo=na usi=nu uraari bur-u
 牧場=LOC 牛=NOM たくさん いる-NPST
 牧場に牛がたくさんいる

(10-93) 非生物の存在

a. mijazaki=a kjuusjuu=na=du ar-u
 宮崎=TOP 九州=LOC=FOC ある-NPST
 宮崎は九州にある

b. ak-i+ja=nu mii+kinai ar-u
 あく-INF+家=NOM 三+軒 ある-NPST
 空き家が三軒ある

(10-94) 目上の身内の存在

buza-ta=nu=du micaar waar-u
 おじ-PL=NOM=FOC 3人 いらっしやる-NPST
 おじさんが3人いらっしやる

(10-95) 生物の存在（尊敬）

koocjoo+sinsi-ta=nu=du gakko=na waar-u=waja
 校長+先生-PL=NOM=FOC 学校=LOC いらっしやる-NPST=SF
 校長先生たちが学校にいらっしやるよ

ただし、非生物であっても存在動詞 bur 「いる」を使用してもいい場合がある。それは、乗り物の場合である。

(10-96) funi=nu=du futoo=na futa+aki {ar-u / bur-u}=waja
 船=NOM=FOC 埠頭=LOC 二+艘 {ある-NPST いる-NPST}=SF
 船が港に二艘ある

したがって、乗り物ではない荷車などには ar 「ある」を使用する。

(10-97) niguruma=nu=du ar-u
 荷車=NOM=FOC ある-NPST
 荷車がある

10.5.4. 所有

黒島方言においては、所有関係は動詞を用いる場合と、助詞を用いる場合とがある。

まず、動詞に関しては、もっぱら所有をあらわす際に用いられるのは存在動詞の ar であり、以下のような例である。

(10-98) unu pusu=a kuruma=nu=du ar-Ø
 この 人=TOP 車=NOM=FOC ある-NPST
 この人は車がある（車を持っている）

このように、所有者を主題とし、所有物を主格、ar を述語とする節を続けるのが黒島方言における自然な所有をあらわす文である。また、この際、所有者に場所格を用い、「X には Y がある」としてもよい。

(10-99) unu pusu=na=a kuruma=nu=du ar-Ø
 この 人=loc=top 車=nom=foc ある-npst
 この人は車がある（車を持っている）

日本語の「持つ」に対応する mut 「持つ」はあるが、これは所有をあらわす際はあまり用いられず、「手に持つ」などの動作の際により用いられる。

続いて、助詞を用いた所有関係について述べる。所有関係をあらわす助詞には=nu と=a

がある。どちらも、名詞に後続し、その助詞付き名詞句が、後続する名詞句の修飾部となるものである。助詞=a のほうは、以下に示すとおり、/a/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則に従う。

(10-100) a. =nu の例

wakacuki=nu	jaa
若月=GEN	家
若月の家	

b. =a の例

wakacukee	jaa
wakacuki=a	jaa
若月=GEN	家
若月の家	

ただし、=a のほうが所有関係のみに用いられるのに対し、=nu のほうはより広い関係を示しうる。たとえば、以下の例では、=nu は文法的であるが=a は非文法的である。

(10-101) a. =nu の例

isanaki=nu	jaa
石垣=GEN	家
石垣の家	

b. =a の例

*isanaki=a	jaa
石垣=GEN	家

また、=a は、呼びかけに用いることができる名詞、代名詞にのみ使用可能であり、それ以外の名詞には後続できない。

(10-102) a. 呼びかけに使える名詞

sinsi=a	jaa
先生=GEN	家
先生の家	

b. 呼びかけに使えない名詞

*usitu=a	jaa
弟=GEN	家

現在の調査の範囲では、所有されるものに関して=nu と=a の違いは観察されていない。今後、調査を進める必要がある。

10.6. テンポラリティー

本節においては、黒島方言のテンポラリティーについて、動詞文(10.6.1.)、名詞文(10.6.2.)、形容詞文(10.6.3.)にわけて述べる。

10.6.1. 動詞文のテンポラリティー

まず、動詞文であらわされるテンポラリティーは3つに分類される。すなわち、非過去、過去、直前である。また、テンポラリティーが示されない動詞文もあるため、これについても述べる。これら4つはすべて相互排他的であり、動詞形態で示される。

非過去については、義務接尾辞である非過去の時制接尾辞であらわされる。主に、-(ir)u という異形態をもつ。状態動詞やそれに由来する形式の場合は、音形を持たない異形態である(動詞形態については、5.3.を参照のこと。以下同様)。この接尾辞が用いられた場合、現在を含めた、未来のことをあらわす。特に、状態動詞の場合に現在を含むことが多い。

(10-103) a. 現在をあらわす場合

maruma	jaa=na=du	bur-Ø
今	家=LOC=FOC	いる-NPST
今、家にいる		

b. 未来をあらわす場合

acca=n jaa=na=du bur-Ø
明日=ADD 家=LOC=FOC いる-NPST
明日も、家にいる

c. 未来をあらわす場合

maruma=hara saki=ju num-u
今=ABL 酒=ACC1 飲む-NPST
今から酒を飲む

これに対し、過去接尾辞が用いられた場合は、必ず過去をあらわす。過去の接尾辞は-uta-、-ita-、-ta-という異形態をとる。

(10-104) a. kinoo=a jaa=na=du bur-ta
昨日=TOP 家 LOC=FOC いる-PST
昨日は、家にいた

b. kinoo=n saki=ju num-uta
昨日=ADD 酒=ACC1 飲む-PST
昨日も酒を飲んだ

このように、動詞文は通常、時制接尾辞を含む動詞形態で終えるものであるが、これ以外の例も存在する。1つ目は、直前の接尾辞-jassu を末尾に持つもので、もう1つは不定の接尾辞-i を末尾に持つものである。

まず、-jassu について述べる。これは、直前をあらわす。-essu や-ijassu といった異形態をとる。-essu は、末尾が子音のA型動詞、-jassu は末尾が母音のA型動詞、-ijassu はB型動詞に用いられる。

(10-105) maruma=du ki-ijassu=waja
今=FOC 消える-直前=SF
今、消えたよ

ただし、ただ時間的に直前であればよいというのではなく、話者の直接経験というエビデンスチャーティーにもかかわるものであるため、単純に時間のみをあらわす接尾辞とは言えない。これについては14章で詳しく述べる。

最後に、時間が示されない動詞文について述べる。これは、不定の接尾辞-i を末尾に持つ動詞で終える文である。このかたちは、日本語標準語のいわゆる連用形に対応するかたちであるが、日本本土諸方言に見られる連用形命令とは性質がまったく異なり、命令といった言語行為をあらわすことはない。不定形で終える動詞文は、平叙文である。ただし、その語形を見ただけでは、時間が示されていないため、どの時点で起こった（もしくは起こる）出来事であるのか不明である。

(10-106) a. kinoo num-i
昨日 飲む-INF
昨日、飲んだ

b. maruma num-i
今 飲む-INF
今、飲んだ/飲んでいる

c. maruma=hara num-i
今=奪 飲む-INF
今から、飲む

このように、不定形動詞は時間が示されていない。なお、他の時制接尾辞と同じ時間をあ
らわせるのであるが、それらとの違いはわかっていない。

10.6.2. 名詞文のテンポラリティー

黒島方言のコピュラは、動詞と基本的には同じ活用を持つ。しかし、上の節で述べた-jassu
や不定形は持たない。したがって、コピュラがとる形態として過去と非過去の対立を持つ。

(10-107) a. 過去の名詞文

unu	pusu=a	iso+pusu=du	ar-ta
この	人=TOP	海+人=FOC	COP-PST
この人は漁師だった			

b. 非過去の名詞文

unu	pusu=a	iso+pusu=du	ar-Ø
この	人=TOP	海+人=FOC	COP-NPST
この人は漁師だ			

ただし、名詞文はコピュラを用いない場合が頻繁に観察され、この場合、時間が指定され
ない。

10.6.3. 形容詞文のテンポラリティー

形容詞の語形において明示されるテンポラリティーは過去のみである。現在や未来をあ
らわしたい場合の専用のかたちは黒島方言には存在しない。その際は、絶対形を用いる。
絶対形を用いて過去のことを述べることも、やや不自然ではあると判断されるものの、可
能ではあるため、厳密には絶対形には時間的意味は含まれていないものと考えられる。し
かし、絶対形形容詞で文を終えた場合、現在のこととして解釈されるのが普通である。

(10-108) 形容詞過去形を用いた過去をあらわす文

kinoo=a	acca-ta
昨日=TOP	暑い-PST
昨日は暑かった	

(10-109) a. 形容詞絶対形を用いた過去をあらわす文

?kinoo=a	acca
昨日=TOP	暑い.ABS
昨日は暑かった	

b. 形容詞絶対形を用いた現在をあらわす文

kjuu=a	acca
今日=TOP	暑い.ABS
今日は暑い	

10.7. アスペクチュアリティー

本節ではアスペクチュアリティーについて述べる。アスペクチュアリティーとは、出来
事内部の時間的表現としておく。本節ではまず、黒島方言において頻繁に用いられる 3 つ
のアスペクチュアリティー形式、助動詞 bur、接尾辞-eer、接尾辞-idar-についてまとめる。

- b. tanna waar-eer-Ø?
 誰か いらっしゃる-CONT-NPST
 誰かいらっしゃる？（人の家に訪ねて行ったときに、玄関口で）
- c. saki num-eer-Ø
 酒 飲む-CONT-NPST
 酒を飲んでいる（飲んでいる最中も、飲んだ結果の継続もあらわせる）

10.7.3. 接尾辞 idar

アスペクト接尾辞-*idar*-は、できごとの完了をあらわす。

- (10-116) a. kinoo=a vv-*idar*-Ø
 昨日=TOP 降る-*COMP-NPST*
 昨日は（雨が）降った
- b. jaa=nu maa=a kuzu cjuugakusee nar-*idar*-Ø
 家=GEN 孫=TOP 去年 中学生 なる-*COMP-NPST*
 うちの孫は去年中学生になった

したがって、上の-*eer*-を用いることができる文で、-*idar*-も用いることができるものは多い。

- (10-117) menkjo=a nizjuuhaci=nu tuki=na tur-*idar*-Ø
 免許=TOP 28=GEN 時=LOC とる-*CONT-NPST*
 免許は28の時にとった（80代のおじいの発話）

しかし、-*eer*-が状態をあらわせるのに対し、-*idar*-は完了しかあらわせないので、以下のような例で差が出る。

- (10-118) saki num-*idar*-Ø
 酒 飲む-*COMP-NPST*
 酒を飲んだ（今飲んでいることはあらわせない）

10.7.4. beer 結果継続

beer は、主に結果の継続をあらわす。以下のように用いられる。

- (10-119) a. jaa=nu sit-irar-i beer-Ø
 家=NOM 捨てる-*PASS-INF* *CONT-NPST*
 家が捨てられている
- b. harata=nu joor-i beer-u sizi ar-Ø
 体=NOM 弱る-*INF* *CONT-NPST* 筋 *COP-NPST*
 体が弱っているわけだ

しかし、動作の継続も同時にあらわすことができる。

- (10-120) maruma saki=ju num-i beer-Ø
 今 酒=ACC1 飲む-*INF* *CONT-NPST*
 今、酒を飲んでいる

したがって、この *beer* は、変化動詞であれば結果の継続、動作動詞であれば動作の継続をあらわすものと考えられる。また、状態動詞と共起する場合もある。

(10-121) tosjokan=na simmuci=nu uraari ar-i beer-Ø
 図書館=LOC 本=NOM たくさん ある-INF CONT-NPST
 図書館には本がたくさんある

もちろん、beer なしで (10-122)のように言っても存在の意味をあらわすことは可能である。現在のところ、beer ありの場合となしの場合との間の意味の差異はわかっていない。今後の課題としたい。また、この beer の形態統語的ふるまいについても今後の課題である。

(10-122) tosjokan=na simmuci=nu uraari ar-Ø
 図書館=LOC 本=NOM たくさん ある-NPST
 図書館には本がたくさんある

10.7.5. arak 習慣

助動詞 arak は習慣をあらわす。例を示す。

(10-123) a. maisitumuti aazi=ba=du par-i arak-u
 毎朝 駆け足=ACC2=FOC 走る-INF HAB-NPST
 毎朝、走っている

b. mukasi=a mee niv-ansukun ook-i arak-uta
 昔=TOP FIL 寝る-NEGSEQ 動く-INF HAB-PST
 昔は、寝ずに動いていた

c. mukasi=a ama+mizi=ba num-i arak-uta
 昔=TOP 甘い+水=ACC2 飲む-INF HAB-PST
 昔は雨水を飲んでいて

この助動詞 arak は、(10-124)のように、さらに助動詞 bur をとる場合もあるが、それらの間の意味の違いはわかっていない。

(10-124) maisitumuti aazi=ba=du par-i arak-i bur-Ø
 毎朝 駆け足=ACC2=FOC 走る-INF HAB-INF PROG-NPST
 毎朝、走っている

10.7.6. 複合動詞 tuus

複合動詞 tuus は、ある瞬間だけではなく、ある程度の期間を通した動作の継続を意味する。したがって、「木が倒れている」という意味をあらわすのに進行の助動詞 bur を使って、「1本の大きな木が立っている状態から、ゆっくり倒れる」というイベントを描写できるのに対し、この助動詞 tuus を使っては、その状況は言いあわせない。仮に、以下の (10-125) のような発話があった場合、「ある程度の時間をかけて、何本もの木が連続して倒れた」という意味になる¹⁰⁰。

(10-125) ki=nu toor-i tuus-ita
 木=NOM 倒れる-INF 通す-PST
 木が倒れ続けた

¹⁰⁰ ゆっくりと時間をかけて行われる動作（「日本学棟がゆっくり倒れている」のような）についてもこの tuus は使用可能かと思われるが、今後の調査が必要である。

なお、この *tuus* は連濁¹⁰¹を起こすため、助動詞としてではなく複合動詞と考えられる。

- | | |
|------------------------|----------------------|
| (10-126) a. 連濁を起こさない変異 | b. 連濁を起こす変異 |
| <i>toorituusi</i> | <i>tooriduusi</i> |
| <i>toor-i+tuus-i</i> | <i>toor-i+tuus-i</i> |
| 倒れる-INF+通す-INF | 倒れる-INF+通す-INF |
| 倒れ続ける | 倒れ続ける |

10.8. 可能

本節においては、可能にまつわる表現について述べる（形態の詳細については 5.4.2. を参照のこと）。黒島方言においては、能力可能を区別してあらかず。可能表現に関係する形式は *-iss-* と *-ar-* という 2 つの接尾辞である。このうち、*-iss-* のほうは能力可能のみをあらわす。これに対し、*-ar-* のほうはどのような可能の表現にも用いられる。例を示す。

- (10-127) *haratta=a ganzuu=du ar-iba u-iss-e-ru=nu*
 体=TOP 元気=FOC COP-CSL 泳ぐ-ABIL-NPST-ADN=ADVRS

kjuu=a ami=nu vv-eer-iba u-ar-un-un
 今日=TOP 雨=NOM 降る-CONT-CSL 泳ぐ-POT-NEG-NPST.DECL
 体は元気だから泳げるけど、今日は雨が降っているので泳げない

- (10-128) *maa=ja sina-ha-Ø=nu unu hon=na jum-iss-an-un*
 孫=TOP 幼い-ADJVZ-INF=ADVRS この 本=TOP 読む-ABLIT-NEG-NPST.DECL
 孫は幼いから、この本は読むことができない

- (10-129) *-ar-*による能力可能の例
haratta=nu ganzuu=du ar-iba u-ar-u-n=do
 体=NOM 元気=FOC COP-CSL 泳ぐ-POT-NPST-DECL=SF
 体が元気だから泳げるよ

したがって、以下の例(10-130)は、能力に関わることのない不可能をあらわす文であるため、非文法的となる。

- (10-130) **unu hon=na jar-i jum-iss-an-un*
 この 本=TOP 破れる-INF 読む-ABILT-NEG-NPST.DECL

10.9. 否定

本節では、黒島方言における否定について述べる。黒島方言における否定は、品詞や、品詞の下位類によって、その方法が異なる。否定のしかたは、形態的な否定、否定専用の語を使用する場合、そして、統語的な否定の 3 種類がある。それぞれの方法と形式を表にまとめると以下のとおりである。

¹⁰¹ 連濁はいかなる語の組み合わせにおいても義務的ではない。

表 10-1 否定の種類

形態的な否定		否定専用の語の使用		統語的な否定	
生物の存在 bur	bur-an	無生物の存在 ar	naan	形容詞 guffa	guffa naan
コンピュータ ar	ar-an				
他の動詞 hak	hak-an				

上に示したとおり、形態的な否定をとるのはほとんどの動詞類である。しかし、例外として、無生物の存在の否定をあらわす場合に限って、否定専用の語を用いる。そして、形容詞の否定は、この無生物の存在の否定をあらわす動詞と同形の助動詞 *naan* を用いた統語的な否定である。以下、それぞれ例を示す。

(10-131) 生物の存在の否定

gira=n bur-an
 シャコガイ=ADD いる-NEG
 シャコガイもない

(10-132) コピュラの否定

banaa isa ar-an-un=do
 1.SG.TOP 医者 COP-NEG-NPST.DECL=SF
 私は医者じゃないよ

(10-133) 無生物の存在の否定

mesitu=na=a macijaa=nu=du naan-un=waja
 宮里=LOC=TOP お店=NOM=FOC STATE.NEG-NPST.DECL=SF
 宮里にはお店がない

(10-134) 形容詞の否定

acaha=a piija naan-un=ra
 明日=TOP 寒い.ABS STATE.NEG-NPST.DECL=SF
 明日は寒くないよね

(10-135) 動詞の否定

banaa saki=a num-an-un
 1.SG.TOP 酒=TOP 飲む-NEG-NPST.DECL

第二部

個別トピック

第二部導入

第二部においては、個別トピックに関する議論を行う。これらは、他言語や他方言との対照などの視点を含むため、本論文においては個別に取り出して論じるほうがよいと判断されたものである。また、これらのトピックは、黒島方言を特徴づけるものでもある。

第二部目次

11. 二重有声摩擦音について
12. 形容詞の認定
13. いわゆる「終止形」と「連体形」について
14. テンポラリティー・アスペクチュアリティー・エビデンシャルティー接尾辞 *jassu* について
15. 属性語幹化接尾辞 *-ida-* について

11. 二重有声摩擦音について

11.1. はじめに

本章においては、二重有声摩擦音の認定と、それにまつわる類型論的トピックを扱う。特に、二重有声摩擦音の形態音韻的ふるまいについては、他の琉球諸語においても類例の報告がなく、本章で取り上げる現象の記述は資料としても極めて重要であると同時に、すでに判明している言語類型論的傾向を新たな側面から支持するデータを提供するため、個別にとりあげて述べる。

黒島方言においては二重有声摩擦音が聞かれる。しかし、以下に示すとおり、同じ語に単音の有声摩擦音が聞かれる変異もある。

- (11-1) a. zzan [z:ɑŋ ~ za:ŋ] 「しらみ」
 b. vvuiru [v:uiri ~ vu:iru] 「黒色」

また語によっては、単音の変異が聞かれた場合、他の語と同音になる場合もある。

- (11-2) a. zzaku [z:aku ~ za:ku] 「咳」
 b. zaaku [za:ku] 「仕事」

そして、単音の変異は頻繁に聞かれる。では、この二重有声摩擦は、単音の有声摩擦音の音声的な変異と考えてよいのであろうか。そこで、本章ではこのような黒島方言の二重有声摩擦音に関して、以下のことを述べることを目的とする。

- (11-3) 本章で述べること
- a. 黒島方言には二重有声摩擦音と単音の有声摩擦音との音韻的対立を認める
 - b. 基底に二重有声摩擦音を立てる
 - c. 黒島方言の二重有声摩擦音の実現には揺れがあるが、それは言語類型論的傾向に合う

さらに、これまでに提案されている言語類型論的傾向を細分化すると、より例外のすくない類型論的傾向が述べられる、ということも合わせて述べる。

本章の構成は、以下のとおりである。次の 11.2.においては本章にかかわる範囲の音韻論を、音素配列を中心に簡単に述べる。続く 11.3.は本章の主張を述べるものであり、ここでは二重音と単音の有声摩擦音のふるまいの違いを述べる。そのうえで、二重有声摩擦音の変異の分布を確認する。そして 11.4.においては、その実現の揺れが言語類型論的傾向に合致することを述べる。さらに、黒島方言の示す事実を考慮に入れ、細分化することによって、より例外の少ない含意関係を示すことができることも述べる。最後の 11.5.ではまとめと今後の課題を述べる。なお、本章は摩擦音についての研究であるが、/h/は二重音としてはあらわれないため、残る/f, v, s, z/を議論の対象とする。

11.2. 黒島方言の音素配列の概略

本節では、本章の議論にかかわる音素配列について述べる。黒島方言は (C) V を基本とする音素配列を持つ。これにいくつか例外を足せばよい。半母音については省略する。以下では、#は語境界をあらわす。

(11-4) 黒島方言の音素配列の例外（単純語の場合）

- a. 語末： $C_1VC_2\#$ となる場合、 C_2 は、/r/か/n/である。
- b. 語中： $C_1VC_2C_3V$ となる場合の C_2C_3 は必ず同じ音素である。
ただし、有声破裂音ならびに/h/がこの位置に立つことはない。
- c. 語頭： $\#C_1C_2V$ となる場合は、 C_1C_2 は鼻音か摩擦音の同じ音素の連続、もしくは、 C_1 が鼻音 C_2 が阻害音の組み合わせである。

11.3. 単音と二重音の有声摩擦音の違い

本節においては、黒島方言における単音と二重音の有声摩擦音の違いを示す（11.3.1.）。その後、二重有声摩擦音を認めることのメリットを示す（11.3.2.）。最後に11.3.3.において、二重有声摩擦音の実現の揺れについてまとめる。

11.3.1. 形態音韻的ふるまいの違い

まず、二重音と単音の摩擦音の違いを示す。冒頭に示したように、一見、二重有声摩擦音と単子音の有声摩擦音は区別がつかない。実際、語頭に二重有声摩擦音がたった場合、単子音化（+母音の延長）してあらわれることのほうが圧倒的に多い。しかし、二重音と単音は形態音韻的ふるまいの違いがあるため、区別される必要がある。それは、複合語の後部要素になった場合（以下、「語中」とする）に明らかになる。（11-5）は、冒頭に示した「咳」と「仕事」の例である。

(11-5) a.	hara+zzaku	[haras:aku ~ haraza:ku ~ haraz:aku]	「空咳」
b.	ubu+zaaku	[ubuza:ku]	「大仕事」
(11-6) a-1.	zza	[z:a ~ za:]	「下」
b-1.	za	[za:]	「座」
a-2.	ui+zza	[uis:a ~ uiza: ~ uiz:a]	「上下」
b-2.	ui+za	[uiza]	「上座」
(11-7) a-1.	zzu	[z:u ~ zu:]	「糞」
b-1.	zuu	[zu:]	「しっぼ」
a-2.	ubu+zzu	[ubus:u ~ ubuzu: ~ ubuz:u]	「大きい糞」
b-2.	ubu+zuu	[ubuzu:]	「大きいしっぼ」

上の例に示したとおり、二重子音の場合は語中において、無声化する変異も持つ。しかし、短子音のほうが無声化することはない。そして、二重子音のほうは、語中の場合、無声化した変異がもっともよく聞かれる。このように、語中におけるふるまいが短子音と二重子音とでは異なるため、音韻的にこれら是对立していると考えられる。

11.3.2. 二重有声摩擦音を認めることのメリット

本節では、二重有声摩擦音を認め、上記の音韻規則を想定することのメリットを2つ述べる。1点目は動詞の活用型を減らすことができる、というものであり、もう1点は普通形容詞化接尾辞の母音同化の例外をなくす、という点である。以下、それぞれ述べる。

11.3.2.1. 動詞活用の型を減らす

本節では、二重有声摩擦音とその形態音韻規則を認めることの1つ目のメリットである、動詞活用の整理について述べる。黒島方言の動詞は不規則動詞を除くと基本的には2つの活用型に分けられる（動詞の形態に関しては5章を参照のこと）。これらの基本の活用型はどちらも語幹が交替しない。しかし、「(雨が) 降る」と「くれる」を意味する動詞が問題であった。それは、以下のようなふるまいを示すためである。基本の活用型であるA型（「書く」）とB型（「消える」）も同時に示す。

表 11-1 黒島方言の基本の動詞活用と例外と思われるもの

	基本 A 型「書く」	「降る」	基本 B 型「消える」	「くれる」
非過去肯定	[haku] hak-u	[vu:]	[ki:ru] ki-iru	[vi:ru]
非過去否定	[hakan] hak-an	[va:n]	[k'u:n] ki-un	[vu:n]
不定形	[haki] hak-i	[vi:]	[ki:] ki-i	[vi:]

上に示したとおり、基本 A 型は語幹にそれぞれ、非過去肯定の場合-u、非過去否定の場合-an、不定形（いわゆる連用形）の場合-i という接辞を後接させる。仮にこのように考えた場合、「降る」は、語幹が *vu*、*va*、*vi* と交替することになり、語幹が一定である基本 A 型とは違う特徴を持つことになる。また、基本 B 型の非過去否定で、かつ、語幹末母音が *i* であった場合、形態音韻規則により口蓋化が生じる（[k'u:n]）のであるが（2.4.7.を参照のこと）、「くれる」はそれが生じない（[vu:n]）。このように、実現形に忠実に考えた場合、「降る」のほうは基本 A 型とは明らかに異なる体系となり、「くれる」のほうも例外となる。

しかし、これらも二重有声摩擦音とその音韻規則を想定すれば、基本の活用型として考えることができる。つまり、「降る」も「くれる」も語幹として「*vv*」を立て、語頭の音韻規則「単子音化+後続母音の延長」を適用すればいいのである。そのように考えた場合、たとえば「降る」の非過去肯定は *vv-u* が基底で考えられ、それに単子音化と後続母音の延長を考えると [vu:] が得られる、というものである。同様に、「降る」の否定は *vv-an* を基底として [va:n]、「降る」の不定形は *vv-i* を基底として [vi:] を得るのである。また、「くれる」の否定についても、*vv-un* を基底にたてることによって、[vu:n] が得られるのである。

なお、これには追加の証拠もある。それは「大降り」を意味する語が [ubuf:i] となることである。これは、*ubu+vv-i*（大+降る-絶対接辞）と分析されるが、この二重子音が語中において無声化したものと考えることができる。このように、動詞活用型の記述に際しても、本章において示した二重子音とその音韻規則は重要であると言える¹⁰²。なお、このような

¹⁰² ここで、歴史的な問題に触れておく。日本語の *sir* や *sur* などに対応する音列は黒島方言では語頭では *zz*、語中では *ss* に対応する場合が多い。たとえば、黒島方言では「白」は *zzu* であり、「むしれる」は *mussiru* である。そのため、二重無声音を基底に考え、語頭で有声化する、と考えることもできる。しかし、本章ではその案はとらない。なぜならば、今回扱うのとは別に二重無声摩擦音が存在するためである。たとえば、「傘」は *ssana* であるし、「くぎ」は *ffun* である。ちなみにこれらは複合語の後部要素になっても有声にならず、二重有声摩擦音とは異なるふるまいを示す。ただし、二重無声摩擦音を語頭に持つ語は極めて限られていて、今のところこれらの2語しか見つかっていない。そのため、これらを例

事実は、たとえば平山など (1967) などの先行研究においては指摘されていない。

11.3.2.2. 普通形容詞化接尾辞の母音同化の例外をなくす

もう 1 点の、二重有声摩擦音とその形態音韻規則を想定することのメリットは、普通形容詞化接尾辞の母音同化の例外をなくす、という点である。「白い」と「黒い」を意味する普通形容詞は、以下のような変異を持つ。

- (11-8) a. 「白い」 [zo:ho ~ z:oho]
b. 「黒い」 [vo:ho ~ v:oho]

これらの変異のうち、長母音があらわれる[zo:ho]と[vo:ho]で実現する場合は圧倒的に多く、二重摩擦音のほうは、こちらが確認しないと出てこない場合さえある。したがって、zoho や vooho という語形を考えることが表層形からは考えられる。

しかし、これらの語形は実は例外的である。それは以下のような例から明らかである。以下に示す形容詞は、すべて普通形容詞化接尾辞-ha の前が短母音である。

- (11-9) a. 「大きい」 //ubu-ha// [uboho]
b. 「広い」 //pusu-ha// [pusoho]
c. 「小さい」 //imi-ha// [imehe]

これらの普通形容詞は、/ha/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則に従っている (2.4.3. を参照のこと)。しかし、もし/ha/を先頭に持つ拘束形態素の形態音韻規則に忠実に従うとしたら、長母音のあとは、母音同化が生じないのである。以下は、向格助詞=ha の例である。

- (11-10) a. 語末が短母音/i/の語のあと
isanaki=ha [isanakehe]
石垣=ALL
石垣へ
b. 語末が短母音/u/のあと
meeku=ha [me:koho]
宮古=ALL
宮古へ
c. 語末が長母音/oo/のあと
kuukoo=ha [ku:ko:ha] (*[ku:ko:ho])
空港=ALL
空港へ

このように、長母音のあとでは/ha/を先頭に持つ拘束形態素は母音同化を起こさないのである。そして、通常、普通形容詞化接尾辞-ha は、この規則に従うものである。しかし、上に示したように、「白い」や「黒い」は表層形を見る限りにおいては、長母音のあとに母音同化を起こしているように見える。したがって、これらは例外扱いをせざるを得ない。

しかし、本章で示すような二重有声摩擦音の形態音韻規則を想定すればこれらは例外扱いする必要はない。つまり、「白い」は語根に zzu を、「黒い」は vvu をたて、それらに普通形容詞化接尾辞を付し、それぞれ、//zzu-ha//、//vvu-ha//という基底形を想定するのである。

外扱いとする、という考え方もあってよいかもしれない。なお、ssana「傘」とffun「くぎ」が複合語の後部要素にたった場合、[habisana]「紙傘」や[ubufun]「大きなくぎ」のように単音化する。これはまた別の課題として今後検討が必要である。

このように考え、短子音化+後続母音の長母音化を想定すれば、*zooho* や *vooho* といった表層形が得られるのである。

さらに、「白い」「黒い」は複合語の後部要素になった場合に無声化する。このことも、これらの語根の基底形に二重有声摩擦音を想定することを支持するものである。

- (11-11) a. 「肌が白い」 *pada+zzu-ha* [padas:oho]
肌+白い-ADJVZ.ABS
b. 「肌が黒い」 *pada+vvu-ha* [padaffoho]
肌+黒い-ADJVZ.ABS

以上、本節では、動詞、形容詞の形態の面から、二重有声摩擦音とその形態音韻規則を想定することのメリットを述べた。

11.3.3. 二重有声摩擦音の実現の揺れ

ここで、二重有声摩擦音の変異の分布をまとめておく。二重有声摩擦音で実現する場合を除くと、二重有声摩擦音の実現の揺れは以下のように示すことができる。

(11-12) 黒島方言における二重有声摩擦音の実現の揺れ

- a. 語頭の場合：「単子音化+後続母音の延長」
b. 語中の場合：「単子音化+後続母音の延長」「無声化」

実際にもっとも選択される変異は、語頭では「単子音化+後続母音の延長」([za:])が起こったものであり、語中では「無声化」([uis:a])が起こったものである。

さらに、語頭では単子音化+母音の延長が定着し、それが語頭における基底形と考えられているように思われる事実もある。それは上に述べた母音同化と最小語制約によって明らかである（これらの音韻規則の詳細は第2章を参照のこと）。たとえば、「糞」をあらわす語は、複合語の後部要素にたった場合、「大きい糞」[ubus:u]のように無声化するため、基底では *zzu* と考えられる。これは、2モーラあって、末尾母音が *u* である語と考えられるので、主題助詞=*a* が後接した場合、母音同化が起こるのが予想される。しかし実際は、[zu:ja] となり、[z:o:] とはならない。つまり、もはや語頭では *zzu* とは認識されておらず、*zuu* または *zu* と認識されているのである。つまり、2モーラではあるが、末尾母音が長母音と認識されているか、1モーラ語として認識され、それに最小語制約がかかり母音が延長されているか、のどちらかであると解釈できる¹⁰³。この点は、明らかに鼻音の連続とは異なる。たとえば、「胸」を意味する語は *nni* であるが、これに主題助詞がついた場合 [n:e:] となる。つまり、*nni* は2モーラで末尾が *i* と考えられているのである。このようなことから、語頭における二重有声摩擦音の単音化が非常に進んでいることがわかる¹⁰⁴。

¹⁰³ 指小辞-*ama* も語頭に/a/を持つ拘束形態素の形態音韻規則に従う。*zza* 「草」に指小辞を付した場合、[za:ma] と実現し、[za:ja:ma] とはならない。これはつまり、「草」の基底形が *zaa* ではなく、*zza* であることを示している。「糞」*zzu* に指小辞を付した形式は得られなかったが、単子音化が進んでいる環境とそうでない環境がそれぞれあるようである。

¹⁰⁴ なお、黒島方言においては語頭の二重鼻音も観察されるが、摩擦音とはふるまいが異なる。まず、絶対に単音化が生じない。たとえば、*mma* 「馬」は[m:a]と実現し、これが[ma:]と実現することはない。また、複合語の後部要素にたつと、*biki+mma* [bikim:a]となり、この場合も単音化などを起こすことはない。なお、黒島方言における語頭の二重子音は鼻音と摩擦音のみであり、他の子音は語中のみで二重子音としてあらわれる。

11.4. 類型論的位置づけ

黒島方言における二重有声摩擦音の実現の揺れは、簡単に言うと、語中での有声二重摩擦音が用いられにくい、ということである。しかし、ではなぜ語中にだけ無声化する変異があるのか、などといったことには疑問が残る。

そこで、本節では言語類型論的に、二重摩擦音に関しては語中の無声がもっともあらわれやすい、ということ述べ、黒島方言の二重摩擦音の分布もそれに合致するものである、と述べる (11.4.1.)。そして最後に、今回の研究の結果から、二重子音の類型論を考える際は、調音法や位置のみを考慮に入れるのではなく、それらを組み合わせることによって、より例外の少ない言語類型論的含意関係が提出できる、ということ述べる (11.4.2.)。

11.4.1. 類型論的傾向と黒島方言の二重有声摩擦音の実現の揺れ

語頭を含む二重子音についての類型論的な研究には、Thurgood (1993)、Muller (2001)、Kraehenmann (2011) などがある。本章では、Muller (2001: 107-235) で示された 29 の語頭二重子音を持つ言語のリストを参照し、有声/無声の二重摩擦音がどのような分布を示すか確認する。次のページからの表 11-2 と 11-3 に示す。

29 のうち、19 言語が (語頭、語中を問わず) 摩擦音の二重子音を持っていた。しかし、オーストロアジア語族モンクメール語派の *Nhaheun* はほぼ単音節語のみの言語なので、この言語は語中の二重子音というものが可能かどうか判断できない (Muller 2001: 124)。そのためこれを除く残りの 18 言語について考察する。

これらの 18 言語の二重摩擦音の有声/無声と語頭/語中に関して確認したところ、「有声二重摩擦音を持つ場合、無声二重摩擦音も持つ」、また、「語頭に二重摩擦音を持つ場合、語中にも二重摩擦音を持つ」ということが明らかになった。たとえば、*Taba* のように、/ss/しか持たず、/zz/は持たない言語というのはほかにもあるが、逆に/zz/しか持たず、/ss/を持たない、という言語は存在しない。また、*Cypriot Greek* は語中に/zz/を持つが、語頭には持たない。*Bernese Swiss* は、/ss/を語中に持つが、語頭には持たない¹⁰⁵。これらのような言語はほかにもあるが、逆に語頭にだけ二重摩擦音を持って、語中には持たない、という言語はない¹⁰⁶。これらの組み合わせから、語中の無声摩擦音が最も一般的である、ということがわかる。実際、二重摩擦音を持つ言語はすべて語中の/ss/を持つ。このように、他の言語の分布からも、二重摩擦音に関しては語中の無声のものがもっとも生起しやすい、ということがわかり、黒島方言もこれに合致するものであると言える。

¹⁰⁵ ただし、このように位置による違いを持つのは *Cypriot Greek* と 2 つのスイスのドイツ語だけである。

¹⁰⁶ *Sa'ban* はすべての二重子音が語頭に生起しうると Muller (2001: 130) に記してあるが、語中は「few」と書いてあり、それがどのような条件かわからない。したがって、これが唯一の例外になる可能性があるが、詳細は不明である。さらに、Blust (2007) によると、そもそも 2 音節語が圧倒的に多かったところに第 1 音節の母音が消失した結果、語頭に二重子音が生じたものとされている。

表 11-2 Muller (2001) の言語リスト (二重歯茎摩擦音)

言語名	語頭		語中	
	SS	ZZ	SS	ZZ
Atepec Zapotec (オト-マンゲ)				
Bernese Swiss (IE)			SS	
Breton (IE)	SS		SS	
Chuukese (Trukese とも。A)	SS		SS	
Circassian (C)	SS		SS	
Cypriot Greek (IE)	SS		SS	ZZ
Cypriot Maronite Arabic (AA)	SS	ZZ	SS	ZZ
Dobel (A)	SS		SS	
Hatam (西パプア)				
Hatoma (南琉球八重山)	SS		SS	
Kiribati (A)				
Lak (C)	SS		SS	
Leti (A)	SS		SS	
Logbara (中央スーダン)				
Luganda (ニジェールコンゴ)	SS	ZZ	SS	ZZ
Moroccan Arabic (AA)	SS	ZZ	SS	ZZ
Ngada (A)				
Nhaheun (オーストロアジア)	SS			
Pattani Malay (A)				
Piro (アラワク)				
Ponapean (A)				
Puluwat (A)	SS		SS	
Roma (A)				
Sa'ban (A)	SS		(SS)	
Taba (A)	SS		SS	
Tamazight Berber (AA)	SS	ZZ	SS	ZZ
Thurgovian Swiss German (IE)			SS	
Woleaian (A)	SS		SS	
Yapese (A)				

※A はオーストロネシア語族、AA はアフロアジア語族、C はコーカサス諸語、IE はインドヨーロッパ語族をあらわす。

表 11-3 Muller (2001) の言語リスト (二重唇歯摩擦音)

言語名	語頭		語中	
	ff	vv	ff	vv
Atepec Zapotec (オト-マンゲ)				
Bernese Swiss (IE)			ff	
Breton (IE)	ff	vv	ff	vv
Chuukese (Trukese とも。A)	ff		ff	
Circassian (C)				
Cypriot Greek (IE)	ff		ff	vv
Cypriot Maronite Arabic (AA)	ff	vv	ff	vv
Dobel (A)				
Hatam (西パプア)				
Hatoma (南琉球八重山)	ff		ff	
Kiribati (A)				
Lak (C)				
Leti (A)				
Logbara (中央スーダン)				
Luganda (ニジェールコンゴ)	ff	vv	ff	vv
Moroccan Arabic (AA)	ff		ff	
Ngada (A)				
Nhaheun (オーストロアジア)				
Pattani Malay (A)				
Piro (アラワク)				
Ponapean (A)				
Puluwat (A)	ff		ff	
Roma (A)				
Sa'ban (A)				
Taba (A)				
Tamazight Berber (AA)	ff		ff	
Thurgovian Swiss German (IE)			ff	
Woleaian (A)	ff		ff	
Yapese (A)				

※A はオーストロネシア語族、AA はアフロアジア語族、C はコーカサス諸語、IE はインドヨーロッパ語族をあらわす。

11.4.2. 類型論的含意関係の細分化

本節では、二重子音の類型論的研究に対して、Muller (2001) のリストを本研究において精査した結果から提出できるものを述べる。これまでの二重子音の類型論的研究では、調音点、調音法、位置、有声性などによってどの二重子音が最も一般的であるか、また、どのような順序で一般的であるか、などその傾向が議論されてきた。たとえば、Thurgood (1993) では、二重子音は母音に挟まれた場合が最も一般的であると述べられている。つまり、位置の観点からは母音に挟まれた二重子音が最も一般的である、ということである。Dmitrieva

(2011: 159) においても、同様のことが述べられているが、Pattani Malay、Sa'ban、Yapese、Ngada、Nhaneun が例外であり、これらの言語には母音に挟まれていない二重子音のみが存在する、とされている。ここで、Sa'ban と Nhaneun はそれぞれの言語に特有の問題があるため除くとして、残りの 3 言語について考える。これらの 3 言語は、前節では扱わなかった言語、すなわち、二重摩擦音を持たない言語である。ということは、母音に挟まれていない環境にのみ二重子音がある場合、それは摩擦音ではない、ということである。実際には、Pattani Malay と Ngada は破裂音と共鳴音、Yapese は l と g のみが（語頭の）二重子音としてあらわれるようである (Muller 2001)。つまり、これらの言語を除いて考え、二重摩擦音についてのみ考慮に入れると、語頭にそれがあつた場合、かならず語中にもあると言えるのである。このように、二重子音の位置だけでは含意関係がすっきりしなかったが、位置と調音法を組み合わせることによって、より例外の少ない含意関係を提出できるのである。

また、有声/無声・語頭/語中の二重摩擦音の知覚に関する実験を行った Pajak (2013) でも述べられているとおり、二重子音の知覚のしやすさは位置、調音法、有声性などの組み合わせによって異なるはずである。本研究も、Pajak (2013) 同様、二重子音の類型論は 1 つの観点だけで考慮されるべきものではなく、複数の要素の組み合わせでこそ説明がより簡単になる、と主張するものである。

11.5. まとめと今後の課題

本章では、黒島方言において、二重音と単音の有声摩擦音の音韻的対立を認めることを主張した。さらに、二重有声摩擦音の実現には揺れがあるが、その分布は言語類型論傾向に合致することを述べた。また、二重子音の類型論においては位置、有声性、調音法などが考慮されるべきであるが、それらの条件を単独で考えるのではなく、組み合わせて考えることの重要性も示した。

ただし、残された課題もある。たとえば、二重子音の分布にはアクセントとのかかわりがあることが指摘されているが (Thurgood 1993, Dmitrieva 2011 など)、アクセントを今回は考慮していない。黒島方言のアクセントの全体像を明らかにすることも含め、今後の課題である。

最後に、Kraehenmann (2011: 1131) においては「語頭の二重子音/単子音の対立はオーストロネシア、インドヨーロッパ、アフロアジア、北コーカサスの語族に集中してあらわれる」とされており、日本語・琉球語諸方言は（語頭の）二重子音の類型論の議論においてほぼ見過ごされている状況である。Muller (2001) の言語リストにおいても、日本語・琉球諸語からは南琉球八重山鳩間方言があげられているだけである。しかし、福井県三国町安島方言 (新田 2011) や、南琉球宮古伊良部方言 (Shimoji 2008)、同大神方言 (Pellard 2010) など、黒島方言のほかにも日本語・琉球諸語には語頭の二重子音を持つ言語/方言があり、それらの示すヴァリエーションは大きいものである¹⁰⁷。これまで、標準日本語の促音に関する研究は活発になされてきたが、今後は日本語・琉球諸語の方言の研究をとおして、（語頭を含む）二重子音研究に貢献することが期待される。そのためには、各言語/方言の詳細な記述とそれらの対照が今後、課題となる。

¹⁰⁷ また、北琉球奄美湯湾方言においては、語頭の二重子音は観察されないが、音韻規則上、形態素境界をまたぐ語中に有声二重音が予測される場合に、それが無声になる現象が観察されるようである (Niinaga 2014: 48)。このように、語中における二重子音の無声化、という観点からも方言間のヴァリエーションを見ていくことができるかもしれない。

12. 形容詞の認定

本章では、黒島方言における形容詞の認定を行う。琉球諸語においては、形容詞という品詞の認定が問題になることが多い（麻生 2010a、2010b、下地 2010、新永 2010 など）。したがって、本研究においても形容詞をいかなる考え方のもと認定したのか示す必要がある。そのため、本章では、他の品詞の語との形態的、または統語的異同を示し、本論文における形容詞の認定を行う。ただし、他の方言の取り扱いとの対照も含むため、個別に取り出し、論じるものである。

本章の構成は以下のとおりである。まず、琉球諸方言の形容詞に関する研究の流れをまとめ、続いて、他方言における形容詞の認定を取り扱った研究を詳細にまとめる (12.1.)。続いて、黒島方言の形容詞、動詞、存在動詞、名詞+コピュラの形態統語的特徴をそれぞれ記述する。形容詞と他の品詞との比較をそれぞれ行い、品詞間の相違点をまとめ、形容詞を認めるという結論を確認する (12.2.)。最後に 12.3.において、他方言の判断との違いについて述べる。

なお、本節の目的は品詞分類（特に形容詞の認定）であるため、相違点に注目する。それぞれの品詞の形態の網羅的な記述は第 1 部を参照のこと。

12.1. 先行研究

本節においては、琉球諸方言の形容詞に関する先行研究のまとめを行う。特に、形容詞の認定に関して議論を行った研究を中心にとりあげるが (12.1.2)、その前に、琉球諸方言における形容詞全般に関する伝統的な先行研究をまとめ、研究の流れについて確認することとする (12.1.1.)。

12.1.1. 琉球語諸方言の形容詞に関する伝統的な研究

これまでの琉球語諸方言の研究において、常に最重要視されてきたのは、日本語との対応である。これは形容詞についても同じである。特に、琉球語諸方言の形容詞で注目されてきたのは、その成立である。つまり、「高い」を例にとると、その「名詞形」である「高さ」に「あり」が接続した「高さあり」を起源とする「サアリ系」と、「連用形」に「あり」が接続した「高くあり」を起源とする「クアリ系」の 2 種類に琉球語諸方言の形容詞は分類されることが述べられてきた（仲宗根 1961: 41-43、内間 1984: 541、名嘉真 1992: 8、上村 1997 (1992): 348-349 など）。これらは地理的な変異であるとみなされている。すなわち、「サアリ系」は、奄美諸島から沖縄本島・宮古多良間島・八重山諸島にひろがる。クアリ系は、宮古本島と伊良部島にある」（仲宗根 *ibid.*）とされている。八重山方言群に属する黒島方言はやはり、サアリ系の方言とされてきた（平山 1967: 179）。また、伊豆山 (1997) はこの琉球語諸方言形容詞の成立に関する定説に対して別の案を提出している¹⁰⁸。

次に重要視されてきたのは、活用である。第 1 部第 1 章に述べた、黒島方言に関する先行研究においても動詞や形容詞の活用が記述の中心であった（平山など 1967、山口 2004）。これは、ほかの琉球語諸方言についても同様である（平山など 1967 など）。特に、山田 (1983) は、例文を多く挙げながら、広い範囲の方言の形容詞について詳細に活用を描いて

¹⁰⁸ 本章は、歴史的な変化を述べる部分はあるが、どのような形式が現在の形容詞の起源となったか、といった成立の問題には立ち入らない。

いる。また、須山 (2007)、仲間 (2007)、かりまた (2007)、高江洲 (2007) もそれぞれ、奄美、与論、沖縄本島うるま、沖縄本島首里 (いずれも北琉球) の形容詞の活用の記述を行っている。

このように、琉球語諸方言の形容詞について特に重要視されてきたのは、上記のとおり、成立と活用であった。ここで問題となるのは、上に取り上げたすべての研究が、「形態統語的にこの方言には形容詞という品詞を立てる必要があるのか」という問いをまったく考慮することなく、日本語で対応する語の形容詞があるというだけ (たとえば、日本語の「高い」に対応する「takasa」が当該方言に見られる、など) で、形容詞という品詞を認めている点である。たとえば、平山など (1967: 183-184) は、南琉球八重山波照間方言に形容詞という品詞を立てたうえで活用を描いているが、結局その活用は動詞とかわるところがない。そのため、麻生 (2009、2010a、2010b) では、平山など (ibid.) において形容詞とされた語類を動詞の下位分類としている。次節において、形容詞の形態統語的認定を行った研究を詳しく見ていく。

12.1.2. 琉球語諸方言の形容詞の認定に関する研究

前節で述べたとおり、伝統的な琉球方言の研究では日本語との対応関係を研究するものが多かったため、その方言をひとつの言語として記述しようという意識が希薄である。そのため、形容詞に関しても、日本語の形容詞と対応関係のある語が使用された場合、それがすなわちその方言における形容詞である、と断定しており、方言ごとに形態統語的な吟味が行われたケースは稀である。

このように日本語との対応関係に力点を置いた研究が目立つなか、Shimoji (2009) は南琉球宮古伊良部島方言の記述の一環として、形容詞という品詞が伊良部島方言に必要かどうか、ということ論じている。そして最終的に、これまで周辺的とされてきた重複形のみが伊良部方言における形容詞である、と認定している。また、新永 (2010)、麻生 (2009、2010a、2010b) はそれぞれ北琉球奄美湯湾方言、南琉球八重山波照間方言に関して、形容詞が必要かどうか、という議論を行い、いずれも形容詞は必要ではなく、日本語の形容詞に類似した概念は、形態的には名詞や動詞であらわされる、という結論を得ている。本節では、これらの研究がどのように形容詞を認定した、もしくは認定しなかったか、詳しく見ていく。以下、Shimoji (2009)、新永 (2010)、麻生 (2009、2010a および 2010b) の順で概観する。

12.1.2.1. Shimoji (2009) による宮古伊良部方言の形容詞認定に関する議論

Shimoji (2009) は、南琉球宮古伊良部方言において、属性概念をあらわす語幹 (Property Concept 語幹:PC 語幹) から派生する5つの語類に関して、それらの形態統語的特徴を描き、品詞分類をおこなっている。このPC語幹は拘束形態素であり、語として機能するにはさらなる形態的操作が必要である。そして、その際の語形成のプロセスが多様である、と述べられている。下の表 12-1 に、Shimoji (ibid.: 33) であげられた「高い」という意味をあらわす語幹からの派生の例を挙げる。左から、形態的手段、語形、意味、最終的に判断された品詞、の順で示す (日本語訳は原田による)。これらの5つの語形のうち、形態統語的に名詞とも動詞とも異なる品詞として形容詞に分類されたのは、【重複】の takaa+taka のみである。なお、本節で示される例はすべて Shimoji (2009) によるものである。

表 12-1 Shimoji (2009: 33) による「高い」を意味する語幹からの派生の例

【形態的手段】	語形	意味	品詞
【複合 1】	taka+jama	(高い山)	名詞
【複合 2】	taka+munu	(高い)	名詞
【重複】	takaa+taka	(高い)	形容詞
【屈折】	taka+kar-Ø	(高い)	動詞
【副詞化】	taka-fi	(高く)	副詞

上記の表 12-1 で示された通り、PC 語幹から派生的手段は 5 つある。このうち、【複合 1】は文字通り複合名詞を形成するため、品詞は名詞である。そして、副詞化接辞をとる場合も、品詞は副詞である。問題となるのは、意味的にはすべて「高い」とされる、【複合 2】と【重複】と【屈折】である。以下、この 3 つについて見ていく。

まず、【複合 2】の taka+munu についてであるが、これは最終的に名詞と判断されている。この munu は、ことや人をあらわす語彙的な名詞であったが、現在は抽象的な意味しか持たない場合が多く、現在意味の消失を被りつつあるものである。このため、日本語訳を施した場合には、「高い」としか訳せない場合が多い。しかし、統語的にはコピュラの補語となったり、項となったりするため、名詞とほぼ¹⁰⁹同じ振る舞いを見せる。そのため、この【複合 2】taka+munu は、同研究においては形容詞ではなく名詞として認定されている。

次に、【屈折】するかたちである taka-kar-Ø についてであるが、これは最終的には動詞と判断されている。このかたちは、-kar-の部分 が動詞化接辞であり、これに屈折接辞が続くことで形成される。taka-kar-Ø の場合は、「Ø」が非過去の屈折接辞である。この際にとりうる屈折接辞が通常動詞と同じ¹¹⁰であるため、この taka-kar-Ø は動詞に分類されている。

最後に、動詞とも名詞とも異なる語類である形容詞として分類された【重複】takaa+takaを見ていく。以下、まずこの形容詞と動詞の違い、続いて、形容詞と名詞との違いについて見ていく。

まず、動詞と比べて、どのように異なるか、確認する。そもそも、動詞句内でこの【重複】形（形容詞）が生起すること自体が稀であるが、その場合には、かなり厳しい制限がある。それは、単純な動詞句の主動詞にはなれないという点と、（助動詞にはなれず）主動詞にしかなれず、助動詞に継続の意味の ur しかとれない、という点である。つまり、助動詞 ur をとらないと、動詞句には生起しえない、ということである。このような制限は当然、通常動詞にはない。通常動詞の例を示し、続いて重複形である形容詞の例を示す。

(12-1) a. tuz=zu tumi-tar 《通常動詞 (tumi) で、単純な動詞句の例》

嫁=ACC 探す-PST
嫁を探した

b. tuz=zu tumi-i=du u¹¹¹-tar 《通常動詞で、継続の助動詞が続いた例》

嫁=ACC 探す-MED=FOC PROG-PST
嫁を探していた

c. tuz=zu tumi-i=du t-tar 《通常動詞で、方向の助動詞が続いた例》

嫁=ACC 探す-MED=FOC DIR-PST
嫁を探してきた

¹⁰⁹ 【複合 2】 taka+munu などの、PC 語幹を含む複合名詞は、副詞による修飾が可能である (Shimoji 2009: 40)。

¹¹⁰ 一部、意味的に不可能な接辞もある。たとえば、同時 (～しながら) をあらわす-ccjaaki など (Shimoji 2009: 38)。

¹¹¹ 特に注記はないが、ur の異形態と思われる。

- (12-2) a. *imii+imi-tar 《形容詞は単純な動詞句の主動詞にはなれない》
 b. imii+imi=du ur-Ø 《形容詞に継続の助動詞が続いた例》
 小さい(重複)=FOC PROG-NPST
 小さい
 c. *imii+im=du t-tar 《形容詞は継続以外の助動詞はとれない》

続いて、名詞と形容詞を比べる。これらはコンピュータの補語になれるという点で共通している。しかし、大きく異なるのは、名詞は項になれるが、形容詞は項になれない、という点である。

- (12-3) a. uri=a imsj=du a-tar 《通常の名詞がコンピュータ補語になった例》
 彼=TOP 漁師=FOC COP-PST
 彼は漁師だった
 b. tuz=zu tumi-tar 《通常の名詞 (tuz) が項になった例》
 嫁=ACC 探す-PST
 嫁を探した

- (12-4) a. uri=a takaa+taka=du a-tar 《形容詞がコンピュータ補語になった例》
 彼=TOP 高い(重複)=FOC COP-PST
 彼は (背が) 高かった
 b. *takaa+taka=u¹¹² 《形容詞は項になれない》
 高い(重複)=ACC

このような議論をもとに、Shimoji (2009) では、PC 語幹の【重複】形は、動詞とも名詞とも形態統語的に異なるため、形容詞として認定する、としている¹¹³。以下の表 3 に、同研究で議論された形容詞、動詞、名詞を区別する基準を簡単にまとめておく。

表 12-2 Shimoji (2009) による、伊良部方言の形容詞、動詞、名詞を区別する基準

	形容詞	動詞	名詞
項になれる	×	×	○
コンピュータの補語になれる	○	×	○
単純な動詞句の主動詞になれる	×	○	×

12.1.2.2. 新永 (2010) による奄美湯湾方言の形容詞認定に関する議論

続いて、新永 (2010) による北琉球奄美湯湾方言の形容詞認定に関する議論を概観する。本節の例はすべて新永 (ibid.) による。結論としては、同方言に形容詞を認めず、動詞や名詞の下位分類としている。この方言の形容詞は、伝統的な「クアリ系」、「サアリ系」という分類では、「サアリ系」に属し、本稿で取り上げる黒島方言と同じである。しかし、黒島方言とは状況が異なり、新永 (ibid.) は湯湾方言に形容詞を認めていない。

新永 (2010) によると、湯湾方言の PC 語幹 (前節の宮古伊良部方言と同じ用語である) が形成する語形は 2 種類である。すなわち、名詞化接辞-sa をとる場合と、動詞化接辞-sa(r)

¹¹² zu と u は対格の異形態。

¹¹³ なお、Shimoji (2009) においては、通言語的に形容詞が担う機能についてもまとめ、実際にこの【重複】形がその機能を担っていることも示している。

をとる場合の 2 つである¹¹⁴。本節でも「高い」を意味する語幹を例にとる。名詞化接辞をとった場合の語形は *taa-sa* で、動詞化接辞をとった場合は、*taa-sa-i* (*-i* は非過去の接尾辞。*-sa* は *-sa(r)* の異形態。) である。

まず、名詞の下位分類とされた場合を見ていく。この場合、*taa-sa* は、連体詞に修飾される、項になれる、述語になれる、といった点で、名詞と同じふるまいをする。以下に例を示す。

- (12-5) a. *an kii* 《通常の名詞が連体詞に修飾された例》
 あの 木
 あの木
- b. *kii=nu tar-an* 《通常の名詞が項になった例》
 木=NOM 足る-NEG.NPST
 木が足りない
- c. *an kii=du gazjumaru* 《通常の名詞 (*gazjuaru*) が述語となった例》
 あの 木=FOC ガジュマル
 あの木がガジュマルだ
- (12-6) a. *an taa-sa* 《PC 語幹+名詞化接辞が連体詞に修飾された例》
 あの 高い-NLZ
 あの高さ
- b. *taa-sa=nu tar-an* 《PC 語幹+名詞化接辞が項になった例》
 高い-NLZ=NOM 足る-NEG.NPST
 高さが足りない
- c. *ankii=nu*¹¹⁵ *taa-sa* 《PC 語幹+名詞化接辞が述語になった例》
 あの 木=NOM 高い-NLZ
 あの木が高い

続いて、動詞の下位分類とされた場合を見る。これは、「融合で新たに生まれたと考えられる形式」(新永 2010: 7) とされている。つまり、「PC 語幹+名詞化接尾辞」と存在動詞である *ar* が融合してできたものである、ということである。つまり、*taa-sa ar* > *taa-sa(r)* のような融合を経たものである。そして、現在は「*taa-sa*」と「*r*」のように分析できず、*taa-sa(r)* のように一語化している。この PC 語幹+*sa(r)* は、とることのできる接辞がかなり限られているものの、動詞と同じ接辞をとりうるため、動詞の下位分類とされている。

- (12-7) *wan=ga jum-joo-i*
 私=NOM 読む-丁寧-NPST
 私が読みます

- (12-8) *an kii=nu taa-sa-joo-i*
 あの 木=NOM 高い-VLZ-丁寧-NPST
 あの木が高いです

以上のように、奄美湯湾方言においては、PC 語幹から形成される語は、名詞か動詞の下位分類となる、と述べられている。下の表 12-3 に、PC 語幹+接尾辞が、名詞や動詞と同じとされた特徴をまとめる。

¹¹⁴ 重複や名詞との複合などが可能かどうかは記述がないためわからない。

¹¹⁵ このように、PC 語幹+名詞化接辞が述語となる場合は主格表示をとるが、通常の名詞の場合は、焦点化表示が義務的となる。このような統語的な違いは存在する。

表 12-3 新永 (2010) による湯湾方言の PC 語幹+接尾辞と名詞、動詞が同じとされた特徴

	PC 語幹+名詞化接辞 (taa-sa)	名詞	PC 語幹+動詞化接辞 (taa-sa-i)	動詞
連体詞で修飾される	○	○	×	×
項になれる	○	○	×	×
述語になれる	○	○	○	○
ある種の接辞をとれる(-i, -joo-など)	×	×	○	○

12.1.2.3. 麻生 (2010b) による八重山波照間方言の形容詞認定に関する議論

最後に、南琉球八重山波照間方言での形容詞認定に関する議論を見る。これについては、3つの研究(麻生 2009、2010a、2010b)があるが、形容詞の認定に関して集中的に議論した麻生(2010b)を中心にとりあげる。波照間方言も前節の湯湾方言と同じく、伝統的には、「サアリ系」の形容詞を持つとされてきた。しかし、麻生(2010b)では、当該方言に形容詞を認めず、これまで形容詞とされてきた語類は動詞の下位分類である、という結論に達している。以下、本節の例はすべて麻生(2010b)による。

麻生(ibid.)によると、isjagaha-Ø-n「小さい」や takaha-Ø-n「高い」などのこれまで形容詞とされてきた語は、動詞と同様の屈折をする、節の述部として機能する、名詞句の修飾部として機能する、という点において、動詞と同じである、とされている。まず、jumu-Ø-n「読む」と isjagaha-Ø-n「少ない」を例にとって、これらが同じ屈折をすることを示す。

表 12-4 麻生 (2010b) による波照間方言の動詞の屈折

	jum(u)- 読む	isjagah(a)- 小さい
肯定現実相 非過去	jumu-Ø-n	isjagaha-Ø-n
肯定現実相 過去	jumu-ta-n	isjagaha-ta-n
否定現実相 過去	jum-an-ta-n	isjagah-en-ta-n
否定無標 非過去	jum-an-u	isjagah-en-u
否定無標 過去	jum-an-ta	isjagah-en-ta

続いて、動詞と、いわゆる形容詞が統語的にも同じであるということを示す。

(12-9) a. ba acca isasīma=ci nugu-Ø-n 《動詞が述部の例》

私 明日 石垣島=へ 行く-NPST-RLS
私は明日、石垣島へ行く

b. acca isasīma=ci nugu-Ø pstu=ja ta ja? 《動詞が名詞句の修飾部》

明日 石垣島=へ 行く-NPST 人=TOP 誰 COP
明日、石垣島へ行く人は誰だ?

(12-10) a. kuri=ja isjagaha-Ø-n 《「形容詞」が述部の例》

これ=TOP 小さい-NPST-RLS
これは小さい

b. isjagaha-ru pasokon=si benkjoo s-i birja-Ø 《「形容詞」が名詞句の修飾部》

小さい-NPST パソコン=で 勉強 する-MED 継続-NPST
小さいパソコンで勉強している

以上のように、波照間方言の形容詞的な意味をもつ語は、形態的にも統語的にも動詞と

同じであるため、形容詞という品詞を立てる必要はない、という結論に達している。以下に、「形容詞」と動詞がともに持つ特徴をまとめる。

(12-11)麻生 (2010b) による、波照間方言の「形容詞」と動詞が共有する特徴

1. 同じ屈折をとる
2. 述部になる
3. 名詞句の修飾部になる

12.1.2.4. 形容詞の認定に関して議論した先行研究のまとめ

これまで、琉球語諸方言において形容詞という品詞を認める必要があるかどうかという議論を展開した先行研究を概観してきた。ここで、今一度、それぞれが形容詞を立てた、もしくは立てなかった根拠を簡単に示す。

表 12-5 Shimoji (2009) による、伊良部方言の形容詞、動詞、名詞を区別する基準

(表 12-2 を再掲)

	形容詞	動詞	名詞
項になれる	×	×	○
コンピュータの補語になれる	○	×	○
単純な動詞句の主動詞になれる	×	○	×

表 12-6 新永 (2010) による湯湾方言の PC 語幹+接尾辞と名詞、動詞が同じとされた特徴

(表 12-3 を再掲)

	PC 語幹+名詞化接辞 (taa-sa)	名詞	PC 語幹+動詞化接辞 (taa-sa-i)	動詞
連体詞で修飾される	○	○	×	×
項になれる	○	○	×	×
述語になれる	○	○	○	○
ある種の接辞をとれる(-i、-joo-など)	×	×	○	○

(12-12) 麻生 (2010b) による、波照間方言の「形容詞」と動詞が共有する特徴

((12-11) を再掲)

1. 同じ屈折をとる
2. 述部になる
3. 名詞句の修飾部になる

以上、見てきたとおり、琉球語諸方言の形容詞認定に関する先行研究をまとめると、上記のような観点がこれまで考慮されてきたことがわかった。これらがすべて黒島方言に関して有効であるとは考えられないが、これらも参考とすることとする。

12.2. 各品詞の特徴

本節では、黒島方言の形容詞の認定にあたり必要な各品詞の特徴の記述を行う。まず、11.2.1.において、形容詞の特徴を記述する。そのあと、11.2.2.において動詞（ここでは、「書

く」という意味の *haku* で代表させる¹¹⁶⁾、11.2.3.において存在動詞 *ar*、最後に 11.2.4.において名詞+コピュラの特徴をそれぞれ記述する。

12.2.1. 形容詞 (guffa 「重い」)

まず形容詞の形態統語的特徴を記述する。*guffa* 「重い」を例にとることとする。形容詞の章 (第 6 章) で述べたとおり、形容詞には形態的にふるまいの異なる下位グループが存在する。しかし、本節で問題とする箇所に関してはグループ間に差異はないため、まとめて形容詞として扱うことを断っておく。形容詞の活用 (の一部) を以下の表 12-7 に示す。

表 12-7 形容詞 *guffa* の活用

重い	<i>guffa</i>
	重い.ABS
重かった	<i>guffa-ta</i>
	重い-PST
重くない	<i>guffa naan-Ø</i>
	重い.INF STATE.NEG-NPST
重くなかった	<i>guffa naan-ta</i>
	重い.INF STATE.NEG-PST
重ければ	<i>guffa-ka</i>
	重い-COND

形容詞は、表 12-7 に示したとおり、活用する。この点は後に述べる動詞と共通する。また、条件の接辞 (-*ka*) や、過去の接辞 (-*ta*) はほぼ同じと言っていい形式を用いる。しかし、以下のような違いが存在する。

まず、形容詞は否定の場合に形態的手段ではなく、統語的手段をとる。その際に用いられるのは、否定の存在動詞 *naan* である。

また、形容詞は、肯定の場合、非過去の接辞を欠いている。この際に現れるかたちを絶対形と呼ぶこととする。このかたちは、主文末の非過去肯定の場合にも生じるし、副詞的に用いられた場合にも生じる。つまり、*guffa* を例にとると、主節末の述部において、非過去・肯定で用いられた場合も *guffa* というかたちで現れ、副詞的に用いられた場合も *guffa* というかたちで現れるということである。それぞれの例文を以下に示す。

(12-13) a. 主文末非過去肯定の形容詞

unu isjee guffa¹¹⁷
 unu isi=a guffa
 この 石=TOP 重い.INF
 この石は重い

¹¹⁶ 動詞の活用には下位分類が存在するが、本節に関わる範囲では、それらの間に違いはないため、動詞としてまとめて考えることとする。

¹¹⁷ この例文の 1 行目は音韻表記であり、*isjee* は、*isi* 「石」に主題標識 *a* が後接し、母音同化が起こったものである。この例文のみ音韻表記を示し、あとの例文においては繰り返しをさけるために省略する。なお、これ以降も初出の場合や、わかりにくい場合には音韻のレベルを示すこととする。

b. 副詞的に用いられた場合の形容詞

unu isi=a guffa nar-ta
 この 石=TOP 重い.INF なる-PST
 この石は重くなった

これはつまり、形態的には語幹がはだかのままで文中に生起しているということである。動詞はこのようなことが不可能であり、この点は大きく動詞と異なる（後述 12.2.2.）。

続いて、形容詞の統語的環境を観察する。まず、非過去肯定の場合を確認し、続いて、非過去否定の場合を確認する。

(12-14) unu isi=a guffa
 この 石=TOP 重い.ABS
 この石は重い

(12-15) unu isi=a guffa naan-Ø
 この 石=TOP 重い.ABS STATE.NEG-NPST
 この石は重くない

否定の場合には、主題標識を挿入することも可能である。

(12-16) unu isi=a guffa=a naan-Ø
 この 石=TOP 重い.ABS=TOP STATE.NEG-NPST
 この石は重くはない

さらに、nar「なる」などの動詞の補部になる場合に、形容詞はなにも助詞をとらず、そのまま補部になれる。この点は後に述べるが、名詞と異なる点である。

(12-17) unu isi=a guffa nar-ta
 この 石=TOP 重い.ABS なる-PST
 この石は重くなった

12.2.2. 動詞 (haku「書く」)

本節では、動詞の形態統語的ふるまいを描く。本節では、動詞の代表として haku「書く」を扱うこととする。まず、haku の活用を以下の表 12-8 に示す。

表 12-8 動詞 haku の活用

書く	hak-u
	書く-NPST
書いた	hak-uta
	書く-PST
書かない	hak-an
	書く-NEG
書かなかった	hak-an-ta
	書く-NEG-PST
書けば	hak-uka
	書く-COND

以下、hak「書く」の統語的性質を示す。

(12-18) hari=nu tigami=ju hak-uta
 3=NOM 手紙=ACC 書く-PST
 彼が手紙を書いた

無論、このように格関係を明示することも可能であるが、もしこの文単独で使用されたとしたら、下の (12-19) のように主格をトピックマーカで示すほうが自然である。ちなみに、haree は、3 人称の hari と主題標識の=a が融合したかたちである。

(12-19) haree tigami=ju hak-uta
 hari=a tigami=ju hak-uta
 3=TOP 手紙=ACC 書く-PST
 彼は手紙を書いた

また、助動詞構文の前部要素となる場合、動詞は不定形をとる。その際、-i という接辞をとる。

(12-20) hak-i bur-Ø
 書く-INF PROG-NPST
 書いている

12.2.3. 存在動詞 ar (ある) の記述

次に、存在動詞 ar (ある) の形態統語的ふるまいを描く。

まず、活用について述べるが、次の表 12-9 からわかるように、この語は補充法が用いられている。

表 12-9 存在動詞 ar の活用

ある	ar-Ø
	STATE-NPST
あった	atta (< ar-ta)
	STATE-PST
ない	naan-Ø
	STATE.NEG-NPST
なかった	naan-ta
	STATE.NEG-PST
あれば	akka (< ar-ka)
	STATE-COND

表にはないが、理由を表わすかたちで、ariba (あるので) というものがある。このことも考え合わせると、存在動詞の語幹に ar が設定できる (この確定条件の接辞 iba が hak 「書く」に続いた場合、hak-iba となる)。音韻の章 (第 2 章) で述べたとおり、/r/ は語末において /n/ と頻繁に交替するため、非過去肯定の場合、[aŋ ~ aN] と発音されることが多い。

続いて、統語的環境を見ていく。存在動詞は否定の場合、統語的な否定しかとることができない。なお、前章で示したとおり、トピックマーカ=a は音素/n/に後続する場合、na というかたちで実現する。

(12-21) unu mici=na=a ana=nu ar-ta
 この 道=LOC=TOP 穴=NOM STATE-PST
 この道には穴があった

(12-22) unu mici=na=a ana=nu naan
 この 道=LOC=TOP 穴=NOM STATE.NEG
 この道には穴がない

12.2.4. 名詞+コピュラ

続いて、名詞+コピュラの形態統語的ふるまいを見ていく。まず、コピュラの形態的特徴を観察する。コピュラの基底形は存在動詞と同音異義の ar である。

表 12-10 コピュラ ar の活用

--である	ar-Ø
	COP-NPST
--であった	atta (< ar-ta)
	COP-PST
--でない	ar-an
	COP-NEG
--でなかった	ar-an-ta
	COP-NEG-PST
--であれば	akka (< ar-ka)
	COP-COND

ここで、コピュラと存在動詞の違いについて述べる。コピュラと存在動詞の違いは、否定の際、顕著になる。コピュラの場合、否定は ar-an であるのに対し、存在動詞は補充形の naan を用いる。

(12-23) コピュラと存在動詞の否定のしかた

a. コピュラの否定 (非過去)

hari=a sinsi ar-an
 3=TOP 先生 COP-NEG
 彼は先生ではない

b. 存在動詞の否定 (非過去)

unu mici=na=a ana=nu naan
 この 道=LOC=TOP 穴=NOM STATE.NEG
 この道には穴がない

続いて、コピュラの統語的環境を見ていく。コピュラは焦点標識=du と共起することが多い。特に、文末、肯定の場合においてはほぼ必ず共起するため、以下の例においては焦点標示を伴うものを挙げることにする。さらに、音韻的に du ar が、縮約されることもあるため、それも示す (のちに詳述する)。

(12-24) kjuu=ja ami=da/dua
 kjuu=a ami=du ar-Ø
 今日=TOP 雨=FOC COP-NPST
 今日雨である

(12-25) kjuu=a ami ar-an
今日=TOP 雨 COP-NEG.NPST
今日は雨でない

まず、非過去の場合のコピュラの使用について取り上げる。工藤 (2007: 23-25) において、日本語諸方言や琉球語諸方言について、非過去の場合のコピュラの使用に方言差があることが示されており、以下の三つに分類されている。

- (12-26) 工藤 (2007) によるコピュラ使用に関する方言の分類
- 非過去の場合にコピュラを基本的に伴わない方言
 - 非過去の場合にコピュラを伴う場合も伴わない場合もある方言
 - 非過去の場合にコピュラを伴うことが相対的に多い方言

黒島方言はこのうち、b.非過去の場合にコピュラを伴う場合も伴わない場合もある方言に分類される。つまり、下の例文(12-27)のようにコピュラなしの文も可能である、ということである。もちろん、上に示した(12-24)のようにコピュラを伴っても問題はない。

(12-27) kjuu=a ami
今日=TOP 雨
今日は雨

否定でないほうに関して、da / dua のように併記したが、これはどちらも使用可能なためである。過去の場合は、datta や duatta のようになる。今のところ、両者の機能的な差異はわかっていないが、面接調査では dua や duatta のほうよりも、da、datta のほうが自然に観察された。このようなことからわかるように、da や datta は、du と存在動詞 an が融合したかたちと見てよいだろう。ただし、duan (である) は文法的とされたが、*dan は非文法的とされた。これは、おそらく、duan のほうではまだコピュラとして意識されやすいが、da になるとその意識が薄れてしまうということによるのであろう。

これらはすべて文法的であるが、いかなる環境において言い換え可能、または不可能であるのか、という点に関してはまだ調査が及んでいない。単純なバリエーションというよりはなんらかの差異があると思われるが、その究明は今後の課題としたい。

12.3. 形容詞と他の品詞との比較

形容詞の認定は、琉球諸語において常に問題になる。特に、黒島方言の近隣の波照間方言において形容詞は動詞の下位分類とされるなどしており (麻生 2010a, 2010b)、形容詞をひとつの品詞として立てるには検討が必要である。そのため、本節では、形容詞と他の品詞との形態統語的特徴を比較し、黒島方言においては形容詞という品詞を立てる必要があることを述べていく。まず、下の表 12-11 に、各品詞を簡単にそれぞれ活用させたかたちで並べた表を示す。以下、各節で動詞 (12.3.1.)、コピュラ (12.3.2.)、存在動詞 (12.3.3) との違いを見ていく。その後、12.3.4.で各品詞と形容詞との比較のまとめを行う。

表 12-11 各品詞の簡単な比較

形容詞	動詞	存在動詞	コピュラ
guffa (重い)	hak-u (書く)	ar-Ø (ある)	ar-Ø (である)
guffa naan (重くない)	hak-an (書かない)	naan (ない)	ar-an (でない)
guffa-ta (重かった)	hak-uta (書いた)	ar-ta (あった)	ar-ta (であった)

12.3.1. 形容詞と動詞との比較

本節では、動詞と形容詞の形態統語的ふるまいを比較する。まず、動詞は否定の場合、形態的な手段をとるが、形容詞はこれが不可能であり、統語的な否定しかできない。

(12-28) a. 動詞の否定

hari=a tigami=ju hak-an-Ø
 3=TOP 手紙=ACC1 書く-NEG-NPST
 彼は手紙を書かない

b. 形容詞の否定

unu isi=a guffa naan-Ø
 この 石=TOP 重い.INF STATE.NEG-NPST
 この石は重くない

c. *unuisi=a guffa-an

さらに、形容詞は形態的にははだかのかたちである絶対形をとることができる。つまり、接辞をまったく付さないかたちで文中に存在できるのである。これに対し、動詞はそれが不可能である。動詞は、かならず接辞をとったうえで不定形を形成する。

(12-29) a. 動詞の不定形

hari=a tigami=ju hak-i bur-Ø
 彼=TOP 手紙=ACC1 書く-INF PROG-NPST
 彼は手紙を書いている

b. 形容詞の不定形

unu isi=a guffa nar-ta
 この 石=TOP 重い.ABS なる-PST
 この石は重くなった

12.3.2. 形容詞とコピュラとの比較

続いて、コピュラと形容詞の形態統語的ふるまいの比較をする。これらの間にも共通点があるようには見えないが、実は、前節ではとりあげなかったが、以下のような言い方が可能である(12-30、31)。

(12-30) unu isi=a guffa=du ar-Ø
 この 石=TOP 重い.ABS=FOC STATE-NPST
 この石は重い

(12-31) kjuu=a ami=du ar-Ø ((12-24)を再掲)
 今日=TOP 雨=FOC COP-NPST
 今日は雨である

これらは一見すると、同じ構文をとっているように見えるが、グロスにも示したとおり、実は異なるものである。それは否定をとった際に明確になる。

(12-32) unu isi=a guffa naan-Ø
 この 石=TOP 重い.ABS STATE.NEG-NPST
 この石は重くない

(12-33) kjuu=a ami ar-an
 今日=TOP 雨 COP-NEG.NPST
 今日は雨でない

このように、形容詞とコピュラの形態統語的ふるまいは明確に異なり、別の品詞として考える必要がある。

12.3.3. 形容詞と存在動詞および名詞との比較

最後に、存在動詞と形容詞の比較を行う。形容詞が最も近いと思われるのが、存在動詞である。両者はかなり近い形態統語的特徴を示す。下の表 12-12 に、存在動詞と形容詞の活用を並べたものを挙げる。

表 12-12 存在動詞と形容詞の活用

ある	ar-Ø	重い	guffa
	STATE-NPST		重い.ABS
あった	ar-ta	重かった	guffa-ta
	STATE-PST		重い-PST
ない	naan-Ø	重くない	guffa naan
	STATE.NEG-NPST		重い STATE.NEG
なかった	naan-ta	重くなかった	guffa naan-ta
	STATE-PST		重い STATE-PST
あれば	ar-ka	重ければ	guffa-ka
	STATE-COND		重い-COND

このような類似性は、形容詞がおそらくはなんらかの語幹部分と存在動詞が融合したものに由来することを示唆している。しかし、共時的には、形容詞と存在動詞は別の品詞とした方がよいと考えられる。それは形態法の違いによる。形容詞が接尾辞をとらない絶対形を持つのに対し、存在動詞は語幹だけのかたちはない。もっとも機能上近いと思われる形容詞の絶対形と存在動詞の不定形の例を挙げる。

(12-34) a. 形容詞の絶対形 b. 存在動詞の不定形
 guffa ar-i
 高い.ABS STATE-INF
 高い ある

このように形態法が異なるため、黒島方言の形容詞と存在動詞は別のものと考えるべきで

ある。

また、形容詞は格助詞の添加が不可能であり、項になりえない、という点においても、名詞+存在動詞とは異なる。名詞と存在動詞の場合には、下の(12-35)のように主格マーカーを挿入することが可能である。

(12-35) unu mici=n=a ana=nu ar-ta
この 道=LOC=TOP 穴=NOM STATE-PST
この道には穴があった

しかし、形容詞の場合、主格 nu を挿入することは不可能である。これは、焦点標識=du を用いる場合も同様である。

(12-36) a. unu isi=a guffa-ta
この 石=TOP 重い.INF-PST
この石は重かった
b. * unu isi=a guffa=nu atta
c. * unu isi=a guffa=nu=du ar-ta

これより、形容詞と名詞との違いに焦点をあてるが、意味的にも、形容詞は抽象名詞として用いられない。「重さが足りない」などという言い方は guffa を用いてはできない。このような場合、単に「軽い」と言うか、「目方」のような別の抽象名詞を用いて、「目方が足りない」と言うか、しかない。つまり、形容詞は格助詞をとることができないのである。従って、guffa が文の項となることはないため、この点も名詞とは性質が異なる。「目方」に対応する語は現在のところ得られていないが、「高さ」「たけ」にあたる語はインフォーマントから得られた。下の例文(12-37-a)は、「たけ」にあたる語が用いられた文であり、文法的である。それに対し、(12-37-b)は形容詞である takaha が用いられているため、非文法的となる。なお、名詞は属格をとれるが、形容詞は属格もとれない(例文(12-38-a, b))。

(12-37) a. taki=nu tar-an-Ø
たけ=NOM 足る-NEG-NPST
たけ/高さが足りない
b. *takaha=nu tar-an

(12-38) a. ami=nu pii
雨=GEN 日
雨の日
b. *guffa=nu isi
c. guffa isi
重い.ABS 石
重い石

名詞と形容詞との違いをもう一点挙げるとすると、nar「なる」の補部になる際のふるまいである。この際、形容詞は絶対形をとるのに対し、名詞の場合与格助詞=ni(もしくは異形態として=n)を必ずともなう。

(12-39) unu isi=a guffa nar-ta
この 石=TOP 重い.ABS なる-PST
この石は重くなった

(12-40) unu pusu=a sinsi=ni nar-ta
この 人=TOP 先生=DAT なる-PST
この人は先生になった

このように、形容詞は格助詞をとることができない。これは形容詞と名詞との大きな違いである。

12.3.4. 形容詞と各品詞との比較のまとめ

本章ではこれまで、形容詞が形態統語的にほかのどの品詞とも異なることを見てきた。どのような違いがあったか、本節で確認のため繰り返し述べ、まとめる。

黒島方言の形容詞は、動詞とも名詞とも共通の特徴を有するが、完全に一致することはない。まず、コンピュータを含む動詞とは、否定のとり方が異なる。形容詞は形態的否定をとることができず、統語的否定をとる。これに対し、動詞は形態的否定をとる。さらに、形容詞の絶対形は接尾辞をとらないが、もっとも機能的に近いと考えられる動詞の不定形は接尾辞を要する。そして、存在動詞と名詞に関しては、格助詞の挿入可能性において異なる。名詞の場合は格助詞を挿入できるのに対し、動詞の場合はそれが不可能である。以上を下の表 12-13 にまとめて示す。

表 12-13 黒島方言における動詞、名詞、形容詞の基準

	動詞	名詞	形容詞
屈折する	○	×	○
格助詞をとる	×	○	×
接辞をとらないかたちを用いることができる	×	○	○

このように、形容詞とほかの品詞との間には、形態統語的な違いが存在する。そのため、黒島方言には形容詞という品詞を立てる必要がある、という結論を得た。

12.4. ほかの方言との比較

前節までで、黒島方言には形容詞を立てるべきだ、ということ述べた。本節では、12.3. でまとめた、ほかの琉球語諸方言の形容詞の認定に関する議論との比較を通し、黒島方言の特徴を描く。ほかの方言における判断と黒島方言における判断とをまとめて表 12-14 に示す。

表 12-14 琉球語諸方言における形容詞認定

方言	研究	形容詞は必要か
南琉球宮古伊良部方言	Shimoji (2009)	必要
北琉球奄美湯湾方言	新永 (2010)	不必要(名詞と動詞の下位分類)
南琉球八重山波照間方言	麻生 (2010b)	不必要(動詞の下位分類)
南琉球八重山黒島方言	本稿	必要

黒島方言における形容詞認定の基準と、他方言における基準とを比べる。

まず、伊良部方言における形容詞の認定と黒島方言との違いは、伊良部方言においては、形容詞はコンピュータの補語になるのに対し、黒島方言ではそうではない、という点である。黒島方言ではコンピュータではなく、存在動詞を用いて述語化する場合がある。このように、同じ南琉球方言の「形容詞」においても形態統語的特徴は共有されていないことがわかる。

(12-41) a. 伊良部方言

uri=a takaa+taka=du a-tar
彼=TOP 高い(重複)=FOC COP-PST
彼は(背が)高かった

b. 黒島方言

unu isi=a guffa naan-Ø
この石=TOP 重い.INF STATE.NEG-NPST
この石は重くない

また、湯湾方言との大きな違いは、名詞性にある。湯湾方言の PC 語幹は、名詞化接辞をとることができ、この場合、連体詞による修飾が可能であるなど、名詞と変わるところがない。これに対し、黒島方言の形容詞は同じサアリ系とされるものの、連体詞による修飾はできない、コンピュータを用いた述語化ができない、など、名詞性は低い。

(12-42) a. 湯湾方言

taa-sa=nu tar-an
高い-NLZ=NOM 足る-NEG
高さが足りない

b. 黒島方言

*taka-ha=nu tar-an
高い-ADJVZ.ABS=NOM 足る-NEG

つまり、従来の研究では、祖形が同じであるからという理由で同じ系列の形容詞である、とされ、それ以上の研究の発展がなされなかったものであるが、同じサアリ系であっても共時的には大きな違いがある、という点を本研究は示しているのである。このように、歴史的な祖形の一致は共時的なふるまいの同一性とはまったく異なる、という点を琉球諸語の形容詞研究において指摘した、という点において本研究は価値があるものと思われる。

最後に、波照間方言との対照を行う。この方言は、今回対照した 3 方言のなかでもっとも黒島方言に系統的に近く、また、形容詞のふるまいのうえでも極めて近い。しかし、麻生 (2010b) は波照間方言に形容詞を認めず、本研究では黒島方言に形容詞を認めている。この 2 つの判断の違いは、「形態的ふるまいを品詞分類に反映させるか」という点に集約される。つまり、本研究においては、形容詞は動詞とは異なる種類の接尾辞をとる、という点においても異なる、と判断したが、麻生 (2010b) においてはこの点は、品詞分類においては考慮されていないのである¹¹⁸。このように、波照間方言と黒島方言の「形容詞」はほぼ同じふるまいを示すものの、基準の違いによって形容詞と認定するかどうか分かれているのである。このように、単に「名づけ」の問題で、同じようなふるまいを見せる語類が別の言語や方言において別の分類に入れられることがある、という点においても琉球諸語の「形容詞」研究は注意が必要である。

¹¹⁸ なお、平山など (1967: 183) によると、波照間方言のいわゆる形容詞の連用修飾のかたちも黒島方言と同様に接尾辞を伴わないかたちであるようである。

13. いわゆる「終止形」と「連体形」について

13.1. はじめに

本章では、黒島方言の動詞におけるいわゆる“終止形”および“連体形”とよばれるかたち¹¹⁹について論じる。本章では主に先行する研究と本研究で得られた結果の差異について述べる。したがって、純粋な言語記述からは離れる。そのため、個別論として取り出し、本章において述べる。

本章で述べることを簡単にまとめると以下の3点である。

- (13-1) 1. 先行研究においては示されていない、過去の連体修飾節末専用の形式が存在する
2. 従来、“連体形”と呼ばれていたかたちには統語情報は示されていない
3. 黒島方言動詞の主節末と連体修飾節末にたちうるかたちには典型的な屈折接辞はない

このように、従来“終止形”や“連体形”と呼ばれてきたかたちは、統語的には一様ではなく、その捉え方に問題がある。そこで、本章ではそれらの形式の特徴の整理を行う。

本章の構成について述べる。まず13.2.において、当該項目に関する先行研究を確認する。13.3.では、本稿の筆者によるフィールド調査の結果を示す。13.4.において、13.3.で扱った接辞それぞれの形態的な位置づけについて論じる。13.5.は本稿のまとめであり、あわせて今後の課題も述べる。

13.2. 先行研究

本節では、本研究に関係する先行研究をまとめる。黒島方言に関する先行研究はそもそも非常に少ないが、平山ほか(1967)と山口(2004)は、黒島方言の動詞に関する貴重な研究である。以下、本節ではまずそれぞれをまとめ、その後それらの異同と、そこから考えられる問題点について確認する。なお、表記についてはそれぞれの表記をそのまま用いるが、無声化記号は省略する。

13.2.1. 平山ほか(1967)

まず、平山ほか(1967)についてまとめる。同研究は国文法の枠組みを用いて黒島方言の動詞の活用をまとめたものである。同研究においては、「終止形」と「連体形」がたてられている。平山(ibid.: 178)の表をまとめると、以下のようになる。

(13-2) 平山ほか(1967)による“終止形”と“連体形”

a. 「終止形」

hak-u'N (書く: 語幹-終止形)

¹¹⁹ 本稿で用いる“終止形”と“連体形”という用語については、飛田ほか編(2007: 210)に従い、以下のように考える。

“終止形”: 平叙文で文を終止させる終止法の機能がある

“連体形”: 名詞(体言)を修飾する連体修飾の機能をもつ

b. 「連体形」

hak-u (書く : 語幹-連体形)

つまり、「終止形」は haku'N であり、語幹に -u'N を付してそれをつくる、ということであろう。「連体形」の場合、語幹に -u を付すことになる。しかし、この表に続く例文を見ると、表の内容とは異なる記述が見られる。以下、表と齟齬のない部分も含めて例を示す。

(13-3) 平山ほか (1967) の「終止形」と「連体形」の例

a. 「終止形」

zi'i ju haku'N (字を書く)

b. 「連体形」

'ure'e Qva hakumunu (それは君が書くものだ)

c. 「連体形」

zi'i haku'N pusu (字を書く人)

d. 「連体形」

前に du を受けて文を結ぶ形にも用いる

'ure'e ba'adu haku (これは私が書く)

このような例が挙げられているが、表との違いが出ているのは c と d の例文である。まず例 c については、表では「終止形」として挙げられている haku'N というかたちが連体修飾をしている点が問題である。さらに、例 d では、表では「連体形」として挙げられている haku というかたちが文を終止している点が問題である。いわゆる係り結びとして解釈されたものであろうが、「連体形」というかたちが文を終止しているという点については違和感がある。

なお、次節でまとめる山口 (2004) において言及がある、動詞活用のクラスによる「終止形」と「連体形」の違いは平山 (1967) においては述べられていない。この点に関しては、13.2.3.において述べる。

13.2.2. 山口 (2004)

続いて、山口 (2004) についてまとめる。同研究も伝統的な国文法の枠組みを用いて黒島方言の動詞の活用を記述したものである。同研究においては、「終止形 1」、「終止形 2」、「連体形」の3つが立てられている。まず、hak「書く」の例を示す。

(13-4) 山口 (2004) による「書く」の“終止形”と“連体形”の説明と例

(下線は原田による)

a. 「終止形 1」

活用形のみで文を終止する

uma na: na:ju haku (ここに名前を書く)

b. 「終止形 2」

dora/ do: (よね/ よ) がついて文を終止する。

ba: hakun dora (私が書くよ)

c. 「連体形」

体言がつく。

haku pīso buranun (書く人がいない)

これらの例から、①文を終えられるかたちには2つあり、haku はあとになにもとらず文を終止する。これに対し、hakun はあとに助詞をとる、②「連体形」と「終止形 1」は、動詞

のかたちだけ見れば同形である、という2点がわかる。

ただし、同研究によると動詞の活用クラスによって「連体形」のかたちが上に示した hak-「書く」と異なるようである。その例として fuk-「起きる」が挙げられる。fuk-「起きる」の「連体形」の例は挙げられているものの、「終止形 1」と「終止形 2」の例は挙げられていないため、それら 2 つは同研究で示されている活用表から抜き出すこととし、以下に示す。

(13-5) 山口 (2004) による「起きる」の“終止形”と“連体形”の例と説明

- a. 「終止形 1」
fukiru
- b. 「終止形 2」
fukirun
- c. 「連体形」
体言がつく。
fuki pīsu (起きる人)

これらの hak-「書く」と fuk-「起きる」の“終止形”と“連体形”の違いを表にまとめると、以下の表のようである。

表 13-1 山口 (2004) による「書く」と「起きる」

	hak 「書く」	fuk 「起きる」
「終止形 1」	haku	fukiru
「終止形 2」	hakun	fukirun
「連体形」	haku	fuki

表からもわかるとおり、hak-「書く」と fuk-「起きる」では、それぞれのかたちが異なる。特に異なるのは、「連体形」に関してである。hak-のほうでは、「終止形 1」と「連体形」が同形であったのに対し、fuk-では違うかたちになっている。具体的には「終止形 1」は fukiru、「連体形」は fuki というかたちである。

13.2.3. 先行研究の相違点と問題点

これまで、平山ほか (1967)、山口 (2004) の両研究による黒島方言動詞の“終止形”と“連体形”について確認してきた。本節においては、これらの相違点をまとめ、そこから解決すべき問題を述べる。

まず、表のかたちでそれぞれの研究による可能な形式をまとめておく。活用のクラスが異なる「書く」と「起きる」をそれぞれ表にして示す。

表 13-2 平山ほか (1967) と山口 (2004) の対比 (「書く」)

	平山ほか (1967)	山口 (2004)
主節末	haku'N (「終止形」) haku (「連体形」)	hakun (「終止形 2」) haku (「終止形 1」)
連体修飾節末	haku'N (「終止形」) haku (「連体形」)	haku (「連体形」)

表 13-3 平山ほか (1967) と山口 (2004) の対比 (「起きる」)

	平山ほか (1967)	山口 (2004)
主節末	fukiru'N (「終止形」) fukiru (「連体形」)	fukirun (「終止形 2」) fukiru (「終止形 1」)
連体修飾節末	fukiru (「連体形」)	fuki (「連体形」)

ここで、両研究の相違点をまとめ、解決すべき問題として述べる。

(13-6) 平山ほか (1967) と山口 (2004) の相違点と問題点

1. 平山ほか (1967) においては、n が末尾にたつかたちが連体修飾節末にもたちうるとの記述であるのに対し、山口 (2004) にはそのような記述がない。
→末尾に n を持つかたちは連体修飾節末にたちうるのか
2. 平山ほか (1967) では、「起きる」の“連体形”は fukiru であるのに対し、山口 (2004) では fuki である。
→fukiru、fuki はそれぞれ連体修飾節末にたちうるのか

本研究では、これらの先行研究間の相違点をふまえ、上記のような問題を解決することを 1 つの目的とする。これらに対する、本研究のフィールドワークに基づいた回答を先取りして述べておくと、以下のようである。

(13-7) 先行研究の問題点に対する本研究の回答

- Q1. 末尾に n を持つかたちは連体修飾節末にたちうるのか
→ A1. 不可能である。
- Q2. fukiru、fuki はそれぞれ連体修飾節末にたちうるのか
→ A2. どちらも名詞を修飾することが可能であるが、fukiru のほうが連体修飾構造であるのに対し、fuki のほうは複合と考えられる。

さらに、本研究の調査において、先行研究ではまったく記述のなかった“連体形”の存在が明らかになった。それも含め、以下、本研究の調査結果の詳細を示す。

13.3. 本研究の調査結果

本節においては、筆者による調査で得られた結果を示す。先行研究においては言及がなかった過去時制のかたちも同時に示す。なお、先行研究の検討からも明らかであるように、“終止形”や“連体形”というかたちの名付けは実態とはかけ離れているため、以下ではこれらの述語は用いず、主節末に生起可能なかたち、また、連体修飾節末に生起可能なかたち、といった観点で述べていく。

表 13-4 筆者による調査の結果「書く」

	非過去	過去
主節末に生起	haku hakun	hakuta hakutan
連体修飾節末に生起	haku	hakuta hakutaru

表 13-5 筆者による調査の結果「起きる」

	非過去	過去
主節末に生起	fukiru fukirun	fukita fukitan
連体修飾節末に生起	fukiru	fukita fukitaru

以下、13.3.1.において主節末にたちうるかたちについて、13.3.2.においては連体修飾節末にたちうるかたちについて述べる。

13.3.1. 主節末にたちうるかたち

本節においては、主節末にたちうるかたちについて述べる。主節末にたちうるかたちは、①時制接尾辞のあとに-nをとったかたちと、②時制接尾辞のあとになにもとらないかたちの2つである。

まず、-nを末尾に持つかたちについて述べる。このかたちは、どちらの先行研究でも示されているのと同じように、本研究の調査においても、主節末にたちうる、という結果を得た。なお、山口(2004)では、-nには助詞が後接するという記述があったが、必ずしもそうではない、ということもわかった。

(13-8) baa simmuci=ju hak-u-n
1.TOP 本=ACC1 書く-NPST-DECL
「私は本を書く」

(13-9) baa paaha fuk-iru-n
1.TOP 早く 起きる-NPST-DECL
「私は早く起きる」

また、-nを末尾に持たないかたちも主節末にたちうる。これは、平山ほか(1967)においても、山口(2004)においても同様の指摘がなされている。

(13-10) baa simmuci=ju hak-u
1.TOP 本=ACC1 書く-NPST
「私は本を書く」

(13-11) baa paaha fuk-iru
1.TOP 早く 起きる-NPST
「私は早く起きる」

本研究では、動詞末尾の-nを動詞の接尾辞として考える。主節末におけるこの接尾辞をとる場合ととらない場合の差は、今のところはっきりしていないが、聞き手が知らない話し手の経験などを語る際には接尾辞-nをとることが多いようである。そのため、聞き手にとって命題が新情報であるという想定のもとに用いられる終助詞=doは、接尾辞-nのあとにすわりが良いようである。

(13-12) baa simmuci=ju hak-u-n=do
1.TOP 本=ACC1 書く-NPST-DECL=SF
「私は本を書くよ」

(13-13)baa paaha fuk-iru-n=do
 1.TOP 早く 起きる-NPST-DECL=SF
 「私は早く起きるよ」

ただし、接尾辞-nをとらなかったとしても非文法的になるわけではない。

(13-14)baa simmuci=ju hak-u=do
 1.TOP 本=ACC1 書く-NPST=SF
 「私は本を書くよ」

(13-15)baa paaha fuk-iru=do
 1.TOP 早く 起きる-NPST=SF
 「私は早く起きる」

これらの差異については今後の課題である。さらに、平山ほか（1967）においては、hakuはいわゆる係り結びの場合に用いられるとの記述があるが、その状況に限られない。つまり、hakuは同一の文中に=duがあってもなくても使用可能であるし、hakunも=duがあってもなくても使用可能である、ということである。

(13-16) { kjuu / kjuu=du } hak-u
 今日 今日=FOC 書く-NPST
 今日書く

なお、主節末においては、非過去の場合と過去の場合に違いはなく、いずれも接尾辞-nをとっても、とらなくても文法的に許容される。

13.3.2. 連体修飾節末にたちうるかたち

続いて本節においては、連体修飾節末にたちうるかたちについて述べる。連体修飾節末にたちうるかたちは、時制接尾辞のあとになにもとらないかたちと、過去の時制接尾辞をとったあとに-ruという接尾辞をとるかたちである。

本節においては、具体的には以下の点について述べる。まず、①山口（2004）において言及がある fuki pīsu「起きる人」というかたちについて述べる。次に、②平山ほか（1967）において述べられた-nを末尾に持つかたちが連体修飾節末にたちうるか、という点について述べる。最後に、③先行研究においては指摘がなかったものの、本研究の調査によって判明した、過去の連体修飾節末専用のかたちについて述べる。

まず、①山口（2004）において指摘された fuki pīsu「起きる人」というかたちについて述べる。結論から述べると、本研究ではこのような連続は可能であるものの、これは動詞のいわゆる連用形（本稿における不定形）と名詞の複合である、と判断する。本研究の調査においても、fuki pusu「起きる人」というかたちは文法的と判断された。ただし、haki pusu「書く人」というかたちも文法的とされた。このかたちはいずれの先行研究でも言及のないかたちである。つまり、山口（2004）は動詞クラスの差が haku と fuki としてあらわれると考えているようであるが、実際には haku、haki、fukiru、fuki のいずれのかたちも存在し、すべてが名詞を修飾できるのである。では、haku と haki、fukiru と fuki の間ではなにが異なるかということ、本研究では haku と fukiru は連体修飾構造を、haki と fuki は複合を形成すると考える。これらの違いは、指示の連体詞を挿入すると明らかになる。連体修飾構造の場合、動詞と名詞の間に連体詞を挟むことが可能である。連体詞 unu「この」を挟んだ例を示す。

(13-17)hak-u unu pusu
 書く-NPST この 人
 「書くこの人」

(13-18)fuk-iru unu pusu
 起きる-NPST この 人
 「起きるこの人」

しかし、複合の場合、連体詞を挿入することは不可能である。

(13-19)*haki+unu+pusu
 書く+この+人

(13-20)*fuki+unu+pusu
 起きる+この+人

このようなことから、確かに名詞を修飾することはできるものの、haki や fuki は複合名詞を形成するかたちであって、連体修飾節末にたちうるかたちとして認めることはできない。

さらに、fuki や haki のかたちが複合語を形成しているという点をサポートする現象があげられる。それはアクセントである。現在わかっている範囲では、黒島方言のアクセントパターンは1つの単位の内部に下降があるものとなないものにわけられる¹²⁰。たとえば、fukiru は下降があるパターンを持ち、連体修飾節末に生じた場合 ki と ru の間に下降が観察される。しかし、これが複合語化した場合、fuki+pusu のどこにも下降はなく、全体で1つの下降のないパターンを示している。つまり、連体修飾構造の場合は fukiru と pusu がそれぞれ1つずつの単位であったのに対し、複合語の場合は fuki+pusu 全体で1つの単位となっているということである。このことから fuki+pusu が複合語化したものであると言えよう。なお、hak-は下降がないパターンを持つため、この判断には適さない。同じ活用を示す jaku-「休む」について述べると、jaku-も fuk-とまったく同じふるまいを示す。jaku-が連体修飾節末に生じた場合は、jakuu hatu「休む場所」というかたちをとり、ku と u の間に下降がある。しかし、jakui+hatu「休み場所」と複合語化した場合は、どこにも下降がなく、全体で1つの単位となっている。このようにアクセントパターンからも fuki や haki、jakui などのかたちが形成するのは複合語である、ということが言えよう。

続いて、②-n を末尾に持つかたちが連体修飾節末にたちうるか、という点について述べる。このかたちは、平山ほか（1967）においては連体修飾節末にもたちうるとされ、山口（2004）においてはそのような言及はなかったものである。本研究の調査においては、-n を末尾に持つかたちは連体修飾節末にたつことは非文法的と判断された。

(13-21)*simmuci=ju hak-u-n pusu
 本=ACC1 書く-NPST-DECL 人

(13-22)*paaha fuk-iru-n pusu
 早く 起きる-NPST-DECL 人

そのため、本研究においては-n を末尾に持つかたちは主節末専用のかたちと判断している。平山ほか（1967）と本研究の間の差がなにに起因するのか、今のところわかっていない。

最後に、③過去の連体修飾節末専用のかたちについて述べる。このかたちは先行研究においては指摘のなかったものである。本研究の調査によって、過去の連体修飾節末専用の形式が存在することが明らかになった。具体的には、接尾辞-ru を末尾にとるものである。

¹²⁰ 下降のパターンなど、アクセントの詳細については今後の課題である。

(13-23)hak-uta-ru pusu
 書く -PST-ADN 人
 「書いた人」

(13-24)fuk-ita-ru pusu
 起きる -PST-ADN 人
 「起きた人」

ただし、この接尾辞-ru は義務的ではなく、過去で、かつ連体修飾節末であれば必ずとらなければならない、といった性質のものではない。

(13-25)hak-uta pusu
 書く -PST 人
 「書いた人」

(13-26)fuk-ita pusu
 起きる -PST 人
 「起きた人」

なお、この接尾辞-ru は、現在調査が及んでいる範囲においては、義務的な接尾辞ではない。後続する連体修飾節と被修飾名詞の関係がどのようなものでも、接尾辞-ru はとってもよく、とらなくてもいい¹²¹。fuk-「起きる」の場合も同様であるので、hak-「書く」の例を示す。

(13-27) 主語をヘッドとする連体修飾
 kinoo tigami=ju hak{-uta / -uta-ru} pusu
 昨日 手紙=ACC1 書く {-PST / -PST-ADN} 人
 「昨日手紙を書いた人」

(13-28) 目的語をヘッドとする連体修飾
 kinoo taroo=nu hak{-uta / -uta-ru} tigami
 昨日 太郎=NOM 書く {-PST / -PST-ADN} 手紙
 「昨日太郎が書いた手紙」

(13-29) 外の関係の連体修飾
 taroo=nu tigami=ju hak{-uta / -uta-ru} bason
 太郎=NOM 手紙=ACC1 書く {-PST / -PST-ADN} 時
 「太郎が手紙を書いた時」

この-ru をとった場合、主節末にたつことはできない。これは、いかなる終助詞が後続した場合でも同様である。

(13-30)*baa simmuci=ju {hak-uta-ru / hak-uta-ru=do}
 1.TOP 本=ACC1 {書く -PST-ADN / 書く -PST-ADN=SF}

(13-31)*baa paaha {fuk-ita-ru / fuk-ita-ru=do}
 1.TOP 早く {起きる -PST-ADN / 起きる -PST-ADN=SF}

このように、この接尾辞-ru をとったかたちは、連体修飾節末にのみ生起する形式であることがわかる。そして、この-ru が非過去の接尾辞に後接することは不可能である。

(13-32)*simmuci=ju hak-u-ru pusu
 本=ACC 書く -NPST-ADN 人

¹²¹ 通時的な観点から述べると、-ru は消失しつつあるものと想定できる。しかし、本稿においては共時態の記述に徹することとする。

(13-33)*paaha fuk-iru-ru pusu
 早く 起きる-NPST-ADN 人

以上のことから、この接尾辞-ru は過去時制の連体修飾節末専用の形式であることがわかる。

以上、本節においては、本研究の調査結果を示した。本節で述べたことを形式ごとにまとめると、以下の表のようになる。

表 13-6 形式ごとの生起可能な位置

形式	生起可能な位置	
	主節末	連体修飾節末
語幹-非過去 (例: hak-u、fuk-iru)	○	○
語幹-非過去-n (例: hak-u-n、fuk-iru-n)	○	×
語幹-非過去-ru	存在しない	
語幹-過去 (例: hak-uta、fuk-ita)	○	○
語幹-過去-n (例: hak-uta-n、fuk-ita-n)	○	×
語幹-過去-ru (例: hak-uta-ru、fuk-ita-ru)	×	○

以上のようなことから、本稿では、-n と-ru をそれぞれ動詞句の統語位置を決める接尾辞として認める。つまりそれぞれ、-n は動詞句を主節末に位置づける終止法の接尾辞（以下、終止接尾辞とする）、-ru は連体修飾節末に位置づける連体修飾の接尾辞（以下、連体接尾辞とする）として考える。つまり、従来“連体形”と考えられてきたかたちそのものには統語的な情報は示されておらず、そこからさらに接尾辞を付して始めて統語位置が決まる、ということである。さらに、それらの接尾辞は義務的ではなく、必要に応じて添加するものである、ということが本研究によって明らかになった。

続く 13.4. においては、これらの接尾辞と時制接尾辞の形態的ステータスについて論じる。

13.4. 各接尾辞の位置づけと議論

本節においては、前節まででとりあげた時制接尾辞、終止接尾辞、連体接尾辞が、黒島方言動詞の形態法においてどのように位置づけられるのか、Haspelmath and Sims (2010) による派生と屈折に関する基準を用いて検討する。

まず、本節で用いる観点について述べる。Haspelmath and Sims (2010: 90) においては、派生と屈折がそれぞれ持つ傾向にある性質を 11 個挙げており、それらのうち最重要視されるのが以下の 3 つとされている¹²²。

表 13-7 Haspelmath and Sims (2010: 90) による屈折と派生の性質（翻訳は筆者による）

屈折	派生
統語に関係あり	統語に関係なし
義務的	非義務的
添加される項目に制限なし	添加される項目に制限がある可能性あり

¹²² Bybee (1985: 27) においても屈折と派生がそれぞれ持つ性質について述べられている。統語に関係するかどうか、という観点以外の残りの 2 点については Haspelmath and Sims (2010) と同様のことが述べられている。

本節では、これらの観点から黒島方言動詞の時制接尾辞、終止接尾辞、連体接尾辞を検討する。まず、それぞれの接尾辞がどの性質を持つか、表に示す。

表 13-8 各接尾辞の持つ性質

	統語との関係	義務性	項目に対する制限
時制接尾辞 (-ir)u, -ita~uta)	なし (D)	義務的 (I)	なし (I)
終止接尾辞 (-n)	あり (I)	任意 (D)	なし (I)
連体接尾辞 (-ru)	あり (I)	任意 (D)	なし (I)

(括弧内は、Haspelmath and Sims 2010 による屈折的性質(I)、もしくは派生的性質(D)を示す)

いずれの接尾辞についても、どのような動詞にも後接¹²³しうるので、項目に対する制限に関してはここでは注目せず、統語との関係と義務性という観点から時制接尾辞と終止接尾辞、連体接尾辞を比べる。

まず、義務性という観点から見る。前節において示したとおり、終止接尾辞および連体接尾辞は、それらをとらなくても、動詞が主節末および連体修飾節末に生起できる、任意の接尾辞であった。つまり、主節末および連体修飾節末にたちうる動詞をかたちづくる際に必ずとる接尾辞は時制接尾辞のみなのである。

しかし、翻ってもう 1 つの、統語との関係という観点から見ると、時制接尾辞をとっただけでは統語位置は決まらず、主節末、連体修飾節末のどちらにたつこともできる。逆に、終止接尾辞、連体接尾辞をとった場合は動詞の統語位置は定まってしまう。このように、黒島方言動詞においては義務的ではない接尾辞によって動詞の統語位置は示される。つまり、黒島方言の主節末と連体修飾節末に生起する動詞には、典型的な屈折接辞は認められない、ということになる。

この黒島方言の言語事実から屈折と派生の関係について検討する。Haspelmath and Sims (2010: 89) においては、屈折と派生の関係のとらえ方が 2 つ述べられている。1 つ目は、**dichotomy approach** であり、これは屈折と派生は完全に別個のもの、ととらえる考え方である。もう 1 つは、**continuum approach** であり、これは屈折と派生は完全に切り離すことはできずグラデーションを示すものである、とする考え方である。本稿ではここまで、黒島方言においては典型的な屈折と呼べる接辞が存在しないことを示してきた。したがって、黒島方言の動詞の形態法を記述する際には **dichotomy approach** をとることはできず、必然的に **continuum approach** をとらざるを得ない、と述べることができる。

13.5. おわりに

本稿で述べたことをまとめると、以下の 3 点になる。

- (13-34)
1. 先行研究においては示されていない、過去の連体修飾節末専用の形式が存在する
 2. 従来、“連体形”と呼ばれていたかたちには統語情報は示されていない
 3. 黒島方言動詞の主節末と連体修飾節末にたちうるかたちには典型的な屈折接辞はない

¹²³ Haspelmath and Sims (2010: 93) において注目されているのは、base に対する applicability のようである。したがって、本稿においても添加される語彙項目に関して制限があるかないか、ということに注目する。

今後の課題について述べる。今回はアスペクトにかかわる形式を扱うことができなかった。アスペクトにかかわる形式をとった動詞はより複雑な活用を示すと考えられるため（この点に関しては10.4.4.を参照のこと）、それらについても今後、検討する必要がある。また、黒島方言と同じく八重山語の一方言である波照間方言に関する研究である麻生（2013）においても、動詞の屈折と統語位置の関係が論じられており、やはり動詞活用形のみでは統語情報が示されない場合について述べられている。ただし、以下の例のように、形式上は黒島方言の過去連体形に対応するようなもの（同論文では分詞と呼ばれる）が、係り結びの際に主節末に生起するようであり、この点においては黒島方言と大きく異なる。

(13-35) 波照間方言の例

da=ndu	ba	tatag-ja-ta-ru
2.SG=FOC	1.SG	たたく-DUR-PST-PCTP
お前が私をたたいた		

このように、同じ八重山語内でも方言差は大きいものと思われる。そのため、今後は、他の八重山語の調査も進めて、八重山語全体の記述をより精緻なものにしていきたい。

14.2. 黒島方言テンポラリティー・アスペクチュアリティーの概要

本節では、本章で主に扱う *jassu* を除いた範囲での黒島方言動詞のテンポラリティーおよびアスペクチュアリティーについて簡単に概要を述べる。テンポラリティー、アスペクチュアリティーに関する調査は現在も進行中であるため、以下は現在わかっている範囲での記述である。その後、これらと比較しつつ、*jassu* の特徴について簡単にまとめる。

まず、黒島方言のテンスは過去と非過去の対立を持つ。これらは動詞の義務接尾辞において示され、範列的に対立している。(義務接尾辞と任意接尾辞については、14.3.において詳述する。)

(14-3) テンスの形態的対立

- | | |
|--------|--------------------------|
| a. 非過去 | <i>jum-u</i>
読む-NPST |
| b. 過去 | <i>jum-uta</i>
読む-PST |

このように、テンポラリティーが形態的にも対立しているのに対し、アスペクチュアリティーは形式の上で体系的とは言えない。現在わかっている限り、アスペクチュアリティーをあらわす形式は助動詞と任意接尾辞であらわされるものが主である。以下、簡単に形式とそれがあらわす意味をまとめる。なお、これらの形式はすべて、上に述べたテンポラリティーの対立を持つ。

(14-4) アスペクチュアリティーにかかわる主な形式とそれがあらわす意味

- | | |
|---------|--|
| a. 進行 | 助動詞 <i>bur</i>
<i>ubuhazi=nu ki-i bur-Ø</i>
台風=NOM 来る-INF PROG-NPST
台風が来ている
(接近中である。まだ台風は直撃していない) |
| b. 結果継続 | 任意接尾辞 <i>eer</i>
<i>ubuhazi=nu k-eer-Ø</i>
台風=NOM 来る-CONT-NPST
台風が来ている
(台風直撃中と、それ以降。なんらかの痕跡がある) |
| c. 完了 | 任意接尾辞 <i>idar</i>
<i>ubuhazi=nu ki-idar-Ø</i>
台風=NOM 来る-COMP-NPST
台風が来ている
(台風直撃中と、それ以降。痕跡に関しては無関係) |

上に示したアスペクチュアリティーの意味について簡単に説明を加えておく。痕跡のありなしが問題となる場合がある。台風の例を用いると、たとえば、木が倒れているなど、台風の痕跡が発話時点まで残っている場合に *eer* が使用可能である。逆に、*idar* のほうは特にそのような制限はない。以下にそれぞれの例を示す。

(14-5) a. *eer* の例 (前の週に台風が来て、いまだに倒木が片付けられていない。)

- | | | |
|----------------|----------------------|----------------|
| <i>sensjuu</i> | <i>ubuhazi=nu=du</i> | <i>k-eer-Ø</i> |
| 先週 | 台風=NOM=FOC | 来る-CONT-NPST |
| 先週、台風が来た | | |

b. idar の例 (前の週に台風が来た。)

sensjuu ubuhazi=nu=du ki-idar-Ø
先週 台風=NOM=FOC 来る-COMP-NPST
先週台風が来た

このようなテンポラリティー、アスペクチュアリティーにかかわる形式を持つ黒島方言であるが、これらに対して本章で扱う jassu は大きく異なる性質を持つ。それは、以下のようなものである。

(ii) jassu の諸特徴

1. アスペクチュアリティーにかかわる形式であるにもかかわらず、義務接尾辞である
2. 形態的にテンポラリティーの対立がない
3. 意味的には、上にあげた形式には無関係である話者の直接経験がかかわる

のちに 14.4.2 において述べるが、話者の直接経験が意味的に必須であるため、jassu を用いて未来のできごとをあらわすことは不可能である。実際、エビデンシャルリティーをあらわす形式を持ついかなる言語においても過去のことを述べるエビデンシャルリティー形式のほうがそれ以外の時制のエビデンシャルリティー形式より多く存在するようである (Aikhenvald 2004: 261)。以下、このような jassu の諸特徴について詳述する。

14.3. jassu の形態統語的特徴

本節では、jassu の形態統語的特徴について述べる。具体的には以下の点を述べる ((i-a) を再掲)。

(i) a. jassu の形態統語的特徴

- ①義務接尾辞である
- ②時制接尾辞と共起しない
- ③主節末、副詞節末には生起するものの、連体修飾節末には生起しない

これらの特徴は形態と統語がともに関係するところであるが、(i) ①と②について形態的特徴として 14.3.1.において、(i) ③については統語的特徴として 14.3.2.において述べる。

なお、jassu は形容詞、名詞、コピュラには後接しない。

14.3.1. 形態的特徴

本節では、jassu の形態的特徴について述べる¹²⁵。具体的には、jassu は義務接尾辞である

¹²⁵ jassu は、jassu、essu、ijassu の3つの異形態をとる。黒島方言の動詞は不規則動詞を除くと2つの活用タイプ (A型とB型) に分けられる。これらのうち、B型動詞には ijassu が用いられる。A型動詞のうち、語幹末に母音を持つものには jassu が、子音を持つものには essu が用いられる。以下、それぞれの例を示す。

jassu : A型動詞で語根末が母音のもの
va-u (食べる) va-jassu (食べた)
essu : A型動詞で語根末が子音のもの
sak-u (咲く) sak-essu (咲いた)
ijassu : B型動詞

こと、また、時制接尾辞と共起しないことを述べる。

まず、jassu が義務接尾辞である、という点から述べていく。そもそも、黒島方言の動詞には接尾辞しか見つからない。jassu も同じく接尾辞である。

(14-6) [ut -jassu]
 落ちる -jassu
 [語根 -接尾辞]_{動詞}
 落ちた

(14-7) *jassu-ut

黒島方言の動詞は語根と接尾辞からなる。接尾辞は、必ずとる必要のある義務接尾辞と、任意の任意接尾辞に分類される。義務接尾辞をとらなければ、動詞は文中のどの位置にも生起することができない。したがって、最小の動詞は「語根+義務接尾辞」という構成のものである。そのため、黒島方言の動詞について、最も単純化して図式化すると、以下のような構造をとるものであると言える。例を示す。

(14-8) 黒島方言動詞の基本構造

[語根 (- 任意接尾辞) - 義務接尾辞 (- 任意接尾辞)]_{動詞}

(14-9) 動詞の例 (義務的要素に下線を付している) ¹²⁶

- a. jum -uta
 読む PST
 語根 義務
 読んだ (主節末も連体修飾節末も可能)
- b. jum -ar -ita
 読む PASS PST
 語根 任意 義務
 読まれた (主節末も連体修飾節末も可能)
- c. jum -ar -ita -n
 読む PASS PST DECL
 語根 任意 義務 任意
 読まれた (主節末のみ)
- d. jum -ar -ita -ru
 読む PASS PST ADN
 語根 任意 義務 連体
 読まれた (連体修飾節末のみ)

ここで、本章で問題にしている jassu について確認する。jassu は直前に動詞語根を、直後に終助詞をとることができる形式である。そのため、義務接尾辞とするのが妥当であると考える。これは、終助詞が動詞に後接する場合、義務接尾辞をとったあのかたちにならなければ後接しえないためである。(14-10) には典型的な義務接尾辞である時制接尾辞をとり、そのうえで終助詞をとった例を示す。これに対し、続く (14-11) においては義務接尾辞をとっていないために終助詞が後接しえない例を示す。

ku-iru (越える) ku-ijassu (越えた)

なお、本章の 14. 3. 以降においては、異形態は示していない。

¹²⁶ (14-9b) が主節末で用いられる場合と、(14-9c) が主節末で用いられる場合との違いは、今のところ分かっていない。今後の課題である。

(14-10)	jum	-uta	=waja
	読む	PST	SF
	<u>語根</u>	<u>義務</u>	
	読んだよ		
(14-11)	*jum	-ar	=waja
	読む	PASS	SF
	<u>語根</u>	任意	
(14-12)	jum	-jassu	=waja
	読む	jassu	SF
	<u>語根</u>	<u>義務</u>	
	読んだよ		

ここで、jassu と時制接尾辞との関係について述べる。通常、黒島方言において主節末に生起することができる動詞は、命令や勧誘などの対人的モダリティ要素もしくは時制接尾辞を含んでいる。そして、仮に jassu が「直前に話者が直接経験した状況の変化」という意味を持つのであれば、過去の接尾辞をとってもいいはずである。しかし実際は、jassu は過去の接尾辞と共起しない。

(14-13) *ut-ijassu-ta

(14-14) *ut-ijass-ta

(14-14) *ut-ita-jassu

このように、jassu のあとにも ((14-13))、jassu の末尾の u が非過去の接尾辞の異形態と同音であるためそれを除いたかたちに仮に続けても ((14-14))、また、jassu の前にも ((14-14)) 過去の接尾辞をとることはできない。

また、非過去接尾辞をとることもない。これについても上と同様に、jassu にさらに非過去の接尾辞の異形態をそれぞれ付した場合 ((14-16)と(14-17))、非過去の接尾辞に jassu を続けた場合 ((14-18)) を示しておく。

(14-16) *ut-ijassu-iru

(14-17) *ut-ijassu-u

(14-18) *ut-iru-jassu

黒島方言動詞の非過去接尾辞は u (異形態として iru も) であり、jassu は末尾にこの接尾辞と同じ母音を持つものの、過去との対立がない以上、これを非過去の接尾辞として分析することはできない。歴史的に jassu の u が非過去接尾辞に由来する可能性はあるものの、共時的には jassu をこれ以上小さな形態素に分析することは適切ではない。このように、jassu を含む動詞は主節末に生起可能であるものの、時制接尾辞と共起しない珍しい形式である。このことについては次節で詳述する。

以上、本節では、jassu は義務接尾辞であること、時制接尾辞とは共起しないことを述べた。

14.3.2. 統語的特徴

本節では jassu を含む動詞の統語的特徴について述べる。具体的には、jassu を含む動詞は連体修飾節末には生起しえないこと、また、時制接尾辞を持たないにもかかわらず主節末に生起可能である例外的な形式であること、の 2 点を述べる。

まず、jassu を含む動詞が連体修飾節末には生起しえないことを述べるが、その前に、通

常の時制接尾辞の生起可能な統語的環境について述べておく。時制接尾辞をふくむ動詞は、主節末、副詞節末、連体修飾節末に生起する。

(14-19)時制接尾辞を含む動詞の統語的環境

a. 主節末

kis-uta=do
 着る-PST=SF
 着たよ

b. 副詞節末

kisaa	kin=ba	kis-uta=nu	mee	paz-uta
さっき	着物=ACC2	着る-PST=ADVRS	もう	脱ぐ-PST

さっき着物を着たけどもう脱いだ

c. 連体修飾節末

kin=ba	kis-uta	pusu
着物=ACC1	着る-PST	人

着物を着た人

これに対し、jassu を含む動詞は主節末、一部の副詞節末には生起するものの、連体修飾節末には生起しない。なお、jassu が生起可能な副詞節は今のところ (14-20-b-1) に示す逆接の助詞 nu を用いたものしか確認されておらず、他の副詞節では非文法的とされる。

(14-20)jassu を含む動詞の統語的環境

a. 主節末

kis-jassu=do
 着る-jassu=SF
 着たよ

b-1. 副詞節末 (逆接)

kisaa	kin=ba	kis-jassu=nu	mee	paz-jassu
さっき	着物=ACC2	着る-jassu=ADVRS	もう	脱ぐ-jassu

さっき着物を着たけどもう脱いだ

b-2. 副詞節末 (理由)

*kisaa	kin=ba	kis-jassu=junti
さっき	着物=ACC2	着る-jassu=CSL

さっき着物を着たから

b-3. 副詞節末 (起点)

*kisaa	kin=ba	kis-jassu=hara
さっき	着物=ACC2	着る-jassu=ABL

さっき着物を着てから

c-1. 連体修飾節末 (内の関係：主語がヘッド)

*maruma	kin=ba	kis-jassu	pusu
今	着物=ACC2	着る-jassu	人

今、着物を着た人

c-2. 連体修飾節末 (内の関係：目的語がヘッド)

*maruma	kis-jassu	kin
今	着る-jassu	着物

今着た着物

主節末に生じうる対人的モダリティをあらわさない義務接尾辞は *jassu* 以外には時制接尾辞しか見つかっていない。したがって、このことは *jassu* を時制接尾辞として認めてよい、という可能性を示している。しかし、上に述べたような理由で *jassu* を時制接尾辞として認めることはしない。これらの *jassu* の諸特徴は他のテンポラリティー、アスペクチュアリティー形式とはまったく共有されていないため、*jassu* は黒島方言動詞のテンポラリティー、アスペクチュアリティーの体系のなかでは例外的な形式である、と言わざるを得ない。以上、本節においては *jassu* の形態統語的特徴について述べた。

14.4. *jassu* の意味的特徴

本節では、*jassu* の意味的特徴について述べる。*jassu* は、以下のような意味を持つと考えられる (i-b) を再掲)。

(i-b) *jassu* の意味的特徴 : 直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす

以下では、上記の意味的記述をいくつかの部分にわけて、それぞれ説明していく。14.4.1. では「直前」という点について、14.4.2. では、「話者の直接的経験」という点について、そして 14.4.3. では「状況の変化」という点についてそれぞれ述べる。

14.4.1. 「直前」

本節では、*jassu* のもつ意味として考えられる「直前」について考える。*jassu* は、直前に話者が経験したできごとを描写する際に用いられる。したがって、副詞 *maruma* 「今」と共起することが可能である。

(14-24) *maruma* *kii=nu* *nar=nu* *ut-jassu*
 今 木=GEN 実=NOM 落ちる-*jassu*
 今、木の実が落ちた

(14-25) 目の前で財布を落とした人に対して
uva *maruma* *zinfukur* *utas-jassu=waja*
 2.SG 今 財布 落とす-*jassu*=SF
 あなた、今、財布落としたよ

一方、いくら話者が「直接経験」した「状況の変化」であっても、昨日のことなどには *jassu* は用いられない¹²⁷。

(14-26) **kinoo* *kii=nu* *nar=nu* *ut-jassu*
 昨日 木=GEN 実=NOM 落ちる-*jassu*
 昨日、木の実が落ちた

¹²⁷ しかし、この「直前」にはわりに時間的幅があるようで、「木の実が落ちる」の場合、一時間ほど前であれば *jassu* は使用可能である。

icizikan+mai *kii=nu* *nar=nu* *ut-jassu*
 一時間+前 木=GEN 実=NOM 落ちる-*jassu*
 一時間前、木の実が落ちた

ただし、話者によると、上記の例は言えなくないけれども、わざわざこのようなことは言うことはない、とのことであった。やはり *jassu* を用いるもっとも自然な場面は、発話時の直前であるようである。

- (14-27) *kinoo uva zinfukur utas-jassu=waja
 昨日 2.SG 財布 落とす-jassu=SF
 昨日、あなた財布落としたよ
- (14-28) *issjuukan+mai maa=nu arak-jassu
 一週間+前 孫=NOM 歩く-jassu
 一週間前、孫が歩いた

このようなことから、jassu は直前に話者が経験した状況の変化を描写する形式であると言える。ここで問題になるのは、「状況の変化そのものが直前に起こった」のか、「(状況の変化は以前にすでに起こっていても) 直前に話者が経験した」のか、ということである。典型的な例の場合、それらは同じタイミングであるが、本章では jassu は「直前に話者が経験した」ということを述べる形式であると考えられる。それは、以下のような例が可能であるためである。

- (14-29) usi=nu hazi=nu uraha nar-jassu
 牛=GEN 数=NOM 多く なる-jassu
 牛の数が増えた
- (14-30) 久しぶりに訪れた場所に、以前あったお店がないのを見て
 macijaa=nu ar-ta=nu naana nar-jassu
 お店=NOM ある-PST=ADVRS なく なる-jassu
 お店があったのになくなった

この例は「牛の数が増えた¹²⁸」「お店がなくなった」という変化に話者が気づいたそのタイミングで使用することができる。そもそも、「牛の数が増える」という変化は急激に起こるわけではなく、「直前」という短い時間にその変化が発生することは不可能である。また、「お店がなくなる」という変化はいつ生じたのかわからない。したがって、上記 (14-29)、(14-30) が可能である以上、厳密には「状況の変化が直前に起こった」というよりも「直前に話者が経験した」ということを述べる形式である、と考えるのが妥当であろう¹²⁹。

14.4.2. 「話者の直接的経験」

jassu を用いるためには、命題について話者が直接経験していなければならない。

- (14-31) 木の実が落ちるのを目撃して
 maruma kii=nu nar=nu ut-jassu
 今 木=GEN 実=NOM 落ちる-jassu
 今、木の実が落ちた
- (14-32) 電灯がつくのを目撃して
 maruma dentoo=nu sik-jassu
 今 電灯=NOM つく-jassu
 今、電灯がついた

¹²⁸ 黒島は畜産業、特に肉牛の飼育が盛んな島である。そして実際、島内で飼われている牛の数は年々増えているそうである。このような黒島の事情がこの例の背景にはある。

¹²⁹ ただし、たとえば「しばらく家を空けていて帰宅した際に、出発前は木についていた木の実が地面に落ちていた、ということに気がついた」という場面では jassu は用いられにくいようである。この点については動詞の種類を増やすなどして今後、詳細に記述をしていきたい。

この例文は、話者の目の前で木の実が落ちた場合に典型的に用いられる。どのような経験のしかたでもかまわないことは後に述べるが、いずれにしろ、話者が直接経験したものでない限りこの文は使えない。したがって、上の (14-31) を「落ちて地面にある木の実に気がついた」という文脈で用いることや、(14-32) を「電灯がついているのに気がついた」という文脈で用いることはできない。本節では、jassu が持つ、このような「話者の直接経験」という意味について述べていく。まず、さまざまな「直接経験」の例をあげる。具体的には、視覚だけではなく、聴覚や嗅覚による経験でもかまわない、ということ、そして、自分自身の感覚などについても jassu を用いて述べるができること、を述べる。その後、「直接経験」ではないために非文法的となる例をあげ、「直接経験」が jassu の意味として不可欠であることを確認する。最後に、mirative との関係について述べる。

ではまず、「直接経験」の多様性を示していく。典型的には、(14-31) や (14-32) に示したような、視覚による経験で用いられる。しかし、「直接経験」は目撃に限らない。下の例 (14-33)、(14-34) のとおり聴覚や嗅覚による経験でもかまわない。

(14-33)ものが落ちる音がして

nuara=nu=du ut-jassu
 なにか=NOM=FOC 落ちる-jassu
 なにかが落ちた

(14-34)ご飯が炊ける匂いがして

ii=nu ni-jassu
 ご飯=NOM 煮える-jassu
 ご飯が炊けた

さらに、以下の (14-35)、(14-36)、(14-37) のように、自分自身の感覚や行動についても jassu を用いることができる。

(14-35) banaa boor-jassu
 1.SG.TOP 疲れる-jassu
 私は疲れた

(14-36) banaa aasun=baaki arak-jassu
 1.SG.TOP 東筋=LMT 歩く-jassu
 私は東筋まで歩いた

(14-37) banaa maruma booru kir-jassu
 1.SG.TOP 今 ボール 蹴る-jassu
 私、今ボール蹴った

このように、「直接経験」のなかみはかなり多様であることがわかる。

これに対し、「話者の直接経験」ではないために非文法的となる例は以下のようなものである。まず、他人から得た知識に関しては jassu を用いることはできない。

(14-38)子供が学校に行くのを自分が見た場合

gakko=ha par-jassu
 学校=ALL 行く-jassu
 学校へ行った

(14-39)子供が学校へ行ったと人から聞いた場合

#gakko=ha par-jassu

また、非常に蓋然性が高かったり、話者の確信度が高かったりするような命題であって

も、直接経験していない場合は *jassu* は用いられない。もちろん、自分で見た場合には、次の例文を用いることは可能である。

(14-40)午後7時に必ずニュースが始まるということを知っていて、午後7時に

(ただし、今自分で見てはいない)

#maruma pazimar-jassu

今 始まる-jassu

今、始まった

(14-41)なにかが落ちる音がして、音から鍋が落ちたものと思われる

(ただし、自分で見たわけではないので、なにが落ちたかわからない)

#maruma nabi=nu ut-jassu

今 鍋=NOM 落ちる-jassu

今、鍋が落ちた

上記 (14-41) は、先に示した (14-33) と状況が似ているものの、違いがある。その違いが *jassu* の使用の可否に関係している。(14-33) においては、話者は「(なにかわからないもの) なにかが落ちた」ことを直接経験している。これに対し、(14-41) では「鍋が落ちた」ということを話者が直接経験しているわけではない。このような、直接体験性の差がこれらの例の間には存在し、この違いが *jassu* の使用の文法性にかかわっていることがわかる。

さらに、命題に対する疑いや確信度の低さをあらわす形式を *jassu* を含む動詞のあとに続けることはできない。*kaja* 「かなあ」は話者の疑いをあらわす終助詞である。また、*pazi* 「だろう」は話者の推測をあらわす形式である。

(14-42)孫の野球の試合が石垣島で開始される時間になって

a. *maruma pazimar-jassu=kaja

今 始まる-jassu=SF

今、始まったかなあ

b. maruma pazimar-ta=kaja

今 始まる-PST=SF

今、始まったかなあ

(14-43)孫の野球の試合が石垣島で開始される時間になって

a. *maruma pazimar-jassu=pazi

今 始まる-jassu=はず

今、始まっただろう

b. maruma pazimar-ta=pazi

今 始まる-PST=はず

今、始まっただろう

(14-44)なにかが落ちる音がして、音から鍋が落ちたものと思われる

(ただし、自分で見たわけではないので、なにが落ちたかわからない)

a. *maruma nabi=nu ut-jassu=pazi

今 鍋=NOM 落ちる-jassu=はず

今、鍋が落ちただろう

b. maruma nabi=nu ut-ta=pazi

今 鍋=NOM 落ちる-PST=はず

今、鍋が落ちただろう

このようなことから、*jassu* の意味として「話者の直接経験」が欠くことのできない要素であること、そして、話者の確信度をあらわすというより話者がその情報をどのように得

たかをあらわす形式であることがわかる。以上の分析から、jassu は話者の直接の経験という‘source of information’ (Aikhenvald 2004: 3) をあらわすものであることがわかる。したがって、jassu は evidentiality (証拠性。本章ではエビデンシャルティーとする) にかかわる形式であると言える¹³⁰。

ここで、mirative との関係について述べておく。mirative とは ‘new or unexpected information’ (DeLancey 2001) の標示のことである。確かに jassu は新しい情報をあらわすことが多いが、必ずしも新しい情報でなくてもよいうえに、予測していたことを述べる場合も用いられる。(14-45) 何度も見ている孫が映っているビデオを見て

maruma arak-jassu
今 歩く-jassu
今、歩いた

(14-46) 落ちそうだと思っていた木の実がついに落ちたのを見て

ut-jassu
落ちる-jassu
落ちた

したがって、jassu は mirative をあらわす形式ではない。

14.4.3. 「状況の変化」

本節では jassu の意味の「状況の変化」という要素について述べる。「状況の変化」という非常に広い規定をここで用いるのには理由がある。それは、この jassu が意味する「状況の変化」がかなり多様だからである。この点についてまず簡単に説明し、のちに例を示しつつ詳述する。

jassu が用いられる典型的な例は、できごとが終了限界 (工藤 1995: 80) を越える場合である¹³¹。しかし、どのような状況の変化をとらえるかは、実際には文脈によって決定される。さらに、終了限界のない場合や、限界の認定が難しい場合においても、状況の変化があれば、jassu は使用可能である。以下、まず①典型的な終了限界を越える場合、続いて、②開始限界を越える場合について説明する。そののちに、③動詞によってどのような「状況の変化」をあらわすかが決まるわけではなく、文脈に依存することを述べる。続いて、④開始限界も終了限界も認めにくい場合について述べる。最後に⑤「状況の変化」にあてはまらないために非文法的となる例を確認する。

では、まず①終了限界を越える場合を示す。以下の例では、それぞれの終了限界を越えたところである、ということを jassu はあらわす。

¹³⁰ なお、14.3.2.で示したとおり、jassu を含む動詞は連体修飾節末に生起しえないが、エビデンシャルティー形式が従属節末に生起しえない例は、類型論的に見ても、アブハズ語や東ポモ語など、多く存在するようである (Aikhenvald 2004: 253)。

¹³¹ 工藤 (1995: 87) においては、動詞そのものの限界である内的限界と、動詞自身のものではない外的な限界とが別に考えられている。しかし、本章で扱う現象を分析するに当たっては、これらは区別する必要がないため、すべてできごとの限界として考える。動詞分類などを考慮する際にはこれらを分けて考える必要があるものと思われるが、今後の課題である。なお、Comrie (1976: 44-45) においても telic、atelic について考える際、動詞のみではなく状況を考慮している。

(14-47)kis 「着る」

kin=ba kis-jassu
着物=ACC2 着る-jassu
着物を着た

(14-48)kuras 「殺す」

pisida=ba kuras-jassu
ヤギ=ACC2 殺す-jassu
ヤギを殺した

(14-49)ni 「煮える」

ii=nu ni-jassu
ごはん=NOM 煮える-jassu
ごはんが炊けた

しかし、終了限界を持たない動詞の場合に jassu を用いられないかということ、そうではない。その場合、②開始限界を越えたことをあらわす。

(14-50)ami=nu vv¹³²-jassu

雨=NOM 降る-jassu
雨が降った（発話時点においても降っている）

(14-51)孫などが石垣島に引っ越しをしたのを見届けたときなどに

isanaki=na sum-jassu
石垣=LOC 住む-jassu
石垣に住んだ（発話時点においても住んでいる）

「雨が降る」((14-50))というできごとに関しては、上に示した例のように基本的には雨の降り始めをとらえて、vv-jassu「降る-jassu」を用いる。しかし、黒島ではスコールのような通り雨がよく降るためごく短い時間だけ降った雨をとらえて、vv-jassu「降る-jassu」を用いることも可能である。この場合は、すでに雨は降り終わっている。しかし、梅雨などで長く降った雨の降り終わりをとらえて vv-jassu「降る-jassu」とは言えない。これは、「雨が降る」というできごとで終了限界が備わっていないためであろうと考えられる。

このように、終了限界を持つ動詞の場合、終了限界を越えることを、また、終了限界を持たない動詞の場合は、開始限界を越えることを、典型的にはあらわす。

しかし、実際には、動詞によってどの局面をとらえるかが絶対的に決まるというわけではなく、どのような状況の変化をとらえるか、という点については文脈に依存する (③)。

(14-52)赤ん坊が初めて歩いた場面を見て

arak-jassu
歩く-jassu
歩いた

(14-53)10km 歩くと決めていて 10km 歩いたときに

zjuu+kiro arak-jassu
10+km 歩く-jassu
10km 歩いた

上記 (14-52) と (14-53) はどちらにも同じ動詞 arak「歩く」が使われているものの、とらえ

¹³² 東筋方言においては、動詞「降る」の語根は vv であるが、保里方言においては vu のようである。本章においては東筋方言の語形をあげておく。

られている状況の変化は異なる。例文 (14-52) においてとらえられているのは、「赤ん坊が歩かない状況から歩くようになった」という能力の変化である。それに対し、(14-53) の例文は「10km 歩くという状況が終わった」という状況の変化をとらえている。このように、どのような状況の変化をとらえるか、という点に関しては文脈に依存するのである。

さらに、以下の例のように、④終了限界も開始限界も認めにくいようなできごとにおいても jassu は使用可能である。

(14-54) izu=nu pinar-jassu
魚=NOM 減る-jassu
魚が減った

(14-55) usi=nu hazi=nu uraha nar-jassu
牛=GEN 数=NOM 多く なる-jassu
牛の数が増えた

なお、jassu は状況の変化だけを述べる形式であるため、変化した結果が発話時まで残っている必要はない。

(14-56) kisaa kin=ba kis-jassu. airunu maruma paz-jassu
さっき 着物=ACC2 着る-jassu しかし 今 脱ぐ-jassu
さっき着物を着た。でも今、脱いだ。

ここまで、jassu が「状況の変化」をあらわす形式であることを述べてきた。ここで、⑤「状況の変化」にあてはまらないがために、非文法的である例を確認しておく。それは、状態をあらわす動詞の場合である。その典型は存在動詞である。いくら「直前に話者が直接経験」したことであっても、存在動詞に jassu を用いることはできない ((14-57))。さらに、いわゆる存在動詞を用いた「発見」をあらわすことも不可能である ((14-58))¹³³。

(14-57)人の存在を述べるときに

*maruma uma=na unu pusu bur-jassu
今 ここ=LOC その 人 いる-jassu
今、ここにその人がいる

(14-58)探していたものが見つかって

*uma=na ar-jassu
ここ=LOC ある-jassu
ここにあった

(14-59)探していたものが見つかって

uma=na ar-ta
ここ=LOC ある-PST
ここにあった

また、jam「痛む」などの状態動詞にも jassu を後接させることは不可能である。

¹³³ 存在動詞を用いたいわゆる「発見」について jassu が用いられないのであって、他の動作をあらわす動詞の場合は jassu を用いて「発見」をあらわすことは可能である。

basu=nu ki-jassu=waja
バス=NOM 来る-jassu=SF
バスが来た

- (14-60) *amazi=nu jam-jassu
 頭=NOM 痛む-jassu
- (14-61) maruma amazi=nu jam-u
 今 頭=NOM 痛む-NPST
 今、頭が痛い

このように、「直前に話者が直接経験した」ことであっても「状況が変化」していなければ *jassu* の使用は非文法的になる。(14-58) においては、「ここにある」というできごとをあらわす述部に *jassu* が後続しており、「ここにある」というできごと自体ではなにも変化が起こっていない。そのため、*jassu* を用いることはできない。また、(14-60) については、黒島方言の *jam* 「痛む」は状態をあらわす動詞であり、「痛み始める」という意味はあらわしえないため、これについても状況の変化はない。したがって、(14-60) に関しても *jassu* を用いることは不可能である。このように、*jassu* の意味を記述する際に「状況の変化」という点も不可欠であると言える。

以上、本節では、*jassu* の意味的特徴について議論してきた。その結果、本章では *jassu* は「直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす」接尾辞であると考えられる。

14.5.まとめと今後の課題

本章においては、黒島方言における接尾辞 *jassu* について以下のことを述べた (i) を再掲。

- (i) a. 形態統語的特徴 : ①義務接尾辞である
 ②時制接尾辞と共起しない
 ③主節末、副詞節末には生起するものの、
 連体修飾節末には生起しない
- b. 意味的特徴 : 直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす

このような特徴を持つことからわかるとおり、この *jassu* はまさにテンポラリティー、アスペクチュアリティー、エビデンシャルリティーが重なる接尾辞である。

琉球語諸方言におけるエビデンシャルリティーに関する研究はいくつかの方言においてなされているが (工藤ほか 2007 および Shimoji 2011 による首里方言、Pellard 2010 による大神島方言、Lawrence 2011 による鳩間島方言、Izuyama 2011 による与那国島方言、伊豆山 2011 による石垣島宮良方言、宮古島平良方言など)、まだまだ手つかずの部分が多い。本研究は、黒島方言におけるエビデンシャルリティーに関する研究の端緒となろう。

さらに、黒島方言における意味体系のなかにこの *jassu* の持つ意味を位置づけることも今後の課題としてあげられる。Aikhenvald (2004: 217) によると、1 人称において *evidentials* が用いられるとき、特殊な意味を帯びることがあるという。このような観点も含め、人称や他のアスペクチュアリティー形式とのかかわりなど、より詳細に *jassu* の意味自体も記述していきたい。

15. 属性語幹化接尾辞-ida-について

15.1. はじめに

本章は黒島方言における-ida-という接辞の記述を目的とする。この接辞は動詞語幹に付され、あとに形容詞化接辞をとる(6.4.1.参照)。典型的な意味としては、その動作を頻繁に行ったり、大量に行ったりする性質が主題にある、ということを示す。例を示す。

(15-1) 動詞文 (-ida-なし)

unu pusu=a saki num-u
この 人=TOP 酒 飲む-NPST
この人は酒を飲む

(15-2) -ida-付きの文

unu pusu=a saki num-ida-ha
この 人=TOP 酒 飲む-ida-ADJVZ.ABS
この人はよく酒を飲む (酒を {大量に/頻繁に} 飲む性質を持つ)

本章では、この接辞の形態的、統語的、意味的特徴について述べる。結論は以下のとおりである。

(15-3) -ida-の諸特徴

- 形態的特徴 : 動詞語幹に付され、あとに形容詞化接辞をとる
- 統語的特徴 : もとの動詞の結合価を変化させない
 主題題述構造をとる
- 意味的特徴 : 「主題が、話者が考える基準を超えてある動作を行う (あるいは、あるイベントを経験する、もしくは、ある状態である性質を持つ)」という意味を付す

本章の構成は以下のとおりである。まず 15.2.において-ida-の形態的特徴について述べる。続く 15.3.において統語的特徴について述べる。15.4.では意味的特徴について述べる。15.5.は本章のまとめである。

本章で述べるものと類似した現象がかりまた(2015)に述べられている。ただし同論文は、沖縄県名護市幸喜方言(北琉球諸語に属する)の形容詞を主に扱うものであり、脱動詞形容詞(同方言では-zja:haN という接尾辞をとる)は記述の中心ではない。このように、琉球諸方言に広く分布するようではあるものの、現在まで研究がほぼなされていないこのような脱動詞形容詞について論じることは重要であるため、本章においてとりあげる。

15.2. 形態的特徴

本節では、-ida-の形態的特徴を述べる。-ida-は動詞語幹に付され、それからさらに形容詞化接辞をとる¹³⁴。

¹³⁴ -ida-には、PS (property stem forming suffix) とグロスをふる。

- | | | |
|--------|-----------|-----------------|
| (15-4) | a. ida なし | b. ida あり |
| | num-uta | num-ida-ha-ta |
| | 飲む-PST | 飲む-PS-ADJVZ-PST |
| | 飲んだ | 酒をよく飲んだ |

つまり、-ida-によって拡張された語幹は、形容詞語根相当であると言える。黒島方言の形容詞語根には、形容詞として機能するためには形容詞化接辞が必須である類がある¹³⁵。たとえば、以下の「高い」という意味の形容詞語根 *taka* は、形容詞として機能するためには -ha- という形容詞化接辞をとる必要がある。

- | | | | | |
|--------|------------------|---|-------------------|------------------|
| (15-5) | <i>taka</i> (語根) | → | <i>taka-ha-ta</i> | * <i>taka-ta</i> |
| | | | 高い-ADJVZ-PST | |
| | | | 高かった | |

-ida-で拡張された語幹もこの類の形容詞と同じく、形容詞化接辞-ha-をとらない限り、語としてふるまうことはできない。

- | | | |
|--------|-----------------|-------------|
| (15-6) | num-ida-ha-ta | *num-ida-ta |
| | 飲む-PS-ADJVZ-PST | |
| | 酒をよく飲んだ | |

つまり、-ida-で拡張された語幹も語としてふるまうためには-ha-を必要とするため、-ida-は形容詞語根に相当する形式を形成する接辞であると言える。

これをさらにサポートする現象がある。形容詞語根は比較形容詞化接辞-ku-をとることができる。この接辞が動詞語根に添加されることはない。

- | | | | |
|--------|---------------------|---|-------------------|
| (15-7) | <i>taka</i> (形容詞語根) | → | <i>taka-ku-ta</i> |
| | | | 高い-CMPR-PST |
| | | | 高かった |

- | | | | |
|--------|------------|---|---------|
| (15-8) | num (動詞語根) | → | *num-ku |
|--------|------------|---|---------|

しかし、-ida-で拡張された語幹はこの-ku-をとることができる。

- | | | | | | |
|--------|------------|---|----------|---|----------------|
| (15-9) | num (動詞語根) | → | num-ida- | → | num-ida-ku-ta |
| | | | 飲む-PS- | | 飲む-PS-CMPR-PST |
| | | | | | よく飲んだ |

以上、示したとおり、-ida-で拡張された語幹は、-ha-もしくは-ku-の形容詞化接尾辞を後接させる必要がある。したがって、形態の面からは、この接辞-ida-は、動詞語幹を形容詞語根相当に拡張する機能があると言える¹³⁶。

¹³⁵ 黒島方言の形容詞はこの点において2類に分ける必要がある。すなわち、形容詞化接辞をとってはじめて形容詞として機能する類と、形容詞化接辞をとらずにそのまま形容詞として機能する類である。形容詞化接辞をとらない類は、たとえば *guffa-ta* のように接辞添加される。詳細は、6章を参照のこと。

¹³⁶ ただし、完全に形容詞語根と-ida-で拡張された語幹が同じふるまいを見せるかということそうではない。形容詞語根は重複形を形成することができるが、-ida-で拡張された語幹は重複形を作ることにはできない。

- | | |
|-----|------------------|
| (a) | <i>taka+taka</i> |
| (b) | *num-ida+num-ida |

15.3. 統語的特徴

続いて本節では、-ida-の統語的特徴を確認する。結論を先に述べておくと、-ida-を含む文は基本的には主題題述型の構造を持つ。また、-ida-はもとの動詞の結合価を変えない。ida文で主題化されるのは主に主語であるが、例外もある。以下、それぞれ示していく。

-ida-が含まれた語は、上に述べたとおり、脱動詞形容詞である。したがって、-ida-付き形容詞を述部として持つ文は基本的には主題題述型の構造を持つ。なお、形容詞の統語的特徴については、10.1.2.および12章を参照のこと。

(15-10) unu ki=a magar-ida-ha
 この 木=TOP 曲がる-PS-ADJVZ.ABS
 主題 題述
 この木はよく曲がる

(15-11) unu pusu=a zin=ju mook-ida-ha
 この 人=TOP 金=ACC1 儲ける-PS-ADJVZ.ABS
 主題 題述
 この人は金儲けが上手だ

この、-ida-付きの文が主題題述構造を持つ、ということは主題標識のかわりに主格助詞を用いた場合に顕著になる。つまり、主格助詞を用いた場合、対比の含みが強くなり、下の(15-12)に示したとおり、焦点標示=duをともなうことが自然になるのである。

(15-12) unu ki=nu=du magar-ida-ha
 この 木=NOM=FOC 曲がる-PS-ADJVZ.ABS
 (他の木ではなく) この木がよく曲がる

このように-ida-付き形容詞は、基本的に形容詞と同じ統語的特徴を示す。それは、以下の2点にも見られる。1点目は、否定の仕方である。動詞が形態的な否定ができるのに対し、形容詞は形態的な否定はできず、統語的に否定するしかない。この点に関して、-ida-が付された語は、形容詞と同じふるまいを見せる。

(15-13) 動詞の否定

a. num-u	b. num-an-un
飲む-NPST	飲む-NEG-NPST
飲む	飲まない

(15-14) 形容詞の否定

a. taka-ha	b. taka-ha	naan-un
高い-ADJVZ.ABS	高い-ADJVZ.ABS	STATE.NEG-NPST
高い	高くない	

(15-15) -ida-付き形容詞の否定

a. num-ida-ha	b. num-ida-ha	naan-un
飲む-PS-ADJVZ.ABS	飲む-PS-ADJVZ.ABS	STATE.NEG-NPST
よく飲む	あまり飲まない	

2点目は、動詞 nar「なる」の補語になりうる点である。形容詞、-ida-付き形容詞ともに、動詞 nar の補語になりうる。

(15-15) guffa nar-i
重い.ABS なる-IMP
重くなれ！

(15-17) vva-ida-ha nar-i
食べる-PS-ADJVZ.ABS なる-IMP
よく食べるようになれ！

以上示したように、-ida-によって拡張された語幹を持つ形容詞は通常の形容詞と全くおなじふるまいを見せる。

一方、-ida-はもとの動詞の結合価を変えない、という特徴もある。

(15-18) 動詞文

unu pusu=nu saki=ju num-uta
この 人=NOM 酒=ACC1 飲む-PST
この人が酒を飲んだ

(15-19) -ida-付き形容詞文

unu pusu=a saki=ju num-ida-ha-ta
この 人=TOP 酒=ACC1 飲む-PS-ADJVZ-PST
この人は酒をよく飲んだ

(15-20) *unu pusu=a saki=nu num-ida-ha-ta

ただし、上に述べたとおり、典型的には主題題述型の構造をとるため、もとの動詞文の主語を主題化することが多い。

(15-21) 主題を含まない-ida-付き文

unu pusu=nu=du izu=ju foos-ida-ha
この 人=NOM=FOC 魚=ACC1 釣る-PS-ADJVZ.ABS
この人が魚を釣るのが上手だ

(15-22) 主語が主題化された-ida-付き文

unu pusu=a izu=ju foos-ida-ha
この 人=TOP 魚=ACC1 釣る-PS-ADJVZ.ABS
この人は魚を釣るのが上手だ

しかし、主題題述構造にさえなっていれば、もとの項以外のもの（たとえば場所など）も主題になりうる。

(15-23) 場所が主題化された-ida-付き文

unu sima=na=a pusu=nu mairas-ida-ha-ta
この 島=LOC=TOP 人=NOM 亡くなる-PS-ADJVZ-PST
この島では人がよく亡くなった

なお、以下で述べるとおり -ida-は主題の属性を述べるのであるが、連体修飾節末・主節末の間で生起しやすさの差はないようである。約 90 分の談話資料から -ida-は 3 例確認されたが、そのうち 2 例が主節末、1 例が連体修飾節末であった。

以上、本節まで -ida-の形式的な面の記述を行った。簡単にまとめておくと、-ida-は動詞語幹に付され、そのあとに形容詞化接辞をとる。統語的には、語幹の動詞の結合価は変えず、主題題述構造をとる。

15.4. 意味的特徴

本節では、-ida-の意味的特徴について述べる。結論から述べると、-ida-は「主題が、話者が考える基準を超えてある動作を行う（あるいは、あるイベントを経験する、もしくは、ある状態である）性質を持つ」という意味を付すものである、と本研究では考える。

まず、-ida-が付された形式が持つ多様な意味を確認する。-ida-は、多回、多量、高程度、上手などの意味をあらわす。以下、それぞれ例を示す。

(15-24) 多回（その命題が一定期間において多数回起こる）

a. unu pusu=a isananki=ha par-ida-ha
この 人=TOP 石垣=ALL 行く-PS-ADJVZ.ABS
この人はしょっちゅう石垣へ行く

b. unu pusu=a jaa=na bur-ida-ha
この 人=TOP 家=LOC いる-PS-ADJVZ.ABS
この人はよく家にいる

(15-25) 多量（その命題の主語もしくは目的語の名詞句が多量である）

a. unu ki=a pana=nu sak-ida-ha
この 木=TOP 花=NOM 咲く-PS-ADJVZ.ABS
この木は花がたくさん咲く

b. unu pusu=a saki=ju num-ida-ha
この 人=TOP 酒=ACC1 飲む-PS-ADJVZ.ABS
この人は酒を大量に飲む

(15-26) 高程度（その命題のあり方の程度が高い）

a. unu mici=a magar-ida-ha
この 道=TOP 曲がる-PS-ADJVZ.ABS
この道はカーブが多い

b. unu pocca=a kis-ida-ha
この 包丁=TOP 切れる-PS-ADJVZ.ABS
この包丁はよく切れる

(15-27) 上手（その命題の行為を上手に行う）

a. unu pusu=a budur-ida-ha
この 人=TOP 踊る-PS-ADJVZ.ABS
この人は踊りが上手だ

b. unu pusu=a ii=ju hak-ida-ha
この 人=TOP 絵=ACC1 描く-PS-ADJVZ.ABS
この人は絵を描くのが上手だ

ここから、-ida-の意味を2つの要素に分けて考えていくことにする。-ida-の意味記述を下に再掲し、2つの要素を示す。

(15-28) -ida-の意味的特徴：「主題が、

(A) 話者が考える基準を超えてある動作を行う（あるいは、あるイベントを経験する、もしくは、ある状態である）

(B) 性質を持つ

という意味を付す

つまり、1つ目の要素は「基準を超える」ということであり、もう1つの要素は「性質を持

つ」ということである。以下、本稿においては「基準を超える」という要素を「段階性」、「性質を持つ」という要素を「属性」と称し、それぞれの要素ごとに-ida-がどのような意味を持つものか述べる。議論の都合上、「属性」「段階性¹³⁷」の順で確認を行う。

15.4.1. 属性

本節においては、-ida-の持つ属性という意味について述べる。-ida-を用いた文は、主題がなんらかの性質を持つ、ということであらわす。したがって、一回的なイベントを述べた文には用いることができない。

(15-29) *unu pusu=a kinoo jaa=na bur-ida-ha-ta
 この 人=TOP 昨日 家=LOC いる-PS-ADJVZ-PST
 この人は昨日ずっと家にいた

(15-30) *unu pusu=a kinoo num-ida-ha-ta
 この 人=TOP 昨日 飲む-PS-ADJVZ-PST
 この人は昨日よく飲んだ

(15-31) *unu pusu=a kinoo ii=ju hak-ida-ha-ta
 この 人=TOP 昨日 絵=ACC1 描く-PS-ADJVZ-PST
 この人は昨日絵を上手に描いた

このようなことから、-ida-は「ある性質を持つ」つまり、主題の属性について述べるものであると考えられる。

しかし、以下のような真理をこの-ida-を用いて述べることはできない。

(15-32) pusu=a sin-u
 人=TOP 死ぬ-NPST
 人は死ぬ

(15-33) *pusu=a sin-ida-ha

このことから、単純に-ida-が主題の性質（属性）をあらわすとするわけにはいかないとわかる。ここで、もう1つの意味的な要素である「段階性」に関する議論に移る。

15.4.2. 段階性

本節においては、「属性」に続き、ida-が持つもう1つの意味的な要素である「段階性」について述べる¹³⁸。前節において述べたとおり、-ida-の持つ意味を単純な属性と考えるのは不十分である。そこで、本稿では-ida-のあらわす属性は段階性を伴ったものでなければならぬ、と考える。

まず、-ida-が段階的な意味を持つことを、動詞の非過去形と比べながら確かめる。以下に示すとおり、動詞の非過去形を用いた場合、「田中は酒を飲むけど、少ししか飲まない」という表現が問題ない。

¹³⁷ gradability の訳語として「段階性」を用いる。この語は、加藤 (2003: 109) においては「段階性」とされ、八亀 (2008) においては「程度性」とされている。本稿においては、「段階」の下位類に「程度」という用語を用いるため、gradability の訳語としては「段階性」を用いている。

¹³⁸ -ida-の持つ意味は「ある基準より上」であるため、より正確には「(段階+基準より上)性」であるが、ここでは単に「段階性」としておく。

(15-34) 動詞非過去形

tanaka=a saki=ju num-u=num imeemi=tanka num-u
田中=TOP 酒=ACC1 飲む-NPST=ADVRS 少し=だけ 飲む-NPST
田中は酒を飲むけど、少ししか飲まない

これに対し、-ida-付き形容詞を従属節末に用いた場合、「田中は酒を飲むけど、少しだけしか飲まない」は言えない。

(15-35) -ida-付き形容詞

*tanaka=a saki=ju num-ida-ha-ru=num imeemi=tanka num-u
田中=TOP 酒=ACC1 飲む-PS-ADJVZ-ADN=advrs 少し=だけ 飲む-NPST
田中は酒を飲むけど、少ししか飲まない

このような違いを、以下のように考えて説明する。動詞非過去形の場合、少しでもその性質を帯びていればよい。つまり、その性質を帯びているかいないか、という絶対的な判断をしているのである。しかし、-ida-付きの場合、その性質を帯びているのはもちろんのこと、さらに、話者の考える基準を超えている必要がある。つまり、相対的な評価軸を想定していて、その上で基準を設け、それよりも上の段階であることを-ida-付き形容詞は意味しているのである。

さらに、-ida-付き形容詞が付与する意味に段階性が伴う、という点を補強する点がある。それは動詞を否定した場合と-ida-付き形容詞を否定した場合との意味的差異である。

(15-36) 動詞の否定

unu pusu=a patarak-an-un
この 人=TOP 働く-NEG-NPST
この人は働かない（まったく働かないことも意味しうる）

(15-37) -ida-付き形容詞の否定

unu pusu=a patarak-ida-ha naan-un
この 人=TOP 働く-PS-ADJVZ.ABS STATE.NEG-NPST
この人はあまり働かない（まったく働かない場合は使用しにくい）

これらの例文を比べてわかるのは、動詞の否定が絶対的な基準を持っているのに対し、-ida-付き形容詞の否定はある評価軸上の基準に対してそれより高くないことを意味している、という点である。そのため、まったくその評価軸上にのらないものをこの接辞であらわすことは難しいのである。

以上、示したとおり、-ida-付き形容詞は属性と同時に段階性もあらわすものであると本研究では考える。このように考えると、(15-33) のように「人間は死ぬ」のように真理を述べた節に-ida-が付きえないことが説明できる。すなわち、「ある基準を超えて死ぬ」ということは意味的に不可能であるためである。

ただし、「人が死ぬ」という節自体が-ida-をとりえない、というわけではない。以下の文は可能である。

(15-38) unu sima=na=a pusu=num mairas-ida-ha-ta
この 島=LOC=TOP 人=NOM 亡くなる-PS-ADJVZ-PST
この島では人がよく亡くなった

このように、主語を複数にしてイベントが多数回起こる、という意味にすれば、その頻度が高い、もしくは量が多い、という意味をあらわしうる。つまり、相対的な評価軸を想定しうる命題であれば-ida-を用いることが可能なのである。

次節においては、どのような命題の場合に-ida-がどのような段階的な意味を持つか、確認する。

15.4.3. 命題の種類と段階的な意味の種類

前節において、-ida-は段階的な意味をあらわすことを示した。しかし、15.4.の冒頭（15-24～27）において示したとおり、-ida-のあらわす段階性は多様である。本稿においては、-ida-の段階的な意味を①高頻度、②多量、③高程度、④上手の4つに大きく分ける。本節においてはそれぞれの意味をどのような場合に持つか確認する。本節の最後に、まとめを行う。

15.4.3.1. 高頻度

高頻度をあらわす場合には、その命題が一定期間に多回行的に行われうるイベントをあらわしていなければならない。つまり、非意志的かつ状態的な命題については多回の読みはありえない。

- (15-39) unu mici=a magar-ida-ha
この 道=TOP 曲がる-PS-ADJVZ.ABS
この道はカーブが多い（「曲がる頻度が高い」の読みにはならない）
- (15-40) unu pusu=a bahar-ida-ha
この 人=TOP わかる-PS-ADJVZ.ABS
この人はよくわかっている（「わかる頻度が高い」の読みにはならない）
- (15-41) unu pusu=a amerika+munui dik-ida-ha
この 人=TOP アメリカ+ことば できる-PS-ADJVZ.ABS
この人は英語がよくできる（「英語ができる頻度が高い」の読みにはならない）

逆に言えば、それ以外の命題では高頻度の読みは可能である。

- (15-42) 意志的な状態の例
unu pusu=a jaa=na bur-ida-ha
この 人=TOP 家=LOC いる-PS-ADJVZ.ABS
この人は家によくいる
- (15-43) 非意志的な例
unu pusu=a munu bass-ida-ha
この 人=TOP もの 忘れる-PS-ADJVZ.ABS
この人はよくものを忘れる

15.4.3.2. 多量

多量の意味をあらわすには、目的語なり主語なりが累加的な名詞句でなければならない。つまり、その名詞句のあらわす内容の数量が増減しうるものである必要がある。

- (15-44) tosjokan=na=a hon=nu ar-ida-ha
図書館=LOC=TOP 本=NOM ある-PS-ADJVZ.ABS
（黒島校の）図書館には本がたくさんある

この例であれば、「本」は増減が可能である。しかし、次の例の「この人」や「この本」は増えもしないし、減りもしない。つまり、累加的な名詞句が主語なり目的語なりに立たない場合には、多量の読みにはならない。

- (15-45) unu pusu=a unu hon=ju jom-ida-ha
 この 人=TOP この 本=ACC1 読む-PS-ADJVZ.ABS
 この人はこの本をよく読む

15.4.3.3. 高程度

高程度の意味の場合には、もとの命題に程度性がともなわなければならない。動詞の程度性は形容詞に比べて注目されていないようであるが、動詞や名詞にも程度性は存在する (Bolinger 1972: 150、加藤 2003: 109)。一部の-ida-付き形容詞では、この動詞の程度が高いことをあらわす。

- (15-46) unu sinsi=a sirab-ida-ha
 この 先生=TOP 調べる-PS-ADJVZ.ABS
 この先生は詳しく調べる
- (15-47) unu dentoo=a aar-ida-ha
 この 電灯=TOP 光る-PS-ADJVZ.ABS
 この電灯はよく光る (光が明るい)

そもそも動詞に程度性がない場合、高程度の読みにはなりえない。

- (15-48) unu tokee=a tumar-ida-Ø
 この 時計=top 止まる-PS-ADJVZ.ABS
 この時計はよく止まる (多回の意味。止まる様に程度はない)

15.4.3.4. 上手

上手の意味は、意志的な動詞であれば可能である。極端な話、なにかのコンテストを開催すれば、それについての上手下手を問題にできるのである。

- (15-49) unu pusu=a nka-ida-ha
 この 人=TOP 迎える-PS-ADJVZ.ABS
 この人は心地よく迎えてくれる／迎えるのが上手
- (15-50) unu pusu=a isi sim-ida-ha
 この 人=TOP 石 積む-PS-ADJVZ.ABS
 この人は石を積むのが上手¹³⁹

ただし、当然であるが、非意志的な動詞に関してその上手下手は問題にできない。

- (15-51) unu pusu=a havur-ida-ha
 この 人=TOP 失敗する-PS-ADJVZ.ABS
 この人はよく失敗する
 (「意図せず失敗するのが上手」の意味は不可。失敗の仕方コンテストをすれば可)

15.4.3.5. 多義性のまとめ

以上のように、-ida-は、「高頻度」「多量」「高程度」「上手」という意味を持つ。ここで、それぞれの解釈が可能な場合をまとめておく。

¹³⁹ この例文の「石を積む」は沖縄の伝統的な塀である石積みを作るのが上手、という意味である。石積みは単に石を積むだけでは作れず、技術が必要である。

- (15-52) 高頻度：「非意志的かつ状態的な命題」以外
 多量：累加的な名詞句が命題にある場合
 高程度：程度性のある動詞に-ida-が続いた場合
 上手：意志的な命題の場合

このように、これらの条件は互いに重なっている。したがって、次の例のように多義的になる、ということもここで確認しておく。

- (15-53) kameda=a taku tur-ida-ha
 亀田=TOP タコ とる-PS-ADJVZ.ABS
 亀田はタコとるのが上手 / タコをしょっちゅうとる / タコを大量にとる

15.4.4. 段階性の意味に関する議論

本節では、15.4.3.において扱った段階性の意味の下位類、特に、高程度の意味を持つ場合に関して議論を行う。多量の意味の場合は名詞句の性質が限定されるが、多回の意味と上手の意味の場合は、文脈さえ整えればほとんどすべての動詞で可能になる。しかし、高程度の意味を持つ場合は動詞がそもそもかなり限られる。この点において、高程度の意味は特異である。

Bolinger (1972: 150) では、英語の強調語 (intensifier) が動詞を修飾する際の修飾のあり方を2つに分類した。1つは、動詞そのものの動作やあり方などの程度 (degree) を強調する場合であり、もう1つは量や頻度 (extensibility) を強調する場合である。たとえば、次の(15-54)においては、「いらいらさせる度合い」が高いことを quite があらわしている。それに対し、続く(15-55)において so があらわしているのは、「食べる度合い」の高さではなく、食べる量の多さである。

(15-54) He quite exasperates me. (Bolinger 1972: 150)

(15-55) Why do you eat so? (Bolinger 1972: 152)

これらのうち、(15-54)のように、その動作などの度合いそのものを強調語を用いて高めるような動詞を degree verbs と呼び、他と区別している。

このような程度性をもつ動詞を他の動詞と区別する必要性を示す研究は、たとえば Tsujimura (2000) の日本語の「とても」が修飾しうる動詞の研究、Kennedy and McNally (2005) による脱動詞形容詞の修飾の研究、佐野 (2006) による日本語の副詞「よく」の分類に関する研究など、一定の数はあるものの、多いとは言えない(黒島方言では aru としか言えず、aridaha とは言えない程度)。本稿はこれらの研究と同じく、動詞のなかにも程度性を持つ動詞を認め、それらを他と区別して扱うこと、そして、形容詞だけではなく動詞にも段階性を認めることの重要性を主張するものであると言える。

15.5. まとめと今後の課題

本節では本章のまとめを行い、あわせて今後の課題も述べる。

本章では、黒島方言における ida について、以下のことを述べた。

(15-56)-ida-の諸特徴

- 形態的特徴：動詞語幹に付され、あとに形容詞化接辞をとる
- 統語的特徴：もとの動詞の結合価を変化させない
 主題題述構造をとる

意味的特徴 : 「主題が、話者が考える基準を超えてある動作を行う（あるいは、あるイベントを経験する、もしくは、ある状態である性質を持つ」という意味を付す

最後に、本稿で扱った-ida-を類型論的に位置づけるとどのようになるのか、確認しておく。Aikhenvald (2011: 271-272) は、adjectives derived from verbs のあらゆる意味として、以下を挙げている。

(15-57) Aikhenvald (2011) による脱動詞形容詞のあらゆる意味

- a. property associated with activity or with its result
 - a1. property associated with the action
 - a2. property associated with the result of an action
- b. property of a core argument
 - b1. potential property of the A/S or of the O argument
 - b2. actual property of the A/S argument of the verb
 - b3. property of the O argument of the verb

黒島方言の-ida-は、b の property of a core argument に近いが、厳密にはどれにも当てはまらない。なぜならば、-ida-は必ずしも core argument の属性のみをあらゆるというわけではなく、他の主題もとりうるためである。また、core argument の属性をあらゆることはもちろん可能であるが、その潜在的な属性も、顕在的な属性も、どちらもあらゆることが可能である。

(15-58) 潜在的な属性

unu ki=a magar-ida-ha
この 木=TOP 曲がる-PS-ADJCV-NPST
この木はよく曲がる

(15-59) 顕在的な属性

unu mici=a magar-ida-ha
この 道=TOP 曲がる-PS-ADJCV-NPST
この道はカーブが多い

そもそも、形容詞に関する研究は動詞や名詞に比べると少ないと言え、さらに形容詞化の研究は少ない。そのため今後は、-ida-の類型論的な位置づけを考えつつ、形容詞化自体がどのように特徴づけられるのか、追求していきたい。

16. おわりに

本論文では、南琉球八重山黒島方言の文法を共時的に記述した（第一部）。また、一部のトピックについては個別にとりあげ、論じた（第二部）。ただし、本論文はあくまでも黒島方言のごく一部の記述である、ということ述べる必要がある。最後に、いくつか、本論文では扱えなかった問題の一部をとりあげる。無論、ここで述べない問題も多く存在する。今後も研究を進めていきたい。

16.1. 母音の脱落について

2.4.9.において指摘したとおり、母音が顕著に脱落する場合がある。本論文においては、これを「脱落」と考えている。

ただし、「脱落」として考えるのではなく、そもそも、母音がそこにはなかったのではな
いか、と思われる現象もある。それは、子音連続の間に入る母音が一定でない場合がある、
という点である。たとえば、黒島方言で「月」を意味する語は多くの場合、[ski]と発音され
る。しかし、話者にゆっくり発音するようお願いすると、[suki]や[ɕiki]が得られるのである。
これは、基本的に子音連続を許さない現代標準日本語からの影響を強く受けたがために、
本来母音のないところに母音を挿入して発音しているのではないか、という疑いがある。

これに類似する現象は「聞く」を意味する動詞においても観察される。この動詞は基本 A
型の動詞であるため、非過去の接尾辞は-u で、不定の接尾辞は-i である。以下、実現形を示
す。

- (16-1) a. 「聞く」の非過去 [sku ~ suku]
b. 「聞く」の不定 [ski ~ ɕki ~ ɕiki]

このように、母音が入った場合、s と k の間に入る母音が異なるのである。この現象も、も
ともとの母音の欠如を強く示唆するものである。

一方、ナチュラルスピードで発音された場合に母音が落ちていても、母音を入れた場合
に母音が変わらない場合もある。たとえば、以下のようなものである。

- (16-2) a. pus-u [psu ~ pusu]
干す-NPST
干す

- b. pus-i [pei ~ puei]
干す-INF
干し

- (16-3) a. pis-u [psu ~ pisu]
おならする-NPST
おならする

- b. pis-i [pei ~ piei]
おならする-INF
おならし

このようなことから、単に母音が脱落する場合もあれば、そうとは言えない場合もある、
ということろまではわかっている。今後、条件の明確化などを進めたい。

16.2. アクセント

2.3.2.においても述べたとおり、本稿では2型のアクセントパターンを考えているものの、松森 (2014、2015) においては、黒島方言は3型のアクセントパターンを持つ、とされており、記述に齟齬が見られる。

松森 (2015) においては、黒島方言は「3 モーラ以上の助詞や助詞連続が名詞に後接した場合」に3パターンがあらわれる、とされる。以下、例を示す。「[」はピッチの上がり目を、「]」はピッチの下がり目をあらわす。

(16-4) A 型	a[bu	kinna	洞窟より ¹⁴⁰
B 型	tii	kin]na	手より
C 型	nabi	kinna	甕より

このようなパターンがある、と松森 (2015) には述べられている。本稿においても2パターンがあると述べたが、そもそも同じ語列であっても下がり目が実現したりしなかったりするるのである。したがって、原則的なパターンというのは存在するのかもしれないが、実際の実現の説明にはアクセントのパターン化以外に考慮すべき問題があるのかもしれない。

16.3. アスペクチュアリティ形式

存在がわかっていながら、本論文でアスペクチュアリティ形式がある。それは、-ehen、-jan という接尾辞である。

(16-5)	a. tub-ehen	b. tub-ijan
	飛ぶ-ehen	飛ぶ-ijan

-ehen と -jan は、屈折接尾辞であり、このあとに他の接尾辞をとることはできない。すなわち、これらの接尾辞は過去時制をとることがない。この点においてこれらの接尾辞は14章で取り上げた jassu に似ている。さらに、これらの形式があらわすアスペクトの意味も jassu と酷似しており、「限界を越えた直後」をあらわすようである。証拠にかかわる意味に関しては未確認であるが、このような意味をあらわす以上、first-hand (Aikenvald 2004) の情報である可能性が高い。

¹⁴⁰ 正確には「より」ではなく「よりは」である。

参考文献

- 麻生玲子 (2009) 「波照間方言の動詞と助詞の研究」 修士論文(東京大学)
- _____ (2010a) 「波照間方言の「形容詞」認定に関する問題」 AA 研 Fieldling とくぼとる (8/MAY/10) 発表資料
- _____ (2010b) 「南琉球八重山波照間方言の「形容詞」認定に関する問題」『日本言語学会第 141 回大会予稿集』, 242-247
- _____ (2013) 「八重山語波照間方言の分詞 -単独形式と接語が付加した形式の機能-」『北方言語研究』 3, 55-68
- 伊豆山敦子 (1996) 「琉球方言の母音調和的傾向」『獨協大学教養諸学研究』 31 (1): 1-13
- _____ (1997) 「琉球方言形容詞成立の史的的研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』 54 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1-31
- _____ (2011) 『琉球のことばと人——エヴィデンシャリティーへの道——』 真珠書院
- 内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の研究』 笠間書院
- _____ (2004) 「八重山竹富町黒島方言の音韻」 内間直仁(代表研究者)『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に— (課題番号 14510450) 平成 14 年～平成 15 年度科学研究費補助金 研究成果報告書』, 1-58
- 沖縄県八重山支庁 (2012) 『八重山要覧』
(<http://www.pref.okinawa.jp/site/somu/yaeyama/shinko/documents/yaeyamayouran/yaeyamayouran.html> : 2014 年 12 月 6 日アクセス)
- 沖縄国際大学南島文化研究所編 (2001) 『八重山、竹富町調査報告書 (3)』 地域研究シリーズ 29.
- _____ (2002) 『八重山、竹富町調査報告書 (4)』 地域研究シリーズ 30.
- 荻野千砂子 (2015) 「沖縄県竹富町黒島方言」 国立国語研究所編『文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言)』 国立国語研究所, 87-94.
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」 増岡隆志編『叙述類型論』 くろしお出版, 21-43
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 上村幸雄 (1997(1992)) 「琉球列島の言語 総説」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』 三省堂, 311-353
- かりまたしげひさ (2000) 「多良間方言の系譜——多良間方言を歴史方言学的観点からみる——」 高良倉吉(編)『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』, 27-37
- _____ (2007) 「沖縄県うるま市安慶名方言の形容詞」 工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』 ひつじ書房, 225-240
- _____ (2009) 「琉球語音韻変化の研究」 言語学研究会 (編)『ことばの科学 12』 むぎ書房, 275-354
- _____ (2015) 「語構成からみた沖縄県名護市幸喜方言の形容詞」『琉球の方言』 39 法政大学沖縄文化研究所, 87-116
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- _____ (2007) 「調査と研究成果の概要」 工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』 ひつじ書房, 3-51
- 工藤真由美、高江洲頼子、八亀裕美 (2007) 「首里方言のアスペクト、テンス、エヴィデンシャリティー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』 47.

- 佐野由紀子 (2006) 「あり方に関わる副詞としての「よく」について」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編』くろしお出版, 157-177
- 渋谷勝己 (2002) 「自発」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』ウェブサイト版 (http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/03_jihatsu.pdf: 最終確認 2015 年 8 月 23 日)
- 下地理則 (2010) 「「形容詞的な語」の品詞的振る舞い—琉球諸語の場合」AA 研 Fieldling とくぼとる (8/MAY/10) 発表資料
- 須山名保子 (2007) 「鹿児島県大島郡大和村大和浜方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房, 183-204
- 高江洲頼子 (2007) 「沖縄県那覇市首里方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房, 241-262
- 當山善堂 (2008) 『精選 八重山古典民謡集 (一)』那覇: ティガネシア
- 當山奈那 (2012) 「沖縄首里方言の他動詞派生接尾辞と使役動詞派生接尾辞」『日本言語学会第 145 回大会予稿集』, 76-81
- 飛田良文、遠藤好英、加藤正信、佐藤武義、蜂谷清人、前田富祺編 (2007) 『日本語学研事典』明治書院
- 仲宗根政善 (1961) 「琉球方言概説」東条操監修『方言学講座 第四卷 九州・琉球方言』東京堂, 20-43
- 仲間恵子 (2007) 「鹿児島県大島郡与論町麦屋方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房, 205-224
- 名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』第一書房
- 中松竹雄 (1976 (2001)) 「八重山方言の文法—竹富町黒島方言の助詞の形態と用法—」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 (2001) 『日本列島方言叢書 34 琉球方言考 7 先島 (宮古・八重山他)』ゆまに書房, 398-409 (338-349)
- 新永悠人 (2010) 「奄美大島湯湾方言における「形容詞」 AA 研究 Fieldling とくぼとる (8/MAY/10) 発表資料
- 新田哲夫 (2011) 「福井県三国町安島方言における maffa 《枕》等の重子音について」『音声研究』15 (1): 6-15.
- 野原三義 (2001) 「八重山竹富町黒島方言の助詞」沖縄国際大学南島文化研究所編『八重山、竹富町調査報告書 (3)』, 87-111.
- ハインリッヒ・パトリック (2011) 「琉球諸語に関する社会言語学研究」『日本語の研究』7 (4): 112-118.
- 原田走一郎 (2014) 「南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ——接辞 ku が続く形式に注目して——」『阪大日本語研究』26: 71-85.
- 服部四郎 (1932) 「「琉球語」と「國語」との音韻法則(一)」『方言』2 (7) 春陽堂, 22-37.
- 平山輝男など (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 松森晶子 (2014) 「八重山諸島の 3 型アクセント—その韻律単位は何か—」日本語レキシコンの音韻特性 研究発表会 (2014 年 11 月 14 日) 発表資料
- _____ (2015) 「八重山諸島黒島アクセントの仕組み—その韻律範疇と下がり目の出現条件—」『日本言語学会第 150 回大会予稿集』日本言語学会, 182-187.
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究——類型論的視点から——』明治書院
- 山口栄臣 (2004) 「八重山郡竹富町黒島方言の活用」内間直仁(代表研究者)『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に— (課題番号 14510450) 平成 14 年～平成 15 年度科学研究費補助金 研究成果報告書』, 59-74
- 山田実 (1983) 『琉球語形容詞の形態論的構造』桜楓社
- 山本俊英 (1955) 「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23: 71-75

- ローレンス・ウエイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁(編)『宮良當壯記念論集』ひるぎ社, 547-559
- _____ (2000) 「子音を越えて起こる母音の融合 -琉球諸方言における現象を中心に-」『音声研究』4 (1): 55-60.
- Aikhenvald, Y. Alexandra. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- _____ (2011) Word-class-changing derivations in typological perspective. In Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon. *Language at Large*, 221- 289. Leiden/ Boston: Brill.
- Aso, Reiko. (2010) Hateruma. In Shimoji, M. and T. Pellard. (eds.), *An Introduction to Ryukyuan Languages*, 189-227. Tokyo: Research Institute of Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFU. (URL: http://lingdy.aacore.jp/jp/material/An_introduction_to_Ryukyuan_languages.pdf)
- Archangeli, Diana and Douglas Pulleyblank. (2007) Harmony. In de Lacy, Paul. (ed.) *The Cambridge Handbook of Phonology*, 353-378. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blust, Robert. (2007) Disyllabic attractors and anti-antigeminata in Austronesian sound change. *Phonology*, 24: 1-36.
- Bolinger, Dwight. (1972) *Degree words*. The Hague/ Paris: Mouton.
- Bybee, Joan. (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins
- Comrie, Bernard. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____ (1981) *Language universals and linguistic typology: Syntax and Morphology*. Oxford: Blackwell and Chicago: University of Chicago Press.
- Corbett, G. (2000) *Number*. Cambridge: Cambridge University Press
- DeLancey, Scott. (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33: 369-382.
- Dmitrieva, Olga. (2012) *Geminate typology and the perception of consonant duration*. Doctoral dissertation. Stanford University.
- Dixon, R. M. W. (2004) Adjective Classes in Typological Perspective. In Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective Classes: A Cross-Linguistic Typology*, 1-49. OUP.
- Haspelmath, Martin. and Andrea Sims. (2010) *Understanding morphology*. (2nd edition) London: Hodder Education
- Izuyama, Atsuko. (2011) Yonaguni. In N. Tranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*, 412-457. London and New York: Routledge.
- Kennedy, Christopher, and Louise McNally. (2005) Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81 (2): 345-381.
- Kraehenmann, Astrid. (2011) Initial geminates. In van Oostendorp, M., C. J. Ewen, E. Hume and K. Rice (eds.) *The Blackwell companion to phonology. vol.2*, 1124-1146. UK: Blackwell.
- Lawrence, P. Wayne. (2011) Southern Ryukyuan. In N. Tranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*, 381-411. London and New York: Routledge.
- Muller, Jennifer. (2001) *The phonology and phonetics of word-initial geminates*. Doctoral dissertation. Ohio State University.
- Niinaga, Yuto. (2010) Yuwan. In Shimoji, M. and T. Pellard. (eds.), *An Introduction to Ryukyuan Languages*, 35-111. Tokyo: Research Institute of Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFU. (URL: http://lingdy.aacore.jp/jp/material/An_introduction_to_Ryukyuan_languages.pdf)
- _____ (2014) *A grammar of Yuwan, a northern Ryukyuan language*. Doctoral dissertation. University of Tokyo.
- Pajak, Bozena. (2013) Non-intervocalic geminates: typology, acoustics, perceptibility. *San Diego Linguistics Papers*, 4: 2-27.

- Pellard, Thomas (2009) *Ōgami –Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. 博士論文 École des Hautes Études en Sciences sociales.
- _____ (2010) Ōgami. In Shimoji, M. and T. Pellard. (eds.), *An Introduction to Ryukyuan Languages*, 113-166. Tokyo: Research Institute of Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFU. (URL: http://lingdy.aacore.jp/jp/material/An_introduction_to_Ryukyuan_languages.pdf)
- Roca, Iggy and Wyn Johnson. (1999) *A Course in Phonology*. Blackwell Publishing.
- Rose, Sharon. (1996) Variable laryngeal and vowel lowering. *Phonology*, 13(1): 73-117.
- Shimoji, Michinori (2008) *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Doctoral dissertation. Australian National University.
- _____ (2009) The Adjective Class in Irabu Ryukyuan. 『日本語の研究』 5(3): 33-50
- _____ (2011) Northern Ryukyuan. In N. Tranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*, 351-380. London and New York: Routledge.
- Thurgood, Graham. (1993) Geminate: a cross-linguistic examination. In Nevis, J. A. M. G. and G. Thurgood. (eds.), *Papers in honor of Frederick H. Bregelman on the occasion of the 25th anniversary of the Department of Linguistics, CSU Fresno*, 129-139. Fresno, CA: Department of Linguistics, California State University, Fresno. (URL: <http://www.csuchico.edu/~gthurgood/Papers/Geminate/master.pdf>)
- Tsujimura, Natsuko. (2000) Degree words and scalar structure in Japanese. *Lingua* 111: 29-52.
- Zevakhina, Natalie (2013) Syntactic strategies of exclamation. *Journal of Estonian and Finno-Ugric Linguistics*. 4 (2): 157-178.

ウェブサイト

国土地理院 <http://www.gsi.go.jp/>(2010年10月19日閲覧)